

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書XX

## 竹花遺跡Ⅱ

2011

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書 XX

たけ はな 遺 跡 II  
竹 花

2 0 1 1

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

北陸新幹線は、東京駅を起点として長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井県小浜市を経て、新大阪駅に至る総延長 700km の路線です。全面開通により、北陸地方と関東圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流や発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に伴って実施された糸魚川市大字寺町・南寺町に所在する竹花遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査の結果、中世と古墳時代の遺構・遺物が見つかりました。

中世では 15 世紀から 16 世紀を中心とする陶磁器類や木製品、金属製品などが多く出土しました。しかも、陶磁器類の多様さから用途により各産地の陶磁器の使い分けが行われている様子が明らかになりました。また木製品では箸状木製品や棒状木製品が多く、地面に突き刺した状態で見つかるものや分布に集中範囲も認められ、形代や銭貨など祭祀に関連する遺物と合わせ、湿地的な環境の下で祭祀が行われた空間であることが分かりました。

古墳時代では調査区の低地で畦畔を検出し、土地利用の具体的な有り様が分かりました。

これらの発掘調査で得られた資料や本報告書が、地域の歴史資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この発掘調査に対し、多大な御協力と御理解をいただいた糸魚川市市教育委員会、並びに地元住民の方々、また、発掘調査から本書の刊行まで格別な御配慮をいただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設支援機構鉄道建設本部北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月

新潟県教育委員会

教 育 長 武藤 克己

## 例 言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市南寺町 2-2-1 ほかに所在する竹花遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）から新潟県が受託したものである。調査は、新潟県教育委員会（以下、県教委）が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと、株式会社古田組が平成 21 年度に実施した。
- 3 整理及び報告書作成に係わる作業は、埋文事業団の指導の下、株式会社古田組が行った。平成 21 年度には、基礎整理と報告書原稿作成を行い、平成 22 年度には、報告書作成に伴う編集作業と印刷・製品を行った。
- 4 出土遺物及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「09 タケハ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 5 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 6 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に [ ] で示し、巻末に一括して掲載した。第 VI 章のみ、利便性を考慮し、項末に掲載した。
- 7 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 8 本書で示す方位はすべて真北である。
- 9 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施し、結果を編集の上、第 VI 章に掲載した。執筆分担は章頭に示した。また、焼骨の骨組織構造による動物種同定を日本歯科大学 奈良貴史准教授に依頼し、玉稿を賜ったので、第 VI 章に合わせて掲載した。
- 10 遺構平面実測及び図化は株式会社古田組の指揮・監督の下、株式会社梨本測量社に委託し、成果品は DXF データでの納品とした。
- 11 遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、株式会社セビアスに委託して編集をし、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、デジタル化した遺構写真と合わせて編集を行った。
- 12 本書の執筆は、相羽重徳（株式会社古田組 遺跡調査研究室主任調査員）、上野川勝（同 調査員）、渡邊大士（同 調査員）、高橋保雄（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 課長代理）があたり、編集は相羽が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第 I 章 1・2A：高橋            第 I 章 2B、第三章、第 V 章 1～4・6・7、第七章 1・3：相羽  
第 II 章、第四章、第七章 2B：上野川            第 V 章 5、第七章 2A：渡邊

- 13 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げる。

（敬称略、五十音順）

伊藤啓雄    木島 勉    土田孝雄    山岸洋一    糸魚川市教育委員会

# 目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業の経過	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	3
1) 調査・整理の体制	3
2) 調査・整理の経過	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の概要	12
1 グリッドと調査区の設定	12
A 調査区の設定	12
B グリッドの設定	12
2 基本層序	14
第Ⅳ章 遺 構	18
1 概 要	18
2 近世の遺構	18
3 中世の遺構	19
A 土 坑	19
B 箸状木製品等の平面分布と出土状況	19
1) 平面分布	19
2) 出土状況	21
4 古墳時代の遺構	27
5 そ の 他	28
A 風倒木痕	28
B 倒木・樹根・自然木	29
C 自然落ち込み	30
第Ⅴ章 遺 物	31
1 概 要	31
2 中・近世の土器・陶磁器	31
A 椀 類	32

B	皿類	32
C	盤、鉢、瓦器、杯、瓶類、香炉	34
D	片口鉢・播鉢類	35
E	壺・甕類	36
F	土錘・加工円盤	36
3	古代の土器	38
4	石器・石製品	38
5	木製品	39
A	中世後期	40
1)	箸状木製品・火付け木等	40
2)	形代	41
3)	その他・不明製品	42
4)	棒状・杭状木製品	42
5)	曲物底板	42
6)	板状木製品	42
B	古墳時代	42
6	金属製品・錢貨・鍛冶関連遺物	43
7	弥生時代・古墳時代の土器	44

## 第VI章 自然科学分析 46

1	花粉分析・イネ属同定	46
A	試料	46
B	方法	46
C	結果	46
2	珪藻分析	48
A	試料	48
B	方法	48
C	結果	48
3	植物珪酸体分析	49
A	試料	49
B	方法	49
C	結果	50
4	放射性炭素年代測定	51
A	試料	51
B	方法	51
C	結果	52
5	樹種同定	52
A	試料	52
B	方法	52
C	結果	52
6	動物遺存体	53
A	試料	53
B	方法	53

C	結    果	53
7	考    察	54
A	珪藻化石から見る土壌堆積環境	54
B	土壌分析から見る周辺環境	54
C	稲作の検討	55
D	出土木製品に見る周辺環境と樹種の選択性	55
8	出土骨片の骨組織形態学的検討	59
A	はじめに	59
B	資    料	59
C	方    法	59
D	骨組織形態の観察所見	60
E	計測的検討	60
F	結    論	63
第七章 ま と め		65
1	中・近世の陶磁器	65
A	出土陶磁器から見た各層の年代	65
B	中世土師器皿の分類	66
C	層位間における出土陶磁器組成と変遷	67
D	遺跡間比較　－竹花遺跡と姫御前遺跡の比較－	71
2	祭祀関連遺物	72
A	木    製    品	72
B	銭    貨	75
3	検出された畦畔と古墳時代の遺物	78
《要    約》		81
《引用・参考文献》		82
《観察表》		85

## 挿 図 目 次

第 1 図	北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置	1	第 9 図	木製品出土層位模式図	25
第 2 図	試掘確認調査トレンチ位置図	2	第 10 図	環状土錘分類図	36
第 3 図	竹花遺跡の位置と周辺の地形	6	第 11 図	竹花・姫御前遺跡出土の加工円盤法量分布	37
第 4 図	竹花遺跡周辺の主な遺跡	9	第 12 図	箸状木製品形態分類図	40
第 5 図	竹花遺跡・姫御前遺跡におけるグリッドと調査区の設定	13	第 13 図	竹花・姫御前遺跡における鉄滓・羽口出土分布	44
第 6 図	遺跡間・調査区間における基本層序の対応関係	14	第 14 図	花粉化石群集	47
第 7 図	基本層序	17	第 15 図	植物珪酸体含量	50
第 8 図	箸状木製品・形代・銭貨の平面分布	20	第 16 図	珪藻化石・植物珪酸体	58

第 17 図	花粉化石	58	第 24 図	竹花・姫御前遺跡における 手づくね土師皿の分類	68
第 18 図	木材	58	第 25 図	竹花・姫御前遺跡における ロクロ成形土師皿の分類	69
第 19 図	出土骨	58	第 26 図	各遺跡における 1m <sup>2</sup> あたりの 土器・陶磁器出土破片数	71
第 20 図	竹花遺跡Ⅱ出土骨試料	61	第 27 図	形代集成図	74
第 21 図	比較標本の骨組織像	62	第 28 図	古墳時代の畦畔の位置と 遺物の分布 (Ⅳ層)	80
第 22 図	試料の H-On 示数平均値と比較動物の H-On 示数平均値の分布範囲	63			
第 23 図	層位別出土陶磁器数の変遷	67			

## 挿表目次

第 1 表	調査・整理の経過	4	第 13 表	骨同定結果	53
第 2 表	中世土師器皿の分類	33	第 14 表	竹花遺跡Ⅱ出土骨試料の骨組織形態計測値 ……………	60
第 3 表	土錘分類表	36	第 15 表	比較動物四肢骨標本における骨組織 形態計測平均値の範囲	60
第 4 表	加工円盤の分類	37	第 16 表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土 破片数 (Ⅱ a 層)	70
第 5 表	姫御前遺跡・竹花遺跡出土の 加工円盤集計表	38	第 17 表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土 破片数 (Ⅱ b 層)	70
第 6 表	箸状木製品集計表	40	第 18 表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土 破片数 (Ⅲ層)	70
第 7 表	各遺跡における出土銭貨数量表	43	第 19 表	各遺跡の調査面積における出土銭貨量	71
第 8 表	花粉分析結果	47	第 20 表	中世出土銭貨の分類	77
第 9 表	珪藻分析結果	49			
第 10 表	植物珪酸体含量	50			
第 11 表	放射性炭素年代測定結果	52			
第 12 表	暦年較正結果	52			

## 図版目次

### [図版]

図版 1	竹花遺跡遺構全体図・グリッド設定図・ 地山面起伏図
図版 2	遺構全体図 (1) Ⅱ b 層
図版 3	遺構全体図 (2) Ⅲ層
図版 4	遺構全体図 (3) Ⅳ層
図版 5	遺構個別図 (1)
図版 6	遺構個別図 (2)
図版 7	遺構個別図 (3)
図版 8	遺構個別図 (4)
図版 9	中・近世の陶磁器 (1)
図版 10	中・近世の陶磁器 (2)
図版 11	古代～近世の土器・陶磁器、石器・石製品
図版 12	木製品 (中世～古墳時代)
図版 13	金属製品、鍛冶関連遺物、 弥生・古墳時代の土器

### [写真]

図版 14	遺跡全景・遺構写真 (1)
図版 15	遺構写真 (2)
図版 16	遺構写真 (3)
図版 17	遺構写真 (4)・自然木検出状況
図版 18	自然木・倒木痕・自然落ち込み
図版 19	遺物出土状況
図版 20	中・近世の土器・陶磁器 (1)
図版 21	中・近世の土器・陶磁器 (2)、古代の土器
図版 22	石器・石製品、木製品 (1)
図版 23	木製品 (2)、金属製品、銭貨
図版 24	鍛冶関連遺物、弥生・古墳時代の土器

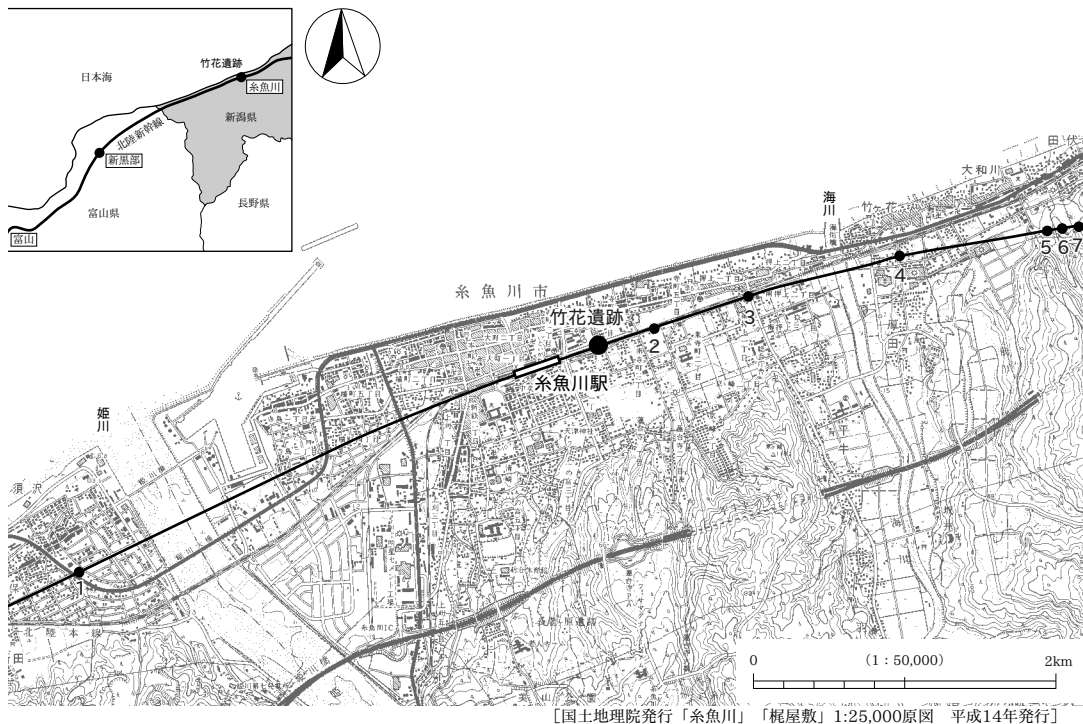


# 第 I 章 序 説

## 1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道である。東京駅を基点として、上越新幹線高崎駅で分岐し、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・福井県小浜市などを經由し、新大阪駅に至る路線である。総延長 700km（東京・高崎間の 105km は上越新幹線と共用）のうち、高崎・長野間は既に平成 9（1997）年 10 月に開業している。その後、平成 10 年 3 月には長野市を基点とし、長野県飯山市を経て上越市に至る長野・上越間の延長 60km の工事実施計画が認可された。一方、上越市から富山市までの約 110km の区間は、平成 5 年 9 月に糸魚川・魚津間が新幹線鉄道規格路線として工事実施計画が認可され、平成 13 年 4 月には上越・糸魚川間及び新黒部・富山間の新規着工が認可された。

これを受けて、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。平成 13 年 5 月、鉄道・運輸機構から上越・糸魚川間の分布調査の依頼を受け、同年 10 月に県教委が糸魚川市、西頸城郡青海町（現糸魚川市）の調査を実施した。その結果、周知の大角地遺跡、須沢角地遺跡、姫御前遺跡を含む 7 地点で遺物を採集した。さらに地形的特徴や糸魚川地域の低地での遺跡の在り方から遺物採集地以外の地点も含め、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であるものの、今後、試掘確認調査を実施し取り扱いを判断する必要があると回答した。



1 須沢角地遺跡 2 姫御前遺跡 3 南押上遺跡 4 六反田南遺跡 5 田伏山崎遺跡 6 山岸遺跡 7 深谷遺跡

第 1 図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置

## 2 調査と整理作業の経過

平成 19 年 3 月、鉄道・運輸機構から糸魚川市南寺町・中央・上刈地内の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成 19 年 11 月、平成 20 年 4 月の試掘調査の結果、隣接する周知の竹花遺跡が本線部分に拡大することが判明し、平成 19 年度は 2,600m<sup>2</sup>、平成 20 年度は 1,080m<sup>2</sup> の本発掘調査が必要と回答した。試掘調査の結果を受け、鉄道・運輸機構は県教委に対し、発掘調査の実施を要望した。県教委は平成 20 年 3 月及び平成 21 年 3 月に鉄道・運輸機構から本発掘調査を受託し、埋文事業団に依頼した。埋文事業団は平成 20 年 4 月（竹花遺跡）及び平成 21 年 5 月（竹花遺跡Ⅱ<sup>1)</sup>）に本発掘調査に着手した。

## 2 調査と整理作業の経過

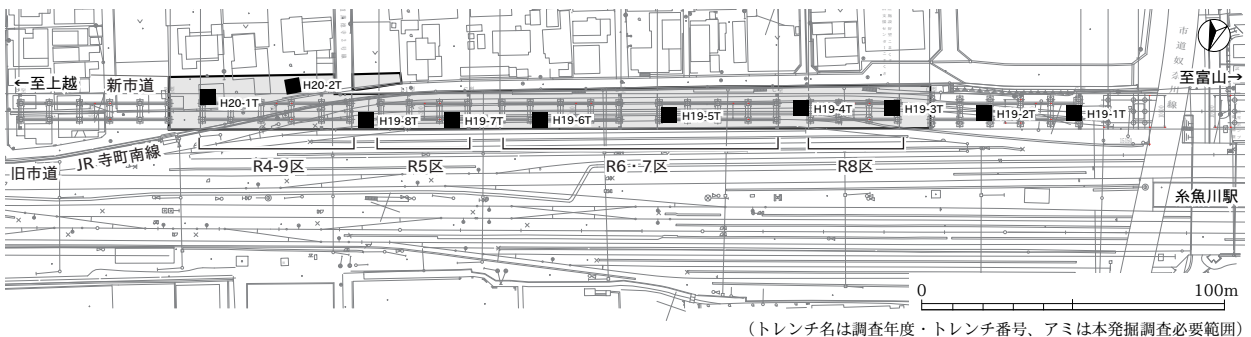
### A 試掘確認調査

試掘確認調査は、平成 19・20 年度の 2 回に分けて行った。現況は駅構内であり、新幹線の本線部分の面積 4,830m<sup>2</sup> を対象とした。調査は対象範囲内に試掘確認トレンチ（以下、トレンチとする）を任意に設定し、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。トレンチは第 2 図のように、対象範囲内に 10 か所（平成 19 年は 8 か所、平成 20 年は 2 か所）設定した。

平成 19 年度 すべてのトレンチでほぼ同様の層序が確認され、遺構は湧水のため、検出されなかったものの、すべてのトレンチから遺物が出土した。特に H19-3～8T 間では遺物量も多く、二次的に移動しにくい陶磁器や金属製品などが多いことが明らかとなった。遺物は上層から中世～近世、下層から古墳時代の遺物が出土し、2 層の遺物包含層が存在することが明らかになった。また H19-5～8T では 1～3T から基盤層の標高が 80cm 以上高く、安定した地盤に立地することが分かった。これらの状況から隣接する周知の竹花遺跡の広がりと考えられ、H19-3～8T までの 2,600m<sup>2</sup> を本発掘調査必要範囲とした。

平成 20 年度 2 か所のトレンチでほぼ 19 年度と同様な層序が検出された。遺構は検出されなかったものの、箸状木製品や杭が遺物包含層中に立てられた状態で検出された。遺物は上層から中世～近世の遺物が出土した。これらの状況から平成 19 年度と同様に隣接する周知の竹花遺跡の広がりと考えられ、H19-1～2T までの 1,080m<sup>2</sup> を本発掘調査必要範囲とした。

この結果、平成 19・20 年度分を合わせ 3,680m<sup>2</sup> が本発掘調査必要範囲とされた。



第 2 図 試掘確認調査トレンチ位置図 (S=1/2,500)

1) 竹花遺跡Ⅱの「Ⅱ」は 2 度目の調査で、2 冊目の発掘調査報告書を意味する。

## B 本発掘調査

### 1) 調査・整理の体制

#### 【平成 19・20 年度 試掘確認調査】

調査期間 平成 19 年 11 月 12 日～15 日、平成 20 年 4 月 8 日～15 日  
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）  
 調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 管理 木村 正昭（事務局長）  
       齋藤 栄（総務課長）  
       藤巻 正信（調査課長）  
 庶務 長谷川 靖（総務課班長）  
 調査担当 加藤 学（調査課班長 平成 19 年度）  
           田海 義正（調査課担当課長代理 平成 20 年度）  
 調査職員 斉藤 準（調査課嘱託員 平成 19 年度）  
           田中 一穂（調査課嘱託員 平成 20 年度）

#### 【平成 21 年度 本調査・整理作業】

調査期間 平成 21 年 5 月 7 日～8 月 20 日、11 月 18 日～平成 23 年 3 月 31 日  
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）  
 調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 管理 木村 正昭（事務局長）  
       齋藤 栄（総務課長）  
       藤巻 正信（調査課長）  
 庶務 松原 健二（総務課班長）  
 調査指導 高橋 保雄（調査課担当課長代理）  
 支援組織 株式会社 古田組 遺跡調査研究室  
 現場代理人 竹内 一喜（管理課 管理長）  
 現場世話人 小林 八郎（管理課）  
 調査担当 相羽 重徳（調査課 主任調査員）  
 調査員 上野川 勝（調査課 調査員）  
 調査員補 渡邊 大士（調査課 調査員）  
 補助員 安達鉄雄・風間 梢・小池美奈子・丸山伸子・葎原美恵子

### 2) 調査・整理の経過

平成 21 年度調査区（以下、今年度調査区）の大部分は、既設の市道 JR 寺町南線の法線内に該当する。そのため、調査前に旧市道を南側に付け替え（新市道）で、調査を行った（第 5 図）。新市道の法線内にはやはり竹花遺跡が延伸していたが、平成 20 年 9 月 24 日～10 月 28 日に調査を終えている [加藤ほか 2011]。今回の調査は、既設の市道及び JR 敷地境の擁壁等、調査に際して支障となる物件を取り除く作業から始まった。これらの作業は、鉄道・運輸機構が担当し、支障物件の除去後、引き続いて鋼矢板を用いて本調査区の土留めを行った。なお、新市道から新幹線工事区内への進入路の関係から、調査予定地の内、南西部の 6m<sup>2</sup> を隅切り部として未調査区域として残すこととし、工事の工程にあわせ、後日改めて調査することにした。4 月 28 日には土留め工事が完了し、5 月 7 日からバックホウを用いて表土除去を開始した。表土除去は、原則として近世初頭の包含層である II a 層まで、バックホウで除去することとした。ただし、II a 層は、下位の中世後期の包含層である II b 層と見分けがつきにくい場所があり、かつ、中



## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

竹花遺跡が所在する糸魚川市は、日本海に面する新潟県の西端に位置する。糸魚川市域の南側には、長野県境に西頸城山地を構成する火打山(2,467m)や焼山(2,400m)から雨飾山(1,963m)へ続く山稜が連なり、姫川を越えた西側にも本県最高峰の小蓮華山(2,769m)へ延びる峰々があり、その南側には白馬岳(2,932m)等の峻険な山々が控える。西側は、飛騨山脈(北アルプス)から北に延び富山県境となる山稜が日本海まで達し、その北端は北陸道最大の難所として知られ、断崖絶壁の景観を呈する「親不知・子不知」付近に達する。

糸魚川市は外縁部にこうした山々を擁し、市街地の周縁部には石灰岩を主体とする黒姫山(1,221m)・明星山(1,188m)がそびえ、さらに東側には能生地区の権現岳(1,104m)など、1,000m級の山地とそこから派生する急傾斜の丘陵が日本海までせまっている。こうした糸魚川地域の山岳地形等は、いわゆるフォッサマグナの西側に位置する活断層「糸魚川-静岡構造線」の地殻変動により形成されたものであり、姫川に沿ってその構造線が南下する

こうした山々からは、数多くの河川が日本海に向かって流れ出している。糸魚川市域の最西端には富山県との境界をなす境川があり、「親不知・子不知」の急崖の東側に青海川・田海川・姫川が北流する。姫川を代表とするこれらの河川で、ヒスイを産出する。ヒスイは、フォッサマグナの形成過程で生成された硬質の岩石で、含有金属の量によって色調が異なる。その製品等は、縄文時代から古墳時代に日本各地にもたらされ、糸魚川地域を中心とする翡翠文化の広まりが注目されてきた。

姫川支流である小滝川の「小滝川硬玉産地」と青海川上流橋立の「青海川の硬玉産地及び硬玉岩塊」は、巨大な転石が散在し、また大露頭が露出することから、それぞれ国の天然記念物として指定を受けている。近年は、姫川等から産出したひすい輝石岩の中に新鉱物が発見されている。姫川の東側には、海川・早川・能生川が蛇行しつつもほぼ平行に山間部を開析し日本海に注ぐ。これらの河川は、妙高山(2,454m)から連なる火打山・焼山・雨飾山などの高山にその源流を発し、海谷溪谷等の急峻な谷地形を発達させる。

姫川は、南方の長野県大町市青木湖北側に源流湧水があり、本県糸魚川市内で海に注ぐ急流である。糸魚川地域は、古来からこの姫川に沿って内陸部へ物資を運ぶ起点として機能し、南北交通の要地であったと見られる。また、古代以降には律令国家の駅伝制に伴う北陸道の駅家が置かれたものとされ、日本海の海岸部を結ぶ陸上交通・海上交通の一拠点となってきた。現在も日本海側を通る国道8号線と北陸自動車道とJR北陸本線などは、北陸地方の大動脈として大きな役割を果たし、また長野県大町市につながる国道148号線とJR大糸線は急峻な山間部を縫うように建設され、この地域の重要な交通路となっている。

この地域の母なる川とも言える姫川の支流である根知川の流域には細長い谷地形が形成され、姫川右岸等から根知谷南部を通り、信州に続く交易路として通称「塩の道」(松本街道)が通っている。松本街道は糸魚川と信州松本を結ぶ街道で、糸魚川から信州へは塩や海産物が運ばれ、信州からはたばこ・大豆・綿・紙等がもたれされた。平成14年には、道路の痕跡を良好に残している大野地区と根知地区の道路跡と茶屋跡と石仏群等が史跡「松本街道」として国指定となっている。

## 1 地理的環境



第3図 竹花遺跡の位置と周辺の地形（「糸魚川市都市計画図 1：10,000」をもとに作成）

この「塩の道」が通る市街地南側に形成された段丘は、高位段丘から低位段丘まで6面に細分されている [鈴木 1982]。高位段丘の2面は糸魚川台地の約半分を占めると見られ、各段丘面にはそれぞれ縄文・弥生・奈良・平安時代などの遺跡が分布し、時代ごとの遺跡分布等も考察されてきた [寺崎 1988]。特に長者ヶ原遺跡は、縄文時代中期を中心とするヒスイの玉などを製作したこの地域の拠点集落としての重要性から国指定史跡となっている。

こうした後背地を持つ糸魚川市域の中心部は、姫川と海川に挟まれた扇状地と西南西から東北東に延びる海岸砂丘列とその南側に形成された平野からなる。日本海に面する扇状地と海岸平野には、南側の段丘から流れ出て天津神社東側から北流する城之川等の小河川が、段丘列との間にかつては低湿地（後背湿地）を形成していた場所もあったが、その後水田となり現在は市街地化している。砂丘は姫川河口から横町・寺町を経て押上まで約4kmにわたって発達し、その上に北国街道や国道8号が通り、近世以降と見られる集落が営まれてきた。

竹花遺跡は、糸魚川市街地の姫川と海川に挟まれた沖積地の中央付近に位置する（第3図）。調査地点は、JR 糸魚川駅の東方約500m、海岸線から約400m内陸の場所である。この場所は、現在の姫川河岸から東へ2,700m、現在の海川河岸から西へ1,700mの地点である。本遺跡の東北東約600mには、平成18年度に発掘調査が実施され、古墳時代と中世の遺構と遺物が検出された姫御前遺跡が位置する [加藤・相羽ほか 2008]。

美山丘陵の先端部に位置する天津神社・奴奈川神社と糸魚川駅に挟まれた通称三反田地区は、城之川の氾濫時にはたびたび水害に遭遇したが、現在は住宅地となっている〔糸魚川市史編さん委員会 1986〕。その一帯にはかつては低湿地が広がりその中に池等が見られたが、その後水田となり現在に至る。この場所は姫川と砂丘列に挟まれた場所に当たり、竹花遺跡は南西が低地に接し、東側は姫御前遺跡につながる沖積地が広がる。

## 2 歴史的環境

糸魚川市域は原始時代からヒスイ製品の生産などを行う文化が発展し、糸魚川を中心としたヒスイの交易は縄文時代中期から後期には全国的な規模の展開を見せた。そのため、縄文時代以降のヒスイ製品を生産した遺跡等が多数分布し、発掘調査も行われてきた。例えば縄文時代の遺跡では、長者ヶ原遺跡と寺地遺跡が著名である。

長者ヶ原遺跡（13）は、糸魚川市街地の南方約 2km の丘陵上に位置する縄文中期を中心とする集落である。昭和 29 年以降の発掘調査により竪穴住居・土坑・掘立柱建物等の遺構と、ヒスイ原石や大珠の未成品などが多量に出土し、縄文中期におけるヒスイ製大珠の生産拠点・拠点集落としての重要性から昭和 46 年に国指定史跡となっている〔糸魚川市史編さん委員会 1986、木島<sup>ほか</sup> 2007〕。また、寺地遺跡（4）は、姫川と青海川の間を流れる田海川の河口付近の低丘陵の先端部に位置する。縄文時代中期と晩期の竪穴住居（玉作工房跡）や巨木柱・配石遺構等が検出され、多数のヒスイ原石・ヒスイ製品・石器類・土器類等が出土しており〔寺村<sup>ほか</sup> 1987〕、昭和 55 年に国指定史跡となっている。

近年では、市街地東部の海川右岸の沖積地に立地する六反田南遺跡（27）で発掘調査が行われ、縄文時代中期の竪穴住居・竪穴状遺構・廃棄場等が検出され、多地域の様相を示す土器類や石器類・ヒスイ原石等が出土した〔細井・松井 2008、山本 2010〕。この時期の低地遺跡の集落調査は、県内初として注目されている。

ここでは、竹花遺跡と同じ時期である古墳時代から中世の遺跡について、分布や出土遺物等を概観する。

### 古墳時代

糸魚川地域では弥生時代からの伝統を受け継ぎ、古墳時代の玉作遺跡が多数分布している。竹花遺跡の南東約 650m に位置する笛吹田遺跡（22）では弥生時代後期から古墳時代に滑石製・ヒスイ製等の玉類を製作している。過去の発掘調査では特殊ピットや方形周溝墓・溝状遺構等が検出され、管玉・勾玉・白玉・紡錘車等の製品と玉類の未成品・剥片、土師器・原石類・砥石等が出土している〔安藤<sup>ほか</sup> 1978〕。近年の発掘調査でも、古墳時代前期・中期の多くの遺構が検出され、土師器や各種の玉類等、多種・多量の遺物が出土している〔糸魚川市教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006〕。

竹花遺跡の南西約 550m に位置する一の宮遺跡（18）は、姫川と海川にはさまれた丘陵の北側先端部に位置している。奴奈川神社・天津神社を祀る境内の一部が大正 8 年に発掘調査され、古墳時代後期の土器や滑石製勾玉・白玉等が出土している〔糸魚川市史編さん委員会 1986〕。一の宮遺跡の西側に隣接する清崎城跡（糸魚川城跡）（19）では、平成 4 年度の発掘調査で、土師器・須恵器・滑石製品・滑石製未成品等が出土している〔山岸 1999〕。

姫川と田海川に挟まれた丘陵の北側に位置する大角地遺跡（5）は、昭和 45・48 年の発掘調査で玉作（白

## 2 歴史的環境

玉) 工房跡が検出され、滑石製玉類が多数出土している [寺村<sup>ほか</sup>1979]。北陸新幹線関連の発掘調査では、古墳時代の白玉・白玉未成品等が溝の中から出土し、そのほか土師器・須恵器・勾玉・勾玉未成品・管玉・白玉・白玉未成品等も出土している。白玉と白玉未成品の石材は、従来から滑石と呼ばれてきたものであるが、岩石学的には緑泥石岩であることが判明した [加藤・相羽<sup>ほか</sup>2006]。田伏遺跡 (34) は、昭和 45 年に発掘調査され、玉作とその祭祀が行われた遺跡と見られている。遺物は、中期から後期の土師器・滑石製の白玉・管玉・勾玉未成品・砥石・原石類等が出土している [関 1972、糸魚川市市史編さん委員会 1986]。

竹花遺跡の東北東約 600m (遺跡の中心同士の距離) に位置する姫御前遺跡 (21) では、北陸新幹線建設に伴う発掘調査が実施され、古墳時代前期から後期の土器類 (甕・鉢・小形壺・高杯) や玉作遺物・石器・木製品等が出土している。玉作遺物は、滑石製の勾玉・管玉・白玉やヒスイの原石・剥片等があり、近隣で玉作が行われていたと見られている [加藤・相羽<sup>ほか</sup>2008]。また横マクリ遺跡 (29) では、滑石を主体とする玉作が確認され [渡邊<sup>ほか</sup>2008]、六反田南遺跡 (27) では平成 21 年度の調査で前期の玉作遺構が発掘されている [山本 2010]。

平成 20 年度の調査では、南押上遺跡 (23) から古墳時代前期の竪穴建物や溝をもつ建物等が発掘されている。特に 1 号竪穴建物は新潟県内最大級の規模を持つこと、また床面のほぼ中央に構築された石囲炉は県内初の発見となること等の成果が見られた [小池 2008]。また竹花遺跡 (17) の平成 20 年度の調査 (竹花遺跡 I) では、古墳時代前期の畦畔等が検出された。畦畔の構築は、土を盛り上げただけのものと板材や木製品を敷き詰めたり、芯材にしたりしたものが見られ、後者では建築部材や木製の農耕具等が出土している [加藤・相羽<sup>ほか</sup>2011]。

## 古 代

古代には、新潟県域は越国の一部であった。『日本書紀』の記載によれば 7 世紀前半の越国は越前・越中・越後に分割されていたと見られ、この頃の越後国は阿賀野川以北を指していたものとされ、頸城郡は越中国に属したものと考えられている。この後、大宝 2 (702) 年に越中国の 4 郡 (頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡) が越後国に分割され、さらに和銅元 (708) 年に越後国に設置された出羽郡が和銅 5 (712) 年に出羽国として分立された。こうして佐渡を除く新潟県の領域が定まったと考えられている [山田 1986]。

頸城郡は越後国の南西端に位置し、『和名類聚抄』には 10 郷が記されており、竹花遺跡を含む地域は頸城郡沼川郷に該当すると考えられる [山田 1986]。なお『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」と見え、頸城郡内に越後国府があったと考えられている。近年では、上越市今池遺跡と本長者原遺跡の周辺に国府と国分寺が存在した可能性が高いとされている [坂井<sup>ほか</sup>1984]。

古代律令制下の駅伝制では越後の駅馬・伝馬として、「滄海 8 疋、鶉石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各 5 疋、伊神 2 疋、渡戸船 2 艘、伝馬頸城・古志郡各 8 疋」『延喜式』と記されている。この中の「滄海」は現在の糸魚川市青海地区 (旧青海町) にあったものと見られる。滄海の駅馬の数は越後国内では 8 疋と多く、この地域の駅路が険しいことと無関係ではないと考えられる。越中国から越後国への北陸道は、海岸沿いは「親不知・子不知」の急崖であるため、迂回して山間部を通る山道 (上路道) が多用された可能性がある。これは県境の市振から境川沿いに南下し上路に入り、坂田峠付近から旧青海町橋立を通過して滄海駅家に至るものと想定される。また、海沿いの道や海路も利用されていたと見られる。

糸魚川地区 (旧糸魚川市域) では、道者ハバ遺跡 (10) において古代の住居や井戸などが検出されており、





第4図 竹花遺跡周辺の主な遺跡（加賀街道周辺の位置は[土田 1991]による。）

〔国土地理院発行「糸魚川」「小滝」1:50,000原図 平成8年発行〕

## 2 歴史的環境

緑釉陶器・灰釉陶器が多数出土し、土師器・須恵器も多量に見られることから当地方の中心的な遺跡と見られている。道者ハバ遺跡の東側丘陵上に位置する新割遺跡では、竪穴住居 5 軒・土坑 3 基等が検出され、土師器・須恵器・製塩土器等が出土した〔糸魚川市史編さん委員会 1986〕。新割遺跡の南側に隣接する原山遺跡では、10 世紀初頭ころの竪穴建物 2 軒・鍛冶遺構 1 基等が検出された。海川右岸の丘陵北端部に位置する山崎 A 遺跡 (30) では、土師器の一括廃棄土坑から多数の墨書土器等が出土し、また大型の掘立柱建物等が検出されるなど、古代後期から中世初頭ころの資料が得られている〔木島 2007〕。山崎 A 遺跡の北東約 1km の山岸遺跡 (37) では、9～11 世紀の水田・溝等が検出され、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器のほか多種多様な遺物が出土している〔春日 2009〕。また金山城跡の東側山麓に位置する立ノ内遺跡 (41) では、多数の製塩土器が出土している〔高橋ほか 1988〕。

青海地区 (旧青海町域) では、姫川の西側から青海川付近の平野部に北陸道の駅路が造営されたものと想定され、須沢周辺が渡河地点となる。須沢角地遺跡 (7) は、過去の発掘調査により竪穴住居 31 軒が検出され、7 世紀末～9 世紀前半を中心とし、10 世紀後半まで続く集落である〔土田ほか 1988〕。北陸新幹線建設に伴う発掘調査では 8 世紀末の竪穴建物などが検出され〔辻 2006〕、最近の調査では 7 世紀後半～8 世紀初頭と 9 世紀後半の住居等が検出され、竪穴建物の竈周辺に特殊な土器の出土状況が認められることから、祭祀 (儀礼) 行為と考えられている〔今村・山岸 2008〕。西角地古窯跡 (6) では、窯壁・窯体の一部が検出され、焼土や須恵器が多数出土した。8 世紀末から 9 世紀初頭ころの窯跡と見られている〔春日 1998〕。

能生地区 (旧能生町域) では、古代は駅家として「鶉石」が置かれた。その駅家と駅路などは未発見であるが現在でも能生川左岸に鶉石の地名があり、鶉石の周辺には大道寺・柱道・島道など「道」に関する地名が多く残る。近年では角地田遺跡で、10～11 世紀の溝・掘立柱建物等に伴い、多数の土器類・「臣」の墨書土器・10 世紀後半の越州窯系青磁碗等が出土している。在地の有力者が居住する集落と見られている。また隣接する平遺跡では、9 世紀の土師器・須恵器等が出土している〔實川ほか 2009〕。

### 中 世

中世のこの地域では、史料や仏像銘に「沼河保」・「布河庄」と記されていることが知られている。糸魚川地区では、金山城跡 (40) の立地する丘陵北端では昭和 44 年に発掘された田伏製鉄遺跡 (35) で鉄滓・羽口等の遺物が出土した〔糸魚川市教育委員会 2008〕といわれるが、遺跡の時期は不詳である。田伏製鉄遺跡の東方山麓では、岩倉遺跡 (39) で中世の水田跡と見られる方形区画遺構や中近世の土器・陶磁器類が出土している〔山本・高橋ほか 2003〕。近年、早川左岸の丘陵北端部に位置する伝極楽寺跡 (36) で、山麓の平場から中世の礎石建物等が中世陶磁器を伴って検出されている〔石川ほか 2010〕。また、その南西に位置する山岸遺跡 (37) では、平安時代から鎌倉時代を中心とする多数の遺構と遺物が検出された。特に、池等から成る鎌倉期の庭園遺構と大型掘立柱建物等が広く注目を集め、鎌倉期の遺構は北条氏一門の名越氏に係わるものと見られている〔春日 2009〕。山岸遺跡北東丘陵にある田伏薬師堂には数段の平場が造成されており、南北朝期の五輪塔 2 基が現存している。

市街地南側に位置し、戦国期ころに廃絶した蓮台寺は天台系の寺院と見られており、これに対して天津神社境内には真言密教系の一の宮神宮寺があったとされている〔糸魚川市教育委員会 2001・2008〕。蓮台寺は寺跡が確定されていないものの、その地名が蓮台寺川に沿った台地の谷部や台地上に残されていることから、糸魚川台地の中央部を広く保持していた可能性がある。現在、国指定木造十一面観音立像を安

置する水保観音堂（44）の境内からは、中世陶磁器が出土している〔山岸・田村 2004〕。

また、先に触れた姫御前遺跡（21）では、室町時代から戦国時代の掘立柱建物 1 棟・杭列 1 列が検出され、土師器・青磁・白磁・瀬戸美濃焼・珠洲焼等の陶磁器類、箸状・棒状・人形・刀形・下駄等の多数の木製品、銭貨・鉄釘・鉄関連資料等が出土し、箸状木製品等は水辺の祭祀に関連する可能性が指摘された〔加藤・相羽ほか 2008〕。姫御前遺跡は本遺跡の東側に近接し、遺跡の立地や出土遺物の種類等が類似する。なお、本遺跡の北側には、かつて「観音寺」（かんおんじ）と呼ばれた寺院があった（第 3 図）〔糸魚川市教育委員会 2001〕。観音寺は、現在糸魚川市寺町に所在し無住となっているが、延徳 3（1491）年に管領細川政元の越後下向に従った冷泉為広の日記史料には、観音寺がその際の宿所となっていたことが見える〔矢田 1994〕。

青海川右岸の丘陵上に位置する青海神社裏の天神山姫塚からは、大正 8 年に陶製経筒 1 口・鏡 3 面が発見され天神山経塚（1）として知られる〔金子 1975〕。経筒は珠洲焼で、仁安 2（1167）年の年号や僧名等の刻銘がある。寺地遺跡（4）では、近年の北陸新幹線の建設に伴う発掘調査により、箸状木製品や中世陶磁器等が出土している〔佐藤ほか 2002〕。能生地区では、白山神社本殿が永正 12（1515）年の建立で、国指定の建造物となっている。白山神社には平安後期の木造聖観音立像（国指定）等が伝世され、この場所が平安期以来の信仰の地であったものと見られる。

糸魚川市街地中心部に位置する清崎城跡（糸魚川城跡）では、平成 4 年度の発掘調査で中世土坑（墓）・溜池状遺構等が検出され、珠洲焼・青磁・銭貨が出土している〔山岸 1999〕。越中国境に近い勝山城跡は、「親不知・子不知」の一部である子不知の断崖絶壁から続く勝山山頂部に位置し、越中方面に対する山城と見られている。早川左岸の金山城跡（40）は、不動山城跡の支城とされ堀切・郭等が残る。金山城跡の東側山麓に位置する立ノ内遺跡（41）は、北陸自動車道建設に関連して発掘調査が実施され、15 世紀後半から 16 世紀前半の掘立柱建物等が検出された。早川右岸の不動山城跡は、上杉家譜代の山本寺氏の居城で南北朝期の築城とされ、山腹に堀切・帯郭・井戸等が残る。根知城跡は、糸魚川地域で最大規模を持つ山城で、山上には堀切・郭等の城郭遺構が現存し、山麓には根小屋と町屋が想定されている。

中世後期から近世初期の原山十三塚（14）や山崎三十三塚（26）は、段丘から丘陵上に造営されている〔木島 1989〕。このほかに、蓮台寺の塚・狐塚・長者ヶ原の塚・菊畑の塚等が大字一ノ宮と大字蓮台寺に分布する。

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1 グリッドと調査区の設定 (第5図・図版1)

#### A 調査区の設定

今年度調査区は、北陸新幹線法線内にあり、平成20年度調査におけるR5区の東10mに位置する。調査区は幅8.5m、延長53mで、調査面積は448m<sup>2</sup>である。しかし、調査地は市道及び付随する埋設物(ライフラインなど)、JR用地境の擁壁などが設置されていた場所で、遺跡への損傷が著しく、実際に調査できた面積はそれよりも少ない。なお、調査前に敷設されていた市道JR寺町南線は、本調査区の南側に付け替えられている(新市道)。付け替え部分は既に平成20年度に調査(R4-1～8)が行われている。今年度の調査は、平成20年度調査時に付した調査区の呼称との連続性を重視し、「R4-9区」と呼称する。

#### B グリッドの設定

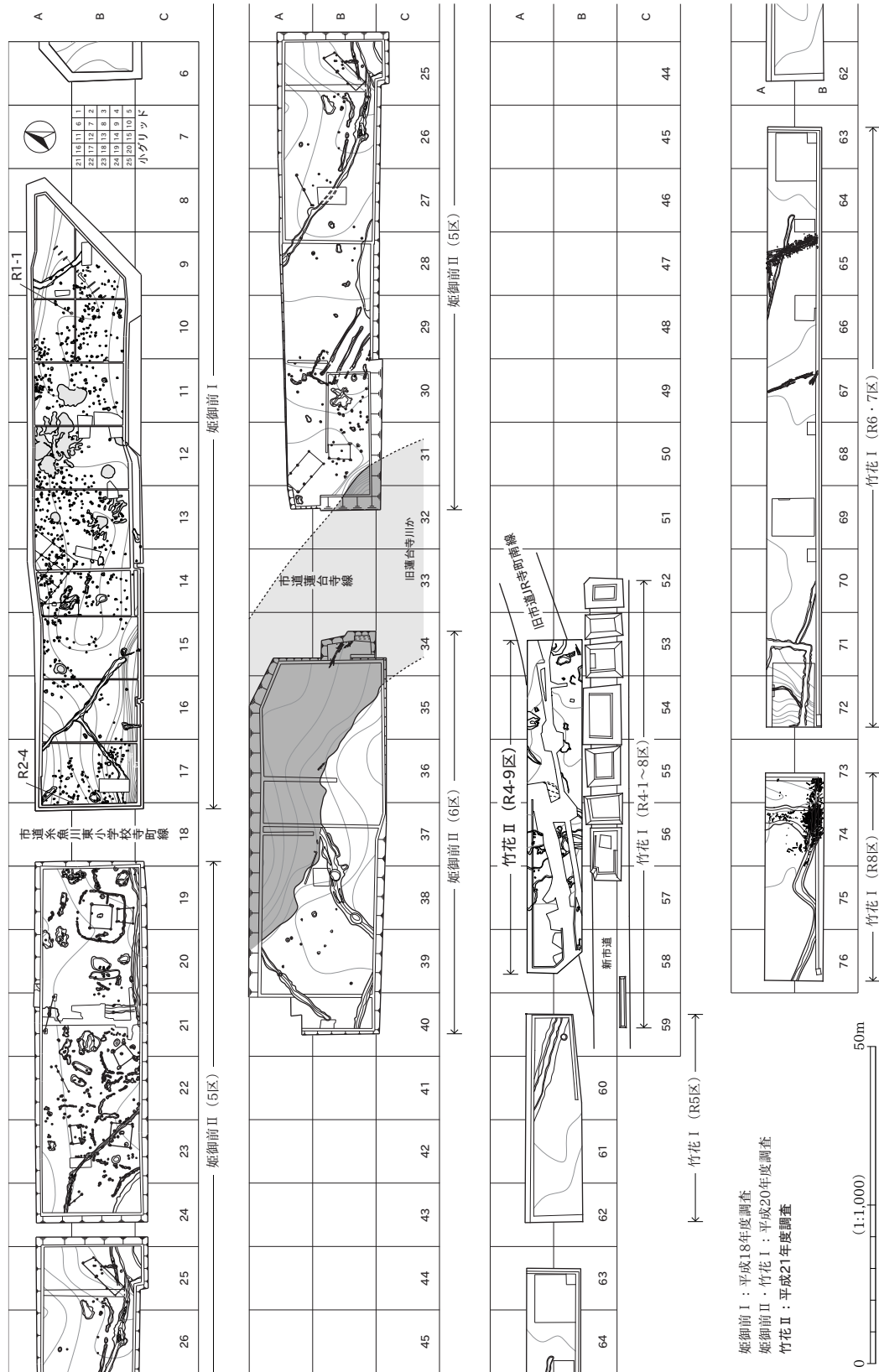
今年度調査区は、平成20年度調査において設定したグリッドに含まれることから、名称及び方法を踏襲し、使用することにした。

竹花遺跡を覆うグリッドは、平成18年に姫御前遺跡に付したグリッドを延長させて使用している。竹花遺跡と姫御前遺跡を同じグリッド上に配したのは、両遺跡が同じ新幹線法線内の近隣に位置していたためである。この間の新幹線法線はほぼ直線であり、グリッドラインがいずれの調査区に対しても平行して設定できた。また、両遺跡は類似した時代の遺跡であったため、両者の比較検討を容易にした。

グリッドの設定方法は、新幹線法線のセンターラインを主軸とする方法である。主軸は、新幹線法線センター杭R2-4(世界測地系X=115906.5398、Y=-55596.2477)とR1-1(X=115931.7057、Y=-55523.6880)を結んだラインである。そのため、主軸は真北から70度52分19秒東偏している。そして、杭R2-4で主軸と直交するように一定の間隔で方眼を組み、グリッドとしている(第5図)。

グリッドは、大・小2種類からなる。大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドをさらに2m四方に25分割したものである。大グリッドの呼称は、杭R2-4から主軸に沿って170m東の地点を起点とし、東から西へ向かい1・2・3…とアラビア数字を付していった。また、基準ラインの北側10mをA、南側10mをBとし、以下、南に向かって10mごとにC・D…とアルファベットを付した。小グリッドは、北東隅を1、南東隅を5、北西隅を21、南西隅を25となるように番号を付し、大グリッド番号との組み合わせで「55B2」などと表示した。

この方法により、今年度調査区であるR4-9区は、53～58列に含まれることになる。なお、主軸は調査区中央を横断し、54B1の座標値はX=115788.570、Y=-55936.370で、58B1の座標値はX=115775.462、Y=-55974.162である。



第5図 竹花遺跡・姫御前遺跡におけるグリッドと調査区の設定

## 2 基本層序 (第7図)

今年度調査範囲では、調査区全域にほぼ平坦に土層が堆積しており、基本層序がほぼ対応可能であった。調査時に使用した基本層序は、平成20年度調査区において使用した層序と一致している(第6図)。また、平成20年度調査では、姫御前遺跡とおおむね同様の層順を示していたことから、姫御前遺跡と共通した層序を付した。そのため、層名が付されてはいるが、今年度調査区において検出されなかった層位もある。

- O 層 盛土 北陸本線(引き込み線)及び市道JR寺町南線造成時の碎石等による盛土。
- I 層 暗オリーブ灰色土 旧表土。炭化物をわずかに含む。近代以降の遺物を含む。層厚は10cm程である。
- II a 層 にぶい黄褐色シルト 近世前半を中心とする遺物包含層。炭化物を少量含み、円礫をわずかに含む。基層は、粒径が粗い。層厚は5~10cm程と薄い。

花粉分析の結果(自然科学分析の詳細については第VI章を参照)からは、草本類の増加が指摘されている。特にイネ科の多産が顕著で、カヤツリグサ科・ヨモギ属などの明るく開けた場所に生える人里植物や、オモダカ属・ミズアオイ属など水湿性植物が認められる。イネ属の植物珪酸体も約23,000個/gと高値を示し、周辺での水田域の拡大開発が益々進行した様子が看取される。栽培種のソバの花粉も検出されており、該期にソバの栽培も開始された可能性がある。生産域の拡大は、周辺植生にも影響したと考えられ、従来より優勢であったスギ属が減少し、マツ属(二次林)が特徴的に見られるようになり、湿地を好むハンノキ属も多く生育する環境であったと考えられる。

- II b 層 黒褐色シルト 中世後期(15~16世紀が中心)の遺物包含層。箸状木製品などの祭祀関連遺物を含む。また、人骨を含む獣類の焼骨片が散見される。炭化物をわずかに含む。層厚は、10~15cm程である。

花粉分析の結果からは、草本類の増加が指摘されている。II a 層ほどではないが、やはりイネ属の多産が顕著である。その他、人里植物や水湿性植物が認められる。また、イネ属の植

	姫御前 I	姫御前 II		竹花 II	竹花 I
	居住域?	居住域	流路	生産域	生産域
近現代	I	I	I	I	I
近世後半(18~19世紀)	II a	II a	II a	II a	II a1
近世前半(17世紀)					II a2
中世後期(15~16世紀)	II b	II b	II b 上部 II b 下部	II b (III)	II b1 II b2
古代(9世紀)	III		III 上部		III
古墳前期(6期以降)~ 古墳後期(中心は古墳前期)	IV	a	IV 下部	IV	
	V	b	V 上部		IV1
		c	V 下部		IV2
5期~6期?(火山灰)		d			V
弥生後期~古墳前期(5期)	—			—	
縄文時代晩期	倒木痕	倒木痕	樹根痕?	樹根	樹根
漸移層	VII	VII	VII	VII	VII
地山	VIII	VIII	VIII	VIII	VIII

第6図 遺跡間・調査区間における基本層序の対応関係

[加藤・相羽ほか 2011 に加筆]

物珪酸体も約 20,000 個 /g と高値であり、周囲に開けた水田域が広がっていたことを示している。実際に、隣接する平成 20 年度調査区（竹花 I 遺跡）で、水田遺構を検出している。周辺植生は、スギ属が優勢で、ハンノキ属・ニレ属など適湿地に生育する樹木の花粉が見られる。

- Ⅲ 層 黒褐色粘質シルト 中世後期（15～16 世紀が中心）の遺物包含層。箸状木製品を多量に含む。Ⅱ b 層より色調が暗く、粘性が強い。Ⅳ層由来の褐灰色粘質シルトブロックをわずかに含む。層厚は、15～20cm 程である。

花粉分析の結果からは、適湿性のハンノキ属の増加が指摘されている。また、イネ属の多産が見られ、人里植物や水湿性植物が広がる環境であったと考えられる。イネ属の植物珪酸体については、籾や葉部に含まれる細胞列が検出されるなど周囲の水田耕作を裏付けるものの、約 8,600 個 /g とⅡ b 層に比べると低値である。平成 20 年度に R8 区で実施した花粉分析と珪藻分析の結果からは、草本花粉の減少とガマ属花粉の増加が認められ、停滞した止水域を好む珪藻が検出されていることから、水田が一時的に衰退した可能性が指摘されている。

- Ⅳ 層 褐灰色粘質シルト 古墳時代前期後半～後期の遺物包含層。Ⅷ層（地山）をブロック状に少量含み、下位の層（Ⅷ層）との攪拌が著しい。また、本層と下位の層（Ⅷ層）との層境は不整合が顕著である。本層とⅧ層との層境で検出された、小畦畔の可能性のある木材（自然木 A）は、放射性炭素年代測定の結果、BC95～1（暦年較正年代）の値を示している。平成 20 年度調査で顕著であった草本質泥炭層と火山灰の混入は、明瞭でない。層厚は、20cm 程である。

花粉分析の結果からは、スギ属を優勢とする木本花粉が多く、草本花粉は少ない。ただし、草本花粉にはイネ属のほか、人里植物や水湿性植物が見られる。また、イネ属の植物珪酸体は、約 3,400 個 /g 含まれており、やや低値ではあるものの、水田域の分布を示していると考えられる。

- V・Ⅵ層 姫御前遺跡 I の低地で認められた地層であるが、本調査区では検出されなかった。

- Ⅶ 層 漸移層 Ⅷ層を基調とし、褐灰色粘質シルトを斑状に含む。存在しないところも広く認められる。Ⅳ層とⅧ層の層境は乱れており、凹凸が激しいことから、その移り変わりの際の残痕である可能性が高い。

- Ⅷ 層 オリーブ灰色シルト 無遺物層であり、地山である。粒径が均質なシルトを基調とし、混入物はほとんど認められない。Ⅳ層との層境から下位にそれぞれ 20cm 程の層厚で、シルトと細砂の互層が続く。

花粉化石の保存状態は悪い。わずかにイネ属の花粉が検出されているが、植物珪酸体は約 900 個 /g と極めて低値で、栽培種の植物珪酸体は検出されていない。

以上が、今年度調査における竹花遺跡の基本層序である。平成 20 年度調査で設定した層位を踏襲しながらも以下のような複数の違いが認められる。

Ⅱ a 層は平成 20 年度調査において土質の違いからⅡ a1・Ⅱ a2 層の 2 層に区分でき、それぞれ 17 世紀初頭～末（Ⅱ a2 層）と 18～19 世紀以降（Ⅱ a1 層）の時代の異なる遺物包含層であったわけであるが、今年度調査においては、分離が不可能であった。しかしながら、今年度調査においては、地層の特徴の類似性、及び層中から 17 世紀前半の遺物が主体的に出土していることなどから、主にⅡ a2 層に対応するものと考えられる。

- Ⅲ層は、今年度調査において中世後期の遺物、及び中世に属すると考えられる箸状木製品が多数出土し

## 2 基本層序

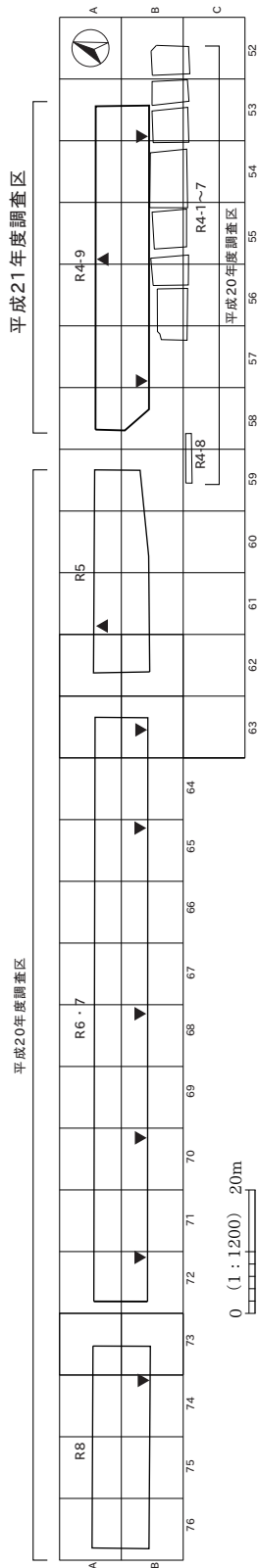
ており、古墳時代の遺物の混入は10%以下であった。平成20年度調査でも、層中に古墳時代の遺物がほとんどなく、一部中世の遺物が含まれていることを確認している。しかし、平成20年度調査では、姫御前遺跡との層位の対応関係から、古墳時代の相当層とし、出土した中世遺物は水田耕作時の上位からの踏み込みなどによる局所的な混入としてとらえている。しかしながら、今年度調査でⅢ層と付与した層には中世遺物がまとまって出土していることから、本層は、中世後期の包含層としてとらえることにした。仮に今年度調査のⅢ層と平成20年度調査のⅢ層が異なる層であるとするならば、層順・出土遺物の様相・地層の特徴などの類似性をかながみて、Ⅱb2層に対応する可能性がある。また、土層観察の結果、層中に下位層由来のブロックが混入している状況も看取され、水田耕作などの影響により、Ⅱb層とⅢ層が攪拌された結果生じた混合層である可能性も否定できない。

Ⅳ層についても同様で、下位層（地山）由来のブロックが混入しており、攪拌が著しい。そのため、平成20年度調査において細分の指標とした草本質泥炭層や火山灰は、明瞭に検出することができなかった。したがって、今年度調査においては、本層を細分せずに古墳時代の包含層として一括した。層中からは、数が少ないながらも古墳時代前期後半の土器が出土しており、齟齬はない。

なお、Ⅳ層とⅦ層の境には自然木の樹根、あるいは倒木痕が検出された。共伴遺物は出土しなかったものの、層順的に姫御前遺跡や竹花遺跡Ⅰで検出されたものと合致し、同時代の樹痕である可能性が高い。

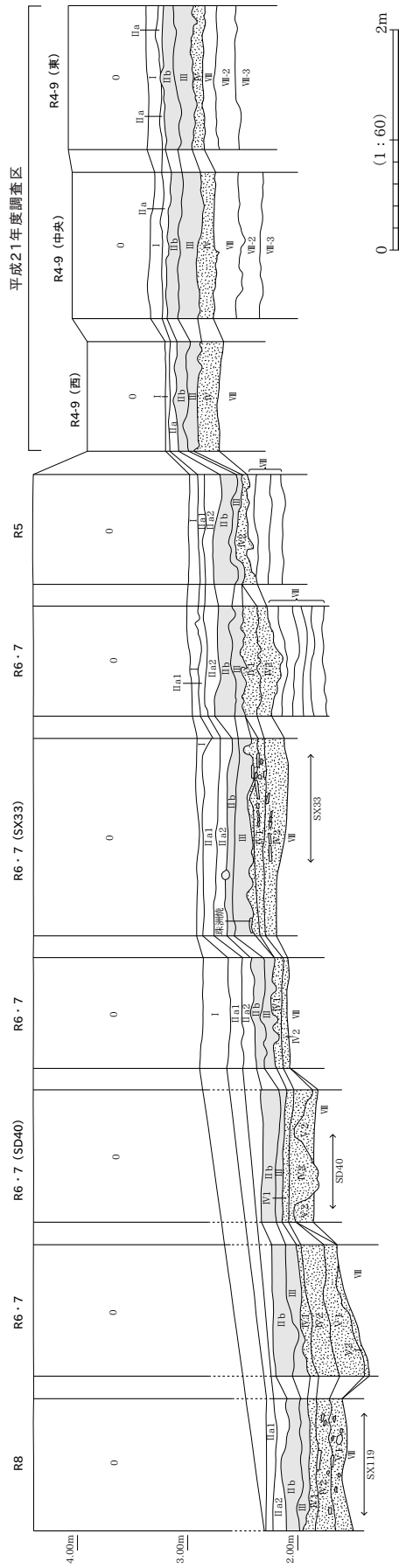


〔竹花遺跡調査区平面図〕



▲ 基本層序測定地点

〔柱状図〕



第7図 基本層序

# 第Ⅳ章 遺 構

## 1 概 要

調査区からは、古墳時代から近世の遺構が検出された。遺構の時期と種類は、近世の溝 1 条、中世の土坑 1 基、中世の木製品環状刺突遺構 1 箇所・木製品集中刺突遺構 1 箇所・木製品弧状刺突遺構 1 箇所、中世の木製品刺突等の検出地点が多数、古墳時代前期頃の畦畔 2 条、古墳時代前期以前で時期不詳の風倒木痕・倒木・樹根・自然落ち込み等が検出された。

近世の溝は、南北方向に伸びる溝で覆土から曲物底板が出土した。中世の遺物包含層からは、祭祀関連遺物である箸状木製品が多数出土し、棒状木製品・板状木製品・杭状木製品・形代（人形・舟形・刀形）・曲物（底板）・銭貨・銅製品・鉄滓・羽口・砥石等も出土している。

箸状木製品は、地面に垂直または斜位に突き刺した状態で検出されたものが多数あり、何らかの意図を持って意識的に突き立てたと見られる。また、水平近くに横たわって出土した箸状木製品も見られた。箸状木製品の中には先端部が炭化しているものがあり、これらはいわゆる「火付け木」と見られるが、火付け木の中には箸状木製品と明らかに形状の異なるものも見られる。

箸状木製品等の出土状況では、単独で出土する場合と、2～3本が近接して出土した例、また刺突された箸等の木製品が環状に分布して出土した例、箸等の木製品が小範囲に集中して出土した例、箸等の木製品と土師器・銭貨が弧状に分布して検出された例等の各種の出土状況が見られた。なお、箸状木製品等の検出層位はⅡb層～Ⅳ層である。

古墳時代前期頃の畦畔は、後世の攪乱によりその大部分が破壊されていることから、わずかに検出されたのみである。そのため、遺構の規模等は部分的な数値を得るに留まったが、基軸方向や規模等に平成20年度調査で検出された東西方向の大畦畔との連続性が認められ、その東側に直線的に連続する同じ畦畔の一部であると判断した。また、この東西方向の大畦畔と同じ時期の南北方向の畦畔も検出した。

## 2 近世の遺構

調査区の西側で、溝（SD401）1条を検出した（図版2・5・14）。SD401の検出面はⅡb層上面であり、溝の覆土はⅡa層に類似する黄灰色系である。竹花遺跡Ⅰ・姫御前遺跡の調査成果〔加藤・相羽ほか2011〕及び今年度調査の結果から、Ⅱa層には17世紀を主体とする遺物が含まれるため、近世に形成された層と見られている。

SD401は58Aグリッド南西部で検出され、溝の主軸方向は南南東から北北西(N-17°-W)である。溝は、調査区内では直線的に長さ4.1mが検出されたが、北西壁面の一部には隅丸方形に突出する部分が見られる。溝の幅は調査区中央部で70～120cm、南端部で100cmである。調査区北部では、深さ14cmである。溝の断面形態は、緩やかな逆台形状に近いが、両壁面は急角度である。溝の底面は凹凸が多く見られるが、中央では部分的に平坦部がある。覆土は締りが強く炭化物を少量含み、また細砂がブロック状に少量含まれる。溝の覆土からは、小型の曲物底板（224）が出土した。

### 3 中世の遺構

#### A 土 坑

土坑と判断した遺構は、1基である。SK432は、IV層上面で検出した土坑である。中央部と東側が現代の攪乱により壊されており、不整形ではあるものの規模から土坑として分類して調査したが、覆土の2層と3層が基本堆積層のⅢ層とⅣ層に類似することから人為的な遺構ではない可能性もある。

SK432(図版3・5・17)55A10～55B6グリッド付近に位置する。遺構の中央部・東部が攪乱で消失しているが、規模は長径4.2m、短径2.5m、深さ48cmを測る。平面形は不整形で、断面形は東西に段差が付き浅く窪む形状である。覆土はⅢ層に類似し締りが弱い黒褐色粘質シルトと、Ⅳ層に類似する褐色粘質シルトを基調としており、人為的な掘り込みではない可能性もある。

遺物は、覆土3層から箸状木製品2点が出土している。そのほか、小片のため図化していないが、古代前半の所産と考えられる内外面ハケメ調整の養胴部が1点出土している。なお、本遺構の直上であるⅡb層中からは銭貨「貨泉」(246)が1枚出土している。

#### B 箸状木製品等の平面分布と出土状況

##### 1) 平面分布

本遺跡では、中世の木製品として箸状木製品・棒状木製品・板状木製品・杭状木製品・形代(人形・舟形・刀形)、曲物底板等が出土した。箸状木製品と形代(人形等)は、一般に祭祀関連遺物と見られている。この箸状木製品及び形代と同じ包含層内から棒状木製品・板状木製品・曲物底板・銭貨等が出土しており、これらの中世遺物も祭祀関連遺物の可能性がある。

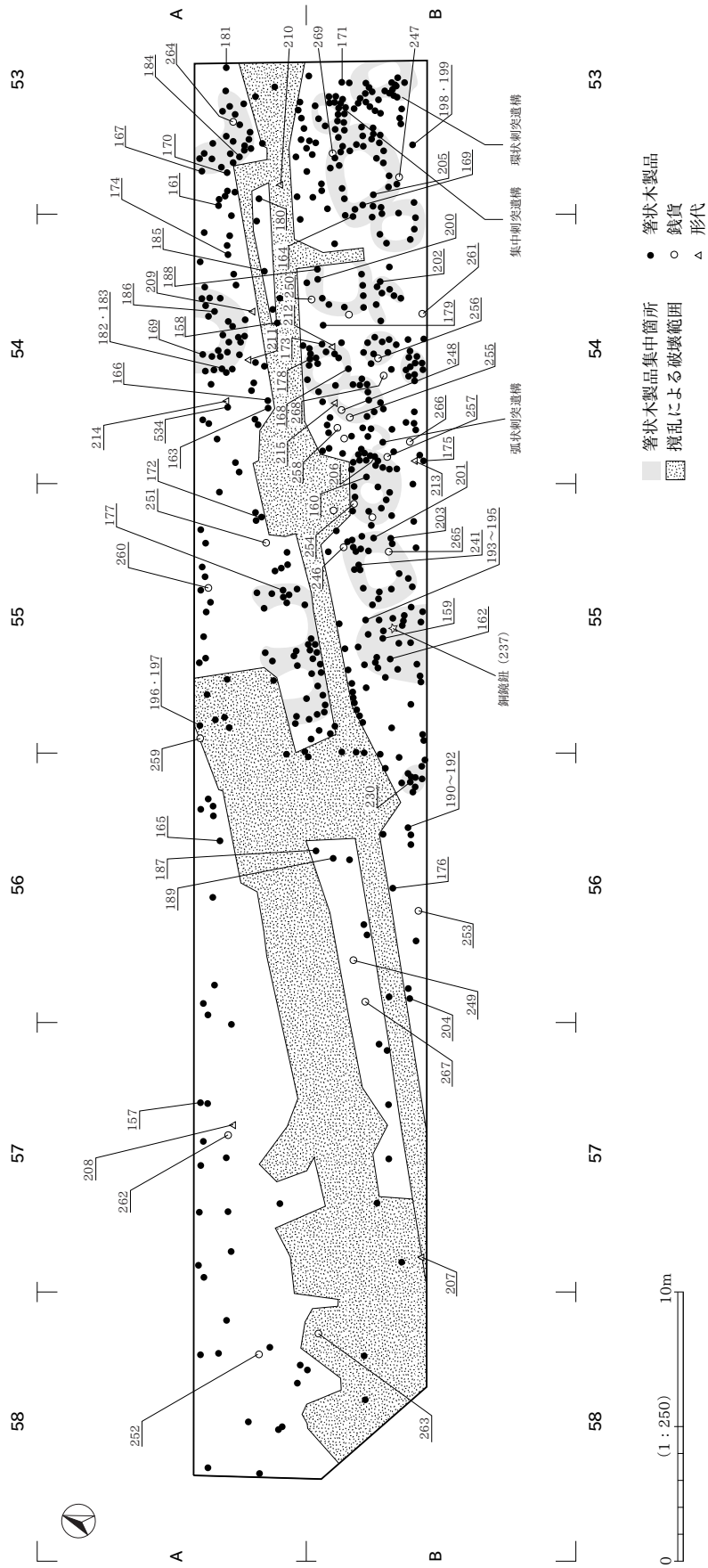
箸状木製品は、平面分布図(第8図)に明らかとなり、調査区内東部のグリッド53列～55列から多数検出されている。特に53列と54列南部では分布密度が高い。53列南部では、特に木製品の密度が高く、箸状木製品や棒状木製品等が環状に分布する地点を木製品環状刺突遺構として、その北側に隣接して木製品が多数出土した地点を木製品集中刺突遺構として詳細に報告する。

53Bグリッドに位置する木製品環状刺突遺構は、長軸約1.6m、短軸約1.1mの不整楕円形の範囲に箸状木製品・棒状木製品等が集中して検出されたが、中央部は遺物がない空白域となっていた。また54Bグリッドでは、土師器・銭貨・箸状木製品が一定の範囲に弧状に検出された場所が見られ、木製品弧状刺突遺構として報告する。

箸状木製品等を包含するⅡb層とⅢ層は、調査区内の東から西へ緩やかに傾斜しており(図版1)、標高の高い東部から南東部に箸状木製品が多く分布している。なお、地面に垂直に近い角度で突き刺したものと地面に横たわった状態で検出された箸状木製品は混在しており、特別な分布状況は示していない。これに対してやや標高が低くなる調査区内西部の56～58列では、箸状木製品が点在するように分布している。

このような遺跡内における東西の箸状木製品の平面分布状況の相違は、中世期の土地利用状況が反映されたものなのか、あるいはほかの要因により西側半分が何らかの影響を受けた結果なのか即断はできないが、地層の肉眼観察による変異は認められないことから、前者の可能性が高いものと見られる。

端部に焼痕を持ついわゆる「火付け木」は、53列北部・南部、54列北部・南部、55列南部、56列南部から出土するなどの状況が見られるが、特に集中する傾向は見られない。いわゆる火付け木は箸状木製



第8図 箸状木製品・形代・錢貨の平面分布

品と混在して出土し、地面に刺さって出土している点が共通することから、その用途は判然としないものの、箸状木製品と同様な性格を付与することができよう。

舟形は、調査区東部に位置する 54 列北部から 1 点が出土したのみである。舳先を下に向けて、斜位に刺している。人形は、調査区西部に位置する 57 列南部から 1 点出土した。刀形は、調査区東部の 53・54 列から出土しており、これらの形代は平面分布において特に偏った出土傾向は認められない。曲物底板は、調査区東部の 54 列から 2 点、55 列から 1 点と、調査区西部に位置する 57 列から 1 点が出土した。

以上のように、箸状木製品は調査区内の東部から南東部に多く分布する状況が判明した。棒状木製品・板状木製品も箸状木製品と混在して検出されたが、特に異なる平面分布は示していない。

錢貨の平面分布状況は、53 列南部から 55 列南東部にかけての東西約 15m・南北約 4m の範囲に合計 18 枚の分布が見られる。この数量は、出土錢貨 28 枚の約 6 割を占める。このことから錢貨は、箸状木製品に類似するように調査区内南東部に多く分布する状況を示している。

## 2) 出土状況

箸状木製品等は、ほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出されたもの、水平または水平近くに横たわった状態で出土したもの、斜位に突き刺さった状態のもの等がある。箸状木製品等の木製品のうち、地面に突き刺さって出土した例が多数を占めるため、ここでは木製品刺突地点として報告する。

SX402・403・407・416b・417・421a・426・433 の 8 例は、ほぼ垂直に近く地面に突き刺さった状態で検出され、SX405・409b・412b・416C・419・421b・427a の 7 例は、水平または水平に近く横たわった状態で検出された。その他の箸状木製品は、角度の差はあるものの斜位に地面に突き刺さった状態で検出されている（第 9 図）。

SX403・415・427bc・430・434b では、箸状木製品が地面に突き刺す途中で折れた状態で検出され、SX403 ではⅡ b 層中から突き刺したところ下端部がⅣ層上面に達し、Ⅱ b 層内で折れて水平近くに横たわった状態を示しているものと想定される。ほかの箸状木製品もそれぞれ出土状態は異なるものの、SX415・427・430 では上部がⅢ層中に含まれ、下端部がⅢ層から粘性が強く締まったシルト質のⅣ層上面に達した状態で折れたと見られる。

箸状・棒状木製品のうち SX402・431 は、地面に突き刺した下端部が炭化しており、いわゆる火付け木と呼ばれるものである。SX402 はⅡ b 層中から突き刺された火付け木の下端部がⅢ層に達しており、SX431 ではⅢ層中から突き刺された火付け木の下端部がⅣ層へ達した状態が見られ、両者の下端部の到達位置に差異が見られた。

舟形 (SX443) は、54A9 グリッドのⅢ層から地面に斜位に突き刺さった状態で検出され、先端部はⅣ層へ約 6cm 入り込んでいる。舟形の周囲には、特に付随する遺構はなかった。人形 (207) は 57B23 グリッドⅢ層から単独で横たわるように検出されたが、周囲に特別な状況は認められなかった。

曲物底板は、55A15 グリッド (234) と 54A4 グリッド (225) などから出土している。前者は SK432 直上のⅡ b 層とⅢ層の境目から検出され、南に緩やかに傾斜する面に張り付くような状態を示していた。後者はⅢ層中から出土しているが、周囲には多数の箸状木製品があることから、この曲物底板も祭祀関連遺物と見ることも可能であろう。続いて以下に、箸状木製品等の出土状況を記述する。

SX402 (図版 2・5) 54B7 グリッドに位置する。下端部を尖らせた棒状木製品 (202) が、ほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡ b 層中で検出され、先端はⅢ層中に達している。木製

品の下部先端が炭化しており、火付け木と考えられる。

SX403 (図版2・5) 54B17 グリッドに位置する。下端部を尖らせた棒状木製品(216)が2本に折れ、上半部は水平近くに横たわった状態で、下半部はほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層中に検出されたが、先端はⅣ層上面に達している。棒状木製品には、中央に円孔が穿たれている台形状突起が付く。

SX404 (図版2・5) 54B1 グリッドに位置する。下端部をやや尖らせた箸状木製品(188)が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層中で検出され、先端はⅢ層中に達している。

SX405 (図版2・5) 54B6 グリッドに位置する。下端部を尖らせた箸状木製品(200)が、水平に近く横たわった状態で検出された。遺物はⅡb層中で検出されたが、半分以上はⅢ層中に含まれる。

SX406 (図版2・5・14) 56B11 グリッドに位置する。下端部をやや尖らせた箸状木製品(189)が、地面に斜位に刺さった状態で検出された。遺物の上半部はⅡb層中で検出され、下半部はⅢ層中である。

SX407 (図版2・5・15) 56B6 グリッドに位置する。下端部を尖らせた箸状木製品(187)が、ほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層中で検出されたが、先端はⅣ層上面から下へ約4cmの深さに達している。

SX408 (図版2・5・14) 54A14 グリッドに位置する。下端部を尖らせた箸状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層中で検出されたが、大半はⅢ層中に含まれる。

SX409 (図版2・5・15) 54A14 グリッドに位置し、2本の箸状木製品が斜位に地面に突き刺さった状態で、1本が水平に横たわった状態で1箇所から検出された。aは、長さ19.6cmの箸状木製品(182)で斜位に突き刺さり、Ⅱb層中で検出され大半はⅢ層中に達している。bは、長さ5.6cmの箸状木製品で、水平に横たわった状態でⅢ層最上部に検出された。cは、長さ12.6cmの箸状木製品(183)で、水平近くに横たわった状態でⅢ層中に検出された。

SX410 (図版2・5) 53A25 グリッドに位置する。長さ7.4cmの板状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層がⅢ層中に落ち込んだ中に含まれる。

SX411 (図版2・5) 55B2 グリッドに位置する。下端部を尖らせた棒状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層中で検出されたが、大半はⅢ層中に達している。

SX412 (図版3・5・15) 55B12 グリッドに位置する。斜位に地面に突き刺さった状態で2本の箸状木製品が隣接して検出され、そのうちの1本に接するように短い箸状木製品が水平に横たわった状態で検出された。aは、上端部が尖った長さ12.3cmの箸状木製品(194)で、斜位に突き刺さっている。遺物はⅢ層中で検出され、先端はⅣ層上面に達している。bは、長さ6.4cmの箸状木製品(195)で、水平に横たわった状態でⅢ層中に検出された。cは、下端部を尖らせた箸状木製品(193)で、斜位に突き刺さった状態でⅢ層中に検出され、先端はⅣ層へ1cmほど入っている。

SX413 (図版2・5) 55B17 グリッドに位置する。上端部がやや尖った箸状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅢ層中に含まれる。

SX414 (図版2・5) 55B17 グリッドに位置する。下端部を尖らせた箸状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層中で検出され、先端はⅢ層に2cmほど入る。

SX415 (図版3・5) 55A24 グリッドに位置する。下端部を尖らせた箸状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。箸状木製品は中央部付近で折れⅢ層中で検出され、下半部はⅣ層上面に沿って横たわった状態であることから、突き刺す過程で折れ曲がったものと見られる。

SX416(図版2・5・15)55A24 グリッドに位置する。箸状木製品2本が、斜位に地面に突き刺さった状態と、垂直に近い急角度に突き刺さる状態で接し、近接して箸状木製品1本がほぼ水平に横たわった状態で検出された。aは、下端を尖らせた長さ6.3cmの箸状木製品(196)で斜位に突き刺さり、Ⅲ層中に検出された。bは、両端がやや尖る形状の長さ11.8cmの箸状木製品(197)で、垂直に近い急角度に突き刺さる状態でⅢ層中に検出され、先端はⅣ層へ約5cm入る。cは、両端をやや尖らせた長さ10.1cmの箸状木製品で、ほぼ水平に横たわった状態でⅢ層とⅣ層の境に検出された。

SX417(図版3・5)54A9 グリッドに位置する。下端部が二つに裂けた板状木製品(227)が、垂直に近い角度で地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅢ層中で検出されたが、先端はⅣ層下部に達している。

SX418(図版3・5)58A10 グリッドに位置する。先端を尖らせた箸状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅢ層中に含まれる。

SX419(図版3・6)56A4 グリッドに位置する。長さ11.2cmの箸状木製品が、水平に地面に横たわった状態で検出された。遺物はⅢ層下部に含まれる。

SX420(図版2・6)55B17 グリッドに位置する。上端部が尖る箸状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層中で検出されたが大半はⅢ層中に含まれ、先端部はⅢ層中に含まれる自然木に達している。

SX421(図版2・6・15)53B17 グリッドに位置する。垂直に近い状態で地面に突き刺さった板状木製品1点と、それに近接してほぼ水平に横たわった状態の1本の箸状木製品、その2点と近接して斜位に突き刺さった状態の箸状木製品1本が検出された。aは、長さ15.5cmの板状木製品(228)で垂直に近い状態で突き刺さり、Ⅱb層中で検出された。bは、一方の端部を尖らせた長さ5.7cmの箸状木製品(199)で、ほぼ水平に横たわった状態でⅢ層中に検出された。cは、長さ8.6cmの箸状木製品(198)で、斜位に突き刺さった状態でⅢ層に落ち込むⅡb層中に検出された。

SX422(図版2・6・15)56B7 グリッドに位置する。斜位に地面に突き刺さった状態で3本の箸状木製品が近接して検出された。aは、長さ13.0cmの箸状木製品(190)で斜位に突き刺さった状態でⅡb層中に検出され、先端はⅢ層に達している。bは、長さ12.2cmの箸状木製品(191)で斜位に突き刺さった状態でⅡb層中に検出され、先端はⅢ層上面に達している。cは、長さ11.1cmの箸状木製品(192)で斜位に突き刺さった状態でⅢ層中に検出され、先端はⅣ層上部に達している。

SX423(図版3・6)55B7 グリッドに位置する。長さ9.2cmの棒状木製品(203)が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅢ層中に含まれる。木製品の形状から炭化はしていないものの、火付け木と考えられる。

SX424(図版3・6)55B12 グリッドに位置する。両端が尖る箸状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅢ層中に含まれるが、先端部はほぼⅣ層上面に達している。

SX425(図版2・6)53B17 グリッドに位置する。長さ13.4cmの箸状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅡb層中で検出され、先端はⅢ層中位に到達する。

SX426(図版3・6)53A19 グリッドに位置する。長さ15.5cmの箸状木製品(184)が、垂直に近い角度で地面に突き刺さった状態でⅢ層中に検出され、その先端はⅧ層上面へ達している。

SX427(図版3・6)55A5 グリッドに位置する。ほぼ水平に横たわった状態で1本の箸状木製品が検出され、隣接して中央部で折れた状態の箸状木製品が検出された。aは、一方の端部を尖らせた長さ

18.2cmの箸状木製品で湾曲するもののほぼ水平に横たわり、Ⅲ層上部で検出された。bは、先端を尖らせた箸状木製品で、水平近くに横たわる状態でⅢ層下部に検出された。cは、長さ4.2cmの箸状木製品で、bから続くものである。bとcは、Ⅲ層下部で検出された。

SX428 (図版3・6) 54B11 グリッドに位置する。下端部を尖らせた箸状木製品が、Ⅳ層中で折れ曲がり途中から水平に横たわる状態で検出された。箸状木製品の上部はⅢ層中からⅣ層にかけて斜位に突き刺さった状態を示すが、下部はほぼ水平となることから、この箸状木製品は突き刺しながら曲がったものが検出されたものと見られる。

SX430 (図版2・6・15) 54A5 グリッドに位置する。下端部を尖らせた箸状木製品(185)が、Ⅳ層上面付近で折れてV字状の形状で検出された。この箸状木製品は、本来は地面に対して斜位に突き刺されたものと見られる。遺物はⅢ層中からⅣ層最上部に含まれる。

SX431 (図版3・6・18) 56B22 グリッドに位置する。下端部が炭化した長さ10.8cmの箸状木製品(204)が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。Ⅲ層精査中に検出されたが、箸状木製品の先端はⅣ上面から約5cmの所まで達している。この箸状木製品は、いわゆる火付け木である。なおこの箸状木製品の下端部付近に自然木が検出されたが、これはⅣ層中に含まれる自然木であり、SX431には無関係である。

SX433 (図版3・6) 54B22 グリッドに位置する。下端部が尖がっていない長さ16.1cmの箸状木製品が、ほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅢ層中で検出されたが、先端はⅣ層上面から下へ約7cmの深さに達している。

SX434 (図版2・6・15) 54A9 グリッドに位置する。板状木製品と下端部を尖らせた箸状木製品が、隣接して斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。aは、板状木製品(230)でⅡb層からⅢ層に検出され、先端はⅣ層上面に達している。bは、箸状木製品(186)で中央部付近が折れ曲がった状態を示し、Ⅱb層下部からⅢ層上部に含まれる。

SX435 (図版3・6) 54A14 グリッドに位置する。下端部を尖らせた棒状木製品が、ほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物の最上部はⅢ層下部で検出されたが、先端はⅧ層上面から下へ約18cmの深さに達している。

SX436 (図版3・7・16) 58A10 グリッドに位置する。長さ21.7cmの棒状木製品(220)が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物は上部が折れ曲がっておりⅢ層下部からⅣ層中に検出されたが、先端はⅧ層上面に達している。

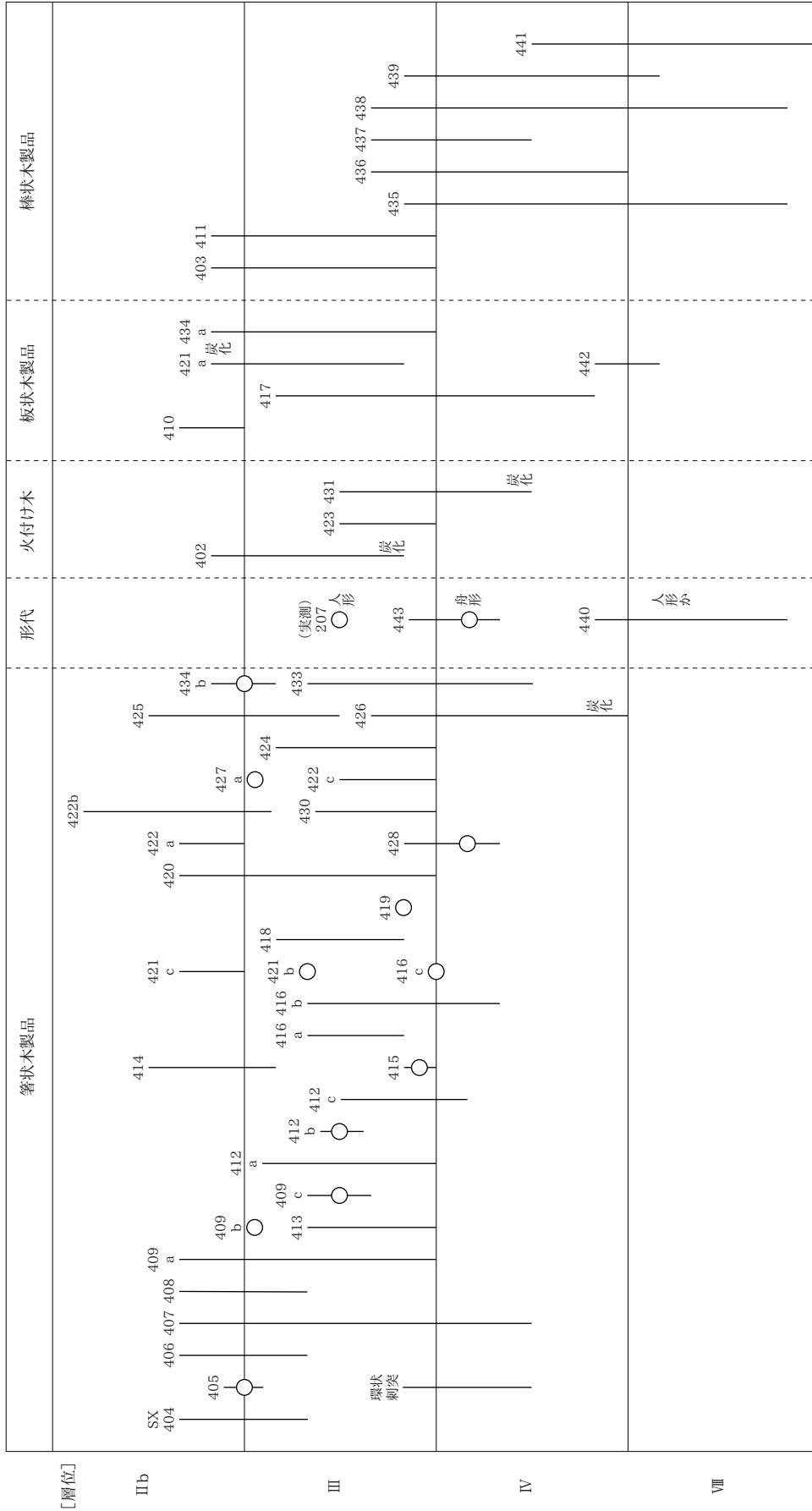
SX437 (図版3・7・16) 58A10 グリッドに位置する。長さ約17cmの棒状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅢ層下部からⅣ層中に検出された。

SX438 (図版3・7) 57A10 グリッドに位置する。下端部を削った棒状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅢ層中で検出されたが、先端はⅧ層上面から下へ約8cmの深さに達している。

SX439 (図版3・7) 57A25 グリッドに位置する。長さ約11cmの棒状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態でⅢ層下部で検出された。遺物の大半はⅣ層中に含まれるが、先端部はⅧ層上面に達している。なおこの棒状木製品の先端部は、折れたような断面を呈していることから、本来はさらに長い棒状木製品であった可能性がある。

SX440 (図版4・7) 57A9 グリッドに位置する。下端部を少し尖らせた長さ16.5cmの棒状木製品(208)が、ほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出された。棒状木製品はⅣ層下部で検出され、先端はⅧ層上





(出土状態)  
 ○：横位のもの  
 ○：途中から横位又は水平に近いもの  
 |：刺突されているもの

第9図 木製品出土層位模式図

面から約 14cm の深さに達している。木製品の形状から人形の可能性がある。

**SX441** (図版 4・7) 54B7 グリッドに位置する。下端部を片面から削った長さ 46.3cm の杭状木製品が、ほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出された。遺物はⅣ層中で検出されたが、先端はⅧ層上面から下へ約 39cm の深さまで達している。なおこの杭状木製品は、Ⅳ層からⅧ層(地山)に直接突き刺されたものと見られ、木製品に伴う掘形等はなかった。古墳時代の遺物である可能性もある。

**SX442** (図版 4・7) 56A14 グリッドに位置する。長さ 6.9cm の板状木製品が、斜位に地面に突き刺さった状態で検出された。板状木製品はⅣ層下部からⅧ層に含まれ、先端はⅧ層上面から下へ約 5cm の深さに達している。

**SX443** (図版 3・7・16) 54A9 グリッドに位置する。舟形と見られる木製品(209)がⅢ層下部からⅣ層中に斜位に突き刺さった状態で検出された。舟の舳先と見られる先端部は、Ⅳ層上面に達している。

#### 木製品環状刺突遺構 (図版 3・7・16)

調査区南東隅付近では、Ⅲ層下部から 2 箇所の木製品集中箇所が検出された。53B12 グリッド北西部から 53B17 グリッド東部にかけての木製品の集中箇所は、長軸約 1.6m、短軸約 1.2m の不整楕円形の範囲に環状に箸状木製品・棒状木製品等が集中して検出された。ここでは、この場所を木製品環状刺突遺構として報告する。この木製品環状刺突遺構の中央部は、遺物がない空白域となっており、その広さは長軸約 100cm、短軸約 55～60cm ほどである。この空白域には、ピットや焼土等は検出されなかった。

遺物は No. 15～No. 49 までの合計 35 点が約 20～50cm ほどの幅で帯状に廻る分布を示すが、東側の一部は 50cm ほど途切れている部分もある。木製品環状刺突遺構では、箸状木製品 24 点・棒状木製品 5 点・板状木製品 1 点・自然木片 1 点・土錘 1 点・円礫 3 点が検出された。箸状木製品は突き刺されている角度の差はあるものの、22 本のうち 20 本が地面に斜位に突き刺さり、棒状木製品は 3 本のうち 2 本が、板状木製品は 5 本のうち 4 本がそれぞれ地面に突き刺さって検出されている。箸状木製品と棒状木製品には、横たわった状態で検出されたものがあるが、遺物出土地点のⅢ層は自然の流路等の痕跡はなく、遺物が他の場所から流れてきた可能性は少ない。そのためこの場所で検出された遺物は、おそらく原位置を保っているものであり、Ⅲ層下部に一時期に形成された楕円形の環状分布を示す小型木製品群とみられる。

No. 37 はⅢ層下部からⅣ層内に斜位に突き刺さっており、その突き刺した方向は南から北へ向かっており、角度は地面に対して約 45 度を示す。No. 35・36・48 も、同一地点に 3 本の箸状木製品がⅢ層下部からⅣ層内に斜位に突き刺ささり、そのうち 2 本は下端部が接する状態となっている。3 本の突き刺した方向は南から北へ向かっており、角度は地面に対して約 45 度から垂直に近い急角度を示している。

No. 46・23・30 では南東から北西方向に突き刺しており、No. 27 は東から西へ、No. 44・45 ではほぼ北から南へ突き刺し、No. 43 では東から西へ刺されている。箸状木製品等の突き刺し方向は、中央の空白域に向かって外側から突き刺した痕跡は認められず、突き刺した方向に統一性はないようである。

また、木製品環状刺突遺構の遺物出土標高は、No. 35・36・48 の上端部では、海拔約 3.03～3.05m である。No. 47 の上端部は海拔約 2.99m であるが、この箸状木製品はほかの遺物より低い位置に横たわっている。これらの遺物の出土標高は海拔約 3.0～3.1m と見られ、この付近に木製品等を突き刺した当時の面があったものと想定される。

なお、ここでは中央部の空白部を囲むひとつの木製品集中箇所としてとらえたが、もう一方ではさらに小単位の木製品集中部の集合と見ることも可能である。つまり、No. 15～31 と No. 46 で構成される長軸約 95cm、短軸 20～40cm の集中箇所、No. 32～34 のやや太い木製品で構成される長軸 25cm、短軸

10cmの集中箇所、No. 35～38とNo. 47～49で構成される長軸45cm、短軸25cmの集中箇所、No. 39～45で構成される長軸45cm、短軸20cmの集中箇所の合計4箇所の小さな集中箇所の集合体と考えることもできよう。なお、その場合でも中央部には空白域が伴う。

#### 木製品集中刺突遺構 (図版3・7・16)

木製品集中刺突遺構は、53B11グリッドの南西部に位置し、木製品環状刺突遺構から北西に約0.6～1mのところ隣接するように検出された。木製品集中刺突遺構は、Ⅲ層下部において長軸約50cm、短軸約30cmの楕円形の範囲に、箸状木製品10点・板状木製品2点・小形木片1点・円礫1点の合計14点が検出された。

遺物は大小各種の木製品が集中しているが、その中心付近に長径約3cmの円礫がある。No. 5は板状木製品で斜位に地面に突き刺さっており、そのほかの箸状木製品等は斜位から地面に横たわった状態で検出されたが、ここでは木製品集中刺突遺構と呼んでおきたい。なお、南側の木製品環状刺突遺構との間には、約40cmの空白部分が見られる。

#### 木製品弧状刺突遺構 (図版3・8・16)

54B22グリッドでは、東西約90cm・南北約70cmの範囲に、土師器1点(59)・銭貨「皇宋通寶」1枚(257)・箸状木製品6点・板状木製品2点の合計10点が、Ⅲ層中に弧を描くように分布して検出された。ここではこの場所を、木製品弧状刺突遺構として報告する。

箸状木製品は、6本のうち3本が北から南に向かって地面に斜位に突き刺さっている。土師器は口縁部に油煙痕(スス)が付着し、内面を上に向けて(正位)やや傾いた状態で出土した。銭貨は、土師器から南東に約20cm離れてほぼ同一レベルから検出された。遺物検出地点では自然の流路等の痕跡はなく、遺物がほかから流されてきたような状況は見られなかった。

遺物の平面分布では、中央部に遺物のない空白域が見られる。弧状を呈する遺物出土状況の特徴は、その中央部が東西約55～80cm、南北約40cmの半楕円形に空白域を呈することである。こうした遺物の出土状況は、木製品環状刺突遺構の中央に空白域を伴う環状の遺物平面分布状況と共通する一面がある。つまりこの遺構は、木製品環状刺突遺構の長軸方向半分の遺物分布状況を示しているとも可能である。これは、Ⅲ層中に一時期に形成された弧状の分布を示す遺物群と見ることができる。

遺物の出土標高は、銭貨が海拔3.06m、土師器が海拔3.10m、最も高い標高を示す箸状木製品(No. 10)の上端部では海拔約3.16mを示す。遺物は海拔3.0～3.1m付近に分布しており、その標高に土師器と銭貨を伴い箸状木製品等を突き刺した面があるものと見られる。この標高は、木製品環状刺突遺構が検出されたレベルとほぼ同一である。

## 4 古墳時代の遺構

水田の畦畔がSX215・SX216の2箇所で検出された。SX215は調査区の南西隅に検出され平成20年度に調査された竹花遺跡Iの東西方向の大畦畔の東側延長上に位置することから、その大畦畔が今年度調査区の南西隅まで延びている可能性が高い。SX216は、SX215の東方約20mに位置する南北方向の畦畔である。これらの畦畔に伴う粗朶や埋設農耕具、土器・石器などの出土はなかった。

SX215(図版4・8・17)調査区南西隅に位置する58B7グリッドから検出された。畦畔の北側一帯が大きく攪乱を受け、また南側が部分的な攪乱により壊されており、平面プランの検出が不可能で、直交方

向の断面も記録できなかつた。SX215はその規模と形状等は十分に判明しなかつたが、平成20年度に調査された東西方向の大畦畔から東へ直線的に連続する大畦畔と想定される。

畦畔は、調査区南壁の土層断面に東西259cmの長さを検出した。これは畦畔の長軸方向に対して直行する土層断面とはなっていないので畦畔の規模は不詳と言わざるを得ないが、土層から見てIV層上に構築された畦畔である。畦畔は、IV層の上にIV層に類似する褐灰色粘質シルトを盛り上げて構築している。この盛土は自然堆積層であるIV層より若干しまりが弱く、黄灰色粘質ブロックを多量に含み中央部を除く両側がより黒味を帯びている。畦畔上面の標高は、2.95mである。

畦畔の下には粗朶や整地面、溝などはなく、IV層の上に土を直接盛り上げたものである。畦畔の高さは、中央部で7～10cmで、中央東側では最大14cmになる。SX215に伴う水田の区画や遺物等は、検出されなかつた。

SX216(図版4・8・17)調査区南部の56B2～56B7グリッドに位置する。畦畔の北側一帯が大きく攪乱を受け、南側は調査区外に延びている。SX216は、SX215と同じくIV層の上に土を盛り上げて畦畔を構築していることから、SX215と同じ時期の南北方向の畦畔と想定される。その場合、大畦畔と想定されるSX215と連結する南北方向の畦畔の可能性がある。調査区内で検出された規模は、南北約1.85mの長さである。畦畔の下面幅は177cm、上面幅は60cmである。

畦畔は、IV層の上に褐灰色シルトを盛り上げて構築している。この盛土は、有機物を多く含みしまりと粘性が弱い。SX216は、しまり・粘性・色調がSX215とは若干異なるが構築面と方向性からみて、SX215に付随する畦畔の可能性を指摘しておきたい。畦畔上面の標高は、3.04mである。

畦畔の下には粗朶や溝などはないが、土層断面図にみられるように畦畔の真下のIV層上面が幅50cmほど平坦になっており、土を盛り上げる前にIV層上面を整地した可能性がある。畦畔の高さは中央部が16cmで、東側では8～12cm、西側では11～16cmの高さを示す。畦畔の西側では、IV層が部分的に落ち込んでいる。

また、畦畔の土層断面では、東側に数cmの窪みが、西側にも地山の盛り上がりが見られるが、盛土を除去した畦畔の下面には特別な状況はなかつた。なお、SX216に伴う水田の区画や遺物等は検出されなかつた。

## 5 その他

### A 風倒木痕(図版3・4・8・18)

風倒木痕は、調査区内の合計4箇所から検出された。これらの風倒木痕は、Ⅲ層上面から1箇所(SX429)、地山であるⅧ層上面から3箇所検出された。

これらの風倒木痕は、全体の平面形が検出されたものは1例であるが、平面形では不整形・楕円形に近い形状・不整形等呈するものが多く、その長軸は2.5～3m以上である。Ⅲ層上面で検出された例(SX429)では、検出面に地山(Ⅷ層)の灰色砂質シルトが半円形に近い形状で検出され、土層断面で北側に半円形にIV層のシルトブロックと有機物を含むシルトが入り込み、中央部の地山も盛り上がっていることから風倒木痕と判断した。SX429は北側が攪乱で壊されているが、東西約1.85m、南北約1.85m以上の風倒木痕で、樹木は南東方向へ倒れたものと見られる。

調査区東部では、Ⅷ層(地山)上面から3箇所の風倒木痕が検出された。54Aグリッドでは、調査区北

壁に東西 2.8m、南北 2.0m 以上の不整形の落ち込み（風倒木痕 3）が見られた。覆土は中央部に締りの弱い土が多く含まれ、土層断面には地山が崩落したブロック状の土塊も見られ、底面に凹凸が多いことなど、風倒木痕の特徴を示すものと見られる。この風倒木痕 3 は北側半分が調査区外となるため、全体の形状等は不詳であるが、土層や底面の様子から木が東の方向へ倒れた可能性がある。なお、この風倒木痕はほかのものとは異なり、覆土が全体的に締りの少ないシルトであったが、風倒木痕の南側検出面上に本体から派生すると見られる樹枝状の痕跡があり、倒木の根の痕跡と想定された。また、風倒木痕の上部にはIV層が堆積していることから、古墳時代前期より古い時期のものと考えられる。

なお、平成 18・20 年度に行われた姫御前遺跡 I・II 及び竹花遺跡 I の調査では、地山（VII層）直上から倒木痕・樹根を検出している。その 1 つから縄文晩期に比定される珪質頁岩製石鏃が出土している。今年度調査においても、IV層以下～VIII層上面に樹痕を検出しており、層順的に齟齬はない。ただし、共存遺物がなく、覆土の状態が平成 18・20 年度とは異なっているため、年代は不詳と言わざるを得ない。

## B 倒木・樹根・自然木（図版 4・8・18）

調査区中央やや西寄りの 56A14 グリッドからは、IV層最下部から自然木（自然木 A）が横たわって検出された。木の方向はほぼ南北方向を示すが、自然木の下部や周囲には遺構や木製品は認められなかった。自然木は長さ 161cm、最大径 12cm で、加工の痕跡はない。この木の南西約 3m の 56B16 グリッドでは、別の自然木がほぼ同じ方向でIV層下部から検出されている。この自然木は、長さ 165cm、最大径 10cm で加工の痕跡はない。両者の間は攪乱により壊されていることから、その間の状況は不詳である。また、この 2 本の南西延長上には、56B17 グリッドに薄く幅広の自然木がIV層下部に検出されている。自然木は長さ 100cm、最大幅 35cm、厚さ約 5cm で、加工の痕跡はない。この自然木の下面はVIII層（地山）が盛り上がっていたが、この中に粗朶木などはなく、またVIII層上に畦を築造するための土を盛り上げた痕跡が土層断面に観察されなかったことなどから、水田の畦であると断定することはできなかった。

なお、これら 3 本の自然木は一直線に伸びており、その検出層位及び標高もほぼ同じであることや、風化が著しいこと、顕著な節や枝分かれなどが見られないこと、調査区南西隅に確認された SX215 にほぼ直交する方向を示すことなどから、大畦畔から分岐する小畦畔の構築材である可能性を完全には否定できない。この自然木の放射性炭素年代測定の結果は、弥生時代中期末頃（BC95～1 年）の年代を示し、古墳時代前期とは異なる時期に伐採された自然木と見られる。ただし、平成 20 年度調査において古墳時代前期の土器とともに出土した木材が年輪年代と放射性炭素年代測定のウイグルマッチングの結果、弥生時代後期の年代を示していることから、早計に判断することはできない。

この自然木の東側に位置する 56B グリッドの自然落ち込み中では、IV層中から自然木が北東方向に倒れた状態で検出された（自然木 B）。この倒木は、幹から突き出た太い枝が自然落ち込みに突き刺さっていることから、木は何らかの影響を受けて北東へ倒れたものと見られる。この自然木は、長さ 215cm、最大径約 42cm であり、加工の痕跡はない。自然木 A と B は検出層位が異なることもあり、無関係と考えられる（図版 8・18）。

調査区中央部の 55A グリッド南西隅から 55B グリッド北西隅にかけては、IV層上面から自然木（自然木 C）が検出された。この自然木は北側が樹枝状に広がり、南側は 2 本の幹状となるため、自然木の根元の可能性が高い。しかし、自然木の北側では地山（VII層）に凹凸が多く見られ、土層断面にはVIII層（地山）の一部がIV層中にブロック状に盛り上がるなどの状況が認められる（図版 8・18）。この場所が SX216

の北側延長に該当する地点である点をかんがみ、畦畔の可能性を否定できないので提示しておく。仮にSX216の延長であった場合、樹根はⅢ層（中世後期）中に倒れていることから、畦畔の構築が古墳時代であったとしても、後世の樹木倒壊による攪乱を受け、一部破壊されたという認識が成り立とう。なお、この地点から東へ約15m離れた場所にあるSX429（風倒木痕）もⅢ層中の検出であり、同時期に生育していたものと考えられよう。

さて、今年度調査区はグリッド55列付近で急速に標高が上がる。竹花遺跡では、今年度調査区の西方に位置する平成20年度調査区と今年度調査のグリッド56列以西に畦畔が検出されている。これらの地点は比較的低地に当たる（図版1）。対して、グリッド55～53列は地山面の標高が2.8m程であるが、この値は140m程東に位置する姫御前遺跡Ⅱ6区とほぼ同値である。姫御前遺跡Ⅱ6区では、自然河川岸の自然堤防上の地山直上から樹痕が多く検出されている。一方、竹花遺跡の低地からは、ほとんど樹痕を検出しておらず、標高差による植生の違い、あるいは土地利用のあり方の変化点を示しているものと考えられよう。なお、いずれの樹根の遺存部にも伐採痕は認められなかった。したがって、人為的な開墾か、自然の倒壊あるいは立ち枯れかは不明である。

### C 自然落ち込み（図版4・8・18）

自然の落ち込みは、Ⅳ層の下に検出された浅い窪地状の部分を指す。調査区中央やや西寄りの56A・56B・57Aグリッドには、3箇所の自然落ち込みが検出されたが、これらはおおむね南東から北西に続くものと見られる。56Aグリッドと57Aグリッドの2箇所の自然落ち込みでは、Ⅷ層（地山）を侵食するような蛇行した形状を示し、底面は平坦に近いが小規模な凹凸が見られる。この2箇所の自然落ち込みの覆土は、Ⅳ層の下位に炭化物を含む褐灰色粘質シルト・褐灰色シルトが自然堆積しており、炭化物が多く含まれる部分も見られる。

調査区中央南部の56Bグリッドでは、南北3.2m以上、東西約2.6～3.0mの浅い窪み状となっており、検出面からの深さは12～13cmで、中央部付近では最大25cmとなる。覆土は北側の2箇所の落ち込みと同一であるが、最下層に粘性の強いシルトが薄く堆積している。なお、この窪地状の自然落ち込み上部に堆積したⅣ層中には、調査区外の南西方向から自然木が倒れ込んでおり、あるいはⅣ層下に広がる自然落ち込みが、部分的に上層の樹木の生育に影響を与えている可能性も想定される。

この他、53B・54B・57B・58Bグリッドにおいても、不整形・不整形円形・細長い溝状などの形状を示す自然落ち込みが検出された。検出面はⅧ層上面であり、覆土はすべて同一の色調と特徴を持っている。これらの自然落ち込み覆土の上位には、Ⅳ層が水平堆積していることから、これらの自然落ち込みは古墳時代前期より以前に形成されたものである。また自然落ち込み中からは、遺物は出土していない。

なお、自然科学分析の結果、Ⅳ層堆積期において周囲で水田耕作が行われていたことが推定されている。また、実際、調査区西部に畦畔が2本確認されている。さらに土層観察の結果、Ⅳ層は広い地点において下位のⅧ層をブロック状に多く含むなど攪拌が認められることなどから、調査区内において耕作が行われていた可能性が高いのであるが、これらの落ち込みとの関連性は特定できなかった。ただし、自然落ち込みは、グリッド56列以西の低地に顕著であり、第Ⅳ章5Bでも指摘したように、グリッド55列を境に東西で土地利用のされ方が異なっていた可能性がある。

# 第V章 遺 物

## 1 概 要

竹花遺跡では、Ⅱ a層から17世紀代、Ⅱ b・Ⅲ層から15～16世紀代、Ⅳ層から古墳時代前期後葉を中心とする遺物が出土した。竹花遺跡の調査は今回で2回目となる。平成20年度には今年度調査区の西隣と南隣の1,643m<sup>2</sup>を調査している。平成20年度調査区(R4-1～8区・R5～8区)と今回の調査区(R4-9区)では、層位がおおむね対応しており、調査地点の差異による変異は認められない。また、出土遺物の年代及び種類も類似している。なお、今年度調査区から東に約130m離れた姫御前遺跡とも層位はおおむね対応しており、各層位に包含される遺物も類似したものが出土している。ただし、竹花遺跡と姫御前遺跡との間は試掘確認調査の結果、遺物の出土は極めてわずかであったことから連続せず、遺跡の分布はいったん途切れるものと考えられている。

今回の調査区で、もっとも多く出土したのは中近世陶磁器で、Ⅱ a層からは164点、Ⅱ b層からは588点、Ⅲ層からは212点出土した。Ⅱ b層とⅢ層からは、それらの陶磁器類に伴い、箸状木製品(545点)などの祭祀具を多く含む木製品が多数出土している。そのほか、土製品、石製品、金属製品が出土している。中・近世の遺構は、近世に属する溝(SD401)と中世に属する土坑(SK432)が存在するのみであり、遺物のほとんどは包含層中からの出土である。ただし、遺物量の多さもさることながら、箸状木製品や棒状木製品、火付け木などの祭祀関連遺物と思われる製品の中には、意図的に地面に突き刺したと考えられるものもあり、人骨を含む獣類の焼骨が22点出土していることから祭祀空間としての利用の在り方も想定され、単なる散布地との評価はできない。また、古代の土器も少量出土しているが、Ⅲ層下位から出土することが多い。

Ⅳ層からは、古墳時代の土器が少量出土した。その量は、個体別の破片数で36点とわずかであるものの、Ⅳ層中で検出された畦畔と同時期と判断され、水田の年代を知る上で重要である。今回検出された畦畔は、平成20年度調査区で検出した畦畔の延長線上にあり、同一区画をなすものと考えられる。今年度に検出した畦畔中からは出土遺物が一切無く、平成20年度に見たような埋納木製農具や粗朶木などは検出されなかった。

## 2 中・近世の土器・陶磁器 (図版9～11・20・21-1～130)

記載にあたり、遺物の分類・年代観については次の論考を参考とした。

青磁は[上田1982]、白磁は[森田1982]、15世紀の青磁・白磁については[水澤2004]、青花は[小野1982]、舶載天目については[水澤2005a]、瀬戸美濃焼は[藤澤1993・2008]、珠洲焼は[吉岡1994]、越前焼は[田中・木村2005]、瓦器は[水澤1999]、越中瀬戸焼は[宮田1997]及び[相羽2003]、肥前系陶磁器は[大橋1993]、中世土師器は[水澤2005b]の各論考を参考とした。

実年代については、瀬戸美濃焼は古瀬戸中期様式Ⅳ期=1340～60年頃、古瀬戸後期様式Ⅰ期=1360～80年頃、Ⅱ期=1380～1420年頃、Ⅲ期=1420～1440年頃、Ⅳ期古段階=1440～60年頃、Ⅳ

期新段階=1460～80年頃、大窯1期=1480～1530年頃、大窯2期=1530～60年頃、大窯3期=1560～90年頃、大窯4期=1590～1610年頃である。珠洲焼は吉岡Ⅱ期=13世紀前半、Ⅲ期=13世紀後半、Ⅳ期=14世紀第1四半期～第3四半期、Ⅴ期=14世紀第4四半期～15世紀前半、Ⅵ期=15世紀後半である。肥前系陶磁器は大橋Ⅰ-1期=1580年代～1594年、Ⅰ-2期=1594年～1610年代、Ⅱ期=1610年代～1650年代、Ⅲ期=1650年代～1690年代である。それ以外の年代や各時期の中でもさらに絞り込める場合については文中に示した。

なお、土器・陶磁器類はそのほとんどが包含層中から出土しているため、器種別に報告することとする。また、人名の後に付すべき「編年」・「分類」などの語は省略して記述する場合がある。

## A 椀 類 (図版9・20-1～20)

1～4は天目茶椀である。1は光沢がありガラス質な暗褐色の釉薬を施すが、口縁直下では黒色と柿色に斑状に変化しており、禾目天目と呼称されるものである。胎土は、やや硬質、緻密で褐灰色を呈することから、中国産の舶載天目と判断される。2～4は黄色味を帯びた灰白色を呈する軟質な胎土で、瀬戸美濃焼である。2は口縁部直下の括れが弱く、古瀬戸中期様式Ⅳ期頃か。3は内面及び外面胴部上半に黒色の鉄釉を掛けるもので、内面には擦痕が著しい。高台際は有段となり、高台内は碁笥底となる。古瀬戸後期様式Ⅱ期の所産である。4はやや緻密な胎土を有するもので、内外面に鉄釉を施す。小破片であることから、全容は不詳であるが、釉調や作行などの特徴は天目茶椀の胴部下半に似る。ただし、外面には円形浮文が貼り付けられ、一部剥離していることから有耳壺などの耳の取り付け部かとも考えたが、器の内面にまでムラなく施釉されていることから壺などの袋物である可能性は低い。窯中の付着物かとも考えたが、盛り上がり部に施釉されていることから施釉前の造作ということが確実であり、あり得ない。

5～14は青磁で、すべて龍泉窯系と考えられる。5は口縁が直線的に外に開く器形の椀で、胴部外面に片刃彫りによる鎬連弁文を有する。ほかの青磁椀(6～14)が暗いオリーブ色を呈するのは異なり、明緑灰色に発色している。上田B-1類に比定され、13世紀後半～14世紀初頭の所産である。6と7は、直縁無文椀で、二次焼成を受けている。8は直縁雷文帯椀である。雷文はやや崩れている。6～8は1440年代～15世紀代の所産である。9～14は直縁篋線描蓮弁文椀もしくは山形線描蓮弁文椀で、15世紀後半～16世紀前半に位置付けられる。篋線描・線描蓮弁文は、弁幅を示す縦線と弁先を示す山形線が別々に描かれ、時代が下るにつれ、より一層単位を意識しなくなり、14に至っては縦線と山形の単位が一致していない。

15～17は瀬戸美濃焼平椀である。いずれも、淡いオリーブ色の灰釉を施す。15は被熱しており、釉が溶け出している。平椀である可能性が高いが、遺存率が低く皿の可能性もある。15と16は古瀬戸中期様式であろうか。16は被熱し、釉が剥離している。17は古瀬戸後期様式Ⅰ期の所産である。

18は肥前系陶器である。内面と外面胴部下半まで灰釉を施す製品で、大橋Ⅱ期の所産である。19と20は越中瀬戸焼の鉄釉丸椀である。削り出し高台で、胴部下半は無釉である。17世紀前半の所産か。

## B 皿 類 (図版9・10・20-21～74)

21～23は青磁で、すべて龍泉窯系と考えられる。21は口縁部が玉縁状になるタイプで、厚釉端反皿である。1430年代～15世紀代の所産である。表面がカセており、二次被熱を受けている可能性が高い。22は21のような厚釉端反皿の底部と考えられる。高く細い高台を有し、畳付けのみ釉剥ぎする。23は



端反皿であるが、21のように玉縁口縁ではない。

24～26は白磁で、森田D群である。いずれも軟質な胎土の内湾皿で、高台付近は無釉となる。見込みに重ね焼きの目跡が認められる。ただし、高台の作りにより2タイプに分かれる。25は高台を4単位のアーチ状に挟りを入れるタイプで、内湾皿挟高台皿である。26は高台に挟りを入れないタイプで、内湾皿平高台皿に分類される。どちらも15世紀代を代表する白磁皿で、25が26に後出する。24と25は被熱している。

27と28は青花で、景德鎮窯系である。27は底部が碁笥底となるタイプで、小野C群皿である。胴部外面下半に芭蕉葉文を連続して配し、内面見込みには捻花と見られる文様を配する。全面施釉していることにより、畳付けには砂礫が付着している。15世紀末～16世紀前半の所産である。28は薄手の皿で、小野E群皿である。内面見込みには、二重圏線で区画された中に花卉文を配し、胴部外面には、草花文を配する。また、高台内中央には、落款の一部と見られる染付がわずかに認められる。高台は細く高い作りで、畳付はケズリ及び拭き取りにより一部無釉となっているが、仕上げは雑であり、砂礫が付着している。小野E群皿が本国において流通し始める年代については、1560年代末以降〔水澤2009〕との指摘があり、17世紀前半まで流通する。

29～39は瀬戸美濃焼である。32が鉄釉であるほかは、すべて灰釉が施されている。29～31、33～35は緩やかに外反する器形で、上半にのみ施釉される皿で、縁釉小皿に分類される。ただし、31の内面には全面に施釉されているし、口縁形態に着目しても多様である。器壁の厚みについても様々あり、古瀬戸後期様式～大窯1期にかけての製品が混在していると考えられる。また、29と33はススが付着しており、灯明皿として利用されたものと考えられる。36は灰釉の施された端反皿で、大窯1期前半の所産である。37は反り皿で、被熱している。大窯2期の所産であろうか。38は折縁皿であるが、被熱している。口縁端部の一部を打ち欠いており、その付近にススが付着していることから29・33と同様に灯明皿として利用されたものと考えられる。口縁形態と薄手であることなどから大窯3期後半に比定される。39は卸皿である。卸目の施されていない部分に灰釉を施す。古瀬戸後期Ⅱ～Ⅲ期の所産である。32は皿類の底部である。遺存率が低く全容は不詳である。底部は回転系切り痕が残る。遺存部は基本的に無釉であるが、わずかに鉄釉の痕跡が認められ、遺存していない口縁部等に施釉されていたものと考えられる。本遺跡からは灰釉皿の出土は多いが、鉄釉皿は少ない。

40～64は、中世土師器皿で、いわゆる「かわらけ」である。本遺跡からは、多種多様な中世土師器皿が出土している。成形技法の面からとらえると、大きく「手づくね成形」と「ロクロ成形」に二分され、さらに口径及び器高により細分される。竹花遺跡と近隣の姫御前遺跡出土の土師器皿については、すでに「姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ」報告書〔加藤ほか2011〕において分類がなされており、本稿でもその基準(第2表)に従う。40～52は手づくね成形の土師器皿である。

40は1類である。胴部上半をヨコナデし、下半に指頭圧痕が残る。赤色味の強い胎土で、礫などを多く含む。41・42は2類である。41の胴部には指頭圧痕が内外面に残るが、42は外面に強いナデによる砂粒の移動が認められる。どちらも口縁端部は上方に摘み上げている。43～45は3類である。43と44は胴部下半に指頭圧痕を残す。45は胴部上半をヨコナデし、胴部中央付近で弱い屈曲をしたのち、下半はヘラ状の工具でナデている。胎土は精良である。

成形技法	分類	口径
手づくね成形	1類	8cm前後
	2類	9cm前後
	3類	10cm前後
	4a類	11～12cm前後(浅身)
	4b類	11～12cm前後(深身)
ロクロ成形	5類	14～19cm前後
	1類	6.5cm前後
	2類	8～10cm前後
	3類	11cm前後
	4a類	13～17cm前後(浅身)
4b類	13～17cm前後(深身)	

第2表 中世土師器皿の分類

46・48～50は4a類である。いずれも胴部下半に指頭圧痕が残る。49と50は胴部中央が強く屈曲し、50はほかと比べて厚手である。47は器壁の傾きと内湾の程度により4b類に分類したが、遺存率が低く、確実ではない。白色味の強い薄手の胎土で、内外面ともにヨコナデされる。51と52は5類である。どちらも薄手の胎土で、口縁端部は上方に摘み上げられている。胴部外面下半には指頭圧痕が残るが、内面には明瞭ではなく、ナデにより消されているものと考えられる。42～44・46・48・52にはススやタールが付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。

53～64はロクロ成形の土師器皿である。底部の遺存している53～57・59・61は回転糸切り法による底部切り離し痕が残る。53と54は底部片である。底径の類似性を考えると、53は1類、54は2類に該当するものと考えられる。55と56は1類である。55は器壁が立つ箱形の器形で、1類の中でも口径が小さい。56は器壁が口径に向かい広がるタイプである。口縁端部を面取りする。57～59は2類である。57は口縁端部を面取りしており、1類の56と共通する。57は口径に比して器高の低いタイプで、一方58と59は器高が高くなることから、2類の中でも細分できる可能性を示唆している。60～64は4類であるが、器高の高低により2分できる。60は口径に対して器高の低くなるタイプで4a類である。これに対して、61～64は器高が高くなるタイプで4b類である。4b類では、器壁が内湾するものと外反するものがあり、将来的には細分できようか。なお、59・61～63はススが付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。土師器皿の年代については、40が14世紀代であるほかは、15世紀代を中心とするものと考えられ、50などの器壁の厚い手づくね成形皿などが16世紀代に一部入るものと考えられる。

65～73は肥前系陶器である。72のみ鉄釉で、そのほかは灰釉を施す。65・66・68・69は口縁部が内湾する丸皿である。67は端反皿、70は段皿、71は溝縁皿である。65と67は灰釉の下に鉄絵を施す、いわゆる「絵唐津」で、65は口縁部端を黒く塗りつぶす様相から「皮鯨手」と呼称される。72と73は、底部片である。72の見込みには胎土目が認められる。高台畳付は無釉であるが、平滑になっており、研磨具として再利用された可能性がある。73は厚手の底部で、鉢あるいは大型の皿の底部の可能性もある。見込みと高台畳付に砂目が認められる。65～70及び72は大橋Ⅰ期、71と73は大橋Ⅱ期に位置付けられる。

74は肥前系磁器である。厚手の底部で、低く小さい高台を有する。釉は、器表全面に生掛けしてあり、ムラが生じている。畳付のみ釉剥ぎするが、一部砂礫が付着している。内面には、圏線が二条描かれるのみの簡素な文様構成である。以上の特徴から、いわゆる「初期伊万里」で、大橋Ⅱ-1期(1610～30年代)の所産と考えられる。

## C 盤、鉢、瓦器、杯、瓶類、香炉 (図版10・21-75～92)

75は龍泉窯系の青磁盤である。底部片であるが、厚くどっしりとした削り出し角高台で畳付まで施釉されているものの、高台内は無釉である。高台内にはヘラ状工具で回転させ削った痕跡をとどめる。見込み中央には向かい合う双魚文が印刻され、胴部境には片刃掘りによる沈線が巡る。14～15世紀の所産であろう。

76～79は鉢である。76が肥前系陶器、77～79は瀬戸美濃焼である。76は口縁が外反する深身の鉢で、内外面に灰釉を施す。外面には鉄絵が釉下に施され、いわゆる「絵唐津」である。片口が付随する可能性もある。大橋Ⅰ～Ⅱ期に比定される。77は口縁形態から卸目付大皿と考えられる。内外面に灰釉が施さ

れる。古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階に比定される。78と79は口縁形態から折縁深皿と考えられる。どちらも、内外面に灰釉が施される。口縁部の長さや作行など若干の差異は認められるものの、古瀬戸後期様式Ⅲ期に比定されようか。

80と81は瓦器である。80は円形浅鉢Ⅲ類〔水澤2009〕である。口縁端部は上端に平坦面を持ち、内側に内湾しながら突出させる器形である。外面には口端やや下方に突帯を1条巡らせ、その下に「×入重画文」スタンプを押印する。内外面は丁寧に磨かれ、黒光りする。81は器種不明である。やや外開きの直立した口縁部で口唇部は平坦面を持つ。口径は17.4cmと小さい。80と異なりミガキは丁寧ではなく、内面には幅広のナデの痕跡が残る。胎土も軟質であり、器表はツヤが無く黄灰色を呈する。80と81は産地が異なるのであろう。

82は白磁多角杯である。波状口縁で、胴部外面には波状の単位に合わせて面取りを行う。内湾白磁皿と胎土や成形方法が近似しており、同時期に流通していると考えられることから15世紀代の所産である。

83～90は瀬戸美濃焼である。83は筒型容器である。内外面に灰釉を施しているが器表は泡立っており、被熱したものと考えられる。古瀬戸後期様式Ⅲ期の所産と考えられる。84と89、90は花瓶Ⅰ類である。84は胴部片で、外面に鉄釉を施し、内面は無釉である。89と90は脚部である。89は無釉、90は鉄釉が施され、どちらも底部に回転糸切り痕が残る。3点とも古瀬戸後期様式で、84はⅡ期、90はⅣ期に比定できる。85も花瓶と考えられるが詳細は不明である。外面に灰釉を施し、内面は無釉である。86は脚付きの瓶子もしくは花瓶であるが、脚の形状から古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期古段階の瓶子Ⅲ類である可能性が高い。脚の上面には灰オリーブ色の灰釉が掛かるが、薄くかつムラがあり、窯中の降灰による自然釉である可能性もある。87は壺・瓶類の胴部である。緻密な胎土でやや粘り気があり、淡黄色から灰色を呈することから中国産である可能性もある。外面には鉄釉を施し、内面には一部外面と同じ鉄釉が垂れるものの基本的に無釉である。88は袴腰形香炉である。外面と内面上半に灰釉が施され、内面の無釉の部分にはススが付着する。91と92は肥前系陶器の瓶である。91は高台を持つ底部片で、外面に灰釉を施し釉下に鉄絵を施すいわゆる「絵唐津」である。高台付近及び内面は無釉である。92は肩部片で、外面全体にいわゆる「青唐津」風な灰釉を施し、その上から一部に白濁した藁灰釉を流し掛けするタイプである。内面は無釉であるが、タタキ成形により生じた当て具痕とナデが顕著に認められる。どちらも大橋Ⅰ期に比定される。

#### D 片口鉢・搦鉢類 (図版10・21-93～108)

93～104は珠洲焼の片口鉢である。口縁端部及び形状に特徴があり、96・98・99の端部には櫛描波状文を有する。それらの特徴から判断して、93～95・101～103は吉岡Ⅳ期、96～98・104は吉岡Ⅴ期、99・100は吉岡Ⅶ期である。

105と106は越前焼の搦鉢である。105は口縁部形態から、木村Ⅴ-3期古段階(16世紀第3四半期)の所産と考えられる。106は焼成が良好な底部片で、詳細年代は不明である。

107は肥前系陶器の搦鉢。口縁端部を内側に突出させ、口縁部のみに鉄釉を施す特徴などから、1630～40年代に位置付けられる。108は越中瀬戸焼の搦鉢で、緩やかに外反する体部から口縁部付近で内湾へと変じる器形で、口縁端部を肥厚させる。瀬戸美濃焼大窯4期前半の搦鉢Ⅰ類に似るが、胎土がやや硬質で、長石及び砂礫を多く含むことなどから、16世紀第4四半期に大窯段階製品を模倣した越中瀬戸焼大窯期の製品と判断した。

E 壺・甕類 (図版 11・21-109～115)

109～112は珠洲焼の甕である。いずれも、タタキ成形により作出され、110～112の外面には平行線状の叩目、内面には円形無文の当て具痕が残る。112の外面には、「大」とヘラ状の工具で刻まれ、窯印と考えられる。109～111は口径が40～45cm前後で中甕に分類される。口縁形態から、109と110は吉岡Ⅳ期、111は吉岡Ⅴ期に比定される。

113は瀬戸美濃焼の壺である。口縁端部は外側に折り返し、玉縁状に丸く外へ突出させる。胎土は粒子の比較的細かい精良な土で灰色を呈し、外面及び口縁内側上部のみに光沢のある鉄釉を施す。遺存部の形状から祖母懐の可能性もある。古瀬戸後期Ⅳ期頃の所産であろうか。114は越中瀬戸焼の広口壺である。失透性の鉄釉を内外面に施す。17世紀代の所産と考えられる。115は、肥前系陶器の甕である。口縁端部は外側に折り返し、玉縁状を呈する。内外面に鉄釉を施す。内面上半は、横位に強く撫でられ、器表に凹凸が生じている。口唇部には環状に釉が剥がれ、付着物が見られることから、重ね焼きの痕跡と判断される。16世紀末～17世紀初頭操業の神谷窯跡に類品が見られ、大橋Ⅰ期の所産である。

F 土錘 (図版 11・21-116～121)・加工円盤 (図版 11・21-122～130)

土錘はすべて環状土錘で、22点出土している。その内、遺存率が高く形状の把握できるもの、及び特徴的なものを6点図化した。

環状土錘の分類は、平成20年度調査報告〔加藤ほか2011〕において、形状及び調整方法により試案が出され、本報告においても基本的にこの基準(第3表)に準じる。

116～118は外径が20～22mm、長さが30～40mm程度と小型で、平成20年度分類には該当しない。新たに4類とする。116は軟質の胎土であるから器表が著しく摩耗しており、調整方法は不明である。一方、117と118の器表には、細かな指頭圧痕が認められる。

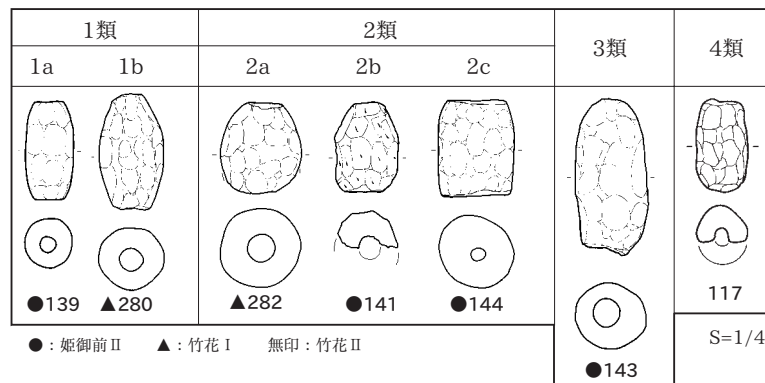
119と120は長さが50～60mm程度、最大径30～32mmを測り、1b類に該当する。ともに器表には指頭圧痕が認められる。また、119の外面には刻線により「×」印が刻まれている。

121は直径が推定48mmを測る太型の土錘で、器表をヘラ状工具によるケズリないしはナデで整えていることから、2b類に該当する。成形技法については、117を除き円孔の太さが均一なため、円柱状の棒に粘土を巻き付け手に握って作成したものと考えられるが、117については円孔が両端から中央に向かい徐々に径を減じていき、中央付近で最小径を迎えることから、両端から串状の工具を突き入れ孔を穿ったものと考えられる。

なお、出土した環状土錘は、直径が測定・推定できるものはすべて20mmを超えることから、関雅之氏による分類

大分類	形状	小分類	調整など
1類	細長い	1a類	胴が膨らまない
		1b類	胴が膨らむ
2類	短胴	2a類	胴が膨らむ・球状に近い
		2b類	ケズリ調整
		2c類	胴が膨らまない・端面を持つ
		2d類	1b類に形状が似るが短胴
3類	長胴	—	—
4類	小型(太型)	—	—

第3表 土錘分類表



第10図 環状土錘分類図

の太型ないしは中間型に属し、細型は出土していない [関 1990]。また、120 (I層) を除き、II bあるいはIII層からの出土であることから、中世後期の所産である可能性が高い。

122～130は土器・陶器類の破片を素材とし、側縁に連続的な剥離を施し、平面形を略円形に仕上げる、いわゆる「加工円盤」である。この一群は、平成20年度調査報告 [加藤ほか2011] において、直径及び高台の有無により分類案が出されており、本報告においても基本的にこの基準 (第4表) に準じる。ただし、詳細は後述するが、平成20年度分類における基準数値の範囲外ではあるが、近似値を示すため、一部適用範囲を修正して用いた箇所もある。

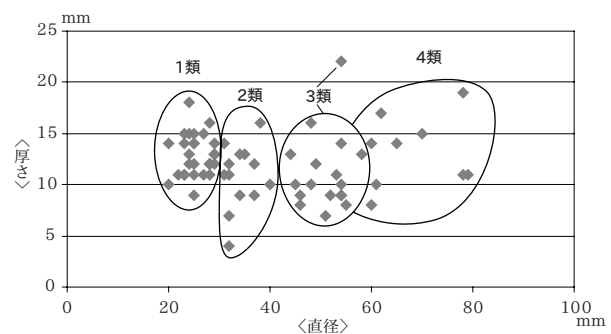
直径	高台	分類
20～29mm	—	1類
31～39mm	無	2a類
	有	2b類
44～58mm	無	3a類
	有	3b類
61mm～	無	4a類
	有	4b類

第4表 加工円盤の分類  
(加藤ほか2011を一部修正)

122～127は珠洲焼のタタキ成形の甕を素材とするものである。128は土器を素材としているのが、胎土が粗く、器表が赤く焼けていることから古代の製塩土器である可能性が高い。いずれも、平面形がきれいな円形をなさず、歪なものが多い。129はロクロ成形の土師器の皿底部を素材とする。裏面には回転糸切り痕が残る。外面に対し内面の面積が小さく、そのため断面台形を呈する。130は古墳時代の高杯脚部の閉塞部を素材とする。そのため一面が平坦ではなく円錐状に尖る形状となり、両面が平坦となる他の製品とは一線を画する。同一用途によるものかは検討の余地がある。

大きさや重量に関しては、122～128が径20～25mm、厚さ10～15mm、重さ5～11gとまとまりがある。この一群は、平成20年度分類における1類 (径22～29mm、厚さ11～13mm、重さ5～17g) に近似する。また、1類が珠洲焼・越前焼といった中世無釉焼き締め陶器が主体をなしている点も共通している (第5表)。したがって、1類の範囲をやや拡大して適用することにした。129は、無高台で、径38mm、厚さ16mm、重さ19.7gを示す。平成20年度分類における近似値では2類 (径31～39mm、厚さ4～14mm、重さ9～16g) がもっとも近い。平成20年度分類において2類の全11点は、珠洲焼、越前焼、青磁、青白磁、越中瀬戸焼、京焼を素材とし、土師器を素材とするものは出土していない (第5表)。一方、3a類 (径44～58mm、厚さ9～16mm、重さ23g程度) では、129と同様にロクロ成形の中世土師器皿底部を素材としたものが8点中7点あり (第5表)、いずれに分類すべきか判断に迷う。また、130も前述のように異質の形状を呈していることから分類は見送ることとし、129と130はほかに類例が増加してから、再度検討を行うのが望ましい。

加工円盤は、すべてII bあるいはIII層中からの出土で、中世後期の所産と考えられる。ただし、128と130については、素材が古墳時代及び古代の土器であることから、中世後期段階において何らかの手段で入手した素材を再加工し、使用したと考えるのが妥当であろう。



第11図 竹花・姫御前遺跡出土の加工円盤量分布

#### 4 石器・石製品

分類	素 材											合計	
	珠 洲	越 前	白 磁	青 磁	青白磁	青 花	李朝陶器	瀬戸美濃	越中瀬戸	肥前系陶器	京 焼		土師器
1 類	21	6										1	28
2a 類	6	1		1	1				1				10
2b 類											1		1
3a 類								1				7	8
3b 類			1	1		1		7					10
4a 類	1							1					2
4b 類				1			1		1	3			6
合計	28	7	1	3	1	1	1	9	2	3	1	8	65

単位：個

第 5 表 姫御前遺跡・竹花遺跡出土の加工円盤集計表

### 3 古代の土器 (図版 11・21-131～144)

古代の土器は、須恵器 9 点と土師器 8 点出土した。いずれも、明らかに中世包含層中 (Ⅱ b 層) における混入を除けば、Ⅲ層の深部あるいはⅣ層との層境で出土することが多かった。Ⅲ層は中世後期、Ⅳ層は古墳時代の包含層であるから、層順的に齟齬はない。なお、古代の土器の年代観については、[春日 1998・1999] を参考にした。

製塩土器については、10 点出土し、中世後期の包含層であるⅡ b 及びⅢ層中からの出土であるが、新潟県においては中世に入ると土器を用いての製塩は行わないとの見解[高橋 1999]があり、古代に含めた。

131～135 は須恵器である。131～133 は無台杯で、134 と 135 は杯蓋である。131 と 132 は粒子の細かい灰色を呈する精良な胎土で、134 と 135 はやや粒子の粗い胎土であるが、いずれも白色微砂粒が多く混入する特徴などから小泊窯産と判断される。いずれも遺存率が低く、判然としないが、9 世紀後半～10 世紀初頭頃であろう。133 は、やや厚手の製品で粒子の細かい灰白色を呈する胎土を有することから、西頸城丘陵産と考えられる。胎土が、滝寺・大貫古窯跡群 [小田ほか 2006] に類似しており、8 世紀末～9 世紀前半に位置付けられよう。

136～141 と 144 は土師器である。136～139 は底部糸切りの無台碗である。大型化してきていることから、9 世紀後半～10 世紀初頭頃の所産であろう。その中でも 139 は器壁が薄く、胴部の開きが大きく、直線的であることから、後出気味である。140 は有台碗である。内外面ともに黒色処理はしていない。131～139 に後出し、10 世紀前半～11 世紀前半頃であろう。141 の外面は細かなハケメ調整を行い、内面は横位のナデ調整をする。胴径が小さいことから小甕と考えられる。遺存率が低く、詳細年代は不明である。144 は鍋の口縁部で、10 世紀の所産と考えられる。

142 と 143 は製塩土器である。粘土輪積み法により作出される。外面には指頭圧痕が認められ、接合部は丁寧には調整しない。内面には簡易なナデ調整を行っている。底部には砂が付着する。全体的に被熱し、もろくなっている。詳細年代は不明である。

杯・碗の内、133 と 136 にはススが付着している。

### 4 石器・石製品 (図版 11・22-145～156)

本調査区からの石器・石製品の出土は少ない。出土層位はⅡ b 及びⅢ層が多く、硯・砥石・敲石・凹石などがある。Ⅳ層中からはわずかであるが、横刃型石器・砥石が出土した。

145 は、暗灰色を呈する粘板岩製の硯である。上面は側縁に幅 7mm 程の縁帯を有し、陸を区画する。

陸は使用の痕跡が明瞭で、平滑となっており、擦痕も著しい。左側面は丁寧に磨かれ、平滑である。裏面は石目に沿って剥離させた後、さほど丁寧な調整はなされていない。146～151は砥石である。146と147は凝灰岩製の砥石で、直方体を基調とする。146は黄白色を呈するキメの粗い素材で中砥である。四面ともに使用している。147はキメの細かい素材で、表面は灰黄褐色を呈するが、石の中心は浅黄色をしている。中砥あるいは仕上砥で、四面ともに使用している。器表には使用による擦痕もわずかに見られ、形状は撥状に磨り減っている。148と149はやや黄色味がかかった灰色を呈するキメの細かい粘板岩製の砥石で、平面形は方形を呈するが、厚みはなく板状を呈する。仕上砥と考えられる。2点の素材の特徴は近似しており、同一産地と考えられ、接合しないものの同一製品である可能性もある。側面は切り出し時の痕跡をとどめたままで、使用面は上面である。上面には擦痕が明瞭に残され、面の中央が高く、側縁に向かって低くなる。150と151は礫砥石である。加工を施さない砂岩礫を砥石として使用している。150は平面楕円形を呈する扁平な素材を利用し、上面及び左側面を砥面として使用している。右側面は剥離しており、不明である。151は不整形の礫で、150に比べると厚みがある。上面を使用している。

152は粗面輝石安山岩を素材とする。内磨き砥石であろうか。153は角閃石安山岩の棒状礫を素材とした敲石である。端面に敲打痕が見られる。154は輝石安山岩の円礫を素材とする凹石である。近年、新潟県の中世遺跡からこのような安山岩を用いた大型凹石の出土報告が相次いでいる。鍛冶や鋳物類の粉碎作業に使用したとの指摘〔小池2009〕もあり、用途については検討を要する。155と156は泥岩を用い、背面に円礫の礫面を残した貝殻状剥片を素材として縁辺に細かな調整剥離を施すことにより刃部を作出したもので、横刃型石器と呼称される。名称は『姫御前遺跡Ⅰ』〔加藤ほか2008〕の報文にならう。

帰属年代については、152と155を除き、中世包含層（Ⅱb・Ⅲ層）中もしくは中世期の土坑（SK432）からの出土であり、中世後期の所産と考えられる。152と155は、古墳前期包含層（Ⅳ層）中からの出土である。糸魚川地域においては、内磨き砥石や横刃型石器が古墳時代の土器と共伴していることはよく知られており、矛盾はない。156はⅢ層から出土した横刃型石器であるが、155との関連性がかんがみると、本来的に古墳時代の所産であって、何らかの要因によりⅢ層中に混入したと理解するのが妥当であろう。

## 5 木製品（図版12・22・23-157～236）

今年度調査を行ったR4-9区は、平成20年度に古墳時代前期に属する農具を伴う土盛り畦畔（SX215）を検出したR5区の東側に面しており、連続すると見られる畦畔の痕跡が検出されている。しかしながら、木製品の主体を占めているのは中世後期（14世紀後半～16世紀）に属するⅡb・Ⅲ層からのものであり、古墳時代の製品はほとんど見られなかった。中世の木製品の多くは箸状木製品、もしくはそれに類するものであり、図示した残存状態の良好なものも含め545点出土している。地面に突き刺さった状態のものが多く検出されており、これまでに調査を行ってきた姫御前遺跡や竹花遺跡の他の地点〔加藤2008・2011〕と類似する傾向が見られた。また今回出土した木製品の中には、片側端部が炭化したものが見られた。棒状材を用いて削りを加えたもので、形態的には後述の棒状木製品の範疇に納まるものであるが、畑大介氏は石川県の西川島遺跡群〔四柳1987〕で井戸・土坑で箸状木製品に包まれる形で鳥形や馬形が出土していること、新潟市の馬場屋敷遺跡〔川上ほか1984〕で、火を用いた何らかの遺構に伴い箸状木製品や端部に焼痕を持つ棒状木製品が出土しており、箸状木製品と併せて祭祀的な遺物としている〔畑

2006] ことから箸状木製品の項に含める。畑氏は後者の例を棧状木製品、あるいは不整形木製品と規定しており、棧状木製品は長さは様々で断面が長方形に近く、ある程度加工が施されたもので端部が細く削られていないものも含める。不整形木製品は簡単な加工が施されるが形状が整っていない木製品で、上端が斜めに切り落とされ下端部が尖り気味になるものも見られ、形態や長さも様々である。片側端部に焼痕をもつものが混在し、岐阜県柿田遺跡の例から「火付け木」の呼称を用いている。

そのほか、中世に位置付けられるものとして、形代 9 点 (人形 2 点、舟形 1 点、刀形 6 点)、板状木製品 2 点、棒状木製品 5 点、板状木製品 7 点、曲物底板 5 点、その他不明製品 2 点、古墳時代前期に比定される IV 層からは田下駄が 2 点出土した。残存率が低いので図示はしていないが、中世後期の層から漆器が 4 点出土している。1 点は塗膜のみの出土であるが、そのほかの 3 点はいずれも内外面に黒漆を塗布している。片面に赤漆が付着しており、底部と見られる高台を持つ漆器片には赤漆による円形と思しき文様が描かれていた。

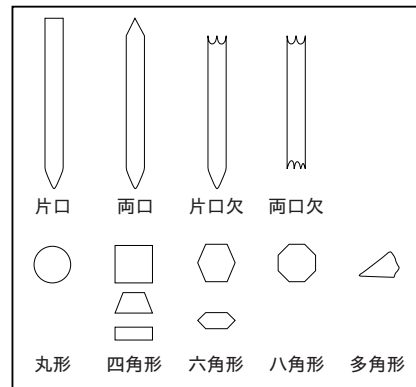
樹種は 80 点中 75 点がスギで、そのほかにマツ属、トウヒ属、モミ属などが使用されている (第 VI 章参照)。スギは木理が通り割裂性が高いことから加工が容易であり、周辺の姫御前遺跡や竹花遺跡の平成 20 年度調査地点でも高い比率で材として選択されている。

なお木製品の分類は『木器集成図録 近畿古代編』・『木器集成図録 近畿原始編』[奈良国立文化財研究所 1985・1993] を参照した。

## A 中世後期

### 1) 箸状木製品 (図版 12・22-157～200)・火付け木 (図版 12・22-201～206) 等

平成 20 年度調査区及び近隣地である姫御前遺跡の調査と同様、今年度調査を行った R4-9 区でも多量の箸状木製品が出土した。過去の事例も含めれば 1,000 点以上にも及ぶ出土点数となり、当該地域を特徴付ける遺物といえるだろう。箸状木製品は棒状の素材を用い断面多角形になるように表面を面取りし、両端もしくは片端を尖らせたものである。例外的なものについて少し言及すると、200 は断面扁平でねじれているが、木理の通らない木取りの影響を受けたものである。203 は角柱状の棒状材を用い四角形の断面を呈し、先端部を斜めに削り尖らせている。200 とともに棒状材を面取りし先端部を尖らせる、といった典型的な箸状木製品と共通する特徴が見受けられることからこちらに含めた。202・204～206 は長さ 10cm 程度の角柱状、もしくは不整形な棒状材の片側端部が炭化したもので、先に述べた火付け木に当たる。火付け木は箸状木製品と伴する例が見られ、祭祀的な性格という点において関連性が高いと見られる。201 は先端部に炭化の痕跡は見られないが、長さ 10cm 程度の角柱状の棒状素材を使用するなど、火付け木と形態的な共通点が見られる。畑氏の論考 [畑 2006] では火付け木の中には未使用のまま捨てられたものが一定の割合で見られ、事前に大量に用意された火付け木は、たとえ火を付けなくても再利用するものではなく使用済み品とともに廃棄されたもので、実用品ではなく祭祀等に用



第 12 図 箸状木製品形態分類図

単位：点

	丸	四角	六角	八角	多角	計
片口箸	0	9	3	0	2	14
両口箸	0	14	17	1	1	33
火付け木	0	11	1	0	12	24
片端欠	0	19	2	0	4	25
両端欠	3	181	203	8	54	449
計	3	234	226	9	73	545

第 6 表 箸状木製品集計表



いたのではないかとしている。また火付け木とした 202・205 では樹種としてマツ属が使用されている。マツ属は花粉分析の結果から遺跡周辺に生育していたことは確認されている。スギと比べ数は少ないが、マツ属は松ヤニに代表されるように樹脂を多く含む木材であり、火付け木として用いるには適した樹種であったのだろう。箸状木製品については古代の斎串的役割の延長上にあるものとし [四柳 1987]、祭祀的な遺物と見ることができ、竹花遺跡 I の報告において形態的な観点から一方を平坦に削り片側を尖らす「片口箸」、と両端を尖らす「両口箸」に分けられ、前者を日常的に消費されるもの、後者を祭祀的な性格を帯びたものと想定した上で、「地面に突き刺した状態で出土したものとそうでないものとの比率や形態といった要素を検証する必要がある。」[加藤ほか 2011] と報告した。それに伴い今年度は箸状木製品を断面形態と先端部の加工といった観点から分類した。

断面形態に関しては丸形、四角形、六角形、八角形、多角形に分けられる (第 12 図)。いくつか付け加えておくと、四角形としたものは削りによって四面をもつもので正方形、長方形、台形などを含む。六角形は角柱状の棒材の四隅を斜めに削ったもので菱形に近い形状のものもある。八角形は四隅を含め丁寧な面取りがされているものである。多角形としたものは基本的には不整形のものであり、あまり加工が加えられていない自然木に近いものも含まれる。また端部の加工については前述のように片端のみを尖らせる片口箸 (161・164・167・171・173・177・180・181) と両端部を尖らせる両口箸 (157・158・166・172・178・179・182) に分けたが、残存率が低く両端の加工が確認できるものは全体の 1 割程度である (第 6 表)。片口箸は 14 点確認された。断面形態を見てみると四角形のもものが 9 点と主体を占め、次いで六角形が 3 点、多角形 2 点となる。両口箸は 33 点確認された。内訳は四角形が 14 点、六角形が 17 点、八角形と多角形がそれぞれ 1 点となっている。また 545 点のうちあきらかに地面に突き刺した状態と認識されたものは 99 点に及ぶが、ほとんどが両端を欠損しているものである。両端の形態が確認できるものは 6 点のみですべて片口箸となり、両口箸は見られない。破損品が多く対象となる点数が少ないため断定できるものではないが、今回の分析結果は片口箸を日常雑器、両口箸を祭祀的なもので地面に突き刺して用いるという仮定を裏付けるものではなかった。火付け木は図示したものも含めて 24 点確認された。四角形が 11 点、多角形が 12 点、六角形が 1 点という割合で、全体的に丁寧な作りの製品は見られなかった。なお箸状木製品の祭祀的な性格については、第七章 2A で形代類などと併せて述べる。

## 2) 形代 (図版 12・22-207～215)

207 は人形である。長方形の板材を用い、両側面に抉りを入れることで頭部、肩部を作り出し人物の正面観を表現している。208 は棒状素材の頭頂部を斜めに削り、両側縁を抉っている。抉りから下端部にかけて粗く削り、先端を細く作り出している。頭頂部から両側縁の抉りにかけて損耗が激しいため断定はできないが、人形として用いられた可能性がある。209 は舟形である。残存率が低く、全容は把握できないが船首、もしくは船尾にあたる部位を尖らせ、内部を削り抜き台形状の断面形を呈する。平成 20 年度調査でも舟形は 2 点出土しているが、いずれも明確な内部の削り抜きはされておらず、櫂座にあたりと見られる部分をわずかに抉るのみである。それらと比較すれば、209 は実在の舟の構造をより強く模した形態といえるだろう。210～215 は刀形である。全体的に丁寧な作りの製品は少なく、長方形板材の片側端部を斜めに切り落としただけの簡易的な作りのものが多い。210 は方形基調の板材の片側に丸みを持たせて尖らせ刃部を表現する。また刃部から一段狭く削り出すことによって、柄もしくは茎にあたる部分を作り出している。212・215 はほかの刀形と同じように頂部を斜めに削ったのみの簡素なもの

## 5 木製品

だが、器表に径約 2mm 程度の孔が穿たれており、残存形態から刀形としたが、ほかの製品の端材の可能性もある。また、213 の左側縁は欠損しており、同様に他製品の端材である可能性も残される。212 の片側面には擦痕が見られる。

### 3) その他・不明製品 (図版 12・23-216・217)

216 は細長い角柱状の棒状木製品を素材とし、両端は欠損している。形態的には箸状木製品に近いが片側側縁に台形状の突起を持ち、径 2mm 程度の孔が穿たれている。217 は残存している部分が少ないが片側をつまみ状の突起として滑らかに削り出し、裏面を平滑に仕上げている。

### 4) 棒状・杭状木製品 (図版 12・23-218～222)

218・221・222 は角柱状の棒材を用い、片側の先端部に粗い削りを加え杭状に尖らす。222 はやや厚みのある板材を用い、218・221 と同様の粗い削り出しを行っているが、両端部が欠損している。これらは杭状木製品として見た場合先端が鋭利とはいえないが、これまでに調査を行ったほかの地点でもこうした粗雑な作りの杭状木製品が出土しており、低地性の軟質な地盤で用いる際にはそれほど支障は無かったと考えられる。219 は円柱状の棒材を用い片端を尖らせるもので、形態的には前述の箸状木製品に近いが大型である。220 は角柱状の棒状木製品を素材とし、片側端部が欠損している。

### 5) 曲物底板 (図版 12・23-223～226・234)

223 は直径 93mm を測る底板で、片側側縁が欠損している。224 は直径 72mm を測る小型の底板で側縁部は丁寧な加工がなされ稜を残さない。近世期の遺構である SD401 からの出土で、近世期の所産の可能性もある。225 は直径 190mm を測る底板で、全体に損耗している。226 は直径 101mm を測る底板で、側縁部の加工は粗く稜を残し、片面全体が炭化している。234 は直径 174mm を測る底板で、器表には多数の線状痕が見られ、まな板などの転用品の可能性が考えられる。また樹皮の縦じ紐が表面から裏面に貫通しており、ほかの部材と組み合わせて用いられていたと推察される。

### 6) 板状木製品 (図版 12・23-227～233)

いずれも方形基調の板材を用いた製品である。227・230 は両端が欠け、全体に摩耗している。228 は上端が平坦に仕上げられ、下端部が炭化している。229 は上部が平坦に加工され、角に丸みを持たせている。器表には 3mm 程度の穿孔が 2 箇所されており、上部の孔は貫通していない。また下方の孔の下には釘と思しき金属片が残存しており、ほかの部材と組み合わせて使用されたものと考えられる。231 は上部を欠くが、一側面から先端に向かい細く尖らせるもので、板杭である。232 は上方部が欠損する。下方部に大きな削りを加えて先端部を細くしており、杭として用いられたものと考えられる。233 は端部に大きな加工は見られないが、表面に複数回の削りが施されている。

## B 古墳時代 (図版 12・23-235・236)

235 は田下駄である。方形の板材を素材とし、径 1cm 程度の方形孔が穿たれている。丸みを持つ側縁を除き欠損しており、上方のわずかな範囲と下方が炭化している。炭化範囲は欠損面である左側面にまで及ぶことから、破損後に被熱したものと考えられる。236 は方形の板材に長軸 3.8cm 程度の楕円形の孔

が見られる。孔の周辺に擦痕等の痕跡は見られない。全体に損耗しているが、田下駄と考えられる。田下駄もしくは田下駄と推定される製品は、平成20年度調査を行った地点でも8点の出土が見られた。いずれも長方形の板材の器表に複数の穿孔が認められるもので、輪かん状の杵木を持つ形式のものと考えられる。こうした田下駄の周辺遺跡における事例として前波南遺跡〔春日ほか2008〕がある。こちらは古墳時代中期～奈良時代に比定される河道からの出土で、大足や鋤なども見られるが明確な時期については言及されておらず、報文中では奈良時代のものである可能性が高い、とされているものだが一応の例として挙げておく。

## 6 金属製品・銭貨・鍛冶関連遺物 (図版13・23・24-237～277)

金属製品には鉄製品、銅製品、銭貨があり、調査区全域から鍛冶関連遺物が出土している。

237～239、242は銅製品である。すべて、ⅡbあるいはⅢ層中からの出土で、中世後期の所産と考えられる。237は鏡の紐と考えられる部分で、周囲をほぼ円形に再加工している。竹花遺跡及び近接している姫御前遺跡からは、土器・陶磁器類を円形に再加工する「加工円盤」が多数出土しており、本品も同様の意図により作られたものと考えられる。238は用途不明製品である。0.6mmと薄手の銅板を円筒状に折り曲げたもので、下方は開いている。先端が尖らない丸棒状の製品の先に取り付けて使用するものと考えられる。上面には桜花と考えられる細かな細工が彫り込まれる。本品は、土圧が原因であろうがゆがんでおり、上面に亀裂が生じている。239は用途不明製品である。短軸方向に緩やかに湾曲する長方形の銅板に、突起と弧状の把手が取り付けられている。把手はねじり紐のような細工が施される。把手及び突起付近には黒漆が付着している。242は筭である。薄い板状の銅板を加工したもので、上端には耳搔き状の突起が付く。下端は緩やかに尖る。胴部上半には、やや窪ませた窓を区画し、中央に団花あるいは雲をモチーフとした細工が貼り付けてある。窓の下地には、細かな鹿の子文が一部残存しており、本来は窓中の下地のほぼ全面を覆っていたものと考えられる。

240・241・243～245は鉄製品である。240と241は鉄鍋で、240は脚部と考えられる。脚は断面略円形で、上部から下部に向かい徐々に径を減じ、中央やや下寄りでも最小径を迎えたのち、再び径が拡大し、団子状の接地部となる。外形は獣脚にも似る。241は耳の部分で、中央に円孔があげられている。円孔の下位には突起が1条巡る。推定口径は40cm程である。243～245は釘である。大小様々あるが、いずれも断面方形である。頭部は243が長方形の板状を呈し、244と245が頭巻である。240・241・245がⅡbあるいはⅢ層からの出土で中世後期、243と244がⅡa層からの出土で中世後期から近世初頭(17世紀前半)の所産と考えられる。

246～269は銭貨である。竹花遺跡からは全体で77枚出土し、今年度調査区からは28枚出土した。出土層位はⅡa層(17世紀)が若干あるものの、大半は中世後期の包含層であるⅡb及びⅢ層からの出土で、初鑄年のいかに関わらず中世後期～近世初頭(寛永通寶流通以前)段階において流通していたものと考えられよう。中世後期の包含層中からは祭祀用具と考えられる筭状木製品が大量(545点)に出土

	新・後漢銭	唐銭	五代十国	北宋銭	南宋銭	元銭	明銭	不明・無文銭	合計
姫御前Ⅰ	0	0	0	8	1	0	4	0	13
姫御前Ⅱ	0	4	0	37	2	0	6	6	55
竹花Ⅰ	0	3	1	31	2	1	3	8	49
竹花Ⅱ	2	4	0	14	1	0	3	4	28
合計	2	9	2	90	6	1	16	19	145

(単位:枚)

第7表 各遺跡における出土銭貨数量表

したのであるが、銭貨の出土地点も箸状木製品の分布の濃淡と重なる（第8図）ことから、ともに祭祀用具として使用された可能性が高い。箸状木製品と銭貨が伴って出土する事例には、本遺跡から約130m離れた姫御前遺跡がある[加藤ほか2008]。今年度調査区から出土した銭貨は、新・後漢銭2枚、唐銭4枚、北宋銭14枚、南宋銭1枚、明銭3枚、不明・無文銭が4枚であった（第7表）。そのうち、破損の著しい不明銭の4枚を除き、掲載した。銭種の中で、北宋銭がもっとも多い状況は、竹花遺跡や姫御前遺跡を通じて変わらないが、今回の調査では、一際古い貨泉と五銖銭が初めて出土した。出土した28枚の内、最古銭は貨泉（新銭）で西暦14年の初鑄、最新銭は永樂通寶（明銭）で1408年の初鑄である。なお、269の永樂通寶はいびつで銭文も不明瞭であり、比重も軽いことから私鑄銭である可能性が高い。

270～277は鍛冶関連遺物である。今年度調査区からは、鉄滓が総量56点、2,203g出土し、その内、含鉄滓は47点（84%）、1,927g（87%）である。また、羽口は16点出土した。なお、竹花遺跡の平成20年度調査及び約130m離れた姫御前遺跡からも同様に大量の鍛冶関連遺物が出土している。

270～276は鉄滓である。270～276は椀型滓で、276を除きいずれも含鉄滓である。270と271の上面、274の下面には粗砂がブロック状に付着しており、270・273・275の上面と276の側面には炭化材が付着している。

277は羽口である。推定の外径は7.2cmで、中央に推定径2.8cmの円孔があげられている。全体的に被熱しており、器表に空隙が生じている。図の下方が特に被熱が著しい。

第13図は竹花遺跡および姫御前遺跡における鉄滓と羽口の出土分布である。鉄滓の分布の濃淡と羽口の分布の濃淡は類似しており、鉄滓と羽口の関連性の高さが窺われる。今年度調査区では、南東隅にあたる53・54Bグリッドに多く分布する。東方に位置する姫御前遺跡からも遺跡の南西方に偏って鍛冶関連遺物が多く出土している。竹花遺跡と姫御前遺跡、及び、その中間地点である北陸新幹線法線内における試掘確認調査地点からは、鍛冶関連遺構が検出されてはいないものの、これらの供給源である鍛冶関連遺構が近隣に存在している可能性が示唆される。

竹 花									姫御前		
R8	R6・7		R5	R4 (H21年度調査区)							
76～73	72～63		62～59	58	57	56	55	54	53	40～34	32～19
7 192 ・×2	33 1021 ・×16		9 284 ・×2	3 146 ・	3 108 ・	5 217 ・	5 261 ・	1 20 ・	143 5465 ・×38	83 2562 ・×10	
			1 17	6 176 ・	9 248 ・	12 542 ・	14 583 ・×5				

R4にはH20年度調査分、鉄滓3点（115g）、羽口1点を含む

上段：鉄滓個数 中段：鉄滓重量（g） 下段：「・」羽口の個数

第13図 竹花・姫御前遺跡における鉄滓・羽口出土分布

## 7 弥生時代・古墳時代の土器 (図版13・24-278～285)

今年度調査区では古墳時代と考えられる土器は、平箱1箱の出土と極めて少ない。すべて包含層中からの出土で、遺構に伴う遺物はない。しかも、その大半は中世に形成された層（Ⅱb・Ⅲ層）の混入品で、純粋な古墳時代の遺物包含層（Ⅳ層）からの出土は36点（個体識別法）に過ぎず、個々の遺存率も低く、図化に耐えられる7点のみ実測・掲載した。そのほか、中世包含層（Ⅱb層）から弥生時代後期と考えられる高杯口縁部が1点のみ出土したので、図化し掲載した。同類がやはり同層位（Ⅱb層）から平成20

年度調査区において1点出土している。

なお、弥生後期から古墳前期の土器の年代観については、[滝沢 2005]を参考にした。時期区分については畿内第V様式から布留2式までの間を10期区分したもので、北陸における漆町編年(「群」)[田嶋 1986]とほぼ対応する。

平成20年度調査区では、畦畔に伴い土器の出土が見られたのであるが、今年度の土器の出土分布域(第28図)を見ると、畦畔により推定される区画内に多く分布し、かつ想定される畦畔(SX215・216)の近隣に分布しているといえなくもない。しかし、本年度調査区は、攪乱による破損が著しく、畦畔を平面的に明確には検出できなかったことから、ここでは、出土傾向のみを指摘するにとどめる。むしろ、古墳時代の生産域が延伸する西方に密度が濃く、縁辺地に近い東方が薄いと理解すべきかもしれない。

278は薄手の甕である。口縁部と胴部の境は括れが弱いものの、屈曲し、明瞭に分かれる。口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、端部は若干内側に摘み出し、上端は丸くなる。口縁部にはヨコナデを施し、胴部には細かいハケメ調整を行う。調整の方向については外面は縦位、内面は横位である。口縁部にはススが附着する。布留式傾向の強い甕で、9～10期に位置付けられる。279は、口縁部が長くやや内湾しながら伸びる小型丸底壺の系譜を引く厚手の壺である。ほかの製品と比較して、白色の精良な胎土を用いている。口縁部の内外面及び胴部外面にはミガキ調整が行われ、胴部内面にはナデが施される。9～10期に位置付けられる。280・281は、壺あるいは甕の底部である。どちらも内面にハケメ調整を行い、砂礫などの混入物が多く認められる。底部に敷物などの圧痕は認められない。282は高杯の脚部で、受部の内面を黒色処理する。脚部の外面には縦位のヘラナデあるいは太い原体のミガキを行う。内面は簡易に横位のナデを行うが、粘土紐の接合痕は残っている。古墳時代後期の所産である。283は器台の脚部である。赤橙色を呈する粗い胎土で、器高が低く、脚が開く形状である。器表は摩耗が著しく、調整等是不明である。器壁が厚く、末広がり形状から9期以降か。284は大口径の二重口縁壺の口縁部上半である。緩やかに外反し、口縁端部の外側に小玉縁状の膨らみを持つ。破片の下端は肥厚することから、口縁部下半との接合部に当たるのであろう。内外面は、横位のナデ調整を施す。285は本調査区において認識できた唯一の弥生土器である。出土層位はII b層(中世後期包含層)であることから、混入品と考えられる。高杯受部の口縁端部片と考えられる。弥生後期に当たる法仏～月影式期に比定される。

以上、本遺跡出土の古墳時代の土器は、278・279・283・284のまとまりから、前期後葉である9～10期頃の年代が与えることができよう。平成20年度調査において、出土した該期の土器も、古墳時代前期中～後葉に位置付けられており、おおむね合致した調査結果といえる。

## 第Ⅵ章 自然科学分析

1～7：パリノ・サーヴェイ株式会社

1：斉藤崇人 2：伊藤良永

3：馬場健司 4・5：高橋 敦

6：金井慎司

7：斉藤・馬場・高橋・伊藤

### 1 花粉分析・イネ属同定

#### A 試料

試料は、57B グリッドに位置する調査区南壁である基本層序西地点のⅠ層（試料番号1）、Ⅱa層（試料番号2）、Ⅱb層（試料番号3）、Ⅲ層（試料番号4）、Ⅳ層（試料番号5）、Ⅷ層（試料番号6）から採取された土壌6点である。このうち、Ⅰ層が暗オリーブ灰色砂混じりシルト、Ⅱa層が暗灰黄色砂混じりシルト、Ⅱb層がオリーブ黒色砂混じりシルト、Ⅲ層が黒褐色粘土質シルト、Ⅳ層が植物遺体が混じる黒褐色粘土、Ⅷ層が管状酸化鉄が発達する灰黄褐色シルトである。

#### B 方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚状況・粒径などを考慮し、[中村1974]を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。結果は花粉分析と合わせて図表に示す。

#### C 結果

結果を第8表、第14図に示す。花粉化石は、西地点（57B）のⅡ～Ⅷ層（試料番号2～6）の各試料から豊富に産出する。保存状態は、Ⅷ層（試料番号6）はやや悪いが、このほかの試料はいずれも比較的良好である。以下に、各試料の産状を述べる。

Ⅷ層（試料番号6）は、花粉化石が産出するものの保存状態がやや悪く、シダ類胞子が多産する。木本花粉ではスギ属が多産し、ツガ属、マツ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属等が認められる。

IV層（試料番号5）は、花粉化石群集における木本花粉の占める割合が高い。木本花粉では、スギ属が優占し、マツ属やブナ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が多く認められ、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属等の水湿地生植物に由来する花粉も検出される。

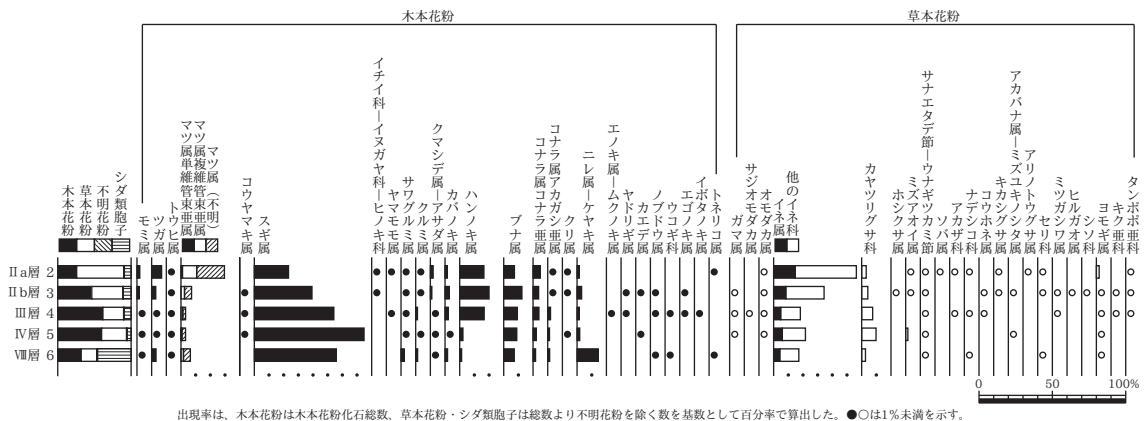
III層（試料番号4）は、IV層（試料番号5）と同様に花粉化石群集における木本花粉の割合が高い。木本花粉も同様にスギ属が多産するが、IV層と比較してハンノキ属の割合も高く、ブナ属やコナラ亜属等を伴う。草本花粉は、IV層と同様にイネ科やカヤツリグサ科が多く認められ、ガマ属やサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、コウホネ属、ミツガシワ属等の水湿地生植物も検出される。

II b層（試料番号3）は、花粉化石群集において草本花粉が木本花粉と同程度の割合を示す。木本花粉は、下位層と同様にスギ属が多産し、ハンノキ属、ブナ属等も多く認められる。このほかに、マツ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。草本花粉では、イネ科が多産するほか、カヤツリグサ科やサナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科等を伴う。また、ガマ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、コウホネ属、ミツガシワ属等の水湿地生植物も検出される。

II a層（試料番号2）は、花粉化石群集において草本花粉の割合が高くなる。草本花粉では、イネ科

分類群	西地点 (57B)					
	II a層	II b層	III層	IV層	VII層	
	2	3	4	5	6	
<b>木本花粉</b>						
モミ属	4	4	1	3	1	
ツガ属	14	8	2	2	7	
トウヒ属	1	1	1	1	2	
マツ属単維管束亜属	2	-	-	1	-	
マツ属複維管束亜属	20	7	4	1	4	
マツ属(不明)	39	14	6	8	11	
コウヤマキ属	-	1	1	1	-	
スギ属	48	114	175	243	132	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2	2	-	-	-	
ヤマモモ属	1	-	1	-	-	
サウクルミ属	1	2	3	1	5	
クルミ属	1	1	4	2	3	
クマシデ属-アサダ属	4	3	2	3	2	
カバノキ属	3	8	7	3	4	
ハンノキ属	34	58	54	7	3	
ブナ属	15	36	30	29	17	
コナラ属コナラ亜属	10	11	13	7	4	
コナラ属アカガシ亜属	2	2	6	4	3	
クリ属	1	2	-	1	-	
ニレ属-ケヤキ属	3	9	5	6	34	
エノキ属-ムクノキ属	-	-	1	-	-	
ヤドリギ属	-	1	1	-	-	
サンショウ属	-	-	1	-	-	
モチノキ属	-	-	-	1	-	
カエデ属	-	1	-	1	-	
ブドウ属	-	-	1	-	-	
ノブドウ属	-	1	1	-	1	
グミ属	-	1	-	-	-	
ウコギ科	-	-	1	-	2	
エゴノキ属	-	1	1	-	-	
イボタノキ属	-	-	1	-	-	
トネリコ属	1	-	-	-	1	
タニウツギ属	-	1	-	-	-	
スイカズラ属	-	1	-	-	-	
<b>草本花粉</b>						
ガマ属	-	1	2	1	-	
サジオモダカ属	-	-	1	-	-	
オモダカ属	1	1	1	1	-	
イネ属	117	52	25	32	31	
他のイネ科	331	163	70	85	95	
カヤツリグサ科	25	26	39	53	19	
ホシクサ属	-	1	-	-	-	
ミズアオイ属	6	2	-	8	-	
クワ科	1	-	-	-	-	
サナエタデ節-ウナギツカミ節	4	5	3	1	1	
タデ属	1	-	-	-	-	
ソバ属	2	-	-	-	-	
アカザ科	1	-	1	-	-	
ナデシコ科	3	-	1	-	2	
コウホネ属	-	2	1	-	-	
キンボウゲ科	-	-	-	-	1	
アブラナ科	1	-	-	-	-	
ミソハギ属	-	1	-	-	-	
キカシグサ属	2	1	-	-	-	
アカバナ属-ミズユキノシタ属	-	1	-	1	-	
アリノトウグサ属	1	-	-	-	-	
セリ科	1	1	-	-	1	
ミツガシワ属	-	1	1	-	-	
ヒルガオ属	-	1	-	-	-	
シソ科	-	1	-	-	-	
ヨモギ属	15	3	1	2	6	
キク亜科	-	4	1	-	-	
タンポポ亜科	2	1	1	-	-	
不明花粉	4	3	2	3	7	
<b>シダ類胞子</b>						
ゼンマイ属	1	-	-	-	-	
他のシダ類胞子	73	67	51	30	340	
<b>合計</b>						
木本花粉	206	290	323	325	236	
草本花粉	514	268	148	184	156	
不明花粉	4	3	2	3	7	
シダ類胞子	74	67	51	30	340	
総計(不明を除く)	794	625	522	539	732	

第8表 花粉分析結果



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。●は1%未満を示す。

第14図 花粉化石群集

## 2 珪藻分析

が優占し、カヤツリグサ科やヨモギ属等を伴う。このほかに、水湿地生植物のオモダカ属、ミズアオイ属、栽培種のソバ属等が検出される。木本花粉では、マツ属やスギ属、ハンノキ属が多く認められ、ツガ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。

栽培種のイネ属花粉は各試料から検出され、イネ科花粉中に占めるイネ属花粉の割合は、Ⅷ層（試料番号6）が24.6%、Ⅳ層（試料番号5）が27.4%、Ⅲ層（試料番号4）が26.3%、Ⅱb層（試料番号3）が24.2%、Ⅱa層（試料番号2）が26.1%である。

## 2 珪藻分析

### A 試料

試料は、花粉分析及びイネ属同定試料の採取地点と同じである。

### B 方法

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、[原口ほか1998]、[Krammer1992]、[Krammer&Lange-Bertalot1986・1988・1991a・1991b]、[渡辺ほか2005]、[小林ほか2006]などを参照し、分類基準は[Roundほか1990]に、壊れた珪藻殻の計数基準は[柳沢2000]に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms；広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、[Vos・de Wolf 1993]を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は[Lowe1974]に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。

### C 結果

結果を第9表に示す。西地点（57B）のⅡ～Ⅷ層（試料番号2～6）の珪藻化石の産出頻度はいずれも100個体未満と少なく、化石の保存状態も悪い。

西地点（57B）のⅡ～Ⅷ層（試料番号2～6）から産出する珪藻化石は、*Thalassionema nitzschioides*等の海水生種、*Anomooneis sphaerophora*等の淡水～汽水生種、*Encyonema silesiacum*等の淡水生種、*Sellaphora seminulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*等の陸生珪藻が少量ながら混在する程度である。



分類群	生態性			環境指標種	57B				
	塩分	pH	流水		Ⅱ a層 2	Ⅱ b層 3	Ⅲ層 4	Ⅳ層 5	Ⅴ層 6
Bacillariophyta (珪藻植物門)									
Araphid Pennate Diatoms (無縦溝羽状珪藻類)									
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	—	1	—	—	—
<i>Staurosira construens</i> var. <i>binodis</i> (Ehren.) Hamilton	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	—	1	—	—	—
<i>Thalassionema nitzschioides</i> (Grun.) Grunow	Euh			A, B	1	2	—	1	—
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)									
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	1	—	—	—
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i> (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		1	2	—	—	—
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	3	1	—	—
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	1	—	—	—
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	1	—	—
<i>Navicula placenta</i> fo. <i>obtusata</i> Meister	Ogh-ind	al-il	ind		—	1	—	—	—
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	1	—	1	—
<i>Stauroneis kriegeri</i> Patrick	Ogh-ind	ind	ind	T	1	1	—	—	—
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	1	—	1	—
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	—	1	1	—	—
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	3	1	—
<i>Sellaphora seminulum</i> (Grun.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RB, S	3	6	2	—	1
管縦溝類									
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	—	—	3	1	—
<i>Nitzschia lorenziana</i> Grunow	Meh			E2	—	1	—	—	—
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	—	1	—	—	—
短縦溝類									
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O, T	—	1	—	—	—
<i>Eunotia praeurupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	—	—	1	—	—
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	—	—	1	—
海水生種					1	2	1	1	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0
汽水生種					0	1	0	0	0
淡水～汽水生種					1	3	0	0	0
淡水生種					7	20	12	5	1
珪藻化石総数					9	26	12	6	1

[適応性]			[環境指標種群]		
H.R.: 塩分濃度	pH: 水素イオン濃度	C.R.: 流水	A: 外洋指標種, B: 内湾指標種, E2: 汽水泥質干潟指標種 (以上は [小杉 1988])		
Euh: 海水生種	al-bi: 真アルカリ性種	l-bi: 真止水性種	O: 沼沢湿地付着生種 [安藤 1990]		
Meh: 汽水生種	al-il: 好アルカリ性種	l-ph: 好止水性種	S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は [Asai・Watanabe1995])		
Ogh-Meh: 淡水～汽水生種	ind: pH 不定性種	ind: 流水不定性種	R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RI: 未区分) [伊藤・堀内 1991]		
Ogh-hil: 貧塩好塩性種	ac-il: 好酸性種	r-ph: 好流水性種			
Ogh-ind: 貧塩不定性種	ac-bi: 真酸性種	r-bi: 真流水性種			
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種	unk: pH 不明種	unk: 流水不明種			
Ogh-unk: 貧塩不明種					

第9表 珪藻分析結果

### 3 植物珪酸体分析

#### A 試料

試料は、花粉分析及びイネ属同定試料の採取地点と同じである。

#### B 方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、[近藤 2004] の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g 当たりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g 当たりの個数に換算）を求める。

3 植物珪酸体分析

結果は、植物珪酸体含量の一覧表とその層位的変化を図示する。各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未滿は「<100」で表示する。合計は各分類群の基数を合計した後に100単位として表示する。

C 結果

結果を第10表、第15図に示す。植物珪酸体は、西地点(57B)のII~VIII層(試料番号2~6)の各試料から検出されるが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各試料の産状を述べる。

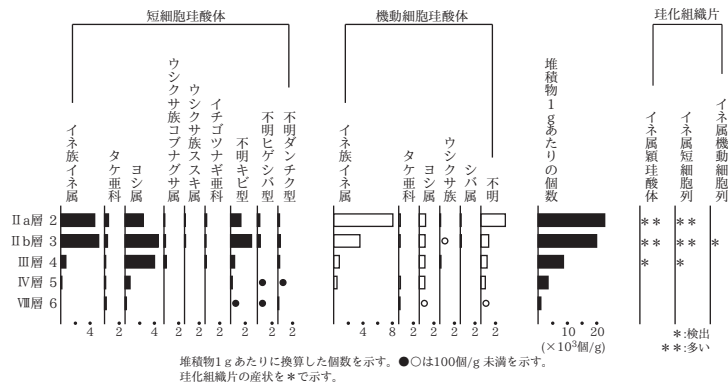
VIII層(試料番号6)の植物珪酸体含量は約900個/gであり、上位の試料と比較して含量が低い。栽培種は検出されず、タケ亜科やヨシ属などがわずかに検出されるのみである。

IV層(試料番号5)の植物珪酸体含量は約3,400個/gである。検出された分類群のうち、栽培種はイネ属が検出される。その含量は短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体が約500個/gである。栽培種を除く分類群では、タケ亜科やヨシ属など検出され、ヨシ属の含量が高い。

III層(試料番号4)の植物珪酸体含量は約8,600個/gであり、下位試料と比較して含量が高い。検出された分類群のうち、栽培種はイネ属が検出される。その含量は、短細胞珪酸体が約700個/g、機動細胞珪酸体が約800個/gである。

このほかに、イネ属は、粉(穎)に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列が確認される。栽培種を除く分類群は、タケ亜科やヨシ属、コブナクサ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が検出される。これらの分類群では、ヨシ属の含量が高い。

II b層(試料番号3)の植物珪酸体含量は約2万個/gであり、III層と比較して極めて含量が高い。栽培種では、イネ属が検出され、その含量は短細胞珪酸体が約5,200個/g、機動細胞珪酸体が約3,600個/gである。また、短細胞列と穎珪酸体の産出が目立ち、機動細胞珪酸体も確認される。栽培種を除く分類群は、タケ亜科やヨシ属、コブナクサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナ



第15図 植物珪酸体含量

分類群	西地点(57B)				
	II a層 2	II b層 3	III層 4	IV層 5	VIII層 6
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	4,600	5,200	700	200	-
タケ亜科	500	400	200	200	200
ヨシ属	2,500	4,500	4,000	700	200
ウシクサ族コブナクサ属	100	200	300	-	-
ウシクサ族ススキ属	100	100	-	-	-
イチゴツナギ亜科	200	100	200	-	-
不明キビ型	1,400	2,900	500	200	<100
不明ヒゲシバ型	300	400	-	<100	<100
不明ダンチク型	200	300	200	<100	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	8,100	3,600	800	500	-
タケ亜科	200	200	-	200	200
ヨシ属	900	800	800	800	<100
ウシクサ族	100	<100	200	-	-
シバ属	100	100	-	-	-
不明	3,300	1,100	800	600	<100
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	10,000	14,100	6,100	1,400	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	12,700	5,800	2,500	2,000	300
総計	22,700	20,000	8,600	3,400	900
珪化組織片*					
イネ属穎珪酸体	**	**	*	-	-
イネ属短細胞列	**	**	*	-	-
イネ属機動細胞列	-	*	-	-	-

\*凡例 [-]: 未検出, [\*]: 検出, [\*\*]: 多い。

第10表 植物珪酸体含量

ギ亜科などが検出される。これらの分類群では、ヨシ属の含量が高い。

II a 層(試料番号 2)の植物珪酸体含量は約 2.3 万個/g と、II b 層よりやや高い含量を示す。栽培種では、イネ属が検出され、その含量は短細胞珪酸体が約 4,600 個/g、機動細胞珪酸体が約 8,100 個/g である。また、短細胞列と穎珪酸体の産出が目立つ。栽培種を除く分類群は、II b 層と同様であり、ヨシ属の含量が高い。

## 4 放射性炭素年代測定

### A 試料

木材試料(56A14 自然木 A)は、水田畦畔の可能性のある VIII 層がやや高まる箇所に確認された自然木である。木材試料は、板目板状を呈しており、後述する放射性炭素年代測定試料として観察範囲内における最外年輪を含む 3～4 年分に相当する部位を採取している。

### B 方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO<sub>2</sub> を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO<sub>2</sub> と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシウ酸(HOX- II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に <sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C の測定も行うため、この値を用いて  $\delta^{13}\text{C}$  を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の <sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の <sup>14</sup>C 濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>C の半減期 5,730 ± 40 年)を較正することである。暦年較正は、CALIB 6.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正結果は、 $\sigma \cdot 2 \sigma$  ( $\sigma$  は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 $2 \sigma$  は真の値が 95% の確率で存在する範囲)の値を示す。表中の相対比(確率分布)は、 $\sigma$ 、 $2 \sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

## C 結果

木材試料(56A14 自然木 A)の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、 $2,050 \pm 30$ yrBPを示す(第11表)。また、補正年代に基づく暦年較正結果( $\sigma$ )は、calBC95-calBC1である(第12表)。

試料名	性状	樹種	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 (yrBP)	測定機関 code.
56A14 自然木 A	木材	スギ	$2,050 \pm 30$	$-19.82 \pm 0.81$	$1,960 \pm 20$	I AAA - 92640

第11表 放射性炭素年代測定結果

試料	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	測定機関 Code.
56A14 自然木 A 木材 (スギ)	$2,048 \pm 25$	$\sigma$	cal BC 95 - cal BC 36	cal BP 2,044 - 1,985	0.758	I AAA - 92640	
			cal BC 32 - cal BC 20	cal BP 1,981 - 1,969	0.115		
			cal BC 12 - cal BC 1	cal BP 1,961 - 1,950	0.127		
		$2\sigma$	cal BC 162 - cal BC 131	cal BP 2,111 - 2,080	0.089		
			cal BC 118 - cal AD 18	cal BP 2,067 - 1,932	0.911		

第12表 暦年較正結果

## 5 樹種同定

### A 試料

試料は、図化・報告した古墳時代～中世の木製品 80 点(図版 12-157～236)と放射性炭素年代測定を行った[自然木 A (56A14)]である。試料の詳細は、第 V 章 5 及び遺物観察表に示す。

### B 方法

木材や木製品の木取りを観察した後、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。木材組織の名称と特徴は、[島地・伊東 1982]及び[Richter ほか 2006]を参考にする。

### C 結果

木材試料(56A14 自然木 A)は、針葉樹のスギであった。そのほかの木製品の同定結果は遺物観察表に示す。木製品は、すべて針葉樹で、4 分類群(マツ属複雑管束亜属・モミ属・ツガ属・スギ)に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

いずれも箸状木製品で、木口面が狭いために、木口面の切片は採取できなかった。柾目面での観察から、仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材

部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁・水平壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は、年輪界近くに認められるが、数が少なく目立たない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞壁は滑らかで、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

## 6 動物遺存体

### A 試料

試料は、I～III層から出土した骨片 23 点である。試料の詳細は、結果と共に第 13 表に示す。

### B 方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼及びルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。

### C 結果

結果を第 13 表に示す。試料番号 1～19・21～23 は、白色を呈して表面に細かなひび割れが生じた破片であり、焼骨の特徴を示す。いずれも種の同定までは至らず、獣類の四肢骨片や部位不明の破片である。

試料番号 20 は、火を受けていないニワトリの左尺骨で、全体長 81.9mm を計る。

I～III層出土試料のうち試料番号 20 を除く骨片は、いずれも種の同定には至らなかったが、外観の観察から、火熱の影響を受けた焼骨であることが確認された。また、ニワトリの左尺骨（試料番号 20）は、直接的に火を受けた痕跡が残っておらず、肉をそぎ落とした後に破棄された可能性がある。

試料番号	出土位置		種類	部位	左右	部分	被熱	数量(個)	備考
	グリッド	層位							
1	57B2	II a	獣類	四肢骨		破片	○	1	
2	56A25	II b	獣類	不明		破片	○	1	
3	57A9	II b	獣類	不明		破片	○	1	
4	55B2	II b	獣類	四肢骨		破片	○	1	
5	56A9	II b	獣類	不明		破片	○	1	
6	56B2	I	獣類	四肢骨		破片	○	1	
7	55A15	II b	獣類	四肢骨		破片	○	1	
8	55B21	II a	獣類	四肢骨		破片	○	1	
9	54B6	II b	獣類	不明		破片	○	1	
10	57A14	II a	獣類	頭蓋骨		破片	○	1	
11	53B16	II b	獣類	不明		破片	○	1	
12	57B2	II a	獣類	不明		破片	○	1	
13	54B22	II b	獣類	四肢骨		破片	○	1	
14	55B2	II b	獣類	不明		破片	○	1	
15	56A14	II b	獣類	四肢骨		破片	○	1	
16	54A15	II a	獣類	不明		破片	○	1	
17	54A4	I	獣類	四肢骨		破片	○	1	
18	54A14	II b	獣類	四肢骨		破片	○	1	
19	56B12	III	獣類	四肢骨		破片	○	1	
20	54A5	II a	ニワトリ	尺骨	左	ほぼ完存	—	1	GL81.9mm
21	56A14	III	獣類	不明		破片	○	1	
22			獣類	不明		破片	○	1	
23	55B16	II a	獣類	頭蓋骨		破片	○	1	

第 13 表 骨同定結果

## 7 考 察

### A 珪藻化石から見る土壌堆積環境

Ⅶ～Ⅱ a 層（試料番号 6～2）における珪藻化石は、統計的に扱える数量は検出されず、珪藻化石の生態的特徴から堆積環境について検討することは困難であった。各土層からわずかに産出した珪藻化石を見ると、生育環境の異なる種類が混在するという特徴がうかがわれる。

### B 土壌分析から見る周辺環境

Ⅶ層上面の高まりから検出された自然木（56A14 自然木 A）は、較正年代で紀元前 1 世紀頃を示した。したがって、自然木は弥生時代中期後半～末頃の資料と考えられ、Ⅶ層は弥生時代中期後半及びそれ以前の堆積層と推定される。

Ⅶ層及びⅣ～Ⅱ a 層（試料番号 6～2）における花粉化石群集は、Ⅶ層でやや保存が悪かったが、各層から花粉化石が豊富に産出した。木本花粉では各層でスギ属が多産したほか、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属等も多く認められた。層位的変化を見ると、スギ属は、概して上層に向かって減少する傾向にある。ハンノキ属はⅢ層及びⅡ層で高率となり、マツ属（とくにマツ属複維管束亜属）はⅡ a 層で増加する。一方、比較的多く認められたブナ属は、コナラ亜属とともに各層を通じて大きな変化は認められなかった。

多産したスギ属は、富山湾沿岸地域では扇状地扇端付近の湧水部や、低湿地などに林分を形成することが知られている。また、ハンノキ属は河畔林を構成する分類群を含み、ニレ属－ケヤキ属は適湿地などに生育する。したがって、周辺の河畔や低地などには、スギ林やハンノキ属やニレ属－ケヤキ属等からなる河畔林が分布したと考えられる。また、ブナ属やコナラ亜属は、後背の山地や丘陵には、ブナ属やコナラ亜属等からなる落葉広葉樹林が成立していたと見られ、モミ属やツガ属なども分布していた推定される。山地・丘陵の森林の縁辺や微高地などにはアカガシ亜属やカバノキ属、ウコギ科等が、河川沿い等にはサワグルミ属、クルミ属、クマシデ属－アサダ属等が生育したと考えられる。

ところで、本遺跡の木本花粉群集に認められたスギ属の減少やハンノキ属の増加は、隣接する姫御前遺跡においても確認されている〔株式会社古環境研究所 2008〕。本分析結果及び既知の調査成果を参考とすると、後背の山地・丘陵における森林植生に大きな変化はなかったと推定される一方、Ⅶ～Ⅳ層頃に分布したスギ林はⅣ層以降に減少したことや、Ⅲ層以降にハンノキ属等からなる河畔林要素が増加したことが推定される。

一方、草本花粉では、花粉化石群集における割合がⅢ層を境として高率となる特徴を示し、さらに、イネ科が多産、優占した。同様の傾向は、姫御前遺跡でも確認される〔株式会社古環境研究所 2008〕。このほかの分類群では、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属等の明るく開けた場所に生育する人里植物や、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、コウホネ属、ミツガシワ属等の水湿地生植物に由来する花粉が検出された。また、植物珪酸体では概してヨシ属の含量が高いという特徴が認められた。したがって、遺跡周辺には人里植物からなる草地や水湿地生植物が生育する湿地が分布したと見られる。草本花粉群集における層位的変化を考慮すると、遺跡周辺において草地環境が増加したと考えられ、イネ属花粉や植物珪酸体などの産状から生産域の拡大などの可能性も示唆される。

## C 稲作の検討

竹花遺跡では、これまでの発掘調査により古墳時代及び中世の水田が検出されている。竹花遺跡の今年度調査区は、これらの水田が検出された区域に隣接することや、IV層中及びVII層上面に畦畔状の高まりが検出されたことから、耕作の有無及び水田域の広がり等の検討が課題とされた。

西地点(57B)に確認された堆積層におけるイネ属花粉及びイネ属の植物珪酸体の産状について見ると、イネ属花粉はVII～II a層(試料番号6～2)の各層から検出され、イネ科花粉中における比率は約24～27%であった。イネ科の産状をみると、II b層(試料番号3)で増加傾向を示し、II a層(試料番号2)では極めて高率となる。一方、植物珪酸体では、IV層(試料番号5)でイネ属が出現し、上位層でも同様に検出された。また、イネ属の含量は、IV層及びIII層(試料番号5, 4)はいずれも1,000個/g未満であったのに対し、II b層及びII a層(試料番号3, 2)は短細胞珪酸体が約5,200～4,600個/g、機動細胞珪酸体が約3,600～8,100個/gと含量が高い。東側に隣接する姫御前遺跡では、古墳時代前期頃の堆積層(IV層)と上位のIII層で約2,000個/g、中世後期の堆積層とされるII b層と近世の堆積層とされるII a層では約3,400～7,000個/gのイネ(機動細胞珪酸体)の密度(含量)が確認され、15世紀や17世紀に集約的な稲作が行われたと推定されている[株式会社古環境研究所2008]。

西地点(57B)におけるイネ属の植物珪酸体含量を考慮すると、IV～III層における水田稲作の可能性は低いと見られる一方、II層段階では稲作の可能性が示唆される。なお、試料採取地点のVII～III層の堆積状況について見ると、各層との層界は不整合であり、それぞれ下位の堆積物に由来すると見られる偽礫(ブロック土)が混入するなど、擾乱と見られる痕跡が観察される。このことから、これらの堆積層については、複数地点を対象とした検討も必要と考えられる。また、VII～II層のイネ属花粉の産状からは、比較的近傍で稲作が行われていたことが推定され、隣接地におけるイネ属花粉や植物珪酸体の産状が注目される。

## D 出土木製品に見る周辺環境と樹種の選択性

分析対象とされた木製品は、箸状木製品を主体として、田下駄、曲物底板、人形、舟形、刀形、板状木製品、棒状木製品、用途不明品からなる。これらの木製品からは、針葉樹のマツ属複雑管束亜属、モミ属、ツガ属、スギの4種類が確認され、木製品80点のうち75点がスギであった。

スギの木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易な部類に入る。マツ属複雑管束亜属は、加工は容易であるが、強度・保存性が比較的高く、ツガ属も比較的強度が高い材質を有する。モミ属は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが、保存性は低いとされる。

試料数が最も多かった箸状木製品は、II b～IV層の各層から出土している。木取りの観察では、いずれも削出棒状であり、断面形態は正方形、長方形、多角形、扁平、不定形などが確認された。これらの試料には、端部が炭化する試料も含まれ、これらは利用後に火を受けたり、火付け棒(燃えさし)等の可能性がある。また、長さが短く両端に加工痕が認められるもの(図版12-203)や、中央付近に穿孔を伴う張出を有するもの(図版12-216)なども観察され、これらは箸以外の器種に由来する可能性もある。箸状木製品からは、スギとマツ属複雑管束亜属が確認された。なお、出土層位や断面形態による樹種構成に特徴は認められず、加工が容易な木材の利用が考えられる。

曲物底板は、II b層及びIII層から出土しており、すべてスギの柾目板であった。祭祀具では、人形、舟形、刀形がある。人形は削出角棒状を呈し、舟形は底面が板目になる。刀形は、4点すべてが板目となること

から、板目板の選択・利用した可能性がある。これらの木製品はいずれもスギであった。

棒状木製品は、すべて削出棒であり、断面形態は扁平、不定形、丸、正方形、楕円～不定形、長方形を呈するものが確認された。スギを主体とする点はこのほかの器種と同様であるが、断面が扁平を呈する試料にマツ属複雑管束亜属、不定形の試料にトウヒ属が確認された。板状木製品は、板目となる試料が多く、このほかに柁目や追柁の試料も確認された。スギを主体とするが、モミ属が1点認められた。

本遺跡に隣接する姫御前遺跡や、海川右岸の沖積地に立地する六反田南遺跡、前波南遺跡、横マクリ遺跡の各遺跡から出土した木製品の樹種同定結果 [金原 2008、野村 2008、パリノ・サーヴェイ株式会社 2008a・2008b] などを見ると、板状を呈する試料を主体としてスギが多く利用されており、本遺跡においても同様の木材利用が示唆される。

また、木製品に確認された針葉樹は、花粉分析結果から、いずれも本地域に生育していたことが推定され、木材の入手は容易であったと考えられる。スギを除く分類群を利用する事例としては、マツ属複雑管束亜属は姫御前遺跡の中世の人形に確認されているが、モミ属の利用はほとんど見られず、県内全体でも利用例が少ない。モミ属が利用された事例としては、大武遺跡（和島村）の中世の無歯下駄、浦廻遺跡の中世の部材や不明木製品、砂山中道下遺跡の中世の曲物底板か等に確認されている程度である [松葉 2000]、[パリノ・サーヴェイ株式会社 2003・2006]。ツガ属は、新潟県内では木製品・加工材に認められた事例がなく、北陸地方では中名V・VI遺跡（富山市）の中世の柱根や板状木製品、古代～中世の棒状木製品、打出遺跡（富山市）の古代とされる炭化物等に確認されているのみである [富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2005、中部日本鋳業研究所 2006]。

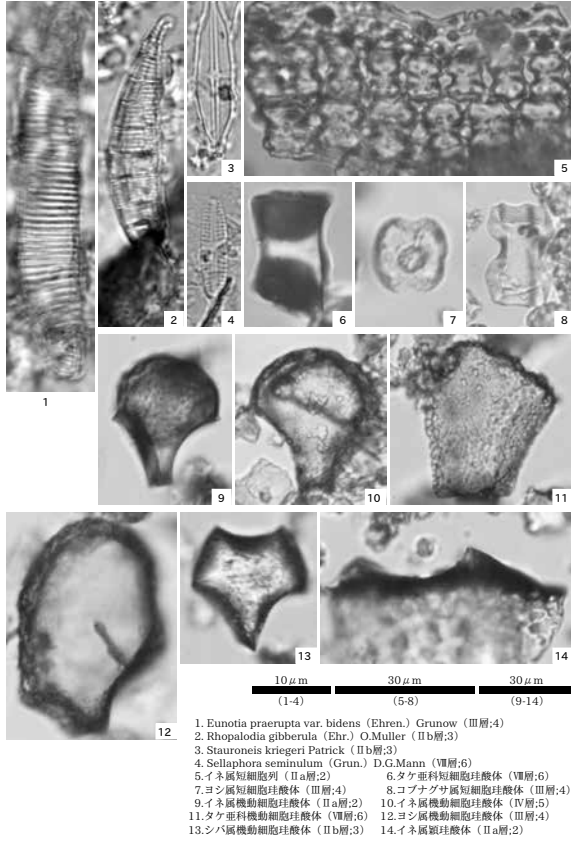
#### [第VI章 1～7 引用・参考文献]

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 東北地理学会
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 日本珪藻学会
- 金原 明 2008 「樹種同定」『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅷ 姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 54-58頁
- 株式会社古環境研究所 2008 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第184集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅷ 姫御前遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 46-60頁
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 日本第四期学会
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五 2006 『小林弘珪藻図鑑』第1巻（棚内田老鶴圃）531頁
- 近藤 鍊三 2004 「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48 日本ペトロロジー学会
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 176頁
- 中部日本鋳業研究所 2006 「打出遺跡の自然科学分析」『富山市打出遺跡発掘調査報告書 一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告』富山市埋蔵文化財調査報告7 富山市教育委員会 141-147頁
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2005 『中名V・VI遺跡・砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告 - 公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』第一分冊 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第26集 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 294頁
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13 日本第四紀学会
- 野村敏江 2008 「樹種同定」『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第188集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 48-49頁

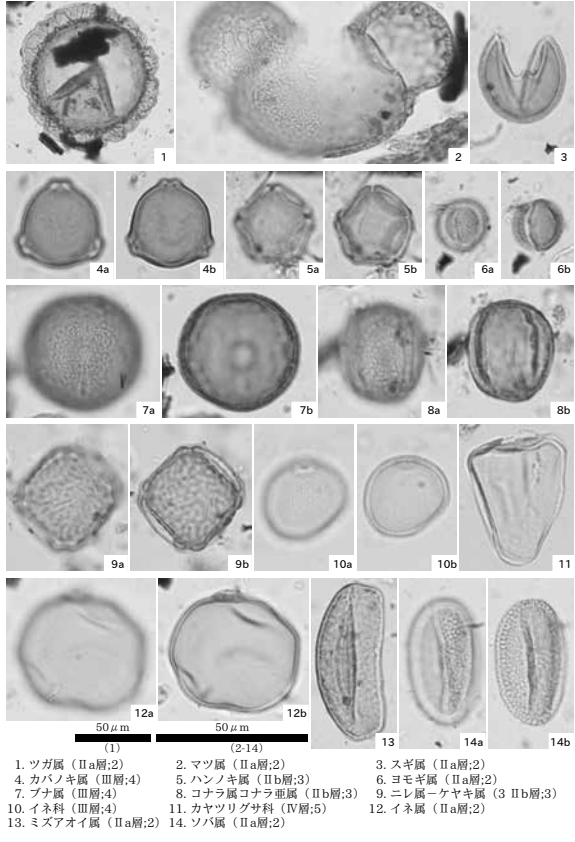


- 原口和夫・三友清史・小林 弘 1998 「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 527-600 頁
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「木製品の樹種」『一般国道 8 号白根バイパス関係発掘調査報告書 浦廻遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 126 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 45-51 頁
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2006 「自然科学分析」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告 XVII 野中土手付遺跡 砂山中道下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 164 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 65-97 頁
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2008a 「自然科学分析」『一般国道 8 号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 202 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 53-56 頁
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2008b 「自然科学分析」『一般国道 8 号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 202 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 36-38 頁
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 1996 「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について - 混合群集の認定と堆積環境の解釈 -」『日本文化財科学会 第 13 回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会 62-63 頁
- 松葉礼子 2000 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」『一般国道 116 号和島バイパス関係報告書 I 大武遺跡 I (中世編)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 97 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 42-47 頁
- 柳沢幸夫 2000 「II -1-3-2- (5) 計数・同定・化石の研究法 - 採集から最新の解析法まで -」『化石研究会』共立出版株式会社 49-50 頁
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子 2005 『淡水珪藻生態図鑑』内田老鶴圃 666 頁
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. *Diatom.*, 10, 35-47.
- Krammer, K. 1992 *PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.* J.CRAMEER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 *Bacillariophyceae.1.Teil : Naviculaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.* Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 *Bacillariophyceae.2.Teil : Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.* Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a *Bacillariophyceae.3.Teil : Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.* Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b *Bacillariophyceae.4.Teil : Achnanthaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.* Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R.L 1974 *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.* 334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005.Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- Richter H.G.,Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社, 70p [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. 2004 *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990 *The diatoms. Biology & morphology of the genera.* 747p. Cambridge Un IV ersity Press, Cambridge.

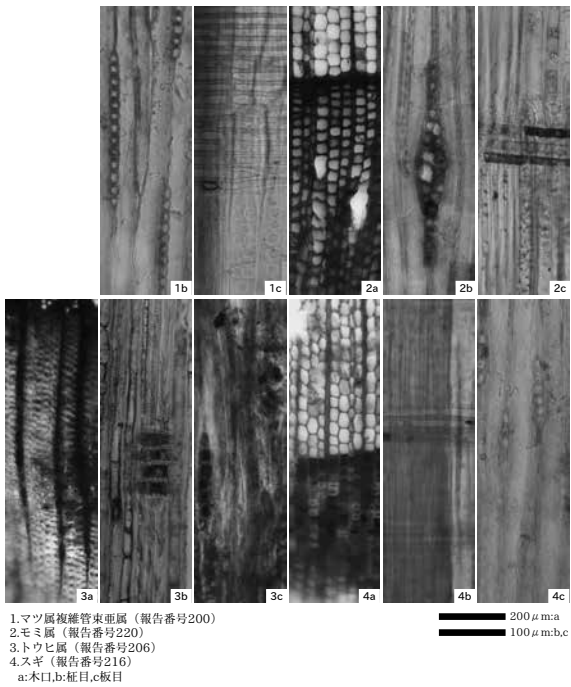
Vos, P.C. & H. de Wolf 1993 Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270, 285-296.



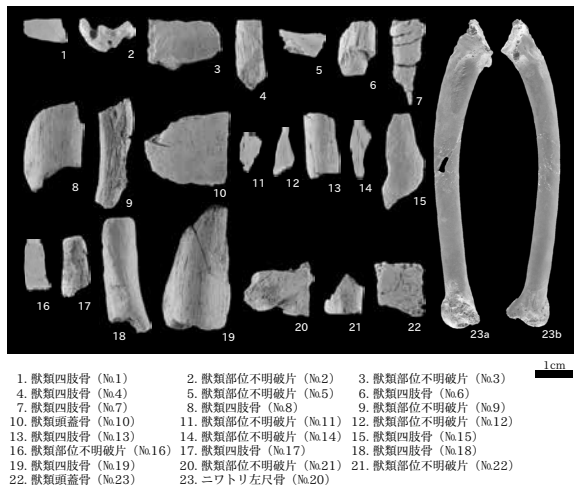
第 16 図 珪藻化石・植物珪酸体



第 17 図 花粉化石



第 18 図 木材



第 19 図 出土骨

## 8 出土骨片の骨組織形態学的検討

奈良貴史<sup>(1)</sup> 澤田純明<sup>(2)</sup>

(1) 日本歯科大学新潟生命歯学部解剖学第一

(2) 聖マリアンナ医科大学医学部解剖学講座

### A はじめに

平成 21 年度の竹花遺跡の発掘調査において I～III 層から 22 点の焼骨片が検出された。パリノ・サーヴェイ (株) の鑑定では、いずれも獣類のものとしてされた。これらの骨片は大きいものでも 30mm 程で、ほとんどが 10～20mm 程の細片で肉眼観察では動物種の同定が困難である。遺跡の性格を考える上で、焼骨が人か動物のものなのかは極めて重要な点であることから、著者らに骨組織形態学的手法を用いて動物種が特定できないか依頼があった。このような微小骨片の鑑定方法として、緻密質の組織形態学的研究法が知られている。ヒトを含む多くの哺乳類の緻密質はオステオンと呼ばれる円柱構造を主体とし、1 個のオステオンは動脈が通るハバース管とその周囲に同心円状に形成されたハバース層板から構成される。オステオンやハバース管の大きさや分布は動物種類によって相違しており、これを利用した鑑定法は特に法医学分野において人獣鑑別の一方法として援用されている [山本 1993, Cattaneo ほか 1999]。また、偶蹄目に顕著に発達する葉状骨など特定の動物に形成される組織構造の有無も、動物種類の識別の根拠として有効である [Enlow・Brown 1956-1958, Ricqlès 1975-1978]。これまで筆者らは、日本列島の人類遺跡から出土した微小骨片の同定に関して事例報告を蓄積しつつ、研究法の進展に努めてきた [奈良・澤田 2007, 澤田・奈良 2007, 澤田 ほか 2010]。今回、竹花遺跡出土骨片の一部を用いて、緻密質組織形態の観察と計測に基づいて動物種類の推定を試みたので、以下にその結果を報告する。

### B 資 料

出土焼骨のうち 3 点の骨片については、骨体の大きさと形状から大型哺乳類の四肢長骨骨幹部であると同定された。動物種による組織構造の相違は特に四肢長骨の緻密質横断面において顕著であることが知られているので [Jowsey 1966, 猪井 ほか 1994]、この 3 点を骨組織形態学的分析の試料とし、発掘調査担当者の付した番号にしたがって、試料 4・試料 8・試料 19 とした。この番号は、第 VI 章 6 のパリノ・サーヴェイの分析番号と一致している。

比較標本は、当時の動物相と家畜動物群に含まれる大型哺乳類を参考に、ヒト・クマ・ウマ・イノシシ・ニホンジカ・カモシカ・ウシを選定した。これらの四肢骨の骨組織形態計測値は、[澤田 ほか 2010] のデータを利用した。

### C 方 法

試料はエタノールで脱水した後、スチレンモノマー及び樹脂 (Rigolac 2004 と Rigolac 70F (Nisshin EM) を 7 対 3 で混合) に浸漬し、樹脂を骨内部に浸透させた。その後、重合促進剤 (Benzoyl Peroxide, 和光純薬工業) を添加した樹脂に包埋して恒温器内に安置し、30℃から 12 時間毎に 10℃ずつ 60℃まで温度を上げて樹脂を重合した。試料を包埋した樹脂が硬化した後、四肢長骨の長軸に対して垂直な横断面を得るように硬組織切断機 (SP1600, Leica) で厚さ 50-70 μm に薄切し、非染色非脱灰標本としてプレパラ

トに封入した。

検鏡には明視野・偏光観察の可能な光学顕微鏡 (Imager A1, Zeiss) を用いた。また、骨組織像を顕微鏡デジタルカメラ (Go-5, QImaging) で撮影し、画像解析ソフトウェア (ImageJ, US National Institute of Health) を用いて骨組織形態計測を行った。骨組織形態計測の方法は [澤田ほか 2010] に準拠し、完形の二次オステオンの面積 (On.Ar)、On.Ar を計測したオステオン内にあるハバース管の面積 (H.Ar)、オステオンの面積に対するハバース管の面積の比 (H-On 示数) を計測項目として採用した。

## D 骨組織形態の観察所見

骨内部への鉍物の浸透が強く本来の形状を保っていない骨組織構造が少なくないものの、各試料は二次オステオンを主体とする緻密質であると認められた (第 20 図)。ハバース管の径が大きく、比較標本のヒト (第 21 図上段) に類似する。幼齢の個体に形成される一次骨が見当たらず、リモデリングによる二次オステオンが多く存在することから、各試料はある程度成長の進んだ個体に由来すると推察される。骨組織構造の保存状態は試料によって相違しており、試料 19 では比較的良好な状態の組織像が観察されたが、試料 4 の組織像はやや不明瞭であり、試料 8 はほとんどのオステオンの輪郭が識別困難であった。偶蹄類や奇蹄類などヒト以外の哺乳類では、規則的なオステオンの配列や、葉状骨または網状骨とよばれる構造 (第 21 図下段右) がしばしば見られるが [Enlow・Brown 1956-1958, Hillier・Bell 2007]、試料の組織像にそうした骨組織形態は観察されなかった。

## E 計測的検討

各試料の骨組織形態計測値を第 14 表に示した。オステオンの面積 (On.Ar) とハバース管の面積 (H.Ar) は動物種によってそれぞれ異なっており、これらの計測項目は種の識別に有効な指標である [Currey 1960, Harsányi 1993, 猪井ほか 1994, 澤田ほか 2010]。試料は焼骨であるため On.Ar と H.Ar は縮小している可能性が高い。[Nelson 1992] によれば焼成による骨構造の収縮率は最大で 17% とされる。試料の計測値 (第 14 表) を比較動物標本のデータ (第 15 表) と比較すると、試料 4 と試料 19 の On.Ar と H.Ar はヒトの値よりやや小さいものの、焼成による収縮を考慮すればヒトに最も近い。試料 8 は計測できた骨組織形態が少なく慎重に評価すべきであるが、On.Ar と H.Ar の値は比較標本の中ではヒトに近い。

	On. Ar ( $\mu\text{m}^2$ )			H. Ar ( $\mu\text{m}^2$ )			H-On 示数		
	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD
試料 4	25	22038.0	8253.4	25	1395.5	646.1	25	6.7	2.8
試料 8	4	33427.8	9910.2	4	3115.2	1859.1	4	8.8	3.0
試料 19	78	29260.2	11364.1	78	1789.7	1108.7	78	6.5	3.6

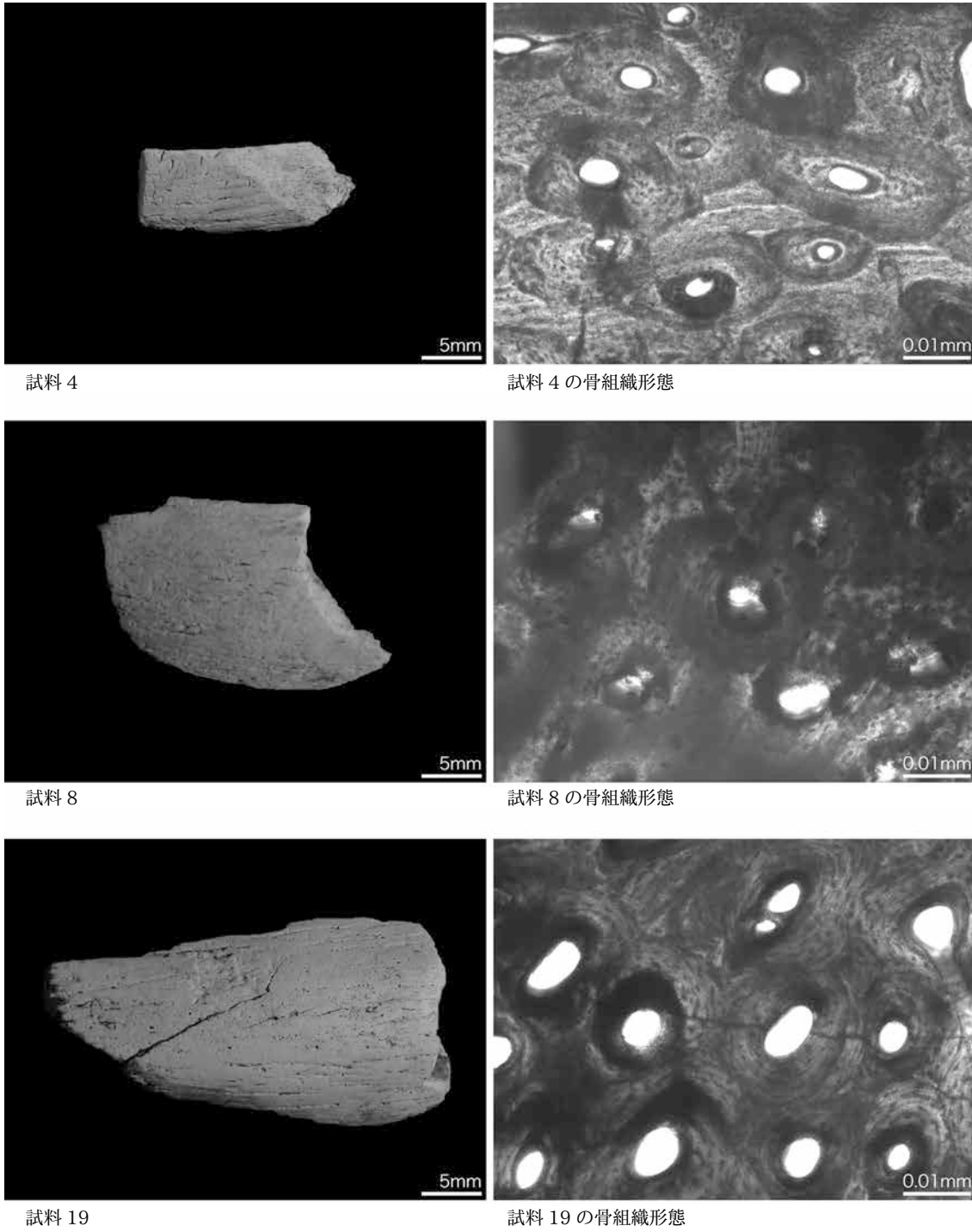
On. Ar : 完形の二次オステオンの面積, H. Ar : ハバース管の面積, H-On 示数 : (H. Ar/On. Ar)  $\times$  100

第 14 表 竹花遺跡 II 出土骨試料の骨組織形態計測値

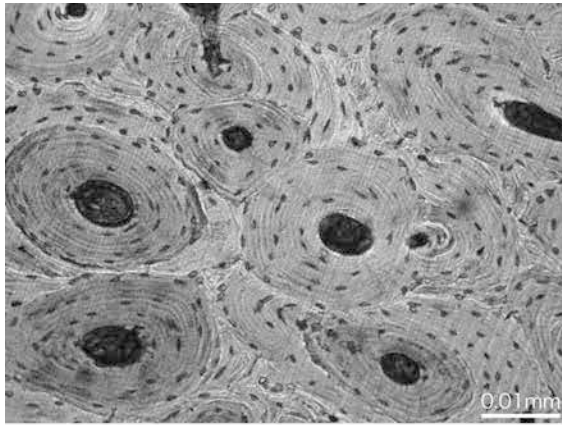
	On. Ar ( $\mu\text{m}^2$ )	H. Ar ( $\mu\text{m}^2$ )	H-On 示数
ヒト (標本数 8)	30722.8-49038.7	1734.3-2524.5	5.4-7.3
クマ (標本数 2)	22203.2-26356.1	637.3-719.5	3.0-3.1
ウマ (標本数 1)	41422.9	1371.1	3.9
イノシシ (標本数 4)	19673.2-25740.1	463.7-827.7	2.0-3.5
ニホンジカ (標本数 6)	16275.5-28138.8	469.4-722.2	2.2-3.4
カモシカ (標本数 1)	26140.1	485.8	2.0
ウシ (標本数 5)	25216.9-43209.7	472.6-338.1	1.5-2.6

On. Ar : 完形の二次オステオンの面積, H. Ar : ハバース管の面積, H-On 示数 : (H. Ar/On. Ar)  $\times$  100

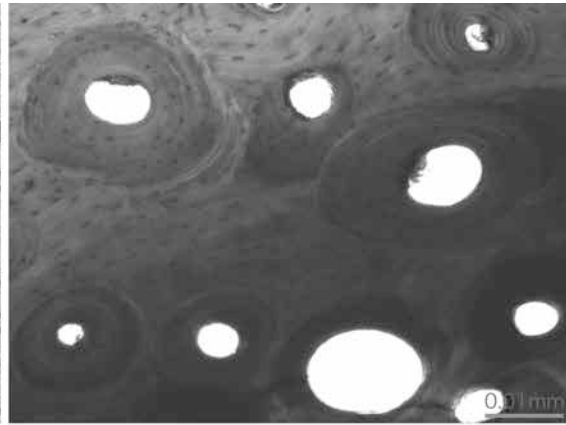
第 15 表 比較動物四肢骨標本における骨組織形態計測平均値の範囲 [澤田ほか 2010] から



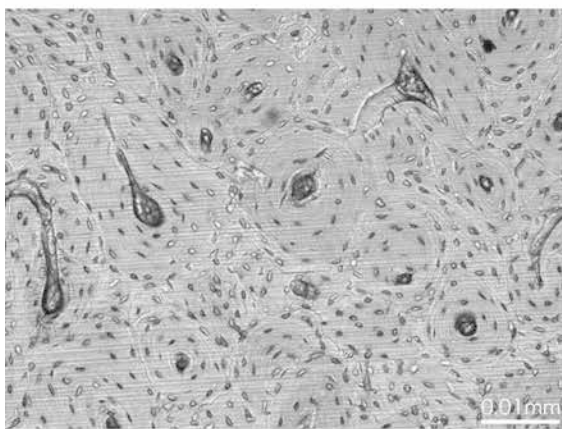
第 20 図 竹花遺跡Ⅱ出土骨試料



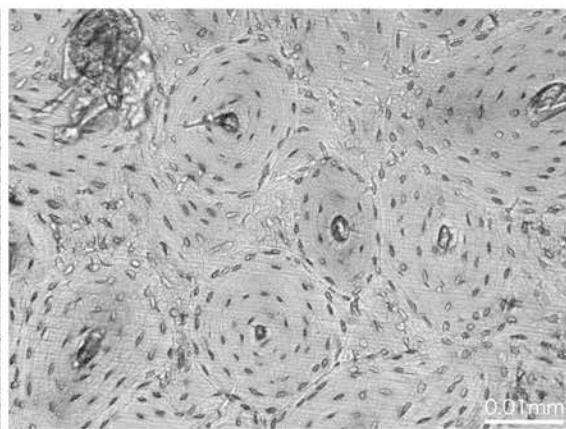
ヒトのオステオン



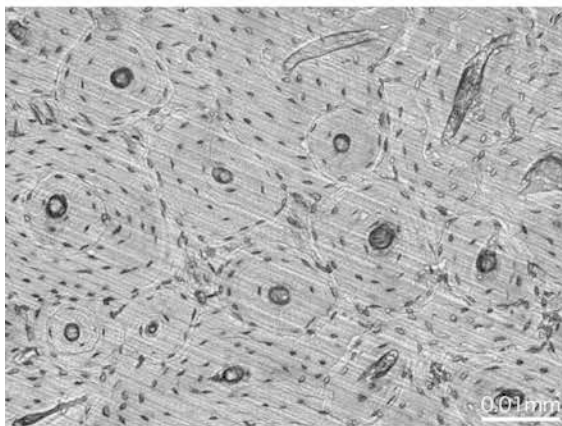
宮城県里浜遺跡出土中世焼人骨のオステオン



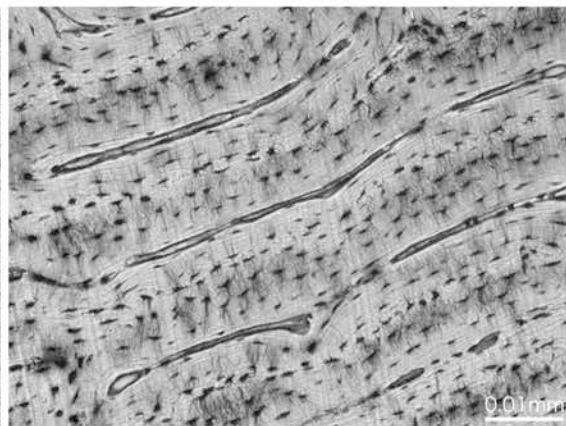
イノシシのオステオン



ウシのオステオン

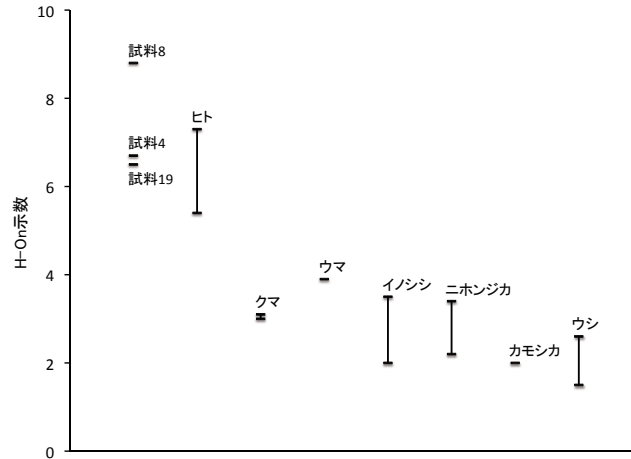


ニホンジカのオステオン



ニホンジカの葉状骨

第 21 図 比較標本の骨組織像



第22図 試料のH-On示数平均値と、比較動物のH-On示数平均値の分布範囲

一般に大きなハバース管はヒトの特徴とされている [Currey1960, Harsányi1993] が、著者らは最近の研究において H-On 示数が人獣鑑別の指標として優れていることを明らかにした [澤田ほか 2010]。H-On 示数は骨組織構造の面積の比なので焼成による収縮の影響が小さく、焼骨の分析においても有用である。試料の H-On 示数を見ると、試料 4 が 6.7、試料 8 が 8.8、試料 19 が 6.5 といずれも高い値であり (第 14 表)、比較標本の中ではヒトに近い (第 15 表)。各試料の高い H-On 示数の値はハバース管の面積がオステオンの面積に対して相対的に大きいことを表しているが、H-On 示数が 5.0 を超えるのはヒトのみである [澤田ほか 2010]。試料 4 と試料 19 の H-On 示数は比較標本のヒトの値によく一致しており、これらの試料はヒトの可能性が高いと判断される (第 22 図)。試料 8 は計測データ数が少ないものの、ほかの試料と同様にヒトの可能性が高いとみなしてよさそうである。

## F 結 論

竹花遺跡の今年度調査区から出土した四肢長骨片 3 点について、骨組織形態の観察と計測的検討を行った結果、試料 4 と試料 19 はいずれもヒトの可能性が高いと考えられた。試料 8 は骨組織形態の保存が悪く評価は困難であるが、同じくヒトに近いように思われた。幼齢期に形成される骨組織構造が見られないことから、試料はある程度成長の進んだ個体のものと推察された。

## 謝 辞

試料の薄切及び画像処理に際して佐伯史子氏のご助力を得た。記して感謝申し上げる。

## 【第VI章 8 引用・参考文献】

- 猪井剛・吉野峰生・瀬田季茂 1994 「ヒトと各種動物の長骨組織像の顕微 X 線学的研究とその法科学的応用」『科学警察研究所報告』法科学編 47 科学警察研究所編 92-101 頁
- 澤田純明・奈良貴史 2007 「花巻市高木中館遺跡出土骨片の骨組織形態学的検討」『岩手考古学』19 岩手考古学会 107-112 頁
- 澤田純明・奈良貴史ほか 2010 「骨組織形態学的方法による骨小片の人獣鑑別 東北北部の平安時代遺跡から出土した焼骨の分析」『Anthropological Science Japanese Series』118 日本人類学会 23-36 頁
- 奈良貴史・澤田純明 2007 「微小骨片の古組織学的検討による動物種類の同定—岩手県中神遺跡出土骨片の分析—」

『考古学談叢』東北大学大学院文学研究科考古学研究室・須藤隆先生退任記念論文集刊行会編  
六一書房 467-476 頁

山本勝一 1993 『法医歯科学』第6版 医歯薬出版

- Cattaneo C., DiMartino S., Scali S., Craig O.E., Grandi M., and Sokol R.J. 1999 Determining the human origin of fragments of burnt bone: a comparative study of histological, immunological and DNA techniques. *Forensic Science International*, 102:181-191.
- Currey J.D. 1960 Differences in the blood-supply of bone of different histological types. *Quarterly Journal of Microscopical Science*, 101, 351-370.
- Enlow D.H. and Brown S.O. 1956-1958 A comparative histological study of fossil and recent bone tissues, Pt I-III. *The Texas Journal of Science*, 8:405-443, 9:186-214, 10:187-230.
- Harsányi L. 1993 Differential diagnosis of human and animal bone. In: Grupe G. and Garland A.N. (eds.) *Histology of Ancient Human Bone: Methods and Diagnosis*. Springer, pp.79-94.
- Hillier M. and Bell L.S. 2007 Differentiating human bone from animal bone: a review of histological method. *Journal of Forensic Sciences*, 52:249-263.
- Jowsey J. 1966 Studies of Haversian systems in man and some animals. *Journal of Anatomy*, 100:857-864.
- Nelson R. 1992 A microscopic comparison of fresh and burned bone. *Journal of Forensic Sciences*, 37:1055-1060.
- Ricqlès A. 1975-1978 Recherches paléohistologiques sur les os longs des tétrapodes. *Annales de Paléontologie*, 61:51-129, 62:711-126, 63:33-56, 64:85-111.



# 第Ⅶ章 ま と め

## 1 中・近世の陶磁器

### A 出土陶磁器から見た各層の年代

竹花遺跡から出土した中・近世陶磁器について見てみる。それらの土器・陶磁器類は、Ⅱ a・Ⅱ b・Ⅲ層から合計 964 点出土した。Ⅱ b・Ⅲ層については中世後期を中心とし、Ⅱ a 層は 17 世紀前半を中心とする。

Ⅱ b 及びⅢ層からは、青花・青磁・白磁・舶載天目・瀬戸美濃焼・珠洲焼・越前焼・瓦器・土師器皿が出土している。以下、それぞれの製品について、主な特徴を挙げ、その年代を示し、各層の年代を知る根拠を示しておきたい。貿易陶磁器について見てみると、青花は、小野正敏氏による分類の C 群皿及び E 群皿が出土しており、15 世紀末から 17 世紀初頭頃の所産である。青磁は、口縁端反の無文椀・皿、雷文椀、籠・線書の蓮弁文椀、内底面に双魚文を有する鉢などがあり、15 世紀代から 16 世紀前半の所産のものが中心をなす。古手の鎚蓮弁文椀も若干量存在するが、主体をなさない。白磁は、内湾皿や多角杯が主体で、15 世紀を中心とする。よって、貿易陶磁器の使用されていた年代は、15 世紀から 16 世紀代が中心といえる。

国産陶磁器については、瀬戸美濃焼は、古瀬戸中期様式Ⅳ期頃のもの少量認められるが、多くは古瀬戸後期様式から大窯 1 期頃のもので、一部、大窯 3 期頃まで存在する。したがって、14 世紀後半から 15 世紀代を中心とし、一部 16 世紀代までの製品が流通している。珠洲焼については、吉岡Ⅳ期～Ⅵ期まであり、14 世紀から 15 世紀後半まで流通している。新潟県内においては、越前焼は、珠洲焼が 15 世紀後半に衰退した後、とってかわるように大量に流通しはじめるのであるが、その時期の製品である木村Ⅴ-3 期の製品が見られ、16 世紀代に流通していることがわかる。瓦器は、水澤氏の円形浅鉢Ⅲ類で、14 世紀末には出現し、16 世紀代にかけて流通していた形態である。土師器皿については後述するが、一部 14 世紀代の製品も見られるが、主体は 15 世紀であり、16 世紀の可能性のある製品も若干量見られる。

以上のことから、Ⅱ b 層とⅢ層では、国産陶磁器に 14 世紀代にさかのぼる資料が見られるものの、貿易陶磁器を含めた中心となる時代は 15～16 世紀代であるといえよう。なお、Ⅱ b 層とⅢ層では、出土遺物の年代観に大きな差がなく、具体的な年代差を知ることはできない。ただし、Ⅲ層中には近世初頭の陶磁器を含まず、中世の中でも後出する青花も含まれないなど、総じてⅡ b 層より古手の一群となり、層順的に齟齬はない。

Ⅱ a 層からは、中世の遺物とともに、肥前系陶磁器・越中瀬戸焼・京信楽系陶器が出土した。肥前系陶器は、胎土目積みの痕跡をとどめる大橋Ⅰ期、砂目積みの痕跡をとどめる大橋Ⅱ期の製品が主体をなす。甕や播鉢についても、同時期の製品が多い。肥前系磁器はいわゆる「初期伊万里」様式の染付が多い。いずれも 16 世紀末から 17 世紀前半の所産である。越中瀬戸焼の製品は椀・皿・播鉢・壺がある。椀・皿・播鉢については、未だ詳細な編年が提示されておらず、不明な点が多いが、新潟県においては、16 世紀末から 17 世紀前半にかけて流通しているものと考えられている。京信楽系陶器については、灯明皿がわずかに出土しており、近世後期に流通する器種であり、出土数も少ない。したがって、Ⅱ a 層は 17 世紀前半

を主体とする堆積といえよう。

以上の各層位の出土傾向は、竹花遺跡における平成 20 年度調査と姫御前遺跡 I・II の調査の結果と一致する。

## B 中世土師器皿の分類

竹花遺跡と東方に位置する姫御前遺跡からは、14 世紀後半から 16 世紀代の土器・陶磁器が最も多く出土している。その中でも最多の出土量を数えるのが中世土師器皿である。接合後の破片数計測法における中世土器・陶磁器に占める土師器皿の割合は、姫御前遺跡 I で 6.7%、姫御前遺跡 II で 17.2%、竹花遺跡 I で 26.1%、竹花遺跡 II で 46.3% である。地点によりバラツキがあるものの、総数で 1,308 点の出土を見る。ただし、破片数計測であるので、比較的壊れやすい土師器皿は、破損した際に 1 個体における破片数がほかの器種よりも多くなると容易に想像され、破片数上の数量の比較だけでは実態を把握できない点にも注意を払う必要があろう。

ここでは、竹花遺跡と姫御前遺跡から出土した中世土師器皿の分類を行う。中世土師器皿は、その成形技法により二分される。手づくね成形とロクロ成形である。その後、口径と器高により細分した（第 24・25 図）。ただし、手づくね成形については、遺存率の悪さから、器高の判明した資料が少なく、器高による分類の具体的な検討は十分に行えていない。

手づくね成形の皿については、口径から 5 類に分類した。1 類は 8cm 前後、2 類は 9cm 前後、3 類は 10cm 前後、4 類は 11～12cm 前後、5 類は 14～19cm 前後である。5 類については、口径範囲に幅を持たせており、将来的に細分が可能となろう。4 類は器高の浅い・深いにより、さらに a・b に二分している。手づくね成形の土師器皿については、同一系譜上に位置付けられる皿であっても、時代により器高及び口径が微妙に変化していることが知られており [小森・上村 1996]、本来的には廃棄年代が限定される遺構一括資料などにより編年を組み上げ、その変遷をとらえて行くのが望ましい。今回、取り扱う資料はすべて中世後期を中心とする包含層中からの出土であり、共伴関係から時期が絞り込めない。ひとまず、ここでは、法量による分類を行い、今後の検討材料に資することとしたい。

さて、今回は法量をもとに細分したのであるが、そのほかにもそれぞれ器形、成形技法、器壁の薄さ、胎土の精製の程度など細部に違いがある。成形技法については、多くの土師器皿で胴部下半を指で押さえて成形している様子が看取でき、共通の成形技法の一つとして認識できる。ただし、その押さえの強さの程度により痕跡の明瞭の度合いも変化する。また、内面については、ナデ消しているものもあり、丁寧なものは指頭圧痕が見えないものもある。なお、40 や 111 のように器高が低く、箱形に近い形状を呈し、底部に近い所のみ指押さえを行うタイプは 14 世紀に位置付けられる [水澤 2005b]。そのほかは、基本的に京都系土師器皿の「第 2 次拡散現象」[水澤 2001] 以降の所産と考えられる。すなわち、新潟県においては、越後守護上杉房定が京都から帰越した 1450 年以降の所産の可能性が高い。胎土や厚みに関しては、120 や 135、126 などとはほかと比較して胎土に混入物が多く、厚手である。春日山城などの 16 世紀代の遺跡から出土する土師器皿は厚手であることから、それらの一群は 16 世紀代に入る可能性がある。胎土の色調に関しては、白色のものや橙色のもの、褐色のもの、赤色のものと多様である。土師器皿の中にはススやタールが付着しているものが見られるが、手づくね成形土師器皿については、2 類と 3 類に多い。以上のように、今回、15 世紀を中心とする手づくね成形土師器皿を、口径から 5 タイプに分類したのであるが、5 類の口径範囲幅の広さをかんがみるともう少しの分類が可能かも知れない。いずれに

しても、「第2次拡散現象」以後の土器サイズの多様性は、「武家儀礼に用いる儀器としての用途」を意味する[水澤 2004]との見解があり、本遺跡の性格を考える上で重要な視点になり得るものと考えられる。該期の県内の中世遺跡では、至徳寺や江上館で15世紀末～16世紀初頭の遺構から5～7種の口径分布を示す手づくね成形土師器皿が出土しており、参考になる。

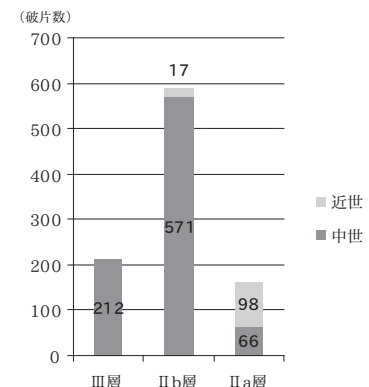
ロクロ成形の皿については、口径から4類に分類した。1類は6.5cm前後、2類は8～10cm前後、3類は11cm前後、4類は13～17cm前後である。4類については、器高の浅い・深いでさらにa・bに二分した。器形は、1・2類は器高の低い箱形を呈する。3類は内湾しながら立ち上がる。4a類は浅身で内湾する。4b類の口縁形態は多種多様であるが、大きく内湾するものと外反するものがある。成形方法については、器壁をロクロ方向にナデて整える。底面は回転糸切り技法により切り離される。4b類の底部境には61に見られるように故意に角を取り、丸めている製品も看取される。色調に関しては、白色のものや褐色のものなどがある。4b類は明るい色調のものが多い。ススやタールが付着しているものは、2類(口径8～10cm前後)に多いのであるが、手づくね成形皿でも2・3類(口径9～10cm前後)に多いことから、口径8～10cm程度の皿を使用することが多いのかもしれない。これらは、灯明皿として使用された後に廃棄されたものと考えられる。なお、竹花遺跡・姫御前遺跡では、瀬戸美濃製品の灰釉皿を灯明皿として使用している例が多々見られる。瀬戸美濃製品皿の場合、口径は12cm程度のものであることからやや大振りとなる。さて、これらのロクロ成形皿は、「関東系」とも呼ばれ、15世紀代の関東上杉氏にその系譜が求められるといわれる。また、本製品の中には、底部に丸みを持たせるなど手づくね成形皿に似せようとした努力も認められる。口径分布は、手づくね成形皿と若干異なるものの、多様性は認められる。白色の胎土を使用していることも京都系手づくね成形皿の模倣を意図したものと評価できよう。したがって、これらのロクロ成形皿の中には、15世紀中葉以降の製品を含むということになる。

以上、検討してきたように、手づくね成形皿・ロクロ成形皿ともに15世紀代後半を中心とし、14世紀～15世紀前半及び16世紀代を一部含むと評価したい。

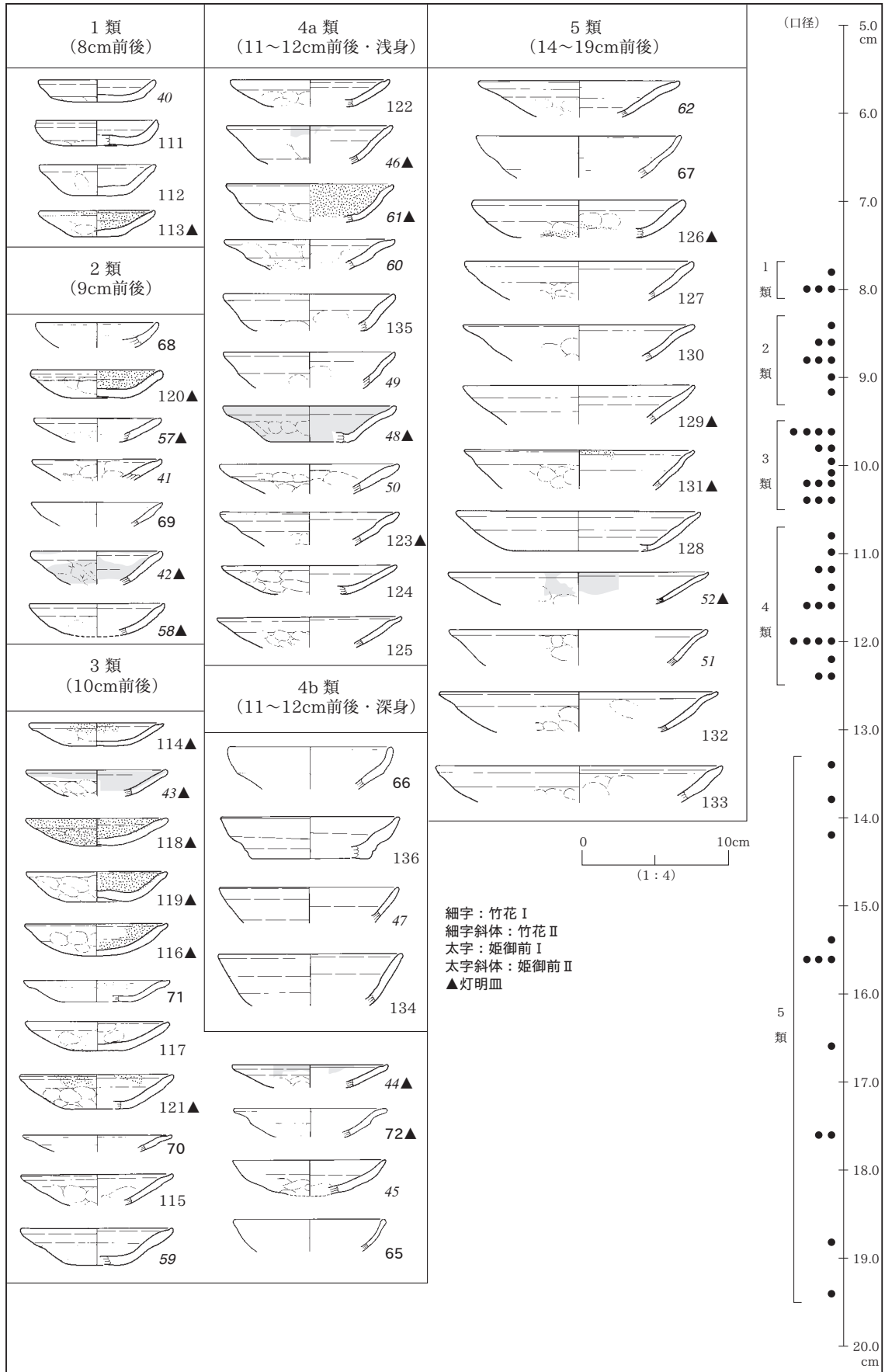
### C 層位間における出土陶磁器組成と変遷

竹花遺跡における今年度調査区からは、中世包含層であるⅡb層及びⅢ層、そして、17世紀前半を主体とする近世包含層であるⅡa層中から中・近世の陶磁器が合計964点出土している。これらは、いずれも遺構に伴わない包含層中からの出土であるから、基本的にその場で使用された道具ではなく、近隣から運ばれ、廃棄された道具との評価が与えられよう。ただし、本調査区を含む近隣は祭祀関連木製品が多数出土するなど祭祀空間としての利用の在り方も想定され、単なる廃棄との評価ともできない面がある。したがって、これらの資料を用いて具体的な当時の日常生活の復元を行うことは妥当ではない。しかしながら、これらの資料を分析することにより廃棄者、すなわち、それらの道具の使用者をある程度推測することが可能であるし、調査地近隣を含めた糸魚川地域の中近世における陶磁器流通や地域性を考える上で重要な視点になり得るだろう。

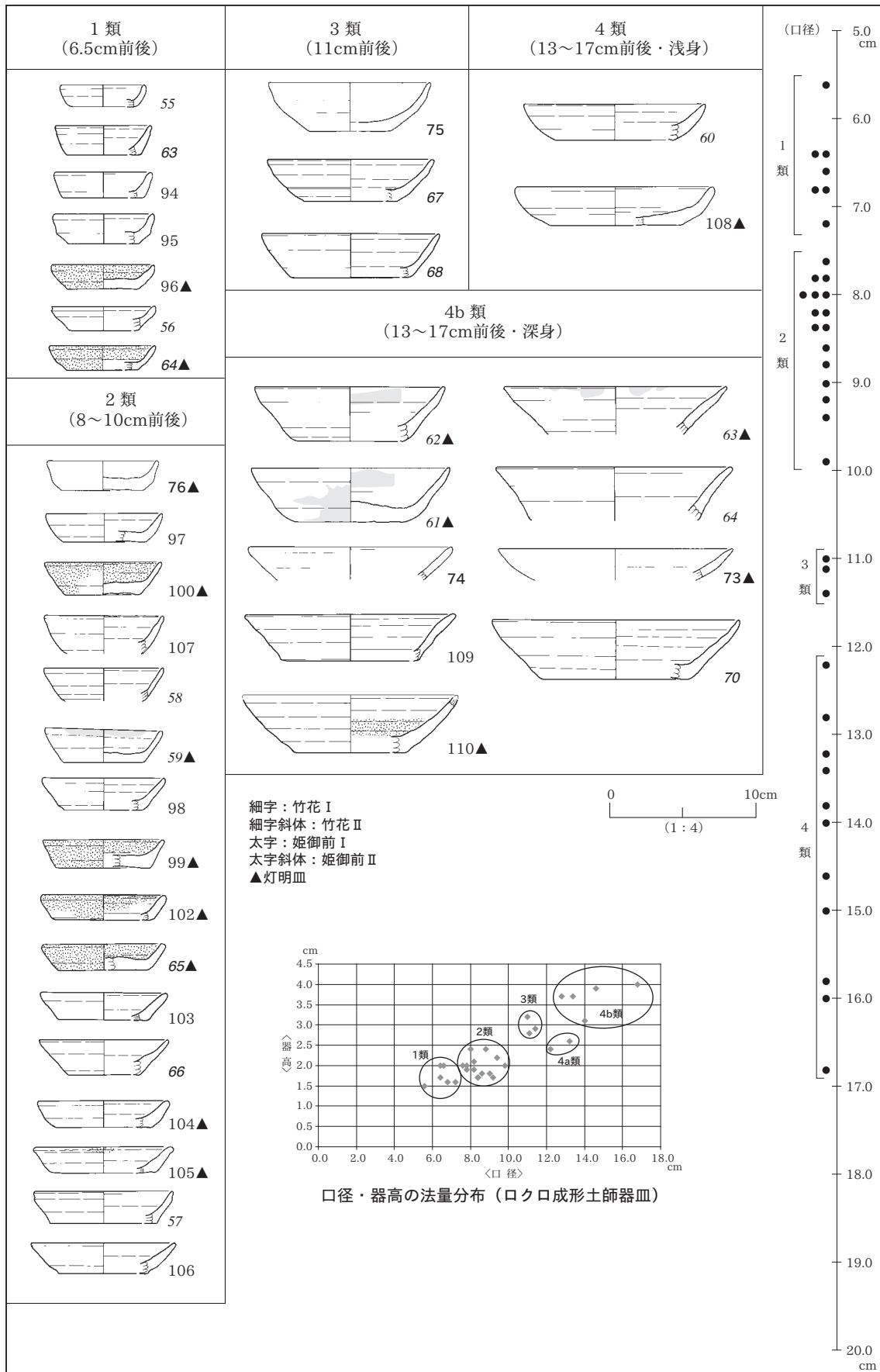
まず、各層における出土量を見てみる(第23図)。出土量の比較は、接合後の破片数で行い、姫御前遺跡Ⅰ[加藤ほか 2008]及び姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ[加藤ほか 2011]と同様の分類基準で集計した。



第23図 層位別出土陶磁器数の変遷



第 24 図 竹花・姫御前遺跡における手づくね土師皿の分類



第25図 竹花・姫御前遺跡におけるロクロ成形土師皿の分類

Ⅲ層では、中世のみで212点出土している。Ⅱb層では、中世が571点、近世が17点の合計588点の出土を見た。近世の資料については、層境や微妙な凹凸、あるいは土壌分析の結果が示すように耕作などによる上層からの攪拌によるⅡa層からの混入である可能性があり、Ⅱb層の下限年代を示しているかという評価は早計に判断できない。いずれにしても、出土総数の97%は中世の陶磁器であり、主体は中世であるといえる。ただし、17点の近世陶磁器のほとんどは、17世紀前半の所産である点を付記しておく。さて、本層は、Ⅲ層段階から比べると格段に出土陶磁器量が増加し、周辺を含めた土地利用の在り方に変化が生じたことを示している。一方、Ⅱa層に入ると中世66点、近世98点の合計164点と再び出土量は減少に転じる。Ⅱa層を基本的には重機で掘削したとはいえ、Ⅱb層から比べると3分の1以下であり、この時点でも何らかの変化が生じたものと考えられる。なお、Ⅱa層中から中世の陶磁器が相当量出土しているが、先述のようにⅡa層には土壌の攪拌が見られることから、本来的に下位の層(Ⅱb層)に埋蔵されていた陶磁器が混入した可能性が高い。こうした動きは、竹花遺跡における平成20年度調査区及び姫御前遺跡でも確認されており、本調査区を含めたやや広域な範囲での動きという評価が与えられよう。

次に、陶磁器組成を見つめる(第16～18表)。

もっとも出土量の多いⅡb層の様相を見てみよう。先述したように、

本層の主体は中世と考えられるから、中世陶磁器の571点について詳述する。供膳具では、土器・陶器・磁器が使用されており、その大半は碗と皿である。碗は、中国製磁器と瀬戸美濃焼で構成され、青磁が卓越する。皿は、中国製磁器と瀬戸美濃焼のほかに、土師器皿が相当数出土している。中国製磁器では碗と異なり、白磁が卓越する。土師器皿と瀬戸美濃製品の中にはススが付着しているものがあり、一部灯明

時期	分類	器種 産地	供膳具					調理具	貯蔵具			その他					不明	合計	
			天目	碗	皿	杯	盤	鉢	掃鉢 (片口鉢)	甕	壺	瓶	香炉 類	茶入	灯明 皿	風炉 火鉢			匣鉢
中世	磁器	青花																	0
		青磁		4															4
		白磁			2														3
	陶器	船載天目																	0
		瀬戸美濃	2	1	3														9
		珠洲							6	ロクロ(R種) タタキ(T種) ケンマ(K種) 成形不明	0 9 0 2								17
		越前							2										2
土器	瓦器																	1	
	土師質			28												土師鉢2		1	
近世	磁器	肥前系	9	11	1	1													30
		肥前系	6	28			2	4	2	2	3								47
	陶器	越中瀬戸	6	6				4											1
		京・信楽												2					2
合計		2	26	78	1	1	2	16	24	8	0	0	2	0	2	0	2	164	

第16表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数(Ⅱa層)

時期	分類	器種 産地	供膳具					調理具	貯蔵具			その他					不明	合計	
			天目	碗	皿	杯	盤	鉢	掃鉢 (片口鉢)	甕	壺	瓶	香炉 類	茶入	灯明 皿	風炉 火鉢			匣鉢
中世	磁器	青花			2														2
		青磁		10	5														19
		白磁		1	9	1													11
	陶器	船載天目	1																1
		瀬戸美濃	6	6	14			3				1	7	2					3
		珠洲							33	ロクロ(R種) タタキ(T種) ケンマ(K種) 成形不明	9 131 0 4							1	7
		越前						4				12							16
土器	瓦器																	0	
	土師質			281												土師鉢11	3	295	
近世	磁器	肥前系	1	1															2
		肥前系	1	3			1		1	2									8
	陶器	越中瀬戸		2				2			1								2
		京・信楽																	0
合計		7	19	317	1	0	4	39	161	7	2	0	0	0	11	4	16	588	

第17表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数(Ⅱb層)

時期	分類	器種 産地	供膳具					調理具	貯蔵具			その他					不明	合計	
			天目	碗	皿	杯	盤	鉢	掃鉢 (片口鉢)	甕	壺	瓶	香炉 類	茶入	灯明 皿	風炉 火鉢			匣鉢
中世	磁器	青花																	0
		青磁		6															6
		白磁		1															1
	陶器	船載天目												1					1
		瀬戸美濃	2	1	4							2	1						10
		珠洲							20	ロクロ(R種) タタキ(T種) ケンマ(K種) 成形不明	5 68 0 3							4	100
		越前										3							3
土器	瓦器															1		1	
	土師質			82												土師鉢8		90	
近世	磁器	肥前系																	0
		肥前系																	0
	陶器	越中瀬戸																	0
		京・信楽																	0
合計		2	8	86	0	0	0	20	79	2	1	1	0	1	8	4	0	212	

第18表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数(Ⅲ層)

皿としての使用が想定できるものも含まれるが、器形から皿に含んである。天目茶碗については、中国製の舶載天目と国産の瀬戸美濃産があるが、舶載天目は少ない。調理具と貯蔵具については、基本的に珠洲焼と越前焼で構成され、瀬戸美濃焼の壺・瓶類が若干量加わる。そのほか、瀬戸美濃焼の香炉や花瓶などの奢侈品が加わる。

Ⅲ層でも、基本的な構成は変わらないことから、それらの道具の使用者に大きな変化がないことを示唆している。Ⅱb層とⅢ層では陶磁器組成の質が変わらない一方で、出土陶磁器量には格段の差が生じていることからその理由を何に求めるかは今後の課題であろう。

中世を通じてこれらの陶磁器の使用者は、日常什器のほかに瓦器や香炉、花瓶、舶載天目など奢侈品や高級品が一定量含まれており、比較的財力のある階層を想定できよう。

近世(Ⅱa層)に入ると一転して、産地は限られるようになり、肥前系陶磁器と越中瀬戸焼でそのほとんど(98%)を占めるようになる。特に肥前系陶磁器は出土近世陶磁器の71%を占め、供膳具・調理具・貯蔵具のいずれの分野においても卓越する。ただし、唯一、壺類において越中瀬戸焼が卓越する。

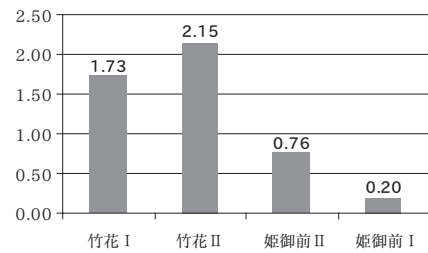
以上、見てきたように中世の段階では、用途により各産地の製品を使い分けているが、近世では、どの器種に関しても肥前系陶磁器が独占的に市場を占めるようになる。こうした変遷や組成内容は竹花遺跡における平成20年度調査区及び姫御前遺跡でも同様であり、陶磁器量の変化とともにある程度広域な陶磁器様相を示していると評価できる。

#### D 遺跡間比較 - 竹花遺跡と姫御前遺跡の比較 -

既に示したように、竹花遺跡と姫御前遺跡では、中世から近世初頭にかけての時期に連続した土層が分布し、遠隔地であっても対応が可能である。しかも同層中から出土する陶磁器類の年代幅及びその質、分布状況はおおよそ一致している。しかしながら、詳細に地点ごとにその内容を分析していくと微細な点で若干の差異があることが分かる。この観点は、姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰの報文中[加藤ほか2011]でも触れた。盤・鉢・香炉・瓶・茶入などの奢侈品や、青白磁・舶載天目などの高級輸入陶磁器などの比率が姫御前遺跡より竹花遺跡の方が多く、高度な装飾を施す金属製品が竹花遺跡に複数見られることなどを指摘しており、その差異を「地域的な陶磁器流通といったマクロ的部分では共通しているが、使用者や使用場所といったミクロ的な観点において陶磁器組成に変化を生じさせている」と評価した。

今年度調査区においては、奢侈品や高級輸入陶磁器では、香炉や瓦器、舶載天目など少ないながらも出土しており、また、細工の細かい金属製品なども出土しており、竹花遺跡Ⅰとの共通性がある。

陶磁器の出土量についても竹花遺跡と姫御前遺跡では差がある。それぞれの調査地点から出土した調査面積1m<sup>2</sup>あたりの中近世陶磁器の出土破片数を比較したのが、第26図である。姫御前遺跡Ⅰでは3,120m<sup>2</sup>を調査し、633点の中近世陶磁器が出土した。よって、1m<sup>2</sup>あたりの出土破片数は0.20点となる。姫御前遺跡の中でも竹花遺跡に近い調査地点である姫御前遺跡Ⅱでは、3,237m<sup>2</sup>を調査し、2,448点であるから、0.76点/m<sup>2</sup>である。今年度調査区の西隣に位置する竹花遺跡Ⅰでは、1,643m<sup>2</sup>を調査し、2,839



第26図 各遺跡における1m<sup>2</sup>あたりの土器・陶磁器出土破片数

	出土枚数	面積 (m <sup>2</sup> )	枚/m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup> /枚
姫御前Ⅰ	13	3,120	0.004	240
姫御前Ⅱ	55	3,237	0.017	59
竹花Ⅰ	49	1,643	0.029	34
竹花Ⅱ	28	448	0.063	16
合計	145	8,448	0.017	58

第19表 各遺跡の調査面積における出土銭貨量

点であるから、1.73 点/m<sup>2</sup>である。今年度調査区（竹花遺跡Ⅱ）では、448m<sup>2</sup>を調査し、964 点であるから、2.15 点/m<sup>2</sup>である。竹花遺跡Ⅱ地点をピークに西方向である竹花遺跡Ⅰ地点、東方向である姫御前遺跡Ⅱ・姫御前遺跡Ⅰと離れるにしたがい、出土破片数は少なくなる傾向が見て取れた。

この傾向は、中世土師器皿でも同様で、上述したように出土中世陶磁器破片数における中世土師皿の割合は、姫御前遺跡Ⅰで 6.7%、姫御前遺跡Ⅱで 17.2%、竹花遺跡Ⅰで 26.1%、竹花遺跡Ⅱで 46.3%であるから、やはり竹花遺跡Ⅱ地点が多い。出土銭貨についても同様である。出土銭貨はいずれの地点においても一括埋納銭や六道銭のような一箇所にまとまった出土は見えておらず、散布していることから、1m<sup>2</sup>当たりの出土枚数を計測した（第 19 表）が、姫御前遺跡Ⅰが 0.004 枚/m<sup>2</sup>、姫御前遺跡Ⅱが 0.017 枚/m<sup>2</sup>、竹花遺跡Ⅰが 0.029 枚/m<sup>2</sup>、竹花遺跡Ⅱが 0.063 枚/m<sup>2</sup>となり、ここでもやはり竹花遺跡Ⅱ地点が多い。

ここまで、一例を示してきたが陶磁器流通のように広域空間において時間的指標となる資料が存在する一方で、狭域な地点においては、使用者や使用方法、使用場所などの要因により変化する資料も同時に存在しており、こうした差異が如何なる要因により発生するのかを突き止めて行く必要がある。

## 2 祭祀関連遺物

### A 木製品

竹花遺跡の今年度調査区（R4-9 区）では祭祀に関連すると見られる木製品として箸状木製品、火付け木、形代の類で人形、刀形、舟形などが出土した。これまでに調査を行ってきた、隣接地である竹花遺跡Ⅰ、姫御前遺跡Ⅰ・Ⅱでも祭祀関連の木製品は多数出土しており、上記の遺物に加え動物形、斎串、笹塔婆も確認されている。その中で最も多く出土した箸状木製品は竹花・姫御前遺跡を併せれば 1,000 点以上出土している。本項ではこれらの木製祭祀遺物について過去の調査成果を踏まえた上で概観し、糸魚川地域における祭祀のあり方の一例について見ていきたい。

竹花遺跡Ⅱの調査範囲は南北約 9m、東西約 53m に及ぶが、箸状木製品を含む木製品の多くは東側に偏って分布している。前年までの調査成果で、箸状木製品の中には地面に垂直に近い角度で突き刺したものが検出されたが、今年度も例に漏れず、出土した 545 点のうち 99 点がこうした状態で検出された。調査時に認識できなかった個体も含めれば実数はもっと多いと考えられる。前項において報告したように箸状木製品が密集する地域において弧状あるいは環状に検出される範囲が見られ、中心に遺物を伴わない空白域が確認できた地点を環状刺突遺構とした。以下、概略を述べると、長軸 50～160cm、短軸 30～110cm の範囲で楕円形、もしくは不整楕円形の広がりを見せる。いずれも中心部に空白域をもち、箸状木製品のみで構成されるわけではなく、板状木製品、棒状木製品、土錘、土師器、銭貨が共伴し、中心の空白域に円礫が検出されるものも見られた。このように箸状木製品がある一定の区画に集中し分布する様相は、県内では新潟市の馬場屋敷遺跡〔川上<sup>ほか</sup>1984・1985〕、県外の事例として石川県の西川島遺跡群の白山橋遺跡〔四柳 1987〕がある。馬場屋敷遺跡では、13 世紀末～14 世紀に比定される下層遺跡で溝や建物跡などの遺構が検出され、呪符木簡や蘇民将来札、人形、刀形、舟形、鳥形などの形代が出土している。木串で方形に囲われた遺構が検出されており、内部には多量の炭・灰が見られる。木串は両端を削った長さ 7～25cm 程度の箸状の細串が主体を占め、全体で 5,000 点以上、一段太く片端のみ削る形状のものが 400 点以上確認されている。木串によって方形に区画される遺構は 4 基確認されている。1 号遺構は長軸 100cm、短軸 50cm の範囲に 9 本の木串が真直に立てられ、中央には骨片や灰がかたまっ

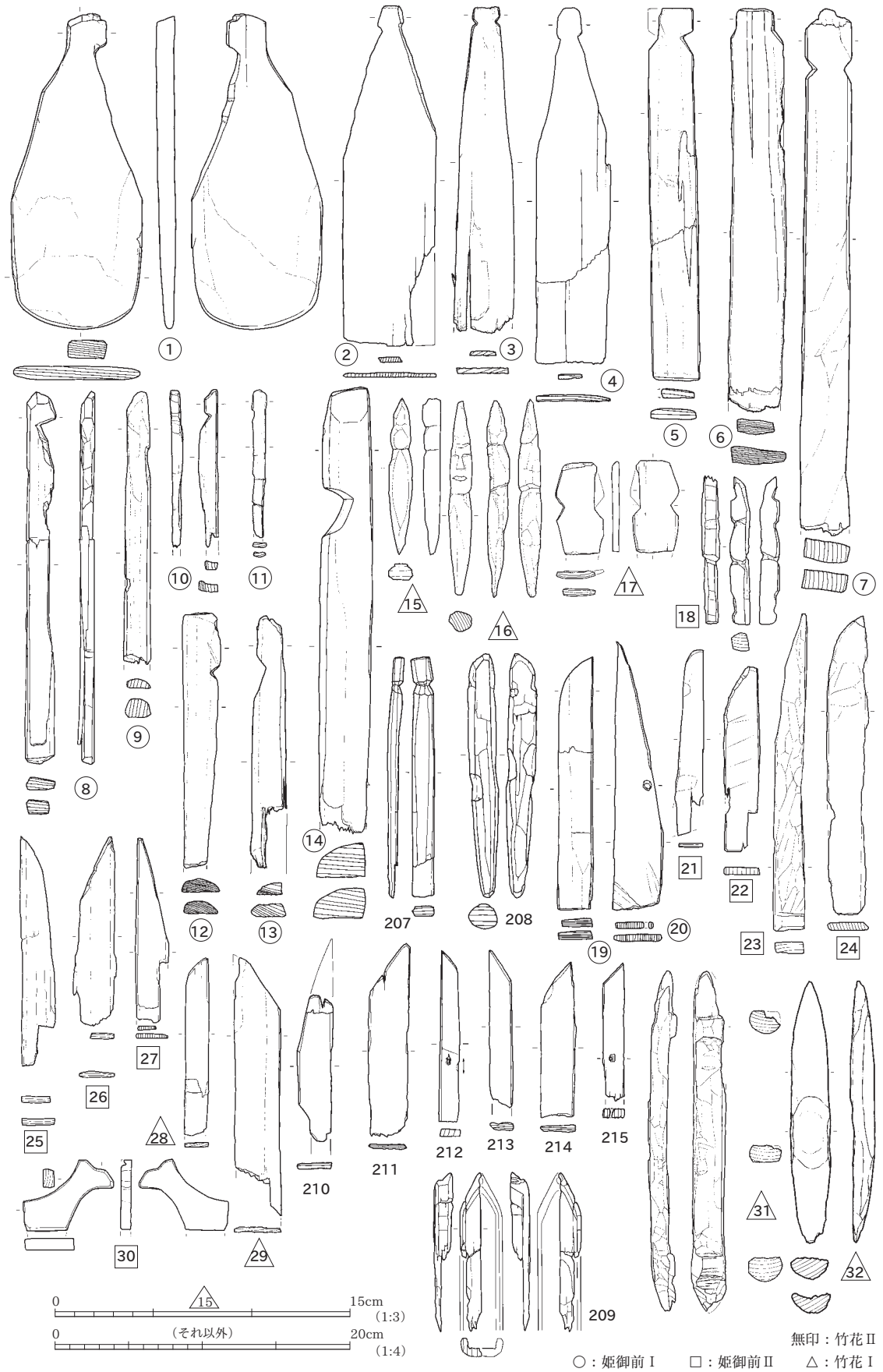


出土した。2号遺構は長軸100cm、短軸95cmの範囲に15本の木串が垂直に立てられ、中心部には半丸板が出土し、その上で木串が焼かれた状況が見られた。3号遺構では長軸160cm、短軸110cmの長方形の範囲に呪札3点を含む22本の木串が真っ直ぐに立てられて出土し、4号遺構では6本の木串が長軸130、短軸80cmの範囲に方形に刺され、中央付近から半丸板や棒状木製品、それらを取り囲むように礫が6個出土した。西川島遺跡群の桜町遺跡、大町・縄手遺跡、御館遺跡、白山橋遺跡、美麻奈比古神社前遺跡で両端を削りだした箸状木製品の出土が見られる。このうち13世紀後半～14世紀前半に比定される白山橋遺跡では6×3m、深さ20cm程度の長方形の掘り込みの中に獅子頭、舟形、人形、刀形、矢形、鳥形、槍形、糸巻、曲物、折敷、木筒、土錘、羽子板、土器などが散乱していた。箸状木製品がこれらの遺物を覆う形で出土し、点数は3,444点に及ぶ。箸状木製品の出土状態は突き立てたり、敷き詰めたり、遺物を包含するという状況で、用途として古代における斎申に近いものではないか、とされている。これらの類例から竹花遺跡、姫御前遺跡における箸状木製品を用いた祭祀については、どのような行為が想定できるだろうか。馬場屋敷遺跡の例では内側の空白地に炭や灰が見られることから、何らかの火を用いた祭祀の可能性が指摘されている。竹花遺跡の環状刺突遺構においても灰や炭などの火を使用した明確な痕跡は確認されていないが、棒状木製品の片側端部が炭化した火付け木が出土している。火付け木は馬場屋敷遺跡でも確認されているように火を使用する遺構に伴い、祭祀に関連する遺物と推察される。地面に刺さった状態で出土している点などの共通性から箸状木製品と同様の性格が想定でき、竹花遺跡においても火を用いた何らかの祭祀が行われたと見ることができるだろう。また、竹花遺跡や姫御前遺跡の一部は、花粉分析の結果から中世後期において水田であった可能性が高い。水田においては苗代のころに行われる水口祭などの際に、「粥箸」という特別な箸を水口脇の畦畔に立てるものである。粥箸は粥搔棒とも呼ばれ、小正月にその年の作物の豊凶を占う「粥占」に使用するもので、粥を掻き混ぜ、付着する米粒の数を見て豊作を占うものであり、水口祭のころまで神棚に供えたとされる[向井・橋本2001]。水田と箸状木製品との関わりという点では注目すべき内容であるが、畦畔状の分布は示さず、実状にそぐわない印象を受ける。

人形は大別して、板状のものの側縁部に切れ込みを入れるものと、棒状素材を用いて立体的に人物を表現するものがある。前者は姫御前遺跡の東側で多く見られた。板状の人形は上越市延命寺遺跡[山崎ほか2008]などで確認されているように奈良・平安時代に多く見られる。板状木製品の側縁に切り込みを入れ、下方は二又に分かれ、器表には目、鼻、口が描かれ正面観を表現する。竹花遺跡、姫御前遺跡から出土した板状の人形は、目・鼻・口などが描かれることはなく、正面観だけではなく側面観を模したものも見られる。これに対し棒状木製品を素材とし、切れ込みを入れることで目、鼻、口や頭頂部、烏帽子などを表現するものが見受けられる。こちらは下端部を杭状に尖らせており、地面に突き刺して用いたと推察できるが、横位で検出され出土状況からはそうした様子をうかがうことはできなかった。

刀形は祓えなどに用いられ、僻邪の願いが込められたものであるとされる。出土に偏在は見られず、集中地点も見られない。形態的には片側側縁で弧を描きながら尖らせ刃部を作り出し、実際の刀の形をある程度模倣しているものと、先端部を斜めに削り出しただけの簡易な作りのものが見られ、比率でいえば後者のものの方が多い。器表に穿孔が認められるものもあるため、ほかからの転用品か、まったく別の製品が混入している可能性が考えられる。

舟形は竹花遺跡でのみ確認されている。第V章5で触れたように、半裁の棒状素材を用い船首、もしくは船尾を尖らした形状のものと、角材の内側を削り抜いた立体的なものが見られる。舟形は水辺の祭祀



第 27 図 形代集成図

に使われ、水神への供献物として航海の安全などを祈願するもの、あるいは穢を移した人形を乗せて世界に送るために川や井戸などに流したとされるものである。いずれにしろ水に関わる祭祀遺物である点が共通しているが、前述したように竹花遺跡は中世後期において水田地帯であったとの分析結果も出ており、農耕儀礼との関わりも考慮すべきであろう。また、出土地点から見る限り、人形との相関関係は見いだせず、舟形単独で用いていたものと考えられる。

糸魚川市周辺ではほかにも寺地遺跡〔佐藤<sup>ほか</sup>2002〕や山岸遺跡〔渡邊2007〕、田伏山崎遺跡〔佐藤<sup>ほか</sup>2009〕でも箸状木製品が確認されている。寺地遺跡では14世紀後半～16世紀初頭に比定される自然流路から箸状木製品や舟形が出土している。箸状木製品は竹花遺跡や姫御前遺跡出土のものと同様に、地面に突き刺した状態のものや、N字状に折れ曲がった状態で検出されている。山岸遺跡は12世紀後半頃が主体となる遺跡であるが、舟形や人形、呪符木筒などの祭祀に係わる木製品が多く出土し、多量の箸状木製品や板状木製品、棒状木製品をピットに突き刺すような事例が見られた。田伏山崎遺跡は山岸遺跡の東側に位置し、12～15世紀に属する中世の層から鳥形や馬形、刀子形などの形代や700点以上の箸状木製品が出土している。また、10～11世紀の古代に属する層からも斎串や形代類が見つかっており、木製形代を用いた祭祀が継続的に行われていたと推察される。前述の西川島遺跡群の御館遺跡では13世紀前半～後半に比定される3号井戸跡で底に箸状木製品を詰め、その中に鳥形木製品を入れ、再び箸状木製品で包み、上部を多量の中世土師器小皿や石、破碎された珠洲焼壺で覆う状態で出土している。また、桜町遺跡の13世紀前半に比定される5号土坑では上層に多量の箸状木製品が突き立てられ、下層に箸状木製品に包括された馬形が見つかった。いずれも遺構中に箸状木製品や形代の類が伴う点で共通点が見られ、山岸遺跡出土のピットもこうした類例に当てはまるものと考えられる。一般的に形代を用いた祭祀は律令的なものとしてとらえられており、古代の遺跡での出土例が多い。こうした祭祀形態は、古代から中世にかけて断絶するわけではなく山岸遺跡や馬場屋敷遺跡、西川島遺跡群などに見られるように中世においても存続している。中世における形代を使用する祭祀は、前述した遺跡の例に代表されるように13～14世紀が主体をなしている。竹花遺跡、姫御前遺跡及び寺地遺跡は14世紀後半～16世紀ころに比定されるが、陶磁器の出土点数でいえば15世紀代のものが多い。箸状木製品や形代類などの木製品は遺構に伴うものではなく、詳細な年代は判別できないが、陶磁器と混在して出土している点を考慮すれば同時代のものである可能性は高く、律令的な祭祀形態は糸魚川周辺では15世紀代まで続いていたと見られる。一方、数こそ少ないが竹花遺跡や姫御前遺跡から五輪塔や笹塔婆といった仏教に関連する遺物も出土しており、こうした中世的な仏教的祭祀・信仰が古代から連綿と続く律令的な祭祀と共存していた様子がうかがえるのではなかろうか。

## B 銭 貨

竹花遺跡Ⅱでは、Ⅱa・Ⅱb・Ⅲ層から合計28枚の銭貨が出土した。これらは中世の渡来銭であり、同じ層位からは中世の陶磁器・木製品・土師器等が出土した。ここでは本遺跡の銭貨出土状況について若干の考察を試みるため、各銭貨について個別銭貨間の最短平面距離を計測し、その数値を検討する作業を行う。そして本遺跡の東側に位置し、本遺跡と同じ層位からほぼ同じ中世遺物が出土し、報告書が刊行されている姫御前遺跡Ⅰ〔加藤・相羽<sup>ほか</sup>2008〕の銭貨出土状況と対比し、本遺跡周辺の銭貨出土状況がどのような特徴を持つのかを確認し、銭貨出土状況に関する何らかの概念が成立し得るかを検討する。

姫御前遺跡Ⅰでは、東西2箇所調査区で13枚の銭貨が出土した。そのうち永楽通寶2枚が17世紀

## 2 祭祀関連遺物

を主体とするⅡ a 層に含まれているが、これは近世水田耕作の影響で上層に浮き上がったものと見られ、本来はⅡ b 層にあったものであろう。また、洪武通寶 1 枚の出土層位が不詳で、紹聖通寶は東側調査区出土であるため除外し、出土した 12 枚の錢貨がⅡ b 層を中心に出土したと仮定し、錢貨の出土状況を検討する。

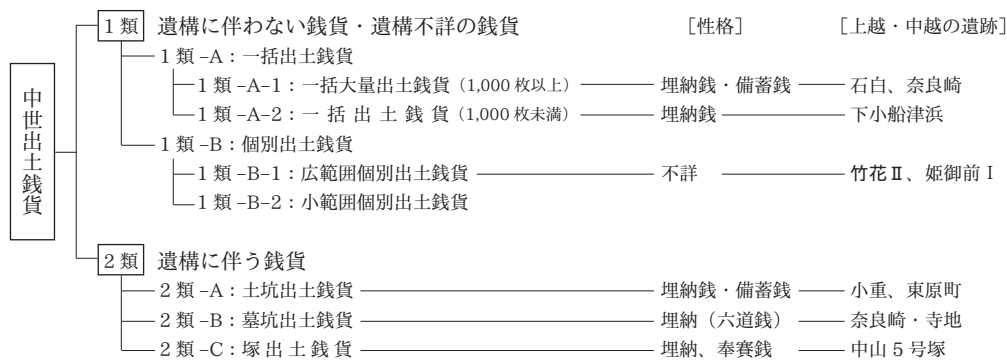
姫御前遺跡Ⅰでは、錢貨は 1 点ずつの個別遺物として出土している。錢種は、祥符元寶・天喜通寶・嘉祐通寶・熙寧元寶・元豐通寶・元祐通寶・嘉泰通寶・洪武通寶・永樂通寶の 9 種類で、北宋の祥符元寶（初鑄：1008 年）から最新錢は明の永樂通寶（初鑄：1408 年）までの錢貨である。ここではこれらの出土錢に対して、その出土状況 1 点ずつの単独出土であることから個別出土錢という呼称を用いる。姫御前遺跡Ⅰ出土の個別錢貨について、隣接する最短距離錢貨との平面の距離は、最大で No. 237 と No. 235 間の 24.5m を測り、最小は No. 238 と No. 245 間の 1.5m である。隣接する最短距離錢貨どうしの平面距離の平均は、約 9.4m である。つまり、姫御前遺跡Ⅰ西側調査区では、中世錢貨は約 9m に 1 枚分布していたことになる。

次に竹花遺跡Ⅱでは、姫御前遺跡Ⅰと同様に錢貨は 1 点ずつの個別遺物として中世後期のⅡ b 層を中心に 28 枚が出土している。その錢種は、貨泉・五銖・開元通寶・太平通寶・天喜通寶・皇宗通寶・嘉祐通寶・熙寧元寶・元豐通寶・元祐通寶・元符通寶・大觀通寶・嘉定通寶・永樂通寶の 14 種類で、新の貨泉（初鑄：14 年）から最新錢は明の永樂通寶（初鑄：1408 年）までの錢貨である。この中では、貨泉と後漢の五銖（初鑄：24 年）の 2 枚が希少錢種である。層位別の内訳はⅡ a 層 4 枚、Ⅱ b 層 17 枚、Ⅲ層 7 枚であるが、詳細な出土位置が不詳の 2 枚を除く 26 枚について、姫御前遺跡Ⅰとの対比上すべてがⅡ b 層を中心に出土したものと扱う。竹花遺跡Ⅱ出土の個別錢貨では、隣接する最短距離錢貨との平面の距離は、最大で No. 705 と No. 701 間で 9.9m を測り、最小は No. 724 と No. 720 間で 0.4m である。隣接する最短距離錢貨同士の平面距離の平均は、約 2.94m である。つまり竹花遺跡Ⅱでは約 3m に 1 枚分布していたことになる。

出土錢に関しては埋納錢・備蓄錢等の用語と概念が研究史上にあるが、「奉賽錢」は櫻木氏による「埋納錢」の項目に見られ、錢貨の研究は備蓄錢研究と個別発見貨研究の双方からの必要性を説く [櫻木 2007]。ここで中世遺跡における錢貨の出土状況を大観する時、次の二つの出土状況があろう。一つは、複数の錢貨が一括して出土する場合（一括出土錢貨）である。これは複数または多数の錢貨が 1 箇所からまとまって出土する場合である。二つ目は、単数（1 枚）の錢貨が個別に出土する場合（個別出土錢貨）である。出土錢貨では、1,000 枚以上を埋納錢または備蓄錢と呼ぶことが多い [鈴木 1999]。

中世遺跡の出土錢貨に関して考古学的に出土状況を検討した是光氏は、埋蔵時に二つの状況があったことを想定した [是光 1986]。一つは、埋蔵の意図が全くない状況で埋没した錢貨。二つ目は、意図的に埋蔵が行われた錢貨。一つ目の例では自然災害に埋没した錢貨や戦乱に巻き込まれて遺棄されたものがあり、意図的に埋蔵された錢貨ではさらに二つの埋納状況に区分している。その一は経塚や墳墓等錢貨が副次的な状態で埋納された遺跡で、奉斎的な性格の遺跡も含む。その二は錢貨の埋蔵を主眼にした遺跡で備蓄錢の出土遺跡を挙げている。『広辞苑』（岩波書店）では、「奉斎」は「神仏をつつしんでお祭り申すこと」であり、「奉賽」は「祈願の成就したお礼のため、神仏におまいりをする」と区分する。

ここで中世遺跡出土の錢貨について、新潟県内の発掘事例等 [伊藤 2002、伊藤・戸根 2009、戸根 1999・2005 など] をもとに概観すると、錢貨の出土状況は遺構に伴う錢貨と、遺構に伴わない錢貨・遺構不詳の錢貨の二つに大きく区分できよう。また、錢貨の枚数と出土範囲と遺構の種類から見て、現段階



第20表 中世出土銭貨の分類

では第20表のような区分が成り立つものと見られる。

上記のうち、2類は中世の土坑・墓坑・塚等の遺構から出土する例で、上越市小重遺跡では中世の遺構は見られないが、約29,000枚の銭貨が径約31～35cmで、深さ約35cmの曲物に収納され、長径約70cmの不整円形の土坑から出土した埋納銭である[小池2002]。柏崎市東原町遺跡では、銭貨10,674枚が珠洲焼(吉岡Ⅳ<sub>1</sub>期)の壺に納められ、板で蓋をした状態で土坑(SK090)から出土した[山崎ほか2005]。この土坑は掘立柱建物の北東に隣接し、また別の土坑(SK162)内の珠洲焼にも銭貨2枚があり、ともに掘立柱建物と外側の境界に埋納された可能性が指摘されている。墓坑出土の例では、長岡市奈良崎遺跡99SK1276から銭貨6枚が瀬戸美濃焼天目茶碗(15世紀後半)と共伴して出土しており、中世の六道銭と見られている[春日・小池ほか2002]。糸魚川市寺地遺跡SK1においては、北宋銭6枚が土坑から出土し墓坑と見られる[佐藤ほか2002]。塚に関連する例では、長岡市中山5号塚下層墳墓から集石を伴う墓が5基と銭貨が2箇所から検出され、銭貨は六道銭と見られている[長岡市教育委員会1978、品田1995]。なお経塚での出土例も見られるが、南魚沼市余川陣馬経塚では銭貨の出土状況は不詳である[伊藤1999a・b]。また、湯沢町宮林B遺跡の礫石経を伴う経塚では、塚の南側の第1号土坑から中世銭貨6枚が出土し、中世墳墓と報告されるが経塚と土坑の関係は不詳と見られる[湯沢町教育委員会1987]。

1類-A一括出土銭貨のうち遺構不詳の例等であっても、小重遺跡のように土坑等に埋納されていた可能性も十分ある。1類-A-1型とした一括大量出土銭貨(1,000枚以上)の例では、湯沢町石白出土の27万枚の銭貨の例[湯沢町教育委員会1976]を代表とし、長岡市奈良崎遺跡99SX926(銭貨集中遺構)出土の1,014枚出土例では長軸40cm・短軸20cm程の範囲からの出土があり、上越市下小船津浜出土例[石川・小池1998]では409枚の銭貨が約30cmの範囲に集中しサシで出土するなど、一括出土銭貨遺跡の個別銭貨の平面出土状況は1箇所集中である。

このような大量埋納銭貨の対極にあると見られる個別出土銭貨は、今まで注意されることが少なかった。しかし、糸魚川地域の姫川東側の沖積地には、中世渡来銭を1枚ずつ広範囲に出土する場所が広がっている。その時期は中世後期であり、銭貨と同じ層位に土坑・墓坑・集石・塚等は存在しないことから、明確な遺構に伴わない銭貨群と見てよい。ただし、今回報告した木製品環状出土遺構・木製品集中出土遺構・木製品弧状出土遺構については、今後遺構としての検討や類例の調査等を行う必要がある。特に木製品弧状刺突遺構では、銭貨(皇宗通寶)1枚・中世土師器1点・箸状木製品・板状木製品の合計10点が1箇所から検出され、中世土師器と銭貨が一組になっていた可能性も想定されよう。竹花遺跡Ⅱにおける中世後期の銭貨の出土状況と平面分布は、銭貨がそこに埋納・遺棄・廃棄・投棄等の行為を受けた結果であ

り、その理由は現段階では不詳であるが、敢えて推定すれば次のようないくつかの仮説が浮上してこよう。

①銭貨が単独で1枚ずつ埋納された(埋納)。②銭貨が単独で1枚ずつ廃棄された(廃棄)。③一括の大量銭貨が洪水や津波などの自然災害の影響で広範囲に広がりそのままとなって埋没した(遺棄)。④銭貨が奉斎の目的で遺棄または投棄された(奉斎のための遺棄または投棄など)。⑤銭貨が奉賽の目的で遺棄または投棄された(奉賽のための遺棄または投棄など)。⑥銭貨が単独で掘り込みを持たない墓に副葬されたか、複数で掘り込みを持たない墓に副葬され、その後個別に分散した(墓への副葬または六道銭的な性格)。

このうち①は銭貨に伴う掘り込みがないことから、該当しない。②は銭貨が金属銅としての価値を当時保有していたことから該当しないであろう。③では洪水の痕跡は見られない。④は神仏をお祭りする際に銭が置かれたり、まかれたり、投げられたりした結果が反映されているものである。⑤は祈願成就のお礼のために神仏にお参りし、銭をまいたり、投げたりした結果が反映されているものである。④と⑤は、神仏のお祭りや神仏へのお参りという行為に付随するものが遺跡として遺されたものである。本遺跡の西方には姫川から親不知・子不知の交通の難所が控えており、姫川の渡河地点での神仏への安全祈願等の行為がなされればその結果の反映となる。⑥は低湿地における墓や墓域の可能性を示すが、自然科学分析の結果を踏まえた検討が必要となろう。本遺跡周辺では南側に奴奈川神社や天津神社が鎮座し、また姫川の渡河地点と見られる等など特異な領域を構成する可能性もあり、通行する人々が銭貨を地主神や土地の霊または精霊(死者の霊)に対して鎮魂の意を込めて奉納した可能性も想定されよう。

また死者に財物を副葬することは普遍的に古くから行われており、その代表として六道銭がある。新潟県内では、中世墓から渡来銭の銭貨6枚が出土する例も多いが、小千谷市竜ヶ池観音堂塚群では、14～16世紀の中世墓群のうち、I-14号墓から古銭1枚と木炭少量が約3歳の幼児の骨と一緒に出土している。古銭1枚の副葬例では、成人1例・幼児1例を含む合計6例が報告されている[池田ほか1982・1983]。この遺跡ではほかに銭貨6枚を持つ六道銭の墓が6例あることから、この遺跡の中世墓では六道銭以外に1枚またはそれ以外の複数枚数を副葬した例が相伴している。このように銭貨1枚を副葬した中世墓が新潟県内の中越地域の中世後期の遺跡で確認できることから、竹花遺跡Ⅱにおける銭貨の個別出土状況は、小千谷市竜ヶ池観音堂塚群の中世墓の銭貨出土状況に類似する可能性もあろう。本遺跡の立地は沖積地から低湿地であり、地面を掘り窪めれば湧水が起ると見られ、土坑等の掘り込みがない墓の存在を想定することも可能であろう。

以上のように竹花遺跡Ⅱ等の銭貨の出土状況を見た場合、広範囲に1枚ずつ個別に出土する銭貨の存在から、広範囲個別出土銭貨という概念を提示してみた。これに対して限られた小範囲から個別に出土する銭貨の存在も想定されようが、今後の検討課題である。隣接する姫御前遺跡Ⅱと竹花遺跡Ⅰにおいても同様な銭貨の出土状況があり、本遺跡を含む中世銭貨の個別出土範囲は東西約600m以上に及ぶと見られる。

### 3 検出された畦畔と古墳時代の遺物

本年度調査区のⅣ層中からは、平成20年度調査区に引き続き、古墳時代の遺物が出土している。古墳時代の遺物の出土総量は浅箱1箱分と少ない。それらは、すべて包含層中からの出土で、遺構に伴う出土はない。しかも、その大半は中世包含層(Ⅱb～Ⅲ層)に含まれる混入品で、純粋な古墳時代の包含層(Ⅳ層)から出土した遺物は39点(個体識別法)とわずかである。そのうち36点は土器で、第Ⅴ章7に示したよ

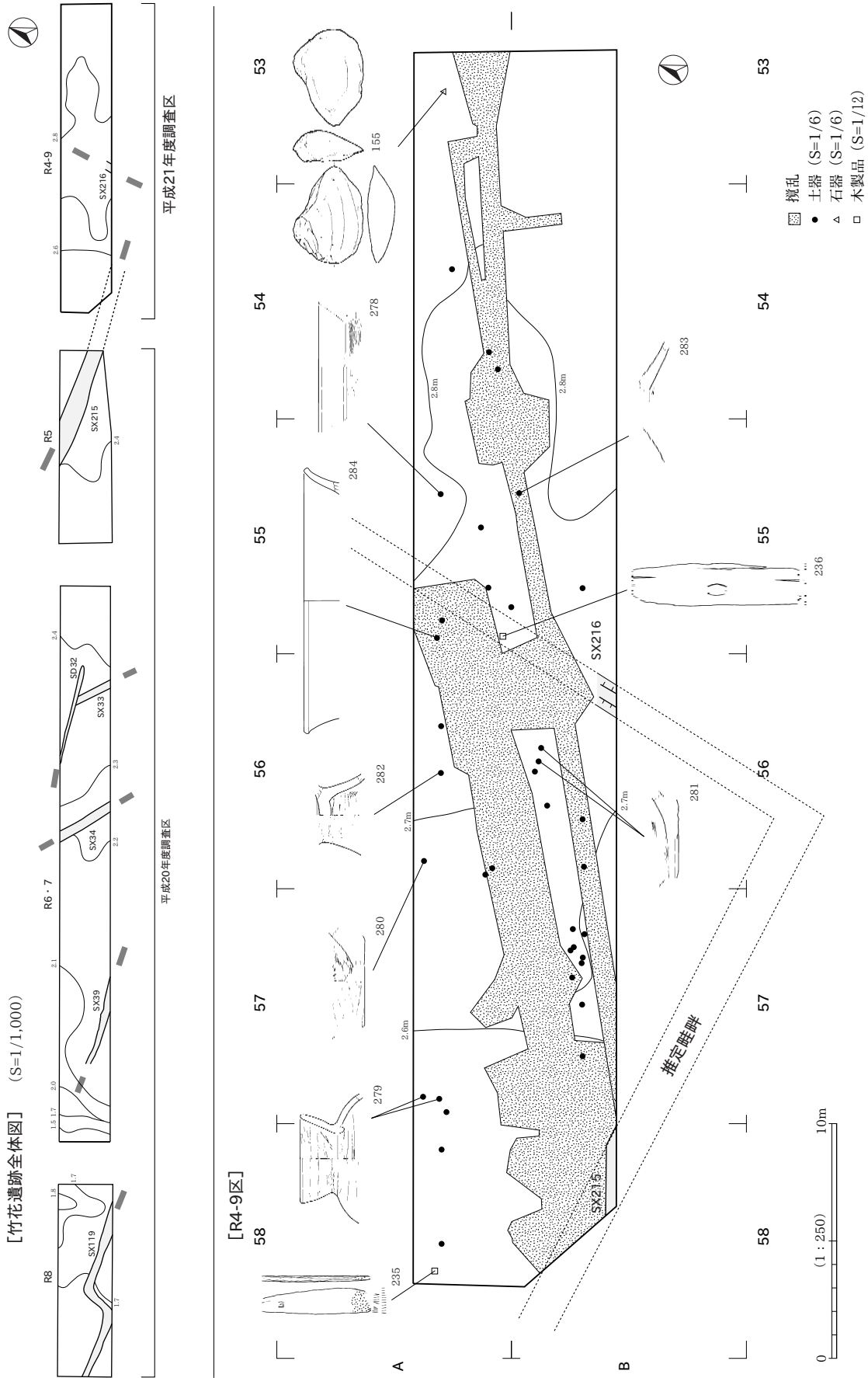
うに甕・壺・二重口縁壺・器台・高杯などがあるが、いずれも細片ばかりで、器形の全容が分かる資料はわずかである。しかしながら、それらの土器群の中に布留式傾向の強い甕や、小型丸底壺の系譜を引く厚手の壺、器高が低く脚が開く形状の器台、大口径の二重口縁壺などの存在から、古墳時代前期後半の年代を与えることができよう。西側に隣接する平成20年度調査区のIV層からも、前期後半の土器が水田の畦畔に伴って出土しており、対応関係にある。IV層からは、そのほか横刃型石器1点と、田下駄2点などが出土し、古墳時代後期の土器も若干量含む。

今年度調査区からは、IV層中から畦畔と考えられる盛り上がり（盛り上がり）を2条検出した。58Bグリッドで検出したSX215は、その大部分が旧市道に伴うライフラインの布設により破壊されており、調査区壁面で断面を検出できたに過ぎない。そのため、延長方向や具体的な形状や規模などは不明と言わざるを得ない。しかしながら、平成20年度調査区の延長上に位置し、IV層中に土を盛り上げて成形していることなどから、同一の畦畔である可能性が高いと判断した。なお、調査期間中は、調査区周囲に隈無く土層観察用ベルトを設置して調査にあたっていた。SX215の検出に伴い、周辺にその延長を示す断面等が現れていないか慎重に観察を行ったが、検出には至っていない。よって、今回検出された畦畔の断面は、平成20年度に西隣のR5区で検出された畦畔、すなわちSX215の一部である可能性が高い。

56Bグリッドでは、SX215の直交方向に延伸する畦畔（SX216）を検出した。SX216は約1.8mの長さで15cmほどの高さの盛土が検出された。盛土の下面幅は177cm、上面幅は60cmである。調査区は攪乱が著しく、全容は把握できないが、SX215とSX216の延長がおおよそ直交し、構築方法が似ることなどから、一連の遺構としてとらえることが可能である。SX216から西方は、今年度調査区のなかでも低地にあたり（図版1）、比較的、水の付きやすい土地であるといえる。

以上の検討から、SX215とSX216に囲まれた範囲が水田耕作地である可能性が考えられたことから、58Bグリッドにおいて土壌を採取し、花粉分析・イネ属同定・珪藻分析・植物珪酸体分析を実施した。詳細は第VI章に譲るが、結果として、IV層ではイネ属の植物珪酸体が検出されているものの、その量は1g中に1,000個未満と少量であり、土壌分析の結果からは水田稲作がなされていたことへの確実な証明はできなかった。しかしながら、VIII層（地山）-IV層（古墳時代包含層）-III層（中世後期包含層）の各層境は不整合であり、かつ、それぞれ下位の堆積層由来のブロック土を含むなど攪拌されている痕跡が認められることなどから、土地の改変を行っていたことはほぼ確実といえる。

IV層中からの遺物の出土分布を見ると、ほぼ満遍なく散布しているといえる。ただし、2本の畦畔（SX215・216）に囲まれた範囲及び畦畔の延長付近に多いといえなくはない。また、田下駄や横刃型石器の出土は平成20年度にも見られ、農作業との関連性がうかがわれる資料である。しかしながら、平成20年度で検出されたような畦畔に伴って木製品が大量に敷設されている状況や、農具の埋納、土器の供献はなかった。出土遺物も細片が多く、出土分布にとりたてて規則性は認められない。したがって、この出土分布は、古墳時代の生産域が延伸する西方に密度が濃く、縁辺地に近い東方が薄いと理解すべきであろう。調査区の東端と姫御前遺跡の西端とは約130m離れているが、試掘確認調査の結果、遺跡は延伸しないことが判明している。



第28図 古墳時代の畦畔の位置と遺物の分布 (IV層)



## 要 約

- 1 竹花遺跡は、新潟県糸魚川市南寺町 2-2-1 ほかに所在する。遺跡は、現海岸線から 400m 内陸の標高 2.5 ～ 2.9m の沖積地に立地する。
- 2 調査は北陸新幹線の建設に伴い、平成 21 年度に実施した。調査面積は 1,344m<sup>2</sup>(448m<sup>2</sup> × 3 面)である。
- 3 竹花遺跡の調査は、平成 20 年度に隣接する 1,643m<sup>2</sup> を調査しており、今回が 2 回目の発掘調査である。
- 4 調査の結果、中世と古墳時代の遺構・遺物が検出された。
- 5 中世では、2 層の連続する包含層を確認し、遺構は下層(Ⅲ層)から土坑が 1 基検出された。包含層中からは、いずれも中世後期の陶磁器類や木製品、金属製品などが多く出土した。
- 6 中・近世の陶磁器は、青磁・白磁・青花・天目などの舶載品、瀬戸美濃・珠洲・越前・肥前・越中瀬戸窯の国産品、瓦器、在地土師器などがある。これらの年代は、15 世紀から 16 世紀を中心(Ⅱ b・Ⅲ層)とし、14 世紀(Ⅱ b・Ⅲ層)と 17 世紀(Ⅱ a 層)が少量ある。こうした、層位ごとの出土陶磁器の様相は、平成 20 年度調査とおおむね合致する。
- 7 中世の陶磁器には基本的に、供膳具に中国製陶磁器・瀬戸美濃焼・土師器皿、貯蔵具と調理具に珠洲焼・越前焼が使われており、用途により各産地の陶磁器を使い分けている様子が見て取れる。そのほか、香炉や花瓶・大型の壺類など奢侈品に瀬戸美濃焼が使用されており、瀬戸美濃焼の高級品指向が理解される。陶磁器組成には、日常什器のほかに瓦器や香炉、花瓶、舶載天目など茶や香に関連する奢侈品や高級品が一定量含まれており、比較的財力のある階層が想定できる。
- 8 中世においては、木製品が大量に出土した。特に箸状木製品が 545 点と最も多い。箸状木製品や棒状木製品の中で、確実に地面に突き刺した状態で検出されているものは 99 点に及び、高率である。このほか、形代(人形・舟形・刀形)や銭貨など、祭祀に関連すると考えられる遺物も出土しており、これらを用いて、湿地的な環境の下で祭祀がなされたものと考えられる。これらの木製品等の分布には集中範囲が認められ、一部に環状あるいは半環状(弧状)の範囲で広がることから、祭祀空間の具体的な有り様に迫る資料が得られた。
- 9 中世においては、大量の木製品と併に、焼骨が 22 点出土している。肉眼観察の結果、すべて獣類に同定できたが、いずれも細片のため、動物種の同定までは至らなかった。そこで、比較的大型の四肢骨片 3 点について日本歯科大学 奈良貴史准教授に光学顕微鏡による骨組織構造観察を依頼した。観察の結果、いずれも成人人骨である可能性が高いとの結論を得た。その他についても人骨である可能性が示唆される。
- 10 古墳時代の土器は、36 点と少ないものの、前期後半の土器が出土した。そのほか、横刃型石器 1 点と木製田下駄 2 点が出土している。
- 11 古墳時代の遺構は、2 地点において畦畔を検出した。いずれも、後世の攪乱により大部分を破壊されており、その検出は一部にとどまるものの、検出位置及び層位から、隣接する平成 20 年度調査区から延伸する畦畔、及びそれと直交方向に連結する畦畔と推定した。
- 12 畦畔は調査区西半の低地に検出された。東半は比較的標高が高く、畦畔は検出されておらず、風倒木や樹痕などが多く分布している。このことから、低地に生産域を選地する具体的な有り様が見て取れる。

## 引用・参考文献

- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する素描―県内出土報告例から―」『研究紀要』4 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤文一ほか 1978 『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 池田 亨ほか 1982・1983 『竜ヶ池観音堂塚群』I・II 小千谷市教育委員会
- 石川智紀・小池義人 1998 「中頸城郡大潟町下小船津浜遺跡の中世銭貨」『研究紀要』第2号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀ほか 2010 『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書V 前波南遺跡II 伝極楽寺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第209集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団糸魚川市教育委員会 2001 『糸魚川市遺跡地図』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書 39 糸魚川市教育委員会
- 糸魚川市教育委員会 2008 『糸魚川市の文化財』糸魚川市教育委員会
- 糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006 『平成18年度出土品展 出土品が語る新潟の歴史』糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 糸魚川市史編さん委員会 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』新潟県糸魚川市役所
- 伊藤啓雄 1999a 「経塚と塚」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 伊藤啓雄 1999b 「新潟県の出土貨幣」『東北地方の中世出土貨幣』東北中世考古学会
- 伊藤啓雄 2002 「中世越後の埋蔵銭」『出土銭貨』第17号 出土銭貨研究会
- 伊藤啓雄・戸根与八郎 2009 「新潟県」『中世の墓と銭』出土銭貨研究会
- 今村 克・山岸洋一 2008 『須沢角地遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告 糸魚川市教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小田由美子ほか 2006 『上信越自動車道関係発掘調査報告書XVI 滝寺古窯跡群 大貫古窯跡群』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 春日真実 1998 「西頸城地域における古代の土器様相」『研究紀要』2 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章古代 第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会 高志書院
- 春日真実 2009 「糸魚川市山岸遺跡」『第16回遺跡発掘調査報告会』新潟県教育委員会・新潟市・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・小池義人ほか 2002 『二級河川郷本川広域基幹河川改修工事・一般国道116号和島バイパス関係報告書奈良崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第116集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実ほか 2008 『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書III 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学・相羽重徳ほか 2006 『北陸新幹線関係発掘調査報告書V 大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学・相羽重徳ほか 2008 『北陸新幹線関係発掘調査報告書VIII 姫御前遺跡I』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学・相羽重徳ほか 2011 『北陸新幹線関係発掘調査報告書XIV 姫御前遺跡II・竹花遺跡I』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第207集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 川上貞雄・遠藤孝司・古寺芳幸 1984 『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』白根市教育委員会
- 川上貞雄 1985 「馬場屋敷遺跡出土の中世木簡と呪術資料」『日本歴史』第441号 日本歴史学会編 吉川弘文館
- 木島 勉 1989 『立ノ内遺跡・山崎三十三塚遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告 19 新潟県糸魚川市教育委員会

- 木島 勉 2007 「山崎 A・B 遺跡」『第 14 回 遺跡調査報告会』新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 木島 勉<sup>ほか</sup> 2007 『長者ヶ原遺跡 縄文時代北陸の玉作集落』日本の遺跡 24 同成社
- 小池勝典 2008 「南押上遺跡」『埋文にいがた』No. 65 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池 聡 2009 「もうひとつの「凹石」」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論集』竹石健二先生・澤田大多郎先生の古希を祝う会編 六一書房
- 小池義人 2002 『一般国道 18 号改築工事関係発掘調査報告書 小重遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 108 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 財団法人京都府埋蔵文化財研究所
- 是光吉基 1986 「出土銭」『日本歴史考古学を学ぶ(下) 生産の諸相』有斐閣
- 坂井秀弥<sup>ほか</sup> 1984 『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告 I 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 35 集 新潟県教育委員会
- 櫻木晋一 2007 「埋納銭」・「備蓄銭」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館
- 佐藤敦史<sup>ほか</sup> 2002 『北陸新幹線関係発掘調査報告書 I 寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 113 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子<sup>ほか</sup> 2009 『北陸新幹線関係発掘調査報告書 XⅢ・一般国道 8 号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ 田伏山崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 205 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 實川順一<sup>ほか</sup> 2009 『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅸ 角地田遺跡 平遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 191 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1995 「越後における中世の墳墓と墓地」『柏崎市立博物館報』No. 9 柏崎市立博物館
- 鈴木郁夫 1982 「I 地形分類図 1 地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 関 雅之 1972 『田伏玉作遺跡 糸魚川市田伏遺跡発掘調査報告書』糸魚川市教育委員会
- 関 雅之 1990 「古代細型環状土錘考」『北越考古学』3 北越考古学研究会
- 高橋 保<sup>ほか</sup> 1988 『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅲ 立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 49 集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1999 「製塩」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第 1 分冊 新潟県考古学会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡 I』石川県埋蔵文化財センター
- 田中照久・木村宏一郎 2005 「越前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 同実行委員会
- 辻 範朗 2006 「北陸新幹線関係 須沢角地遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成 16 年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄 1991 「加賀街道 第Ⅱ章 1・2」『加賀街道・松本街道』新潟県歴史の道調査報告書第 1 集 新潟県教育委員会
- 土田孝雄<sup>ほか</sup> 1988 『須沢角地 A 遺跡発掘調査報告書』須沢角地 A 遺跡発掘調査団編 青海町教育委員会
- 寺崎裕助 1988 「第 I 章 遺跡の立地と周辺の遺跡 1 位置と地形」『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅳ 原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 50 集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴<sup>ほか</sup> 1987 『史跡 寺地遺跡 新潟県西頸城郡青海町寺地遺跡発掘調査報告書』新潟県青海町
- 寺村光晴<sup>ほか</sup> 1979 『大角地遺跡—飾玉とヒスイの工房址—』大角地遺跡発掘調査団編 青海町教育委員会
- 戸根与八郎 1999 「埋納銭」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院

- 戸根与八郎 2005 「新潟県の銭貨埋納容器の諸例－埋納貨幣と埋納容器の変遷－」『新潟県歴史博物館研究紀要』第6号 新潟県歴史博物館
- 長岡市教育委員会 1978 『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書 中山5号塚 座禅塚』長岡市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録－近畿古代編』奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録－近畿原始編』奈良国立文化財研究所
- 畑 大介 2006 「中世前期の村落祭祀と串状の木製品」『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史』陶磁史篇四 愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 細井佳浩・松井 智 2008 「北陸新幹線・一般国道8号糸魚川東バイパス関係 六反田南遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成19年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤幸一 1999 「瓦器、その城館的なもの」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 水澤幸一 2001 「15世紀中葉～後半における北東日本海沿岸地域へのやきものの搬入時期－越後江上館を中心として－」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』日本中世土器研究会
- 水澤幸一 2004 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』24 日本貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005a 「越後の様相」『中世北陸の茶道具』第18回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
- 水澤幸一 2005b 「越後の中世土器」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 水澤幸一 2009 「瓦器の相貌」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 向井由紀子・橋本慶子 2001 『箸（はし）』ものと人間の文化史102 法政大学出版局
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 矢田俊文 1994 「戦国期越後における守護・守護代と都市」『守護所から戦国城下へ－地方政治都市論の試み－』金子拓男・前川要編 名著出版
- 山岸洋一 1999 「清崎城跡（糸魚川城跡）」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山崎忠良<sup>ほか</sup> 2005 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第140集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良<sup>ほか</sup> 2008 『一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅵ 延命寺遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第201集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山田英雄 1986 「国郡制の成立・整備」『新潟県史 通史編1 原始・古代』新潟県
- 山本 肇・高橋 保<sup>ほか</sup> 2003 『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書 岩倉遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第114集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山本友紀 2010 「一般国道8号糸魚川東バイパス関係 六反田南遺跡Ⅳ」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成21年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 湯沢町教育委員会 1976 『伝・泉福寺遺跡－石白中世備蓄銭の報告書－』湯沢町教育委員会
- 湯沢町教育委員会 1987 『川久保遺跡Ⅱ 宮林B遺跡』湯沢町教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『日本海域の土器・陶磁器 [中世編]』六興出版
- 四柳嘉章 1987 『西川島 能登における中世村落の発掘調査』石川県・穴水町教育委員会
- 渡邊裕之 2007 「山岸遺跡－平安時代末～鎌倉時代の祭祀・信仰の場－」『第14回 遺跡調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊裕之<sup>ほか</sup> 2008 『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第188集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

土器・陶磁器観察表(1)

(胎土：白 = 白色粒子、長 = 長石、石 = 石英、角 = 角閃石、チャ = チャート、骨 = 海綿骨針、礫 = 砂礫)

報告 番号	分類		出土位置		口径 mm	器高 mm	底径 mm	色 調		胎土 (上段: 色調 下段: 混入物)	製作痕跡	使用痕跡	備 考
	種 別	器 形	グリッド	層位				外 面	内 面				
1	船載天目	天目茶碗	54	A 19 II b	124	-	-	暗褐 7.5YR3/4	暗褐 7.5YR3/4	褐灰 10YR6/1 白	内外面：鉄軸 (采目)	-	-
2	瀬戸美濃焼	天目茶碗	55	B 12 III	116	-	-	黒 2.5Y2/1	黒 2.5Y2/1	灰白 2.5Y8/1 白	内外面：鉄軸	-	古瀬戸中期様式IV期 1340 ~ 1360年頃
3	瀬戸美濃焼	天目茶碗	54	B 22 III II b	120	63	38	黒 N1.5/0	黒 N1.5/0	灰白 2.5Y8/1 長 石	内外面：鉄軸	内面：擦痕	古瀬戸後期様式II期 1380 ~ 1420年
4	瀬戸美濃焼	天目茶碗か	55	B 7 II b	-	-	-	黒 10YR1.7/1	黒 10YR1.7/1	灰白 10YR8/1 石	内面：鉄軸 外面：鉄軸+円形浮文	-	年代不詳
5	青磁	竊蓮弁文碗	54	A 15 III	140	-	-	明緑灰 10GY7/1	明緑灰 10GY7/1	灰白 N8/0 白	外面：竊蓮弁文	漆継	上田 B-1 類 13世紀後半 ~ 14世紀初頭
6	青磁	直緑無文碗	57	A 23 II b	136	-	-	オリーブ灰 10YR6/2	オリーブ灰 10YR6/2	灰白 N7/0 白	-	被熱	1440 ~ 15C代
7	青磁	直緑無文碗	55	B 2 II b	136	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 2.5GY6/1	灰白 N7/0 白	-	被熱	1440 ~ 15C代
8	青磁	直緑雷文帯碗	55	B 11 II a	146	-	-	灰オリーブ 7.5Y	灰オリーブ 7.5Y	灰白 N7/0 白	外面：雷文	漆継	1440 ~ 15C代
9	青磁	直緑篋線描 蓮弁文碗	54	A 19 カク ラン	136	-	-	オリーブ灰 5G6/1	オリーブ灰 5G6/1	灰白 N6/0 白 石	外面：篋線描蓮弁文	-	15C後半 ~ 16C前半
10	青磁	直緑篋線描 蓮弁文碗	56	A 19 II b	128	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	灰白 N8/0 白	外面：篋線描蓮弁文	-	15C後半 ~ 16C前半
11	青磁	直緑篋線描 蓮弁文碗	54	B 11 II a	120	-	-	オリーブ灰 10Y5/2	オリーブ灰 10Y5/2	灰白 N8/0 白	外面：篋線描蓮弁文	漆継	15C後半 ~ 16C前半
12	青磁	直緑篋線描 蓮弁文碗	56	A 9 II a	146	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	灰白 N8/0 白	外面：篋線描蓮弁文	-	15C後半 ~ 16C前半
13	青磁	直緑篋線描 蓮弁文碗	54	B 2 II b	136	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	灰白 N7/0 白 礫	外面：篋線描蓮弁文	-	15C後半 ~ 16C前半
14	青磁	線描蓮弁文碗	54	A 14 II b	120	-	-	灰オリーブ 5Y5/2	灰オリーブ 5Y5/2	灰白 N7/0 白	外面：線描蓮弁文	-	15C後半 ~ 16C前半
15	瀬戸美濃焼	平碗か	56	A 20 III	124	-	-	灰白 7.5Y7/1	灰白 10Y7/2	灰白 N8/0 白	内外面：灰軸	被熱	古瀬戸中期様式か
16	瀬戸美濃焼	平碗	58	A 4 II a	150	-	-	黄褐 2.5Y5/3	にぶい黄 2.5Y6/3	灰白 2.5Y7/1 石	内外面：灰軸	被熱	古瀬戸中期様式か
17	瀬戸美濃焼	平碗	54	A 14 II b	164	-	-	オリーブ黄 5Y6/3	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 10YR8/2 白	内外面：灰軸	-	古瀬戸後期様式1期 1360 ~ 80年
18	肥前系陶器	碗	54	A 19 II a	-	-	44	にぶい黄橙 10YR6/4	灰オリーブ 5Y5/2	灰白 10YR7/1 白 礫	内外面：灰軸	-	大橋II期 1610 ~ 50年代
19	越中瀬戸焼	丸碗	54	B 21 II a	106	-	-	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3	灰白 10YR8/1 長 石	内外面：鉄軸	-	17世紀前半か
20	越中瀬戸焼	丸碗	54	B 22 II a	-	-	40	灰黄 2.5Y6/2	暗褐 7.5YR3/3	黄灰 2.5Y6/1 石	内面：鉄軸	-	17世紀前半か
21	青磁	厚軸端反皿	53	A 19 II b	112	-	-	灰白 10YR7/2	灰白 10YR7/2	灰白 7.5Y8/1 白	-	被熱?	1430年 ~ 15世紀
22	青磁	皿	57	A 5 II b	-	-	64	オリーブ灰 5GY6/1	オリーブ灰 5GY6/1	灰白 10YR7/1 白	-	-	15世紀
23	青磁	端反皿	53	A 16 II b	152	-	-	オリーブ灰 2.5GY6/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	灰白 N7/0 白 礫	-	-	15世紀
24	白磁	内湾皿	54	A 5 II a	120	-	-	灰白 2.5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	灰白 5YR8/1 ナシ	内外面：施軸	被熱	15世紀
25	白磁	扶高台 内湾皿	55	A 15 II b	100	25	40	灰白 10YR8/1	灰黄 2.5Y7/2	灰白 10YR8/1 ナシ	見込み：目跡4ヶ 外面：アーチ状高台	被熱	15世紀
26	白磁	内湾皿 平高台	54	A 19 II a	-	-	36	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1 ナシ	見込み：目跡2ヶ	-	15世紀
27	青花	皿 (小野C群)	54	A 20 II b	-	-	36	明オリーブ灰 2.5GY7/1	明オリーブ灰 2.5GY7/1	灰白 N8/1 白	見込み：捻花 外面：芭蕉葉文	-	15世紀末 ~ 16世紀前 沙足
28	青花	皿 (小野E群)	54	B 6 II b III	-	-	68	明緑灰 10GY8/1	明緑灰 10GY8/1	白 N9/0 ナシ	見込み：二重園線+花卉 文 外面：草花文	-	1560年代 ~ 17世紀前半 沙足
29	瀬戸美濃焼	緑軸小皿	53	A 20 II b	120	-	-	灰オリーブ 5Y5/3	灰オリーブ 5Y5/3	灰白 10Y8/1 白	内外面上半：灰軸	内外面：スス	古瀬戸後期 ~ 大窯様式1期 1380年 ~ 1500年頃
30	瀬戸美濃焼	緑軸小皿	56	A 14 II b	119	-	-	灰オリーブ 5Y5/3	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 N7/0 長 礫	内外面上半：灰軸	-	古瀬戸後期 ~ 大窯様式1期 1380年 ~ 1500年頃
31	瀬戸美濃焼	緑軸小皿	58	A 4 II b	110	-	-	浅黄 2.5Y7/4	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 10YR7/1 石	内面：灰軸 外面(口)：灰軸	-	古瀬戸後期 ~ 大窯様式1期 1380年 ~ 1500年頃
32	瀬戸美濃焼	緑軸小皿	54	A 14 II b	-	-	47	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1 石	内面：鉄軸わずか 外面：回転糸切り	-	古瀬戸後期 ~ 大窯様式1期 1380年 ~ 1500年頃
33	瀬戸美濃焼	緑軸小皿	56	B 11 II b	120	-	-	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	褐灰 10YR6/1 白 石	内外面：灰軸	内外面：スス	古瀬戸後期 ~ 大窯様式1期 1380年 ~ 1500年頃
34	瀬戸美濃焼	緑軸小皿	58	A 14 III	114	-	-	灰白 10YR8/1	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 10YR8/1 ナシ	内面上半：灰軸 外面(口)：灰軸	-	古瀬戸後期 ~ 大窯様式1期 1380年 ~ 1500年頃
35	瀬戸美濃焼	緑軸小皿	57	A 3 II a	120	-	-	灰白 10YR7/1	暗オリーブ 7.5Y4/3	灰白 N7/0 白	内外面：灰軸	-	古瀬戸後期 ~ 大窯様式1期 1380年 ~ 1500年頃
36	瀬戸美濃焼	端反皿	55	A 15 III	120	-	-	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	灰白 N7/0 石 礫	内外面：灰軸	-	大窯様式1期前半 1480 ~ 1500年頃
37	瀬戸美濃焼	反り皿	54	B 21 II a	84	-	-	オリーブ黄 5Y6/3	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 10YR8/1 白 石	内外面：灰軸	被熱	大窯様式2期 1530 ~ 60年頃
38	瀬戸美濃焼	折縁皿	58	A 5 II b	88	-	-	灰白 10YR7/1	オリーブ灰 10Y4/2	暗灰 N3/0 長	内外面：灰軸	内外面(口)： スス・被熱	大窯様式3期後半 1575 ~ 90年頃
39	瀬戸美濃焼	卸皿	54	A 14 II b	118	-	-	オリーブ黄 5Y6/3	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 2.5Y7/1 石	外面：灰軸 内面(口)：灰軸+卸目	-	古瀬戸後期様式II ~ III期 1380 ~ 1440年頃
40	土師器	皿 (手づくね)	55	A 15 III	78	15	32	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4 長 石 チャ 礫	外面下半：指頭圧痕 上半：ナデ	-	14C
41	土師器	皿 (手づくね)	53	A 20 II a	88	-	-	暗灰黄 2.5Y5/2	灰黄褐 10YR6/2	黄灰 2.5Y4/1 白 石	内外面：指頭圧痕	-	15世紀
42	土師器	皿 (手づくね)	56	B 22 II a	88	-	-	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR5/2 石 礫	外面：ナデ(強) 内面：ナデ	内外面：スス	15世紀
43	土師器	皿 (手づくね)	55	B 21 III	96	-	-	黄褐 2.5Y5/3	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄 2.5Y6/3 白 礫	外面：指頭圧痕	内~外(口)： タール	15世紀

観 察 表

土器・陶磁器観察表(2)

(胎土：白=白色粒子、長=長石、石=石英、角=角閃石、チャ=チャート、骨=海綿骨針、礫=砂礫)

報告番号	分類		出土位置		口径 mm	器高 mm	底径 mm	色 調		胎土(上段:色調 下段:混入物)	製作痕跡	使用痕跡	備 考
	種 別	器 形	グリッド	層位				外 面	内 面				
44	土師器	皿 (手づくね)	55 B	6 II b	104	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/2 長 礫	外面:指頭圧痕	口~内面:タ ール	15世紀
45	土師器	皿 (手づくね)	58 B	6 II b	104	-	-	褐灰 10YR6/1	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2 ナシ	上半:ナデ 下半:ヘラナデ	-	15世紀 胎土精良
46	土師器	皿 (手づくね)	55 B	6 II b	112	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2 長 石 チャ	内面:ナデ 外面下半:指頭圧痕	内外面(口) :タール	15世紀
47	土師器	皿 (手づくね)	56 B	20 II b	122	-	-	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2 石 礫	内面:ナデ 外面:ナデ	-	15世紀
48	土師器	皿 (手づくね)	58 B	16 I	116	24	62	黒褐 2.5Y3/1	黒 N2/0	にぶい黄 2.5Y6/3 石 礫	外面下半:指頭圧痕	内面:スス 外面:スス	15世紀
49	土師器	皿 (手づくね)	53 B	21 II a	116	-	-	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3 長 石 礫	内外面:指頭圧痕	-	15世紀
50	土師器	皿 (手づくね)	55 B	17 II a	120	-	-	にぶい橙 2.5YR6/4	橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/2 石 角 礫	内外面:指頭圧痕	-	15世紀~16世紀
51	土師器	皿 (手づくね)	53 B	22 II b	176	-	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3 石 礫	外面:指頭圧痕	-	15世紀
52	土師器	皿 (手づくね)	54 B	21 II b	176	-	-	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2 長 石 骨 礫	外面:指頭圧痕	内外面:スス	15世紀
53	土師器	皿 (ロクロ成形)	55 A	15 II b	-	-	48	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3 石 礫	底面:回転条切り	-	15世紀
54	土師器	皿 (ロクロ成形)	58 A	13 I	-	-	68	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3 長 石 礫	底面:回転条切り	-	SD401内出土 15世紀
55	土師器	皿 (ロクロ成形)	54 B	12 III	56	15	42	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/2 長 石 礫	底面:回転条切り	-	15世紀
56	土師器	皿 (ロクロ成形)	55 B	24 II b	68	16	48	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3 石 礫	底面:回転条切り	-	15世紀
57	土師器	皿 (ロクロ成形)	55 A	14 II b	94	22	72	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3 石 角	底面:回転条切り	-	15世紀
58	土師器	皿 (ロクロ成形)	55 A	20 III	80	-	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4 石 チャ 礫	-	-	15世紀
59	土師器	皿 (ロクロ成形)	54 B	22 III	80	24	54	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3 石 チャ 礫	底面:回転条切り	(口):スス	15世紀
60	土師器	皿 (ロクロ成形)	54 B	2 III	122	24	80	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	灰白 10YR8/2 石 骨 礫	-	-	15世紀
61	土師器	皿 (ロクロ成形)	54 A	10 II b 6 III	134	37	76	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4 ナシ	底面:回転条切り	口~外面 :スス	15世紀
62	土師器	皿 (ロクロ成形)	54 B	6 III	128	37	70	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3 白 礫	-	口~外面 :スス	15世紀
63	土師器	皿 (ロクロ成形)	58 B	16 II b	150	-	-	橙 5YR6/6	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい黄橙 10YR7/2 石 礫	-	内外面(口) :スス	15世紀
64	土師器	皿 (ロクロ成形)	53 B	16 III	158	-	-	暗灰黄 2.5Y5/2	灰黄 2.5Y6/2	浅黄 2.5Y7/3 石 礫	-	-	15世紀
65	肥前系陶器	皿 (絵唐津)	53 B	22 II a	120	-	-	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	浅黄 2.5Y7/3 白 石	内外面:灰軸 口唇:鉄絵(皮鯨手)	-	大橋 I 期 1580~1610年代
66	肥前系陶器	丸皿	54 B	17 II b	117	-	-	黄灰 2.5Y5/1	暗灰黄 2.5Y5/2	赤 10R5/6 ナシ	内外面:灰軸	-	大橋 I 期 1580~1610年代
67	肥前系陶器	皿 (絵唐津)	53 B	12 II b	147	-	-	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	灰白 2.5Y7/1 白	内面:灰軸+鉄絵 外面:灰軸	-	大橋 I 期 1580~1610年代
68	肥前系陶器	丸皿	54 B	7 II a	153	-	-	灰 N5/0	灰黄褐 10YR5/2	褐灰 7.5YR6/1 白	内外面:薬灰軸	-	大橋 I 期 1580~1610年代
69	肥前系陶器	皿?	55 B	2 II a	102	19	72	浅黄 2.5Y7/3	灰オリーブ 5Y5/3	灰白 2.5Y7/1 長 石 礫	内外面:灰軸	-	大橋 I 期 1580~1610年代
70	肥前系陶器	段皿	55 B	2 II a	100	-	-	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	灰 5Y6/1 白	内外面:灰軸	-	大橋 I 期 1580~1610年代
71	肥前系陶器	溝緑皿	55 B	12 II a	158	-	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	橙 5YR6/6 白 石	内外面:灰軸	-	大橋 II 期 1610~50年代
72	肥前系陶器	皿	54 B	16 II a	-	-	40	にぶい赤褐 2.5YR5/4	灰褐 7.5YR4/2	にぶい黄橙 10YR7/2 長 石	内外面:鉄軸 見込み:胎土目	-	大橋 I - 2 期 1594~1610年代
73	肥前系陶器	皿または鉢	54 B	12 II b	-	-	64	灰黄 2.5Y7/2	にぶい黄 2.5Y6/3	灰黄 2.5Y7/2 長 石	内面:砂目 2ヶ+灰軸 外面:灰軸	-	大橋 II 期 1610~50年代
74	肥前系磁器	染付皿 (初期伊万里)	54 B	12 II a	126	29	52	明緑灰 7.5GY7/1	明緑灰 7.5GY7/1	灰白 N8/0 白	内面:園線 2条	-	大橋 II - 1 期 1610~30年代
75	青磁	盤	56 B	2 I	-	-	56	灰オリーブ 5Y5/3	灰オリーブ 5Y5/2	灰白 10YR8/2 白	内面:双鱼文(印刻)	-	14C~15C
76	肥前系陶器	鉢	54 A	13 II a	212	-	-	灰黄 2.5Y6/7	灰黄 2.5Y6/2	にぶい橙 5YR6/4 石 礫	内面:灰軸 外面:鉄絵	-	大橋 I ~ II 期 16C末~17C前
77	瀬戸美濃焼	卸目付大皿	55 B	11 II b	366	-	-	オリーブ黄 5Y6/3	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 2.5YR8/1 長 石 礫	内外面:灰軸	-	古瀬戸後期様式IV期古段階 1440~60年頃
78	瀬戸美濃焼	折縁深皿	55 B	16 II b	332	-	-	オリーブ 5Y5/4	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 10YR8/1 白 長	内外面:灰軸	-	古瀬戸後期様式III期 1420~40年頃
79	瀬戸美濃焼	折縁深皿	57 A	25 II b	312	-	-	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 5YR7/2	灰白 2.5Y7/1 白 石	内外面:灰軸	-	古瀬戸後期様式III期 1420~40年頃
80	瓦器	円形浅鉢 (皿類)	56 A	24 III	444	-	-	黒 N2/0	暗灰 N3/0	灰黄 2.5Y6/2 石 礫	外面:突帯1条+雷文	-	-
81	瓦器	不明	54 B	13 II a	174	-	-	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	にぶい黄橙 10YR7/4 長 石 礫	内面:ナデ	-	-
82	白磁	多角杯	54 B	11 II b	80	-	-	灰白 10Y8/1	灰白 7.5Y8/1	白 N9/0 ナシ	外面:面取り 口縁:波状	-	15世紀
83	瀬戸美濃焼	筒型容器	55 B	2 II b	108	-	-	灰オリーブ 5Y5/3	灰オリーブ 5Y5/3	灰白 N7/0 石 礫	内外面:灰軸	被熱	古瀬戸後期様式III期 1420~40年
84	瀬戸美濃焼	花瓶 (I類)	55 A	15 III	-	-	-	灰褐 5YR4/2	灰白 10YR8/1	灰白 N8/0 石	外面:鉄軸	-	古瀬戸後期様式II期 1380~1420年
85	瀬戸美濃焼	花瓶	54 A	25 II b	-	-	-	オリーブ黄 7.5Y6/3	灰白 10YR8/1	灰白 2.5Y8/1 石	外面:灰軸	-	古瀬戸後期様式 1380年~1480年頃
86	瀬戸美濃焼	瓶子 (皿類)	55 A	25 II b	-	-	110	灰オリーブ 5Y5/3	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1 石	外面:灰軸 (自然軸?)	-	古瀬戸後期様式III~IV期古段階 1420~60年

土器・陶磁器観察表(3)

(胎土:白=白色粒子、長=長石、石=石英、角=角閃石、チャ=チャート、骨=海綿骨針、礫=砂礫)

報告番号	分類		出土位置		口径 mm	器高 mm	底径 mm	色 調		胎土(上段:色調 下段:混入物)	製作痕跡	使用痕跡	備 考
	種 別	器 形	グリッド	層位				外 面	内 面				
87	瀬戸美濃焼	壺・甕類	53 B 17	III	-	-	-	黒 10YR2/1	灰白 N7/0	灰白 10YR8/1 石	外面:鉄軸	-	中国産の可能性あり
88	瀬戸美濃焼	袴腰形香炉	54 A 19	II b	120	-	-	明オリーブ灰 2.5GY7/1	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1 白 石	外面:灰軸 内面上半:灰軸	内面:スス	古瀬戸後期様式II期 1380~1420年
89	瀬戸美濃焼	花瓶 (I類)	57 A 14	II b	-	-	-	灰白 2.5Y7/1	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/1 白 石	底面:回転糸切り	底面:スス	古瀬戸後期様式 1380年~1480年頃
90	瀬戸美濃焼	花瓶 (I類)	54 B 17	II b	-	-	64	灰白 10YR7/1	-	灰白 10YR8/1 石	外面:鉄軸 底面:回転糸切り	-	古瀬戸後期様式IV期 1440~80年
91	肥前系陶器	瓶 (絵唐津)	55 B 7	II a	-	-	-	灰オリーブ 5Y4/2	灰白 5Y4/2	灰白 2.5Y7/1 長 石 礫	内面:無軸 外面:灰軸+鉄絵	-	大橋I期 1580~1610年代
92	肥前系陶器	瓶 (タタキ成形)	54 A 19	II b	-	-	-	灰オリーブ 5Y4/2	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1 長 石	内面:無軸 外面:灰軸+薬灰軸	-	大橋I期 1580~1610年代
93	珠洲焼	片口鉢	55 B 17	II a	238	-	-	灰 5Y6/1	灰 10Y5/1	灰 5Y6/1 石 骨 礫	鈎目:6条一単位	-	吉岡IV期 14世紀第1四半期
94	珠洲焼	片口鉢	54 A 19	II b	284	-	-	灰 N6/0	灰 N6/0	灰白 N7/0 長 石 骨 礫	-	-	吉岡IV1期 14世紀第1四半期
95	珠洲焼	片口鉢	54 B 16	III	290	-	-	灰 N6/0	灰 N5/0	灰 N6/0 石 骨 礫	鈎目:8条一単位以上	-	吉岡IV2~3期 14世紀第2~3四半期
96	珠洲焼	片口鉢	55 B 2	-	296	-	-	灰 N6/0	灰白 N7/0	灰白 N7/0 長 骨 礫	鈎目:8条一単位以上 口唇:櫛描波状文	-	吉岡V期 14世紀第4四半期 ~15世紀前半
97	珠洲焼	片口鉢	53 A 24	II a	336	-	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	灰白 2.5Y7/1 石 骨 礫	-	-	吉岡V期 14世紀第4四半期 ~15世紀前半
98	珠洲焼	片口鉢	56 A 20	II b	386	-	-	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1 長 骨 礫	鈎目:6条一単位以上 口唇:櫛描波状文	-	吉岡V期 14世紀第4四半期 ~15世紀前半
99	珠洲焼	片口鉢	54 A 14	II b	380	-	-	黄灰 2.5Y6/1	灰白 N7/0	灰白 N7/0 石 骨 礫	口唇:櫛描波状文	-	吉岡VI期 15世紀後半
100	珠洲焼	片口鉢	57 A 19	II b	466	-	-	褐灰 5YR6/1	灰褐 5YR6/2	灰白 2.5Y7/1 白 骨 礫	鈎目:5条一単位以上	-	吉岡VI期 15世紀後半
101	珠洲焼	片口鉢	55 B 2	III	314	-	-	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1 長 石 礫	鈎目:7条一単位	-	吉岡IV2期 14世紀第2四半期
102	珠洲焼	片口鉢	53 B 11	III	394	-	-	灰 N4/0	灰 N6/0	灰 N6/0 石 骨 礫	-	-	吉岡IV2期 14世紀第2四半期
103	珠洲焼	片口鉢	54 A 15	III	346	-	-	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y7/2 長 石 礫	鈎目:6条一単位以上 焼成不良	-	吉岡IV3期 14世紀第3四半期
104	珠洲焼	片口鉢	53 A 15	III	334	-	-	灰 N6/0	灰 N6/0	灰 N6/0 石 骨 礫	-	-	吉岡V期 14世紀第4四半期 ~15世紀前半
105	越前焼	掃鉢	55 B 17	II b	300	-	-	にぶい赤褐 2.5YR5/4	褐灰 2.5YR6/1	にぶい橙 5YR6/4 石	鈎目:7条一単位	-	木村V-3期古段階 16C第3四半期頃
106	越前焼	掃鉢	54 B 11	II b	-	-	168	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR6/1	灰 5YR6/1 長 石 礫	鈎目:7条一単位以上 外面:ナデ	-	-
107	肥前系陶器	掃鉢	53 B 22	II a	-	-	-	黒褐 7.5YR3/1	黒褐 7.5YR3/1	黄灰 2.5Y6/1 礫	口~外面:鉄軸	-	1630~40年代
108	越中瀬戸焼	掃鉢	54 B 11	II a	332	-	-	赤灰 2.5YR4/1	黒褐 7.5YR3/2	褐灰 10YR5/1 長 礫	鈎目:3条一単位以上 内外面:鉄軸	-	大寮黒川窯期 16世紀第4四半期
109	珠洲焼	中甕 (タタキ成形)	53 B 12	III	400	-	-	灰 N6/0	灰 N6/0	灰 N6/0 石 礫	-	-	吉岡IV2期 14世紀第2四半期
110	珠洲焼	中甕 (タタキ成形)	54 B 1	II b	440	-	-	灰 N5/0	灰 N5/0	灰 N6/0 石 礫	-	-	吉岡IV3期 14世紀第3四半期
111	珠洲焼	中甕 (タタキ成形)	57 A 20	II b	484	-	-	灰 5Y5/1	灰 N5/0	灰 5Y6/1 石 礫	-	-	吉岡V期 14世紀第4四半期 ~15世紀前半
112	珠洲焼	甕 (タタキ成形)	57 A 24	II b	-	-	-	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1 石 骨 礫	外面:「大」ヘラ描	-	-
113	瀬戸美濃焼	祖母懷	58 A 14	II b	104	-	-	褐 7.5YR4/3	灰黄 2.5Y6/2	灰 N6/0 長 石	口~外面:鉄軸	-	古瀬戸後期様式IV期か 1460~80年頃
114	越中瀬戸焼	広口壺	56 B 11	II b	114	-	-	褐 7.5YR4/3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4 長 石 礫	内外面:鉄軸	-	17世紀代か
115	肥前系陶器	甕	57 58 A 13 14	II a	120	-	-	暗赤褐 5YR3/2	暗赤灰 2.5YR3/1	褐灰 5YR5/1 白	内外面:鉄軸	-	大橋I期 1580~1610年代
131	須恵器	無台杯	54 A 19	II a	108	-	-	灰 N6/0	灰 N6/0	灰 N6/0 礫	-	-	小泊窯産 9世紀後半~10世紀初頭
132	須恵器	無台杯	56 B 22	II b	114	-	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1 白 石 礫	-	-	小泊窯産 9世紀後半~10世紀初頭
133	須恵器	無台杯	53 B 22	II b	120	-	-	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1 長 礫	-	内面(口): スス	西郷城丘陵産 8世紀末~9世紀前半
134	須恵器	杯蓋	55 A 19	II b	-	-	-	灰 N6/0	灰 N6/0	灰 N6/0 石 礫	-	-	小泊窯産 9世紀後半~10世紀初頭
135	須恵器	杯蓋	57 A 24	II b	-	-	150	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1 石 礫	-	-	小泊窯産 9世紀後半~10世紀初頭
136	土師器 (古代)	無台碗	58 B 2	III	130	43	56	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4 長 石 礫	外面:回転糸切り	外面:スス	9世紀後半~10世紀初頭
137	土師器	無台碗	56 A 24	IV	-	-	52	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6 石 骨 礫	外面:回転糸切り	磨耗著しい	9世紀後半~10世紀初頭
138	土師器 (古代)	無台碗	53 A 14	III	-	-	58	にぶい黄橙 10YR6/3	明黄褐 10YR5/2	明黄褐 10YR7/6 長 石 チャ 礫	外面:回転糸切り	-	9世紀後半~10世紀初頭
139	土師器 (古代)	無台碗	55 B 12	III	-	-	60	褐灰 10YR4/1	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR7/3 長 石 礫	外面:回転糸切り	-	9世紀後半~10世紀初頭
140	土師器 (古代)	有台碗	57 A 19	II b	-	-	80	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2 長 石 チャ 礫	底部:貼り付け高台	-	10世紀前半~11世紀前半
141	土師器 (古代)	小甕	58 A 8	II b	-	-	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3 長 石 礫	外面:ハケメ 内面:ナデ	-	-
142	土器	製塩土器	55 B 7	III	-	-	148	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4 石 チャ 礫	底面:砂底	-	古代
143	土器	製塩土器	55 B 21	III	-	-	196	にぶい黄橙 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4 長 石 礫	底面:砂底	-	古代
144	土師器 (古代)	鍋	55 B 2	II b	448	-	-	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2 長 石 礫	-	-	10世紀

観 察 表

土 錘 観 察 表

報告 番号	分類	出土位置				長さ mm	最大径 mm	孔径 mm	厚さ mm	重さ (g?)	備 考
		グリッド		層位							
116	4	58	A	10	II b	32	22	10	21	10.2	
117	4	55	A	20	III	36	20	6	9	10.1	
118	4	56	B	16	II b	40 +	20	(11)	9	7.6	
119	1 b	58	A	1	III	57	31	12	10	37.9	「×」線刻
120	1 b	57	B	16	I	62	32	11	12	45.4	
121	2 b	54	B	22	III	44 +	34 +	17	18	24.2	推定外径 4.8cm

「+」は破損のため、残存長。( ) は推定。

加工円盤 観 察 表

報告 番号	分類	素材	出土位置				最大径 mm	厚さ mm	重さ (g?)	残存率	使用痕	備 考
			グリッド		層位							
122	1	珠洲焼 (T種)	53	A	15	III	20	10	4.9	12/12	-	
123	1	珠洲焼 (T種)	55	B	21	III	20	14	5.4	12/12	-	
124	1	珠洲焼 (T種)	54	B	22	III	25	14	9.2	12/12	-	
125	1	珠洲焼 (T種)	54	B	17	III	24	13	11.3	12/12	-	
126	1	珠洲焼 (T種)	54	B	2	II b	23	11	6.9	12/12	-	
127	1	珠洲焼 (T種)	57	B	21	カクラン	25	12	8.6	12/12	-	
128	1	土器 (製塩土器)	53	B	16	II b	24	15	8.9	12/12	-	
129	3 a または 2 a	土師皿 (口クロ成形)	54	B	23	II b	38	16	19.7	12/12	-	底部：回転糸切り
130	-	高坏 (古墳前期)	54	A	20	II b	39	30	31.9	12/12	-	閉塞部

石器・石製品 観 察 表

報告 番号	種別	分類	石材	出土位置				長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ (g?)	備 考
				グリッド		層位						
145	石製品	硯	粘板岩	54	B	12	III	58	20	9	17.0	
146	石製品	砥石	凝灰岩	58	A	9	II b	54	35	21	44.3	中砥
147	石製品	砥石	凝灰岩	58	A	19	II b	58	36	23	68.9	中砥～仕上砥
148	石製品	砥石	粘板岩	55	A	4	II b	16	37	5	3.1	仕上砥
149	石製品	砥石	粘板岩	54	B	16	II b	61	30	7	11.2	仕上砥
150	礫石器	砥石	砂岩	58	A	5	III	80	45	13	53.8	
151	礫石器	砥石	砂岩	54	B	6	IV	123	55	28	245.0	SK432 内出土
152	礫石器	内磨き砥石か	輝石安山岩	58	A	40	IV	53	51	19	55.0	
153	礫石器	敲石	角閃石安山岩	55	B	1	III	135	51	28	300.0	
154	礫石器	凹石	輝石安山岩	57	B	11	カクラン	108	112	75	1080.0	
155	石器	横刃型石器	泥岩	53	B	19	IV	71	99	32	225.0	
156	石器	横刃型石器	泥岩	55	A	19	III	36	42	10	18.2	

木製品 観 察 表 (1)

※出土状況の「刺」は地面に刺さった状態で出土したことを示す。

報告 番号	器種・形状	木取り	樹種	断面 形	出土位置				長さ mm	幅 mm	厚さ mm	出土 状況	備 考	
					遺構番号	層位	グリッド							
157	箸状木製品	削出棒	スギ	六角			II b	57	A	9	142	7	6	
158	箸状木製品	削出棒	スギ	六角			III	54	A	10	149	6	4	刺
159	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	424	III	55	B	12	154	7	4	刺
160	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	433	III	54	B	22	161	10	5	刺
161	箸状木製品	削出棒	スギ	四角			III	53	A	24	160	7	2	先端部炭化
162	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	420	III	55	B	17	162	7	4	刺
163	箸状木製品	削出棒	スギ	六角			III	54	A	20	174	6	4	
164	箸状木製品	削出棒	スギ	六角			III	53	B	21	178	7	5	
165	箸状木製品	削出棒	スギ	四角			III	56	A	9	181	12	8	刺 先端部炭化
166	箸状木製品	削出棒	スギ	四角			III	54	A	20	183	5	4	
167	箸状木製品	削出棒	スギ	六角			IV	53	A	24	187	7	5	
168	箸状木製品	削出棒	スギ	六角			III	54	B	11	186	7	3	
169	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	408	II b	54	A	14	188	6	4	刺
170	箸状木製品	削出棒	スギ	六角			III	53	A	24	193	5	6	
171	箸状木製品	削出棒	スギ	四角			IV	53	B	11	193	7	7	刺
172	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	427a	III	55	A	5	182	4	6	
173	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	428	III	54	B	11	203	6	6	刺
174	箸状木製品	削出棒	スギ	四角			III	54	A	4	196	5	5	
175	箸状木製品	削出棒	スギ	四角			II b	54	B	23	196	6	5	
176	箸状木製品	削出棒	スギ	四角			II b	56	B	12	195	7	5	
177	箸状木製品	削出棒	スギ	六角			III	55	A	10	201	7	6	



木製品 観察表 (2)

※出土状況の「刺」は地面に刺さった状態で出土したことを示す。

報告 番号	器種・形状	木取り	樹種	断面 形	出土位置			長さ mm	幅 mm	厚さ mm	出土 状況	備 考
					遺構番号	層位	グリッド					
178	箸状木製品	削出棒	スギ	四角		Ⅲ	54 B 11	204	8	8		
179	箸状木製品	削出棒	スギ	六角		Ⅲ	54 B 11	209	11	9		
180	箸状木製品	削出棒	スギ	四角		Ⅲ	53 A 25	212	5	5		
181	箸状木製品	削出棒	スギ	六角		Ⅳ	53 A 14	221	6	5		
182	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	409a	Ⅱ b 54 A 14	196	8	5	刺	
183	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	409c	Ⅲ 54 A 14	126	6	4		
184	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	426	Ⅲ 53 A 19	155	9	6	刺	
185	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	430	Ⅲ 54 A 5	163	8	4	刺	
186	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	434b	Ⅱ b 54 A 9	167	8	6	刺	
187	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	407	Ⅱ b 56 B 6	131	8	4	刺	
188	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	404	Ⅱ b 54 B 1	115	7	5	刺	
189	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	406	Ⅱ b 56 B 11	99	8	6	刺	
190	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	422a	Ⅱ b 56 B 7	130	5	4	刺	
191	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	422b	Ⅱ b 56 B 7	122	5	5	刺	
192	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	422c	Ⅲ 56 B 7	111	6	4	刺	
193	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	412c	Ⅲ 55 B 12	114	6	3	刺	
194	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	412a	Ⅲ 55 B 12	123	8	5	刺	
195	箸状木製品	削出棒	スギ	四角	SX	412b	Ⅲ 55 B 12	64	6	3		
196	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	416a	Ⅲ 55 A 24	63	6	4	刺	
197	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	416b	Ⅲ 55 A 24	118	5	4	刺	
198	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	421c	Ⅱ b 53 B 17	86	6	5	刺	
199	箸状木製品	削出棒	スギ	六角	SX	421b	Ⅲ 53 B 17	57	6	4		
200	箸状木製品	削出棒	マツ属	多角	SX	405	Ⅱ b 54 B 6	199	9	6		
201	火付け木	削出棒	スギ	四角		Ⅱ b 55 B 2	117	12	7	刺		
202	火付け木	削出棒	マツ属	四角	SX	402	Ⅱ b 54 B 7	111	90	6	刺	先端部炭化
203	火付け木	削出棒	スギ	四角	SX	423	Ⅲ 55 B 7	92	6	6	刺	
204	火付け木	削出棒	スギ	多角	SX	431	Ⅲ 56 B 22	108	10	5	刺	先端部炭化
205	火付け木	板目	マツ属	四角		Ⅲ 53 B 22	87	14	6		先端部炭化	
206	火付け木	削出棒	トウヒ属	多角		Ⅲ 54 B 22	118	13	7		先端部炭化	
207	人 形	削出棒	スギ	—		Ⅲ 57 B 22	162	15	7			
208	人形か	削出棒	スギ	—	SX	440	Ⅳ 57 A 9	165	19	17	刺	
209	舟 形	板目	スギ	—	SX	443	Ⅲ 54 A 9	106	17	14	刺	
210	刀 形	板目	スギ	—		Ⅲ 53 A 25	99	23	4			
211	刀 形	板目	スギ	—		Ⅱ b 54 A 14	130	27	3			
212	刀 形	榫目	スギ	—		Ⅲ 54 B 11	115	13	5		円孔 側縁に擦痕	
213	刀 形	板目	スギ	—		Ⅳ 54 B 22	105	15	5			
214	刀 形	板目	スギ	—		Ⅲ 54 A 19	103	23	5			
215	刀 形	榫目	スギ	—		Ⅲ 54 B 16	93	14	6		円孔	
216	用途不明品	削出棒	スギ	—	SX	403	Ⅱ b 54 B 17	129	8	6	刺	台形状突起+円孔
217	用途不明品	榫目	スギ	—		Ⅲ 54 B 17	60	29	22		つまみ状突起	
218	杭状木製品	榫目	スギ	—	SX	441	Ⅳ 54 B 7	460	28	24	刺	
219	棒状木製品	削出棒	スギ	—		Ⅳ 58 A 14	272	13	9			
220	棒状木製品	削出棒	スギ	—	SX	436	Ⅲ 58 A 10	217	13	8	刺	
221	杭状木製品	削出棒	スギ	—		Ⅲ 54 B 2	183	29	21			
222	杭状木製品	榫目	スギ	—		Ⅲ 57 A 24	103	39	22	刺		
223	曲物底板	榫目	スギ	—		Ⅲ 54 B 16	89	31	4		推定直径 93mm	
224	曲物底板	榫目	スギ	—	SD	401	1 58 A 15	72	44	4		直径 72mm
225	曲物底板	板目	スギ	—		Ⅲ 54 A 4	168	56	6		推定直径 190mm	
226	曲物底板	板目	スギ	—		Ⅲ 57 A 19	101	49	10		直径 101mm	
227	板状木製品	板目	スギ	—	SX	417	Ⅲ 54 A 9	184	24	6	刺	
228	板状木製品	板目	スギ	—	SX	421a	Ⅱ b 53 B 17	155	29	5	刺	先端部炭化
229	板状木製品	板目	モミ属	—		Ⅱ b 58 A 20	96	23	7		未貫通円孔 1 円孔+釘 1	
230	板状木製品	板目	スギ	—	SX	434a	Ⅱ b 54 A 9	138	48	11	刺	
231	板 杭	板目	スギ	—		Ⅲ 55 A 19	144	51	6			
232	板状木製品	追榫目	スギ	—		Ⅲ 55 A 10	241	33	12		板杭か	
233	板状木製品	榫目	スギ	—		Ⅲ 53 B 12	224	24	10		板杭か	
234	曲物底板	榫目	スギ	—		Ⅱ b 55 A 15	174	104	14		直径 174mm 樹皮綴じ紐 器表に線状痕	
235	田下駄	榫目	スギ	—		Ⅳ 58 A 19	220	50	12		方形孔 上・下端炭化	
236	田下駄	板目	スギ	—		Ⅳ 55 A 25	343	84	8		楕円孔	

観 察 表

金属製品 観察表

報告番号	材質	分類	出土位置				長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ (g?)	備 考
			グリッド		層位						
237	銅製品	銅鏡(紐)か	55	B	12	Ⅲ	30	32	6	14.7	円盤状に再加工
238	銅製品	不明	55	B	2	Ⅱ b	29	24	0.6	3.0	板厚 0.6mm
239	銅製品	不明	53	B	12	Ⅲ	41	20	0.5	8.6	板厚 0.5mm 漆塗布 把手・突起付き
240	鉄製品	鉄鍋(脚)	57	A	9	Ⅱ b	32	20	12	11.4	
241	鉄製品	鉄鍋	53	B	16	Ⅲ	398	-	-	9.9	内外面スス付着
242	銅製品	筭	56	A	24	Ⅱ b	201	13	5	26.4	
243	鉄製品	釘	53	B	11	Ⅱ a	83	35	6	24.7	
244	鉄製品	釘	53	B	16	Ⅱ a	32	6	2	0.7	
245	鉄製品	釘	54	A	19	Ⅱ b	135	16	6	11.1	

銭貨 観察表

報告番号	銭貨名	書体	王朝	初鋳年 (西暦)	出土位置				外径縦 mm	外径横 mm	内径縦 mm	内径横 mm	銭厚 mm	重さ (g?)	備 考
					グリッド		層位								
246	貨泉	-	新	14	55	B	6	Ⅱ b	22.4	22.5	6.9	6.8	1.2	2.2	
247	五銖	-	後漢	24	53	B	22	Ⅱ a	24.6	24.1	10.5	10.0	0.6	1.2	
248	開元通寶	-	唐	621	54	B	16	Ⅱ b	23.8	23.8	6.9	6.7	0.9	2.2	
249	開元通寶	-	唐	621	56	B	16	Ⅱ b	23.8	23.7	6.5	6.8	1.2	2.7	
250	開元通寶	-	唐	621	54	A	6	Ⅱ b	24.6	24.6	6.9	6.8	0.9	2.8	
251	開元通寶	-	唐	621	55	A	10	Ⅲ	24.0	23.7	7.3	7.3	1.0	2.2	
252	太平通寶	真書	北宋	976	58	B	10	Ⅱ b	24.1	24.2	6.0	6.2	1.0	2.0	
253	天禧通寶	真書	北宋	1017	56	B	12	Ⅱ b	25.9	25.6	6.5	6.8	1.2	3.5	歪み
254	皇宋通寶	真書	北宋	1038	55	B	1	Ⅱ b	24.2	24.1	6.6	6.5	1.5	2.8	
255	皇宋通寶	真書	北宋	1038	54	B	16	Ⅱ b	24.2	24.5	6.3	6.3	1.3	3.9	
256	皇宋通寶	篆書	北宋	1038	54	B	12	Ⅱ b	24.5	24.5	7.3	7.2	0.8	2.6	表裏平滑
257	皇宋通寶	真書	北宋	1038	54	B	22	Ⅲ	25.8	25.7	6.0	5.9	1.3	3.0	
258	嘉祐元寶	真書	北宋	1056	54	B	16	Ⅱ b	23.4	23.6	6.6	6.5	1.0	1.6	
259	熙寧元寶	真書	北宋	1068	55	A	24	Ⅱ b	24.8	24.9	6.7	6.9	0.9	2.7	裏面平滑
260	熙寧元寶	真書	北宋	1068	55	A	9	Ⅲ	23.8	-	6.8	-	1.0	1.5	裏面平滑
261	元豐通寶	篆書	北宋	1078	54	B	8	Ⅱ a	23.5	23.7	6.8	6.7	1.1	2.5	
262	元祐通寶	篆書	北宋	1086	57	B	14	Ⅲ	24.1	24.3	6.0	6.0	0.6	1.4	
263	元祐通寶	行書	北宋	1086	58	A	5	Ⅱ b	25.1	24.7	7.0	7.0	1.1	2.3	
264	元符通寶	行書	北宋	1098	53	A	19	Ⅱ b	23.7	23.7	6.2	6.2	1.3	2.9	
265	大觀通寶	真書	北宋	1107	55	B	7	Ⅱ a	23.9	23.7	6.3	6.4	1.4	2.6	
266	嘉定通寶	真書	南宋	1208	54	B	22	Ⅲ	23.7	23.9	7.0	6.9	1.2	2.4	背：十二
267	永樂通寶	真書	明	1408	56	B	22	Ⅱ a	25.0	25.0	5.5	5.7	1.2	3.1	
268	永樂通寶	-	明	1408	54	B	12	Ⅲ	24.5	23.7	5.4	5.1	1.5	3.7	
269	永樂通寶	-	明	1408	53	B	16	Ⅲ	25.0	24.8	5.8	6.2	1.4	2.0	私鋳銭

鍛冶関連遺物 観察表

報告番号	分類	含鉄の有無	出土位置				長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ (g?)	備 考
			グリッド		層位						
270	鉄滓(椀形)	含鉄	54	A	14	Ⅱ b	63	77	25	125.2	粗砂付着 炭化材付着
271	鉄滓(椀形)	含鉄	54	B	11	Ⅱ b	65	73	23	137.2	粗砂付着
272	鉄滓(椀形)	含鉄	53	B	15	Ⅱ b	62	71	27	187.8	
273	鉄滓(椀形)	含鉄	57	A	14	Ⅱ b	48	67	19	108.7	炭化材付着
274	鉄滓(椀形)	含鉄	55	A	15	Ⅲ	49	58	27	102.3	粗砂付着
275	鉄滓(椀形)	含鉄	54	B	12	Ⅱ b	47	60	25	93.7	炭化材付着
276	鉄滓(椀形)	無	56	A	25	Ⅲ	39	47	16	49.2	炭化材付着
277	羽口	-	55	A	15	Ⅲ	60	39	28	-	推定外径 7.2cm 孔径 2.8cm 被熱

弥生時代・古墳時代の土器観察表

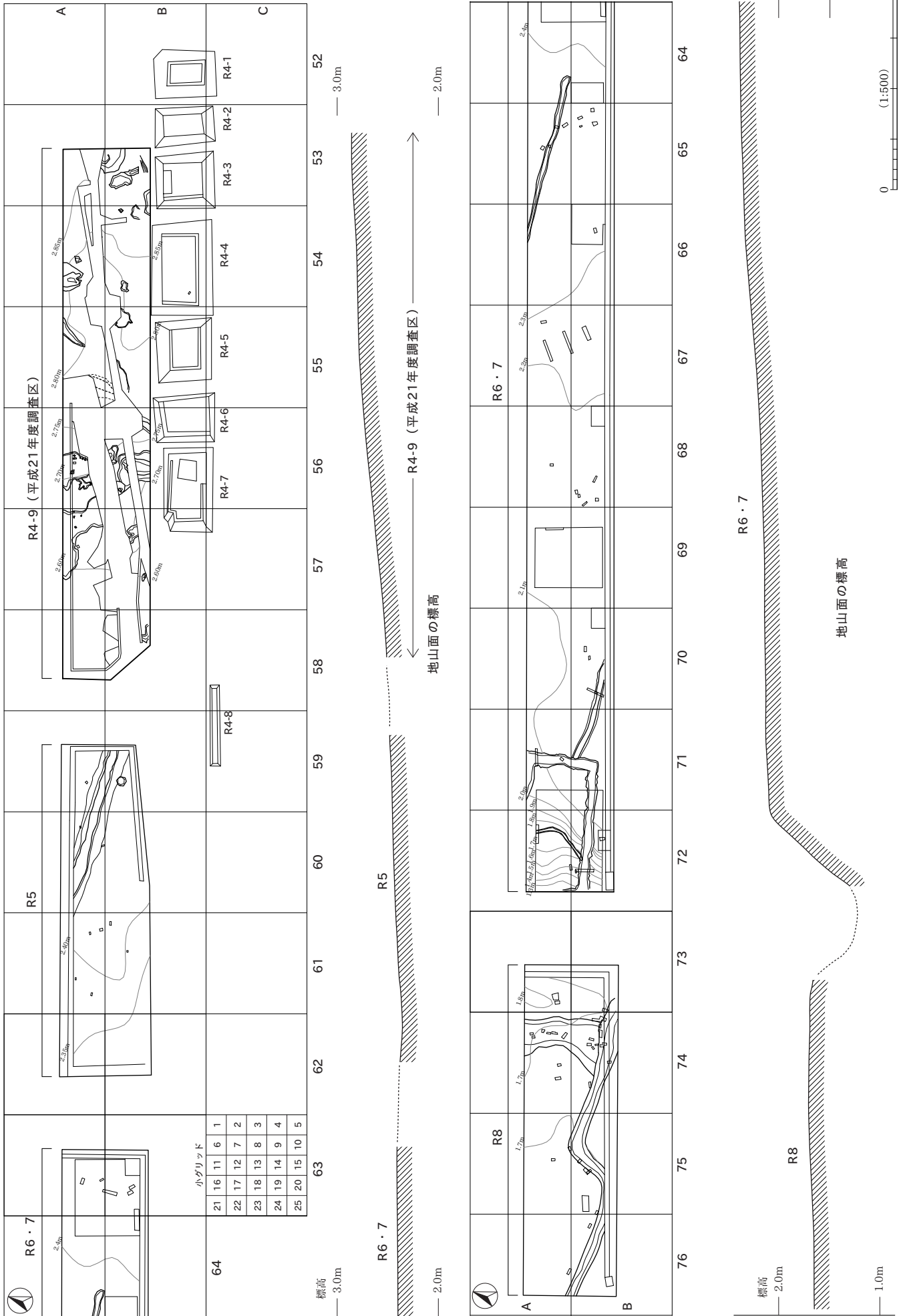
(胎土：長=長石、石=石英、角=角閃石、チャ=チャート、骨=海綿骨針、礫=砂礫)

報告番号	分類		出土位置				口径 mm	器高 mm	底径 mm	色調		胎土(上段：色調 下段：混入物)	製作痕跡	消費痕跡	備 考
	種別	器形	グリッド	層位	外面	内面									
278	土師器(古墳前期)	甕	55	A	9	Ⅲ	130	-	-	暗灰黄 2.5Y4/2	暗灰黄 2.5Y4/2	暗灰黄 2.5Y5/2 石 チャ 礫	内外面：ハケ(頸)ナデ		外面(口)： スス
279	土師器(古墳前期)	壺	57	A	24	Ⅳ	86	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3 石 骨 礫	外面：ミガキ 内面： (頸)ミガキ(胴)ナデ		
280	土師器(古墳前期)	壺か甕(底部)	56	A	24	Ⅱ b	-	-	86	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄 2.5Y7/3	黄灰 2.5Y5/1 長石 礫	外面：ヘラナデ 内面：ハケ		
281	土師器(古墳前期)	壺か甕(底部)	56	B	11	Ⅳ	-	-	80	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR6/2 石 礫	内面：ハケ		
282	土師器(古墳後期)	高杯(脚部)	56	A	14	Ⅲ	-	-	-	にぶい黄橙 10YR7/2	褐灰 10YR6/1	にぶい黄橙 10YR7/2 長石 角 礫	外面：ミガキ 内面：黒色処理+ヘラナデ		
283	土師器(古墳前期)	器台(脚部)	55	B	6	-	-	-	-	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 5YR6/4	灰 5Y5/1 石 礫	調整不明瞭		SK432(2層)
284	土師器(古墳前期)	二重口緑壺	55	A	24	Ⅳ	266	-	-	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR4/3	橙 7.5YR7/6 長石 礫	内外面：ナデ		
285	弥生土器(後期)	高杯	53	B	16	Ⅱ b	276	-	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR6/1 長石 礫	内外面：ナデ		

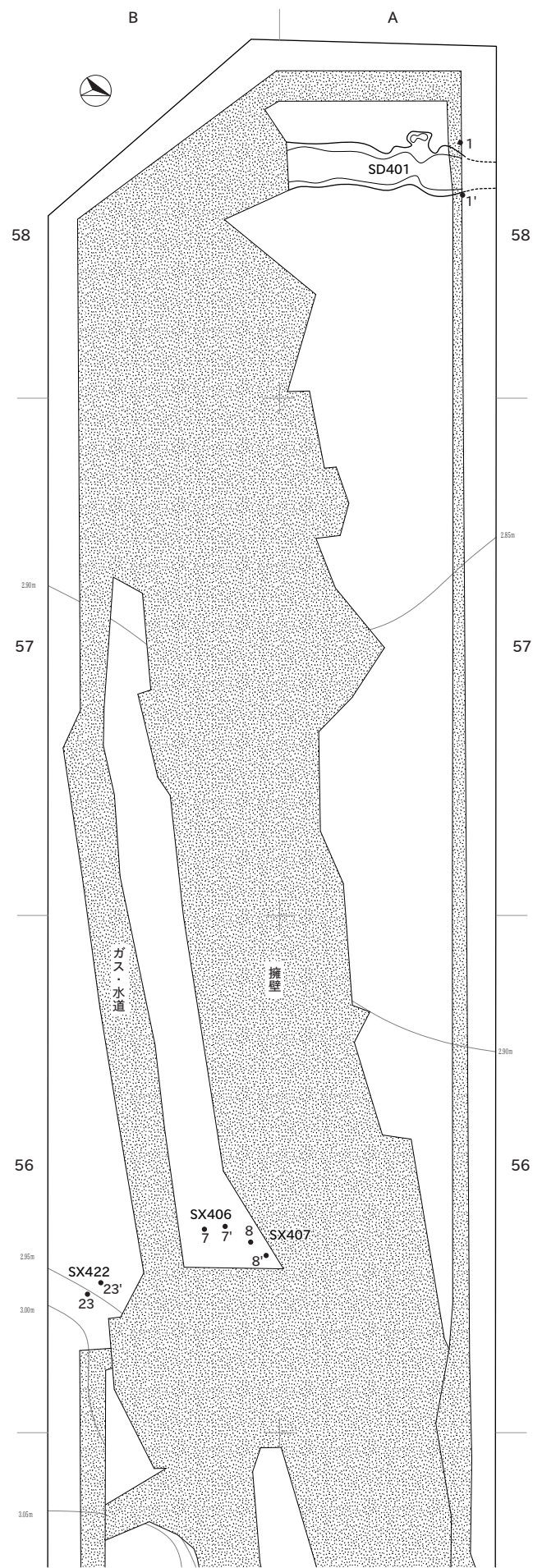
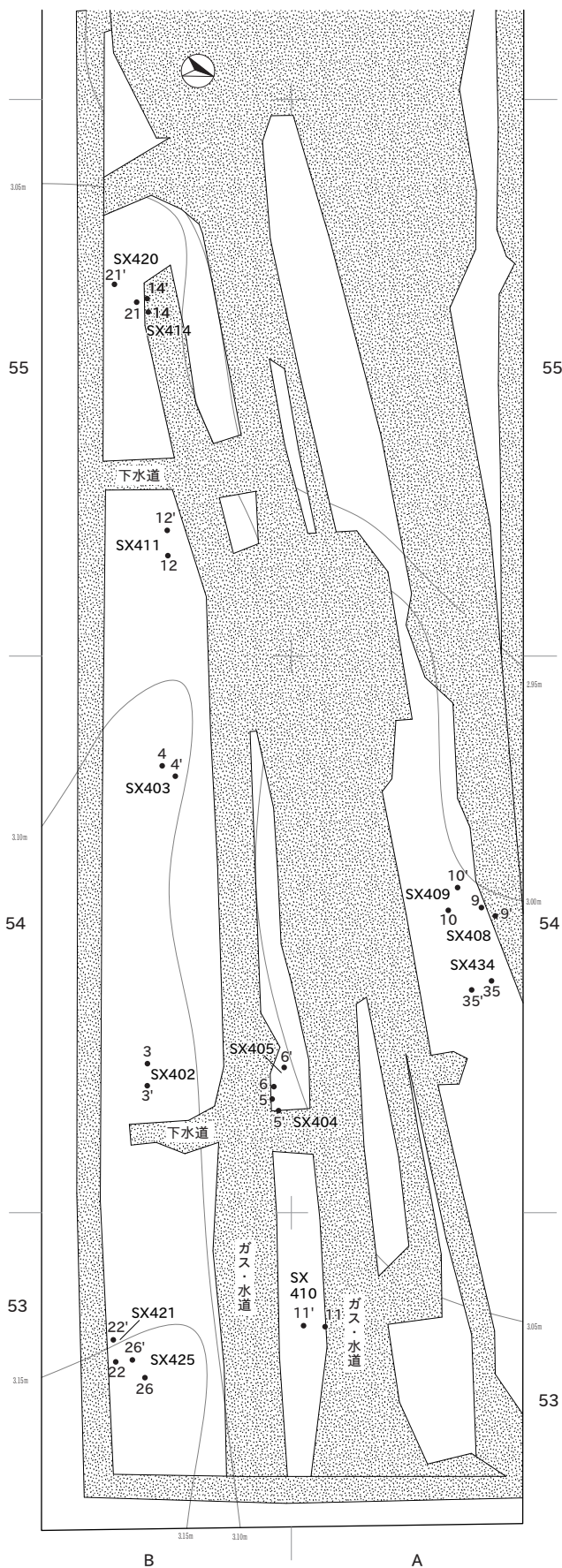
# 図 版

## 凡 例

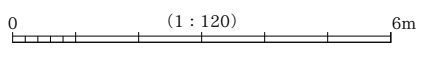
- 1 遺構全体図、遺構個別図（セクション図・平面図）において、木製品刺突集中範囲・畦畔・風倒木及び樹痕・攪乱部にスクリーントーンを貼付した。
- 2 遺構個別図において、箸状・棒状木製品等については基本的に断面図を上部、平面図を下部に配置した（SX428をのぞく）。
- 3 遺構個別図においては、検出層位に関係なくSD、SK、木製品刺突地点、畦畔（SX）、自然木、自然落ち込みの順に掲載した。
- 4 土器は、須恵器を断面塗りつぶし、ほかを白抜きとした。
- 5 石製品、木製品に付したスクリーントーンの凡例は、実測図とともに個別に示した。
- 6 木製品の木目は、木取りを表示したものであり、実際の年輪幅とは異なる。
- 7 遺物写真図版の縮尺は、図面図版とおおむね同じである。



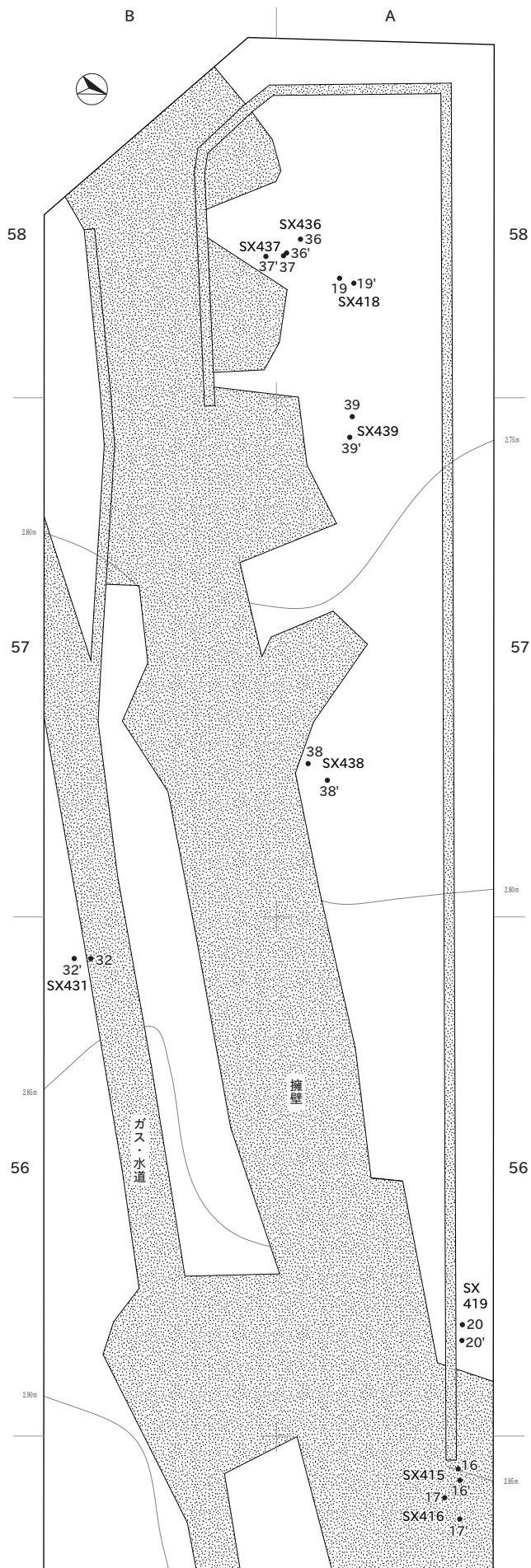
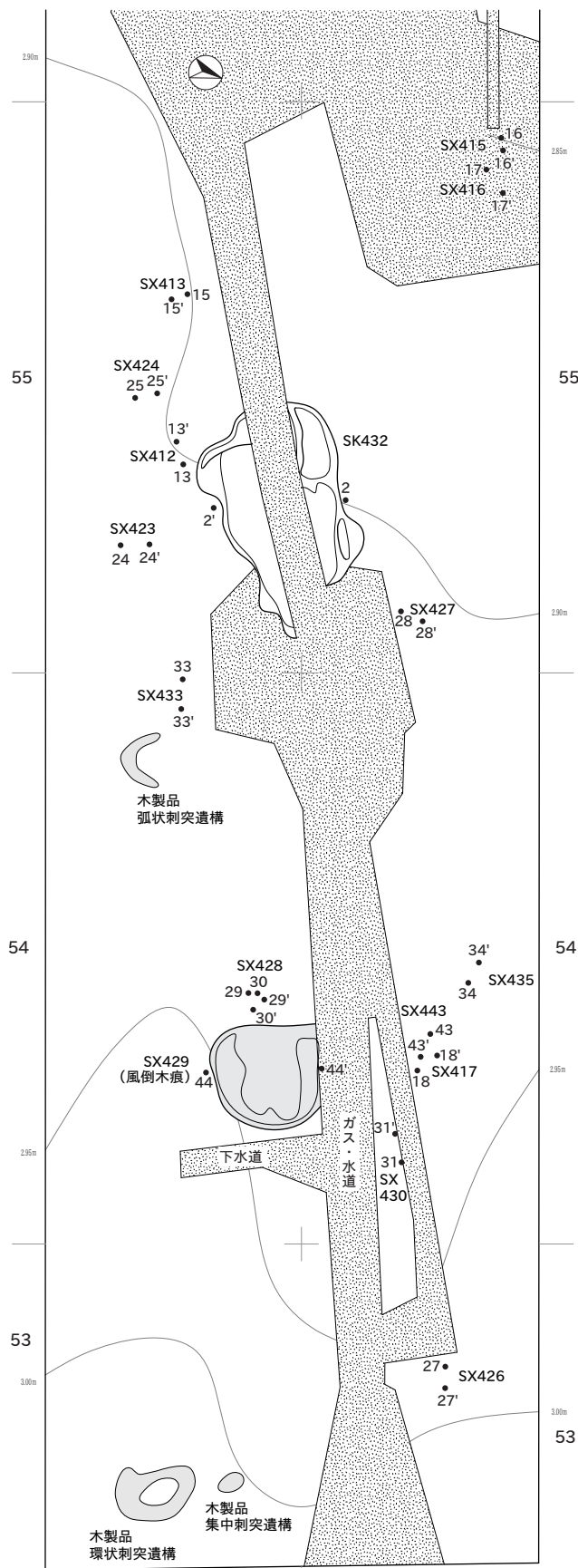
遺構全体図 (II b層)



■ : 攪乱・排水溝



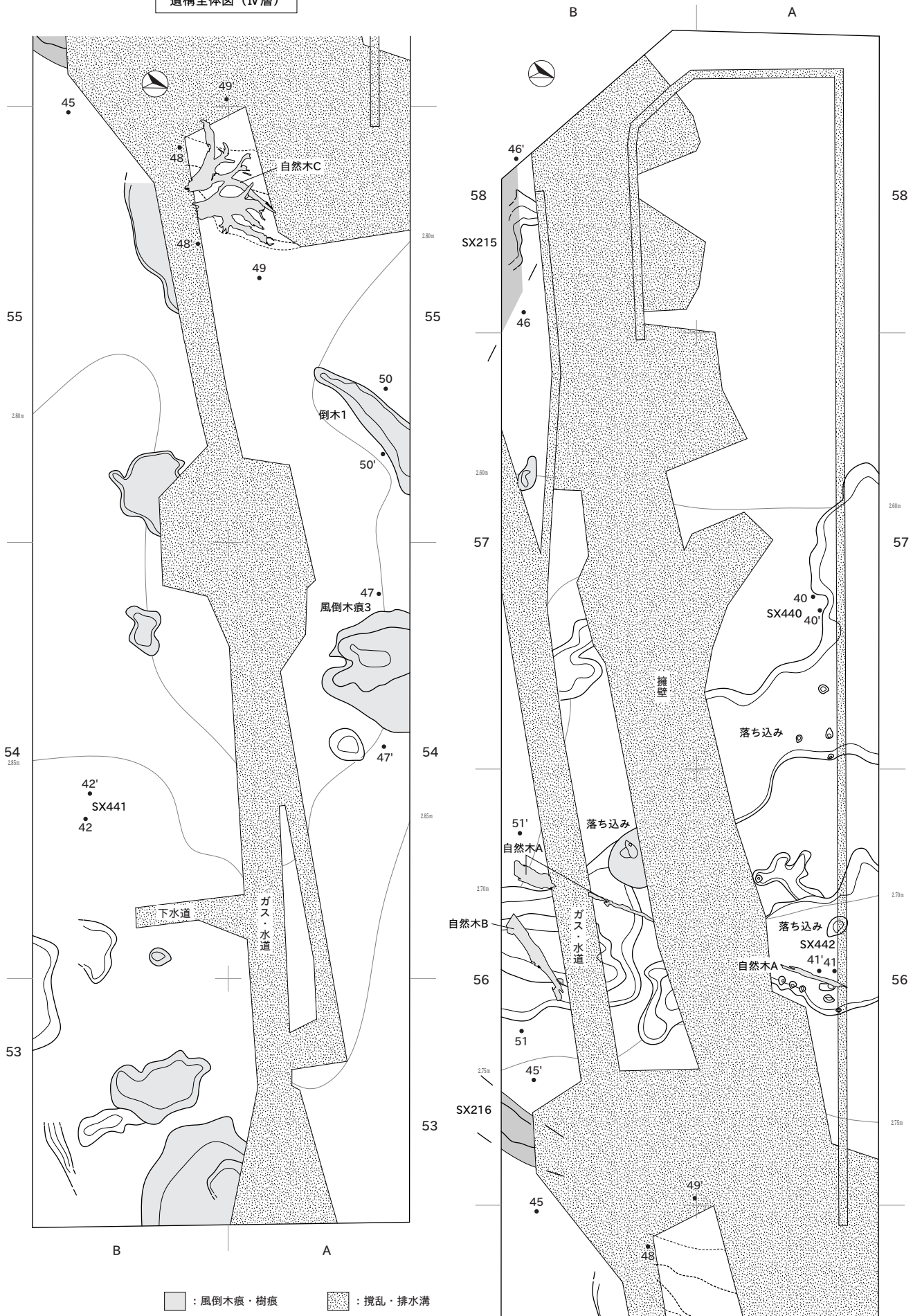
遺構全体図(Ⅲ層)



：攪乱・排水溝

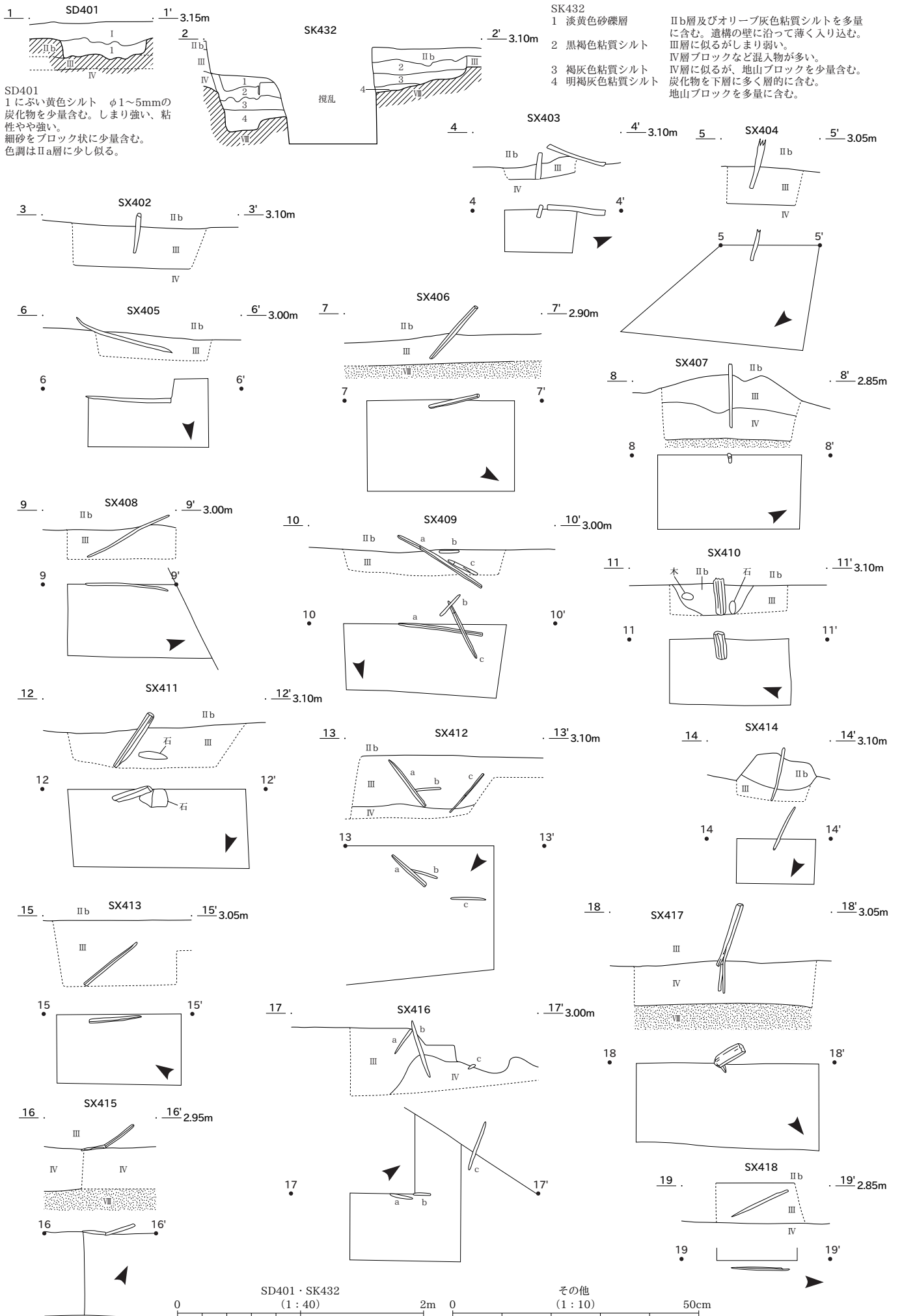
0 (1:120) 6m

遺構全体図 (IV層)

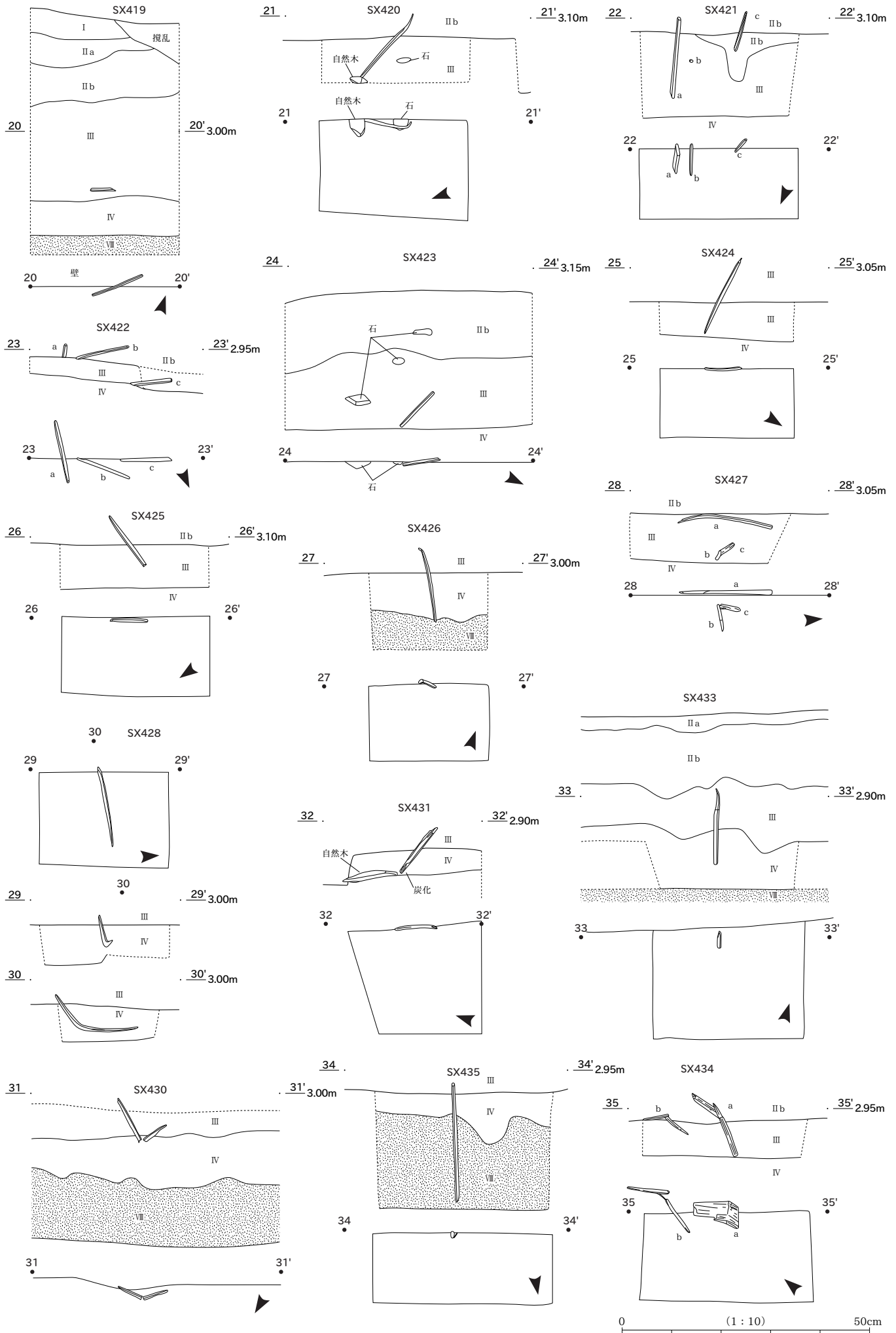


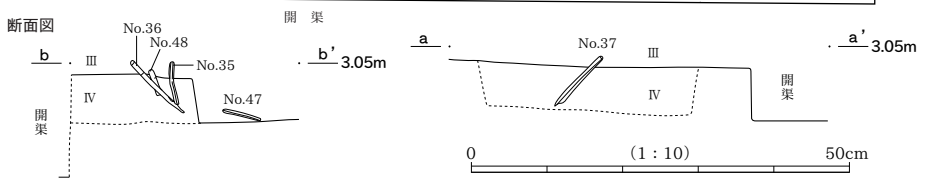
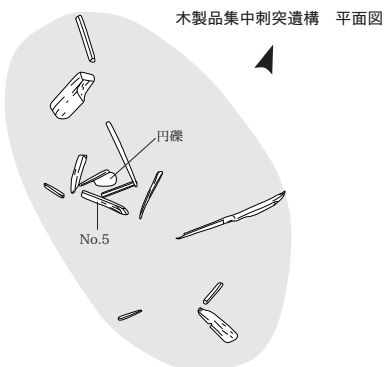
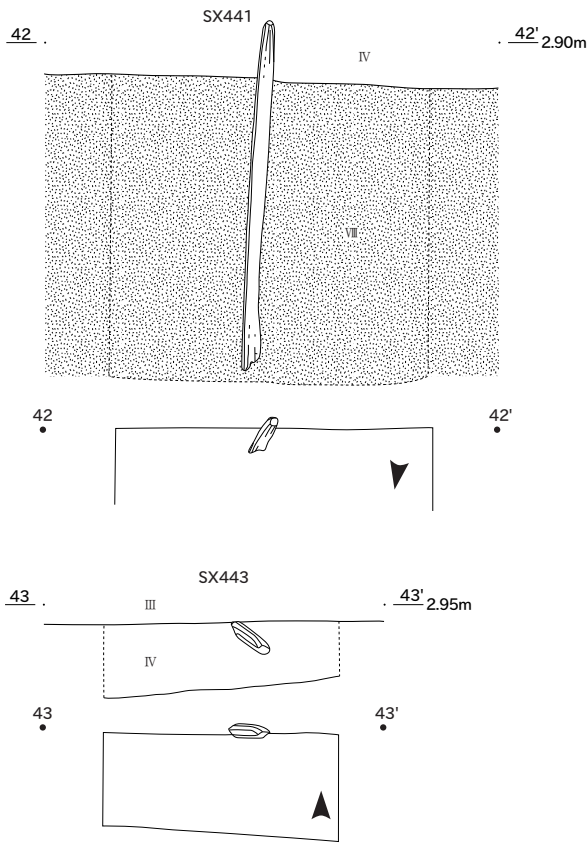
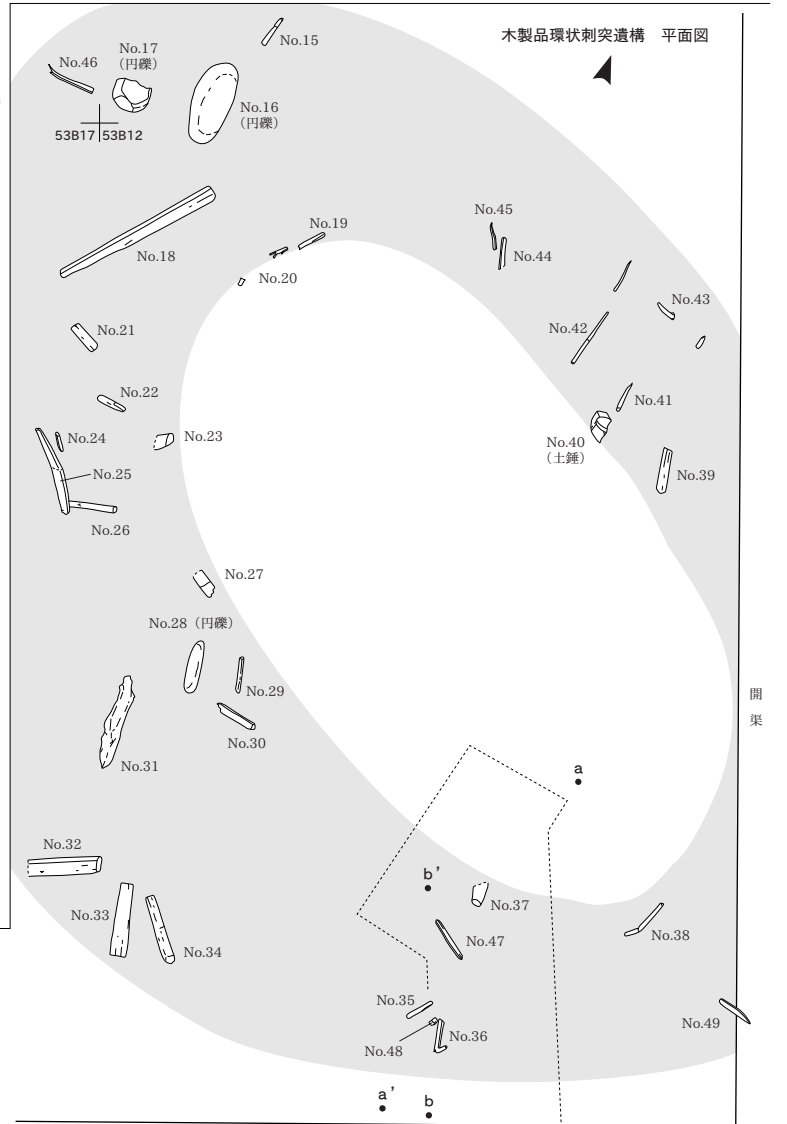
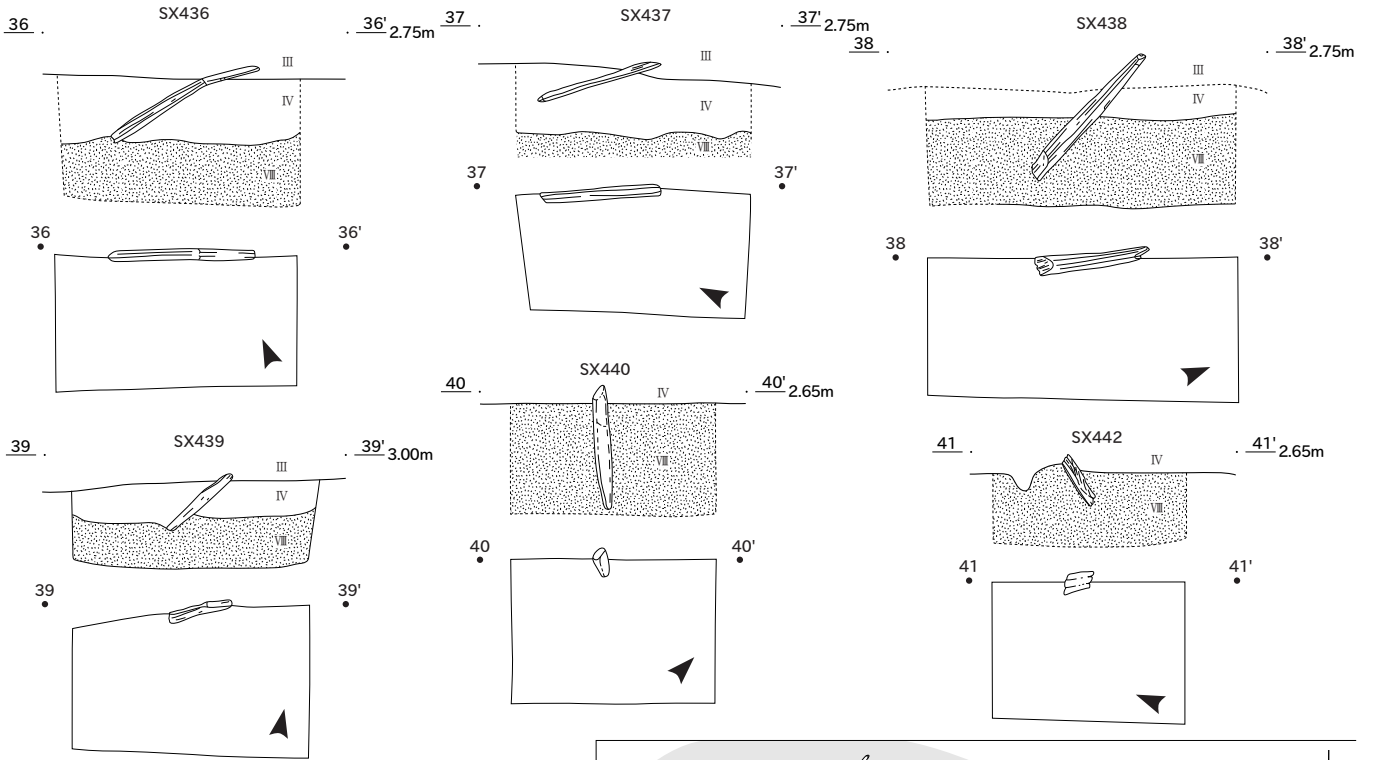
: 風倒木痕・樹痕
  : 攪乱・排水溝

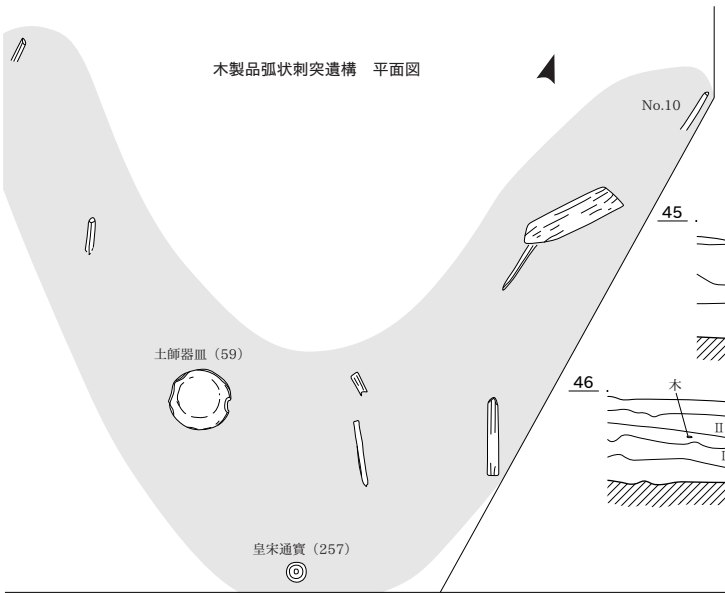
0 (1:120) 6m



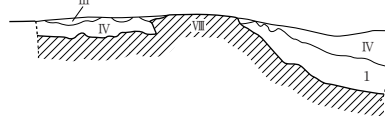






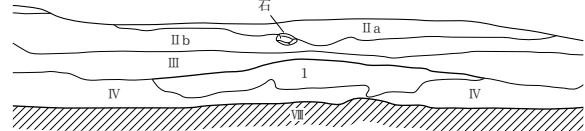


44 . SX429 . 44' 3.15m



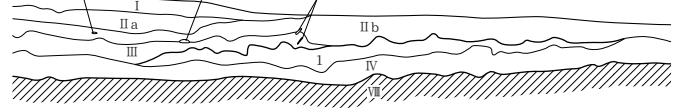
SX429  
1 暗オリーブ褐色粘質シルト 有機物をわずかに含む。  
IV層のシルトブロックをごくわずかに含む。

45 . SX216 . 45' 3.40m



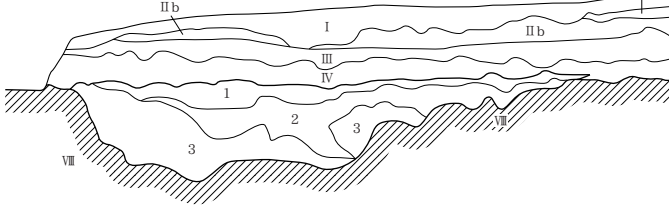
SX216  
1 褐灰色シルト IV層に似るが、有機物を多く含みしまりが無い。  
粘性が弱く色調が暗い。畦畔の盛り上げ土。

46 . SX215 . 46' 3.20m



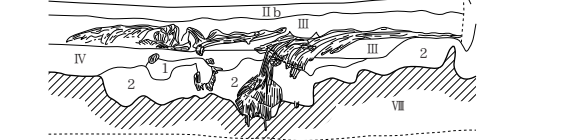
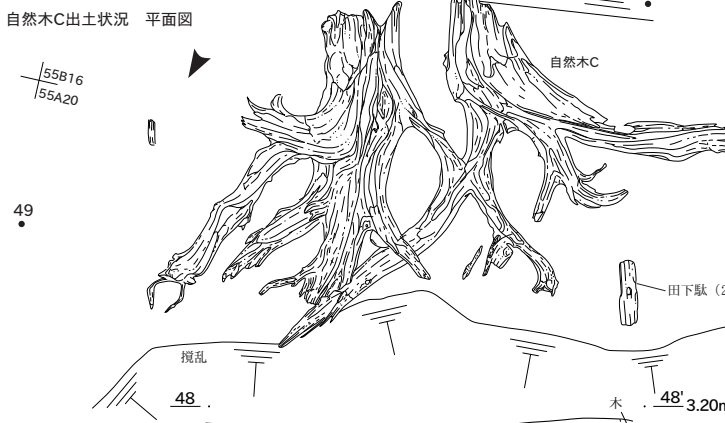
SX215  
1 褐灰色粘質シルト IV層に似るが色調が暗く、若干しまり弱く粘性強い。  
黄灰色粘質シルトブロックを多量に含む。  
畦畔の盛り上げ土。

47 . 風倒木痕3 . 47' 3.30m



風倒木痕3  
1 褐灰色粘質シルト IV層より色調が薄く、しまり弱い。炭化物わずか。  
2 灰褐色粘質シルト 有機物を多量に含む。しまり極めて弱い。  
3 灰オリーブ色シルト 灰褐色の有機物ブロックを多量に含む。しまり弱い。

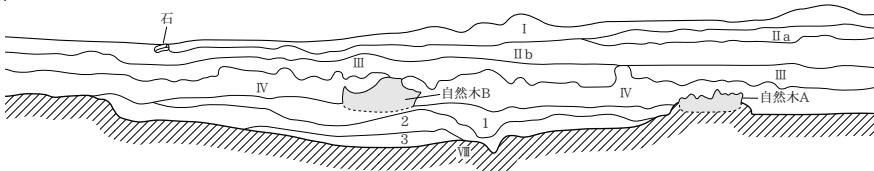
48 . 自然木C出土状況 平面図 . 48' 3.20m



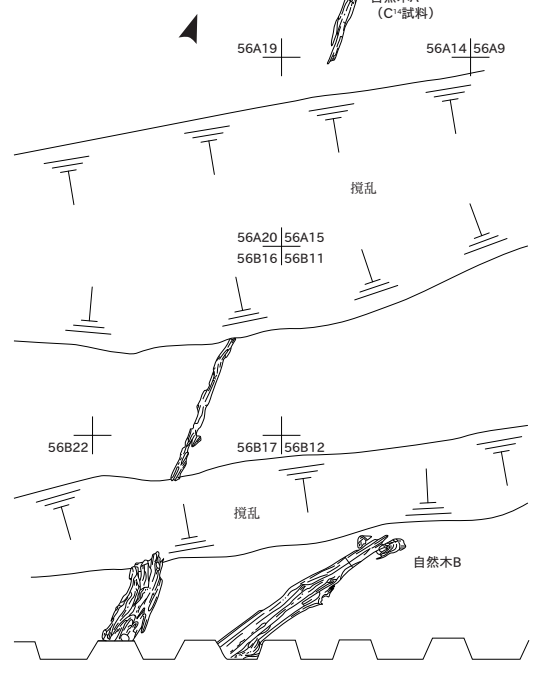
49 . 自然木1 . 49' 3.20m

自然木1  
1 黄褐色粗砂層 粗砂の層。  
2 褐灰色粘土 IV層より色調が薄い。φ5mmの炭化物を多く含む。粘性強い。

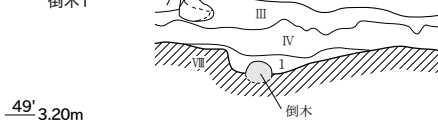
51 . 自然木A-B-自然落ち込み 断面図 . 51' 3.30m



自然木A-B出土状況 平面図

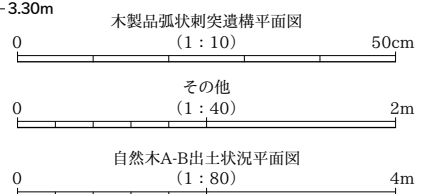


倒木1 . 50' 3.10m

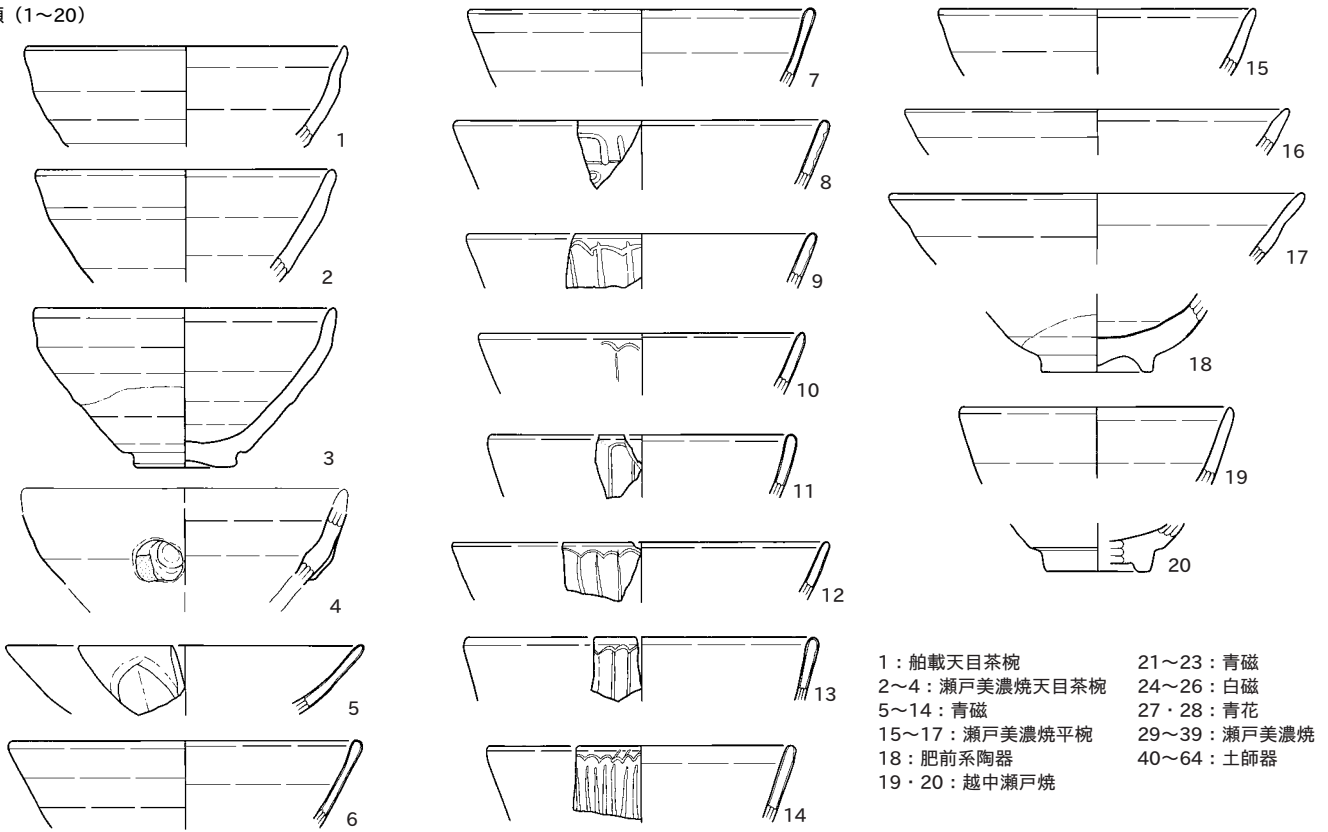


倒木1  
1 褐灰色粘質シルト 炭化物を少量含み、しまり弱い。  
自然木が横たわる。

自然落ち込み  
1 褐灰色粘質シルト IV層より色調が薄く、しまり弱い。  
φ2mmの炭化物・有機物を多く含む。  
2 褐灰色粘質シルト 1層より色調が薄く、紫が強い。  
炭化物を少量含む。  
3 オリーブ灰色シルト 炭化物を少量含む。粘性が強い。

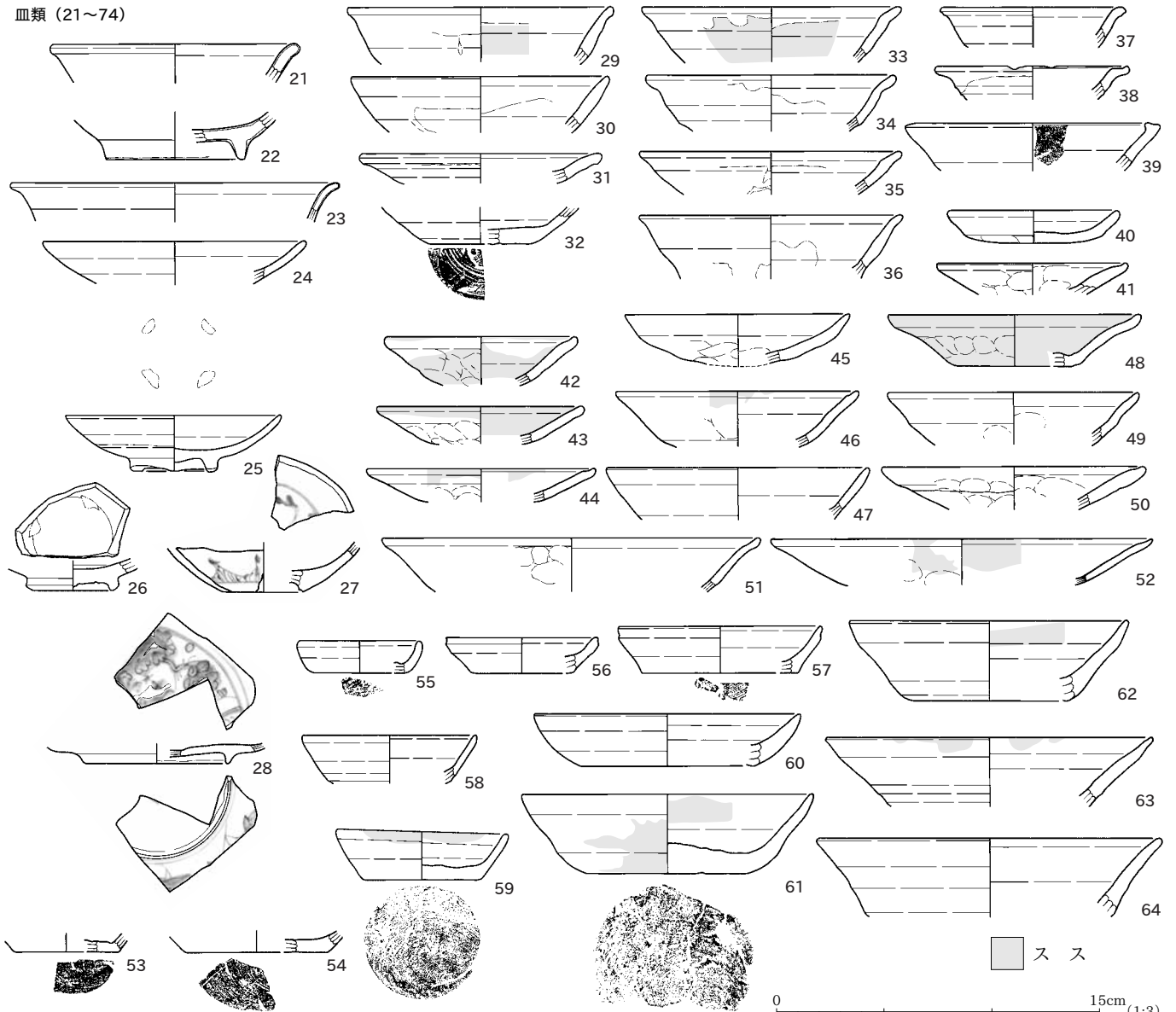


椀類 (1~20)



- 1 : 船載天目茶椀
- 2~4 : 瀬戸美濃焼天目茶椀
- 5~14 : 青磁
- 15~17 : 瀬戸美濃焼平椀
- 18 : 肥前系陶器
- 19・20 : 越中瀬戸焼
- 21~23 : 青磁
- 24~26 : 白磁
- 27・28 : 青花
- 29~39 : 瀬戸美濃焼
- 40~64 : 土師器

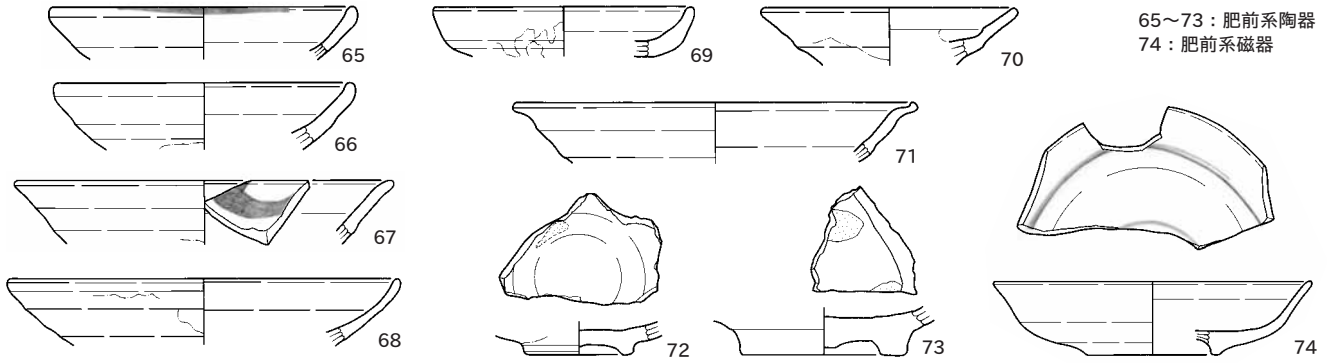
皿類 (21~74)



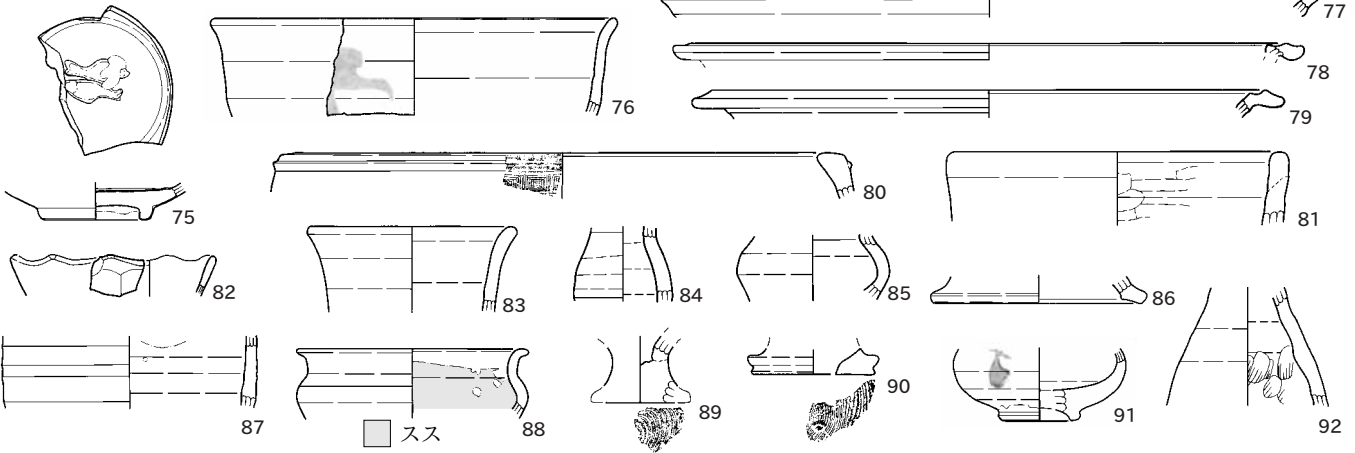
ス ス

0 15cm (1:3)

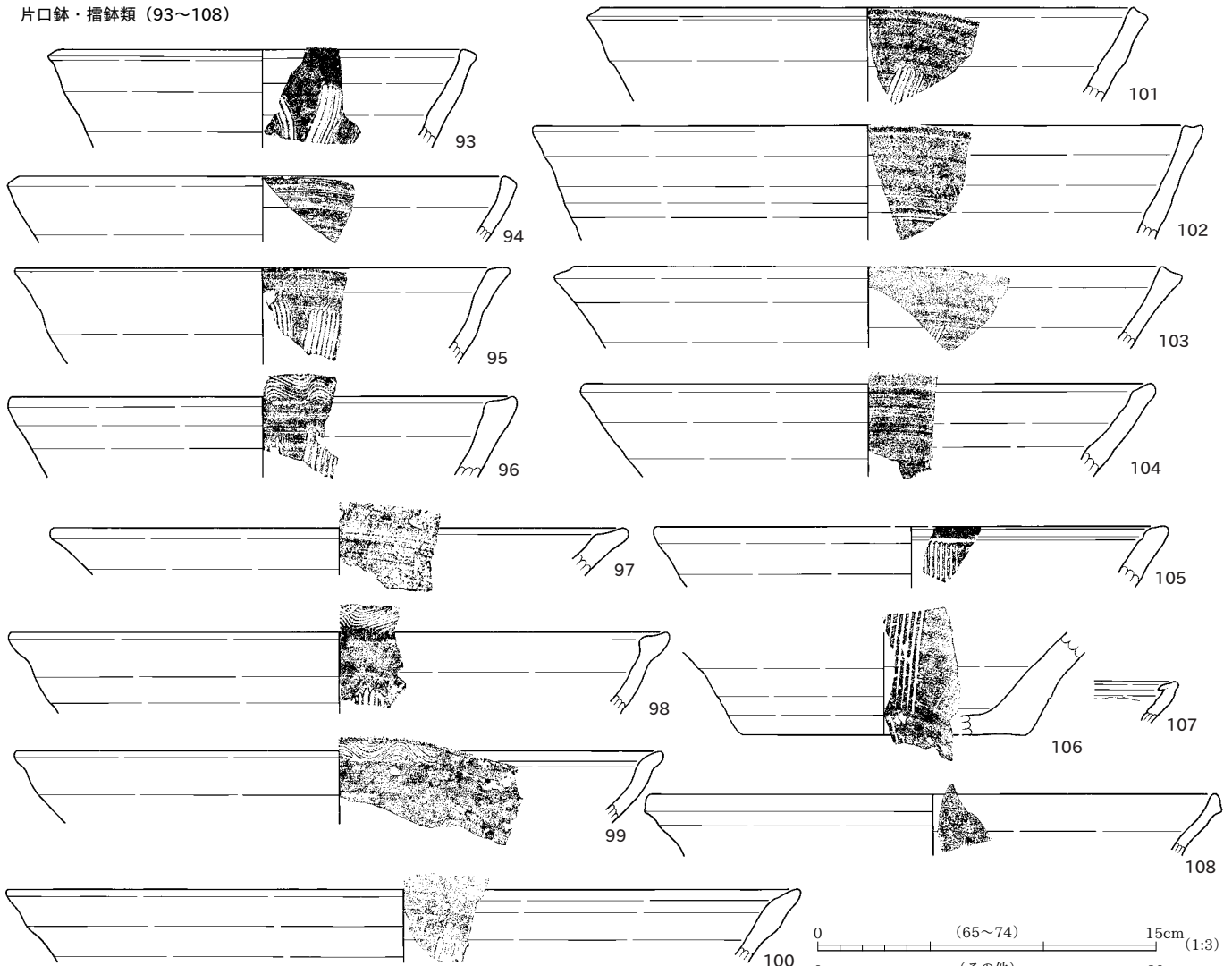
65~73: 肥前系陶器  
74: 肥前系磁器



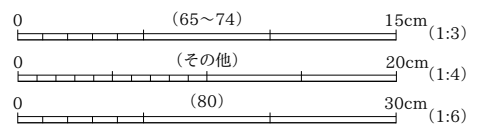
盤・鉢・瓦器・杯・瓶類・香炉 (75~92)



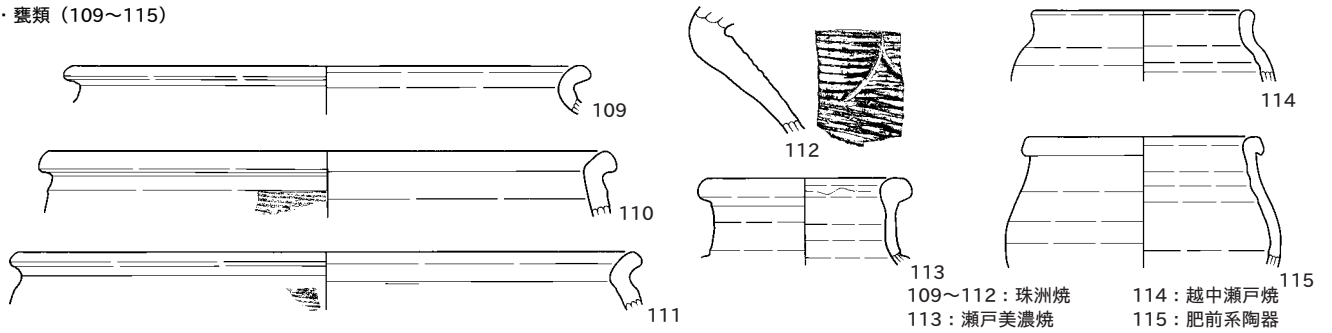
片口鉢・播鉢類 (93~108)



93~104: 珠洲焼 105・106: 越前焼 107: 肥前系陶器 108: 越中瀬戸焼



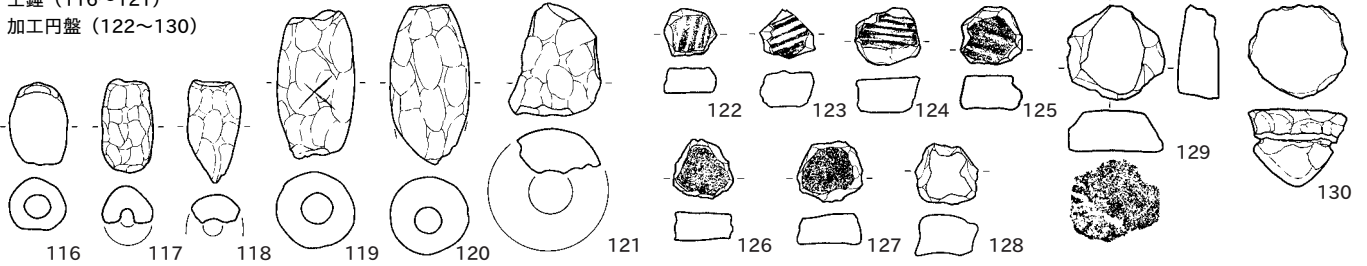
壺・甕類 (109～115)



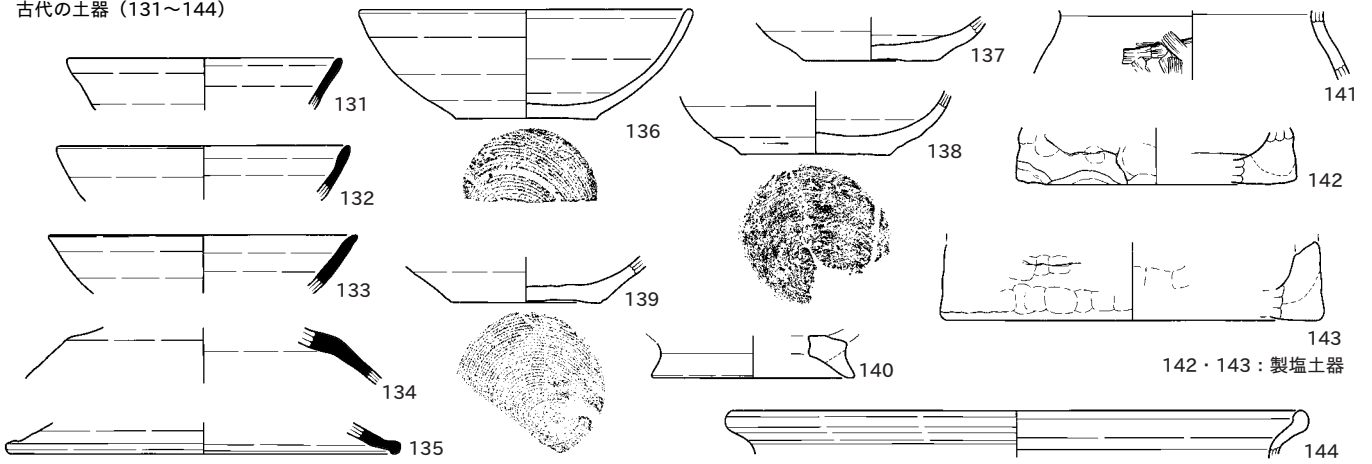
109～112: 珠洲焼  
113: 瀬戸美濃焼  
114: 越中瀬戸焼  
115: 肥前系陶器

土錘 (116～121)

加工円盤 (122～130)

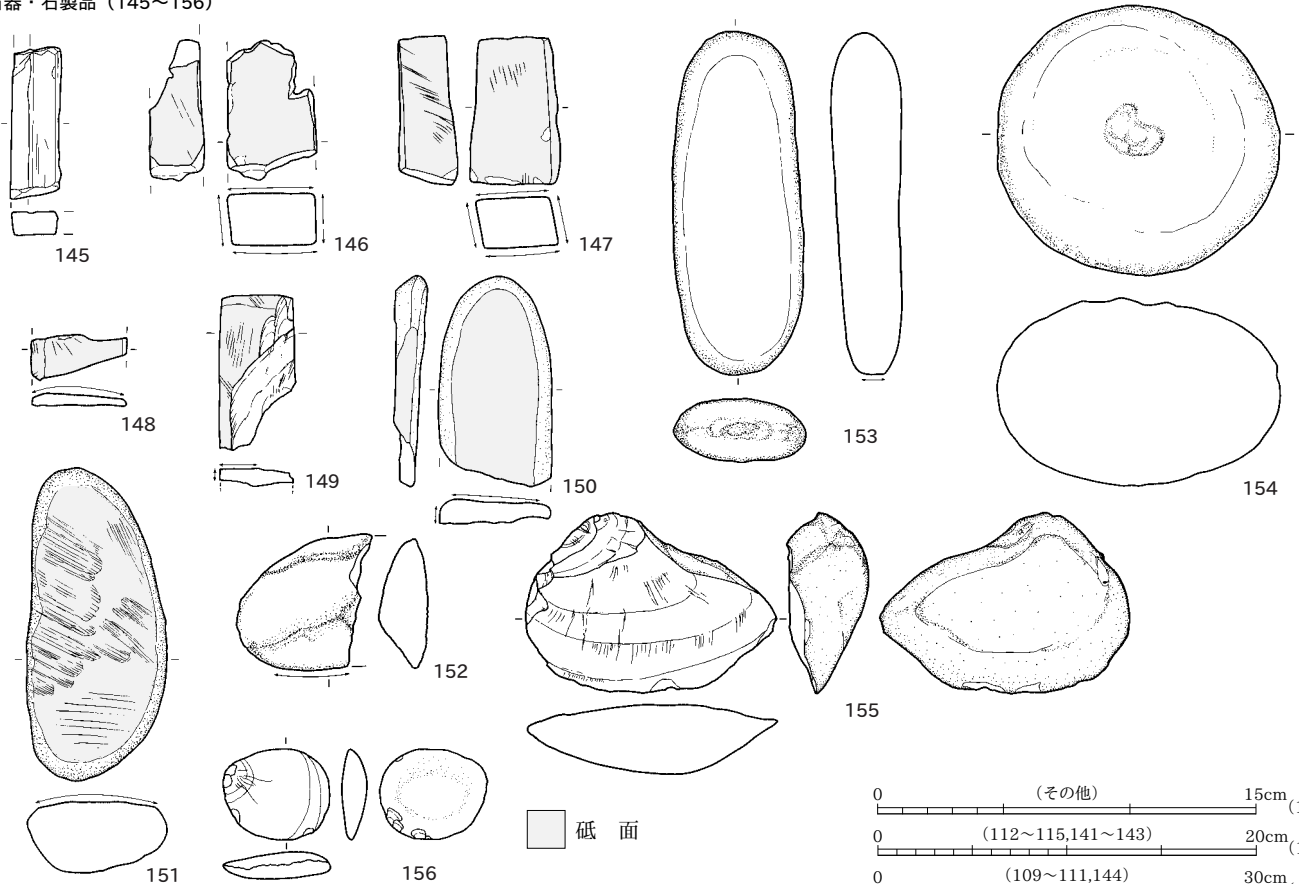


古代の土器 (131～144)

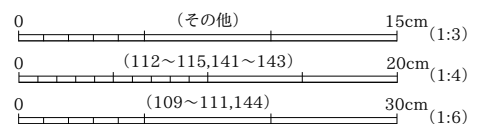


142・143: 製塩土器

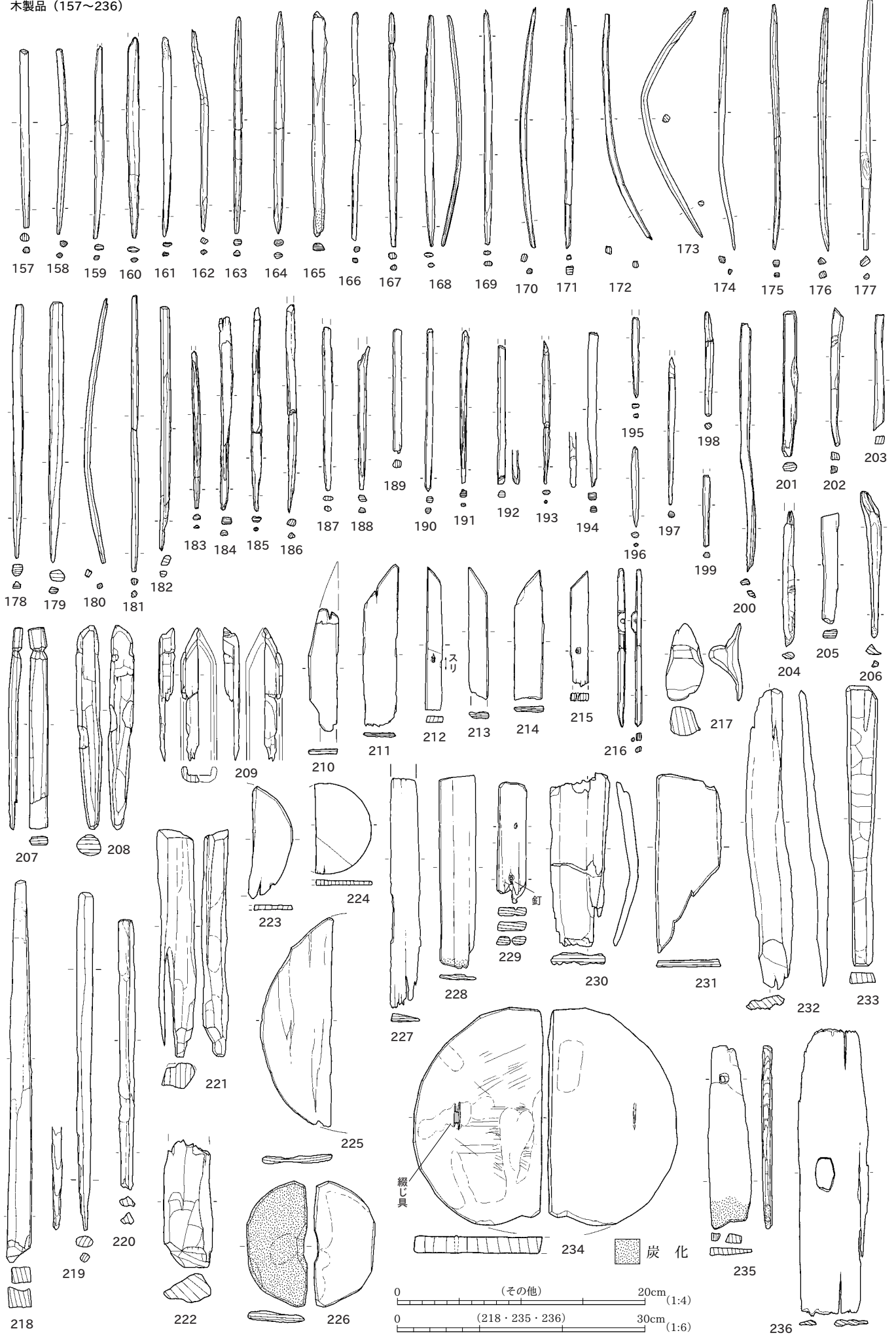
石器・石製品 (145～156)



砥面



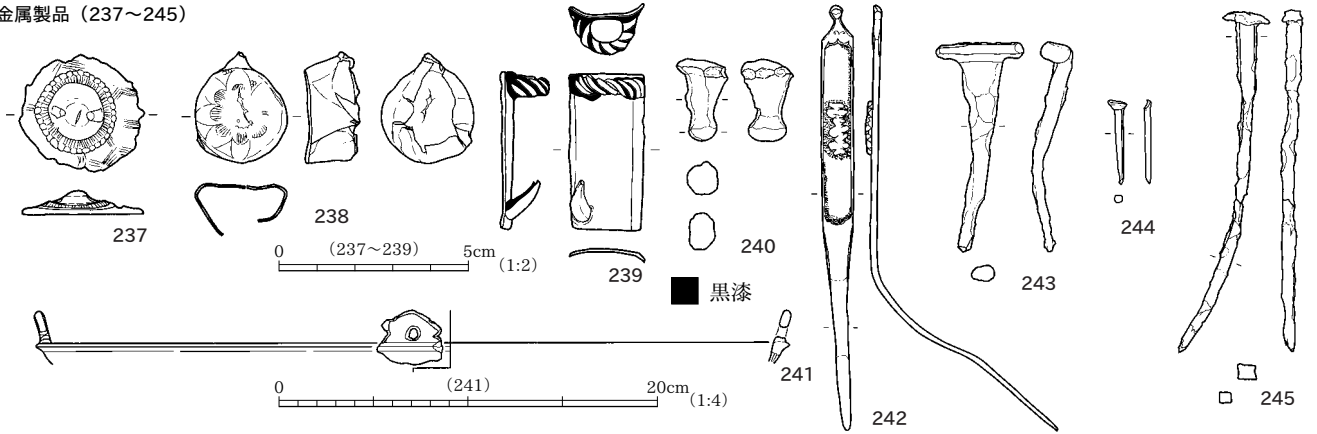
木製品 (157~236)



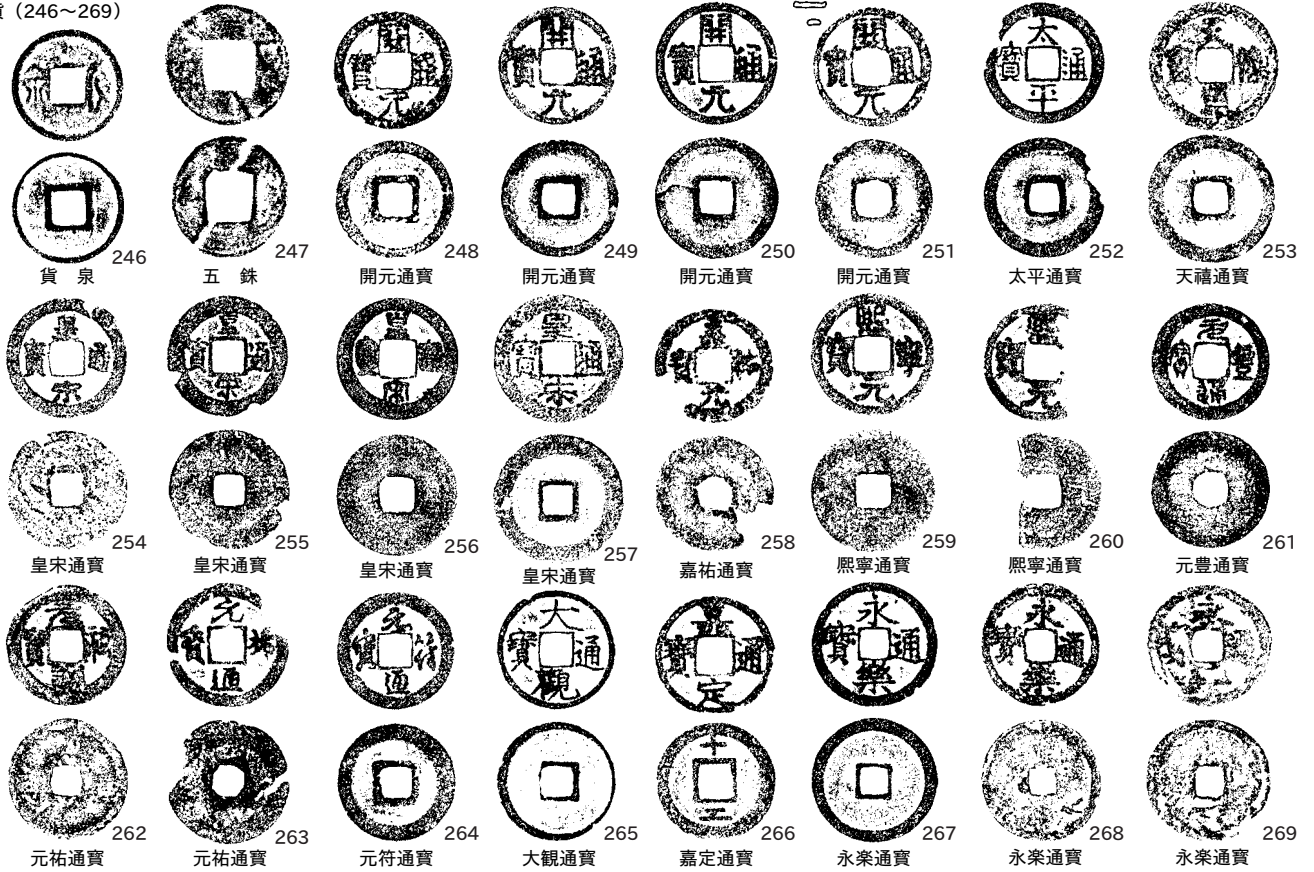
0 (その他) 20cm (1:4)  
 0 (218・235・236) 30cm (1:6)

炭化

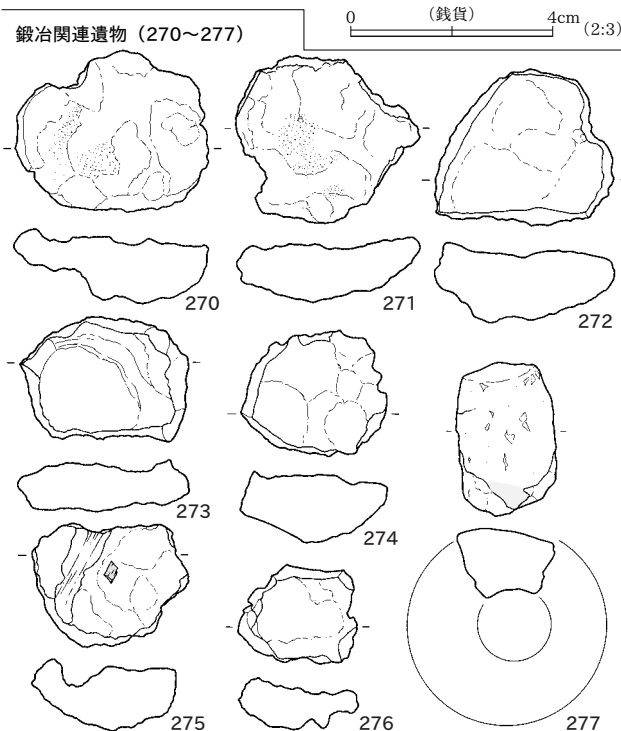
金属製品 (237~245)



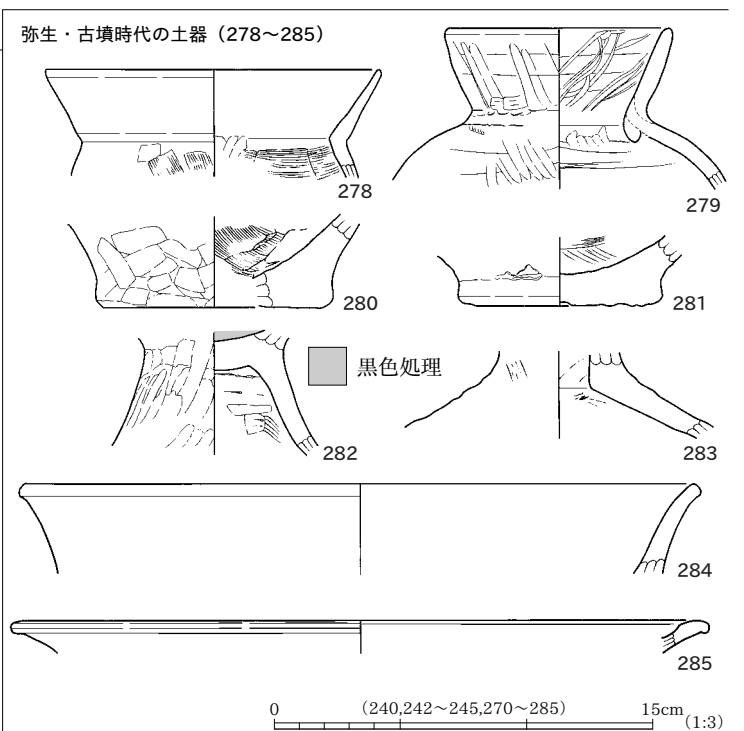
銭貨 (246~269)



鍛冶関連遺物 (270~277)



弥生・古墳時代の土器 (278~285)







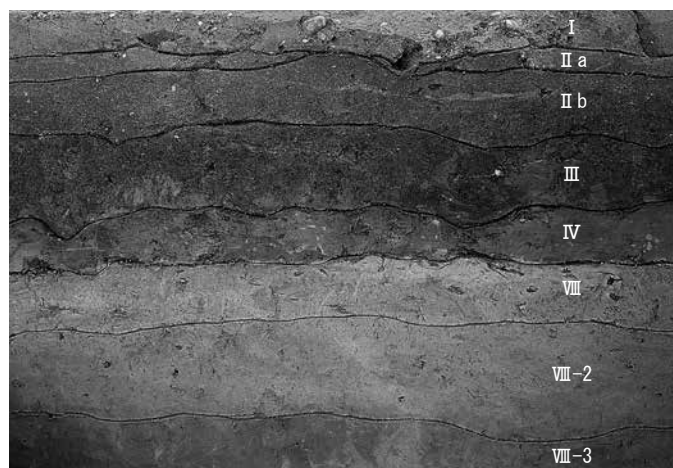
調査区全景(西上空から)



IV層完掘(東から)



III層完掘(東から)



基本層序(北から)



SD401完掘(南から)



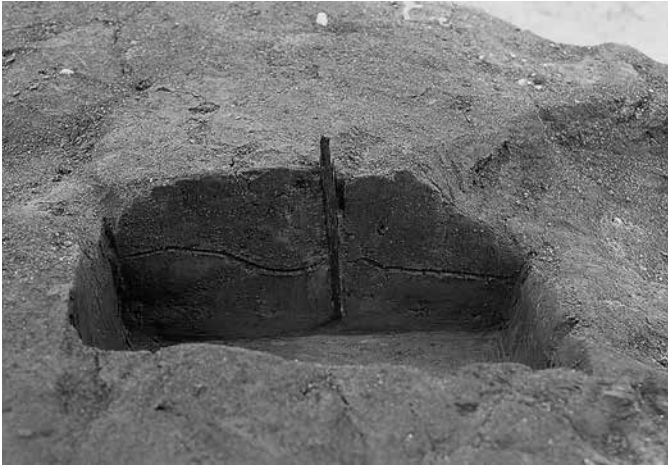
SD401セクション(南から)



箸状木製品(189)の検出状況[SX406](南から)



箸状木製品(169)検出状況[SX408](東から)



箸状木製品 (187) 検出状況 [SX407] (南東から)



箸状木製品 (190～192) 検出状況 [SX422] (東から)



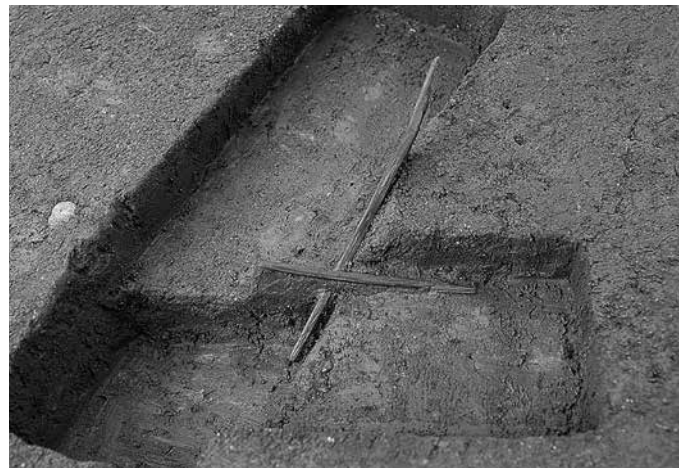
箸状木製品 (193～195) 検出状況 [SX412] (北東から)



箸状木製品 (185) 検出状況 [SX430] (北から)



箸状木製品 (196・197) 検出状況 [SX416] (南東から)



箸状木製品 (182・183) 検出状況 [SX409] (西から)



箸状・板状木製品 (198・199・228) 検出状況 [SX421] (西北から)



箸状・板状木製品 (186・230) 検出状況 [SX434] (南西から)



板状木製品 (220) 検出状況 [SX436・437] (西から)



火付け木 (204) 検出状況 [SX431] (西から)



舟形木製品 (209) 検出状況 [SX443] (南から)



人形木製品 (207) 出土状況 (北から)



木製品環状刺突遺構 検出状況 (西から)



木製品環状刺突遺構 検出状況近景 (北西から)



木製品集中刺突遺構 検出状況 (西から)



木製品弧状刺突遺構 土師器皿・銭貨出土状況 (南西から)



中世の土坑 [SK432] 完掘 (南東から)



古墳時代の畦畔 [SX215] セクション (北から)



古墳時代の畦畔 [SX216] 検出状況 (北から)



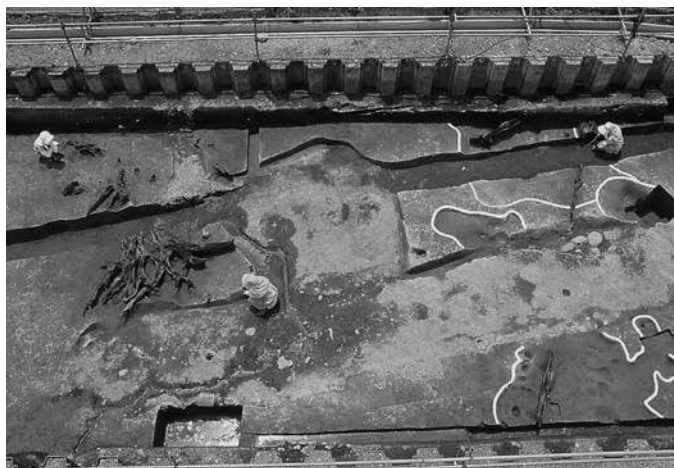
古墳時代の畦畔 [SX216] 完掘状況 (北東から)



古墳時代の畦畔 [SX216] とその周辺 (北から)



自然木 C セクション (南から)



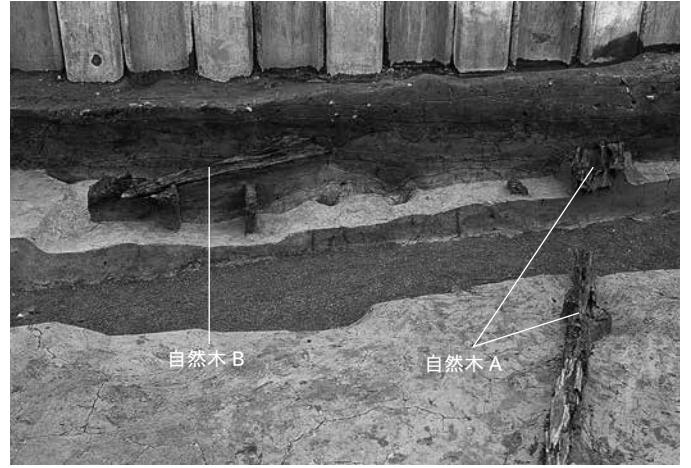
自然木 A・B・C とその周辺 完掘状況 (北から)



自然木 C 除去後の地山の盛り上がり (北東から)



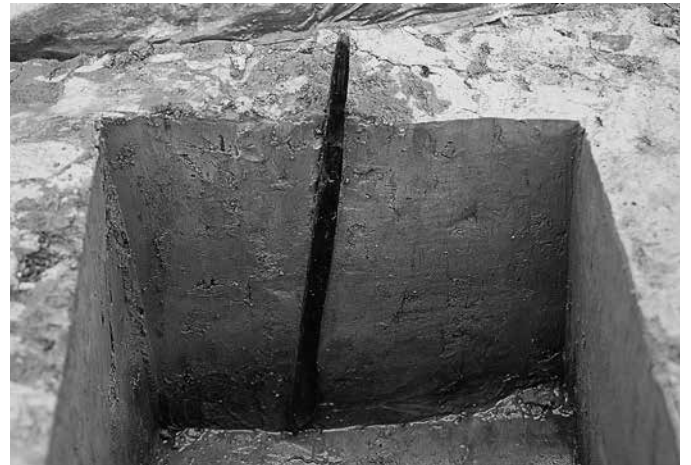
弥生中期末頃の自然木 A 検出状況 (北から)



自然落ち込みと自然木 A・B セクション (北から)



自然木 A と地山の盛り上がり (北から)



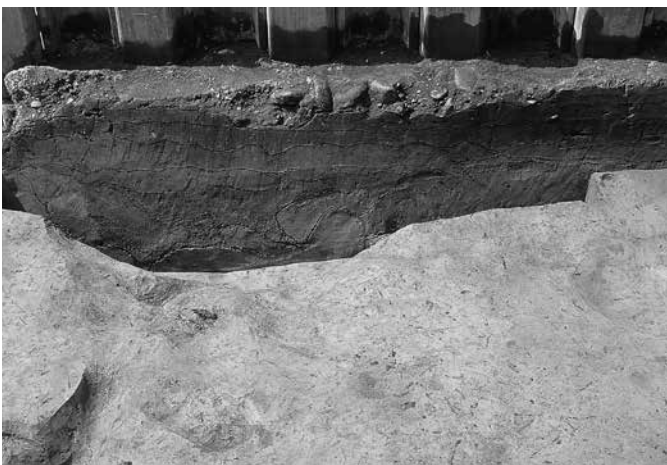
杭状木製品 (218) 断ち割り状況 [SX441]



風倒木痕のセクション [SX429] (南東から)



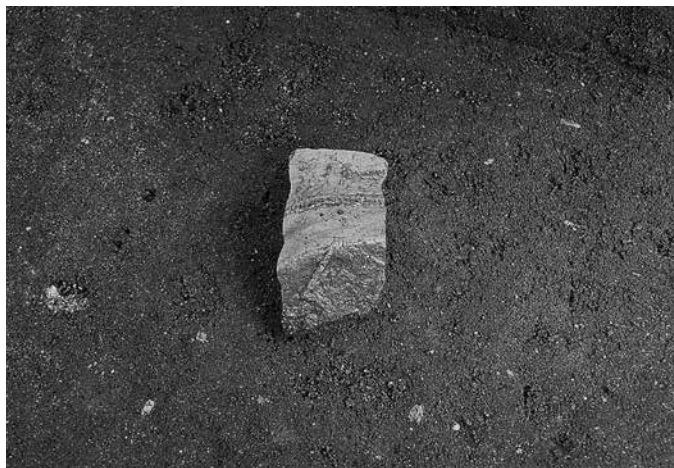
風倒木痕 [SX429] 完掘状況 (東から)



風倒木痕 3 のセクション (南から)



倒木 1 検出状況 (南西から)



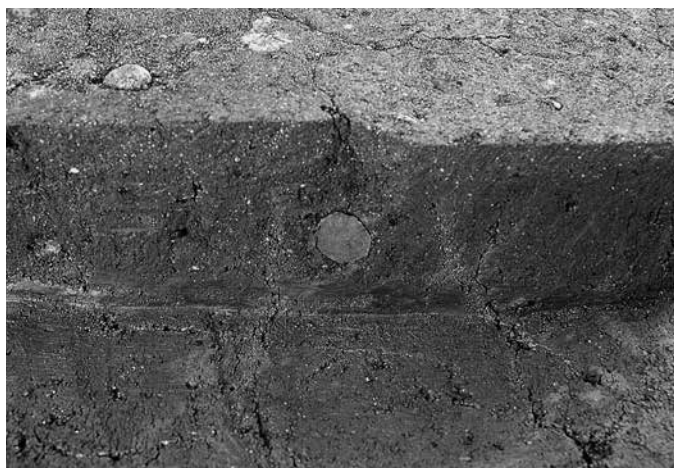
越前焼播鉢 (106) 出土状況 [Ⅱ b層] (東から)



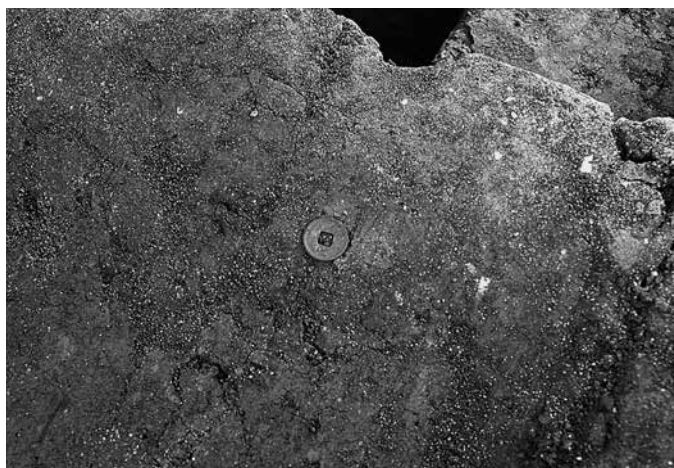
銅製筈 (242) 出土状況 [Ⅱ b層] (南から)



銅製品 (239) 出土状況 [Ⅲ層] (南から)



銅鏡紐 (237) 出土状況 [Ⅲ層] (北東から)



錢貨「貨泉」(246) 出土状況 [Ⅱ b層] (南東から)



曲物底板 (234) 出土状況 [Ⅱ b層] (西から)

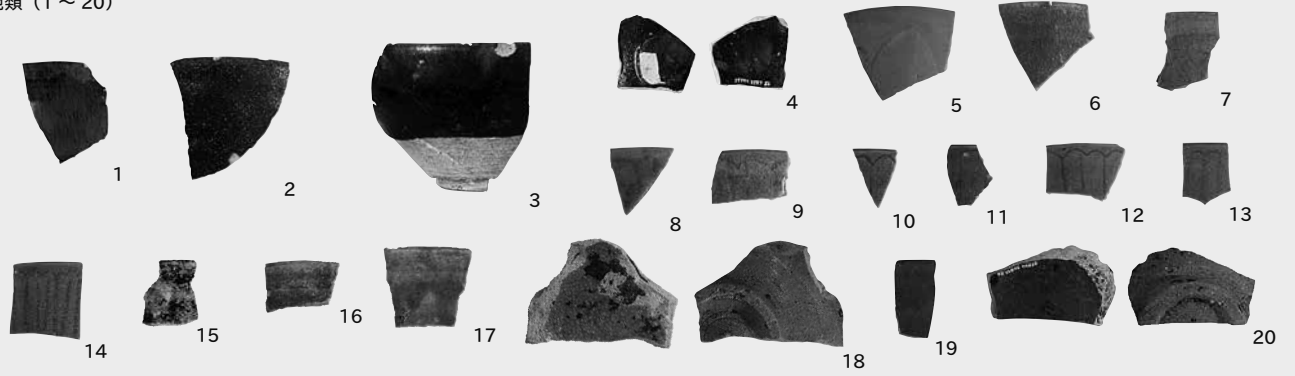


田下駄 (236) 出土状況 [Ⅳ層] (西から)

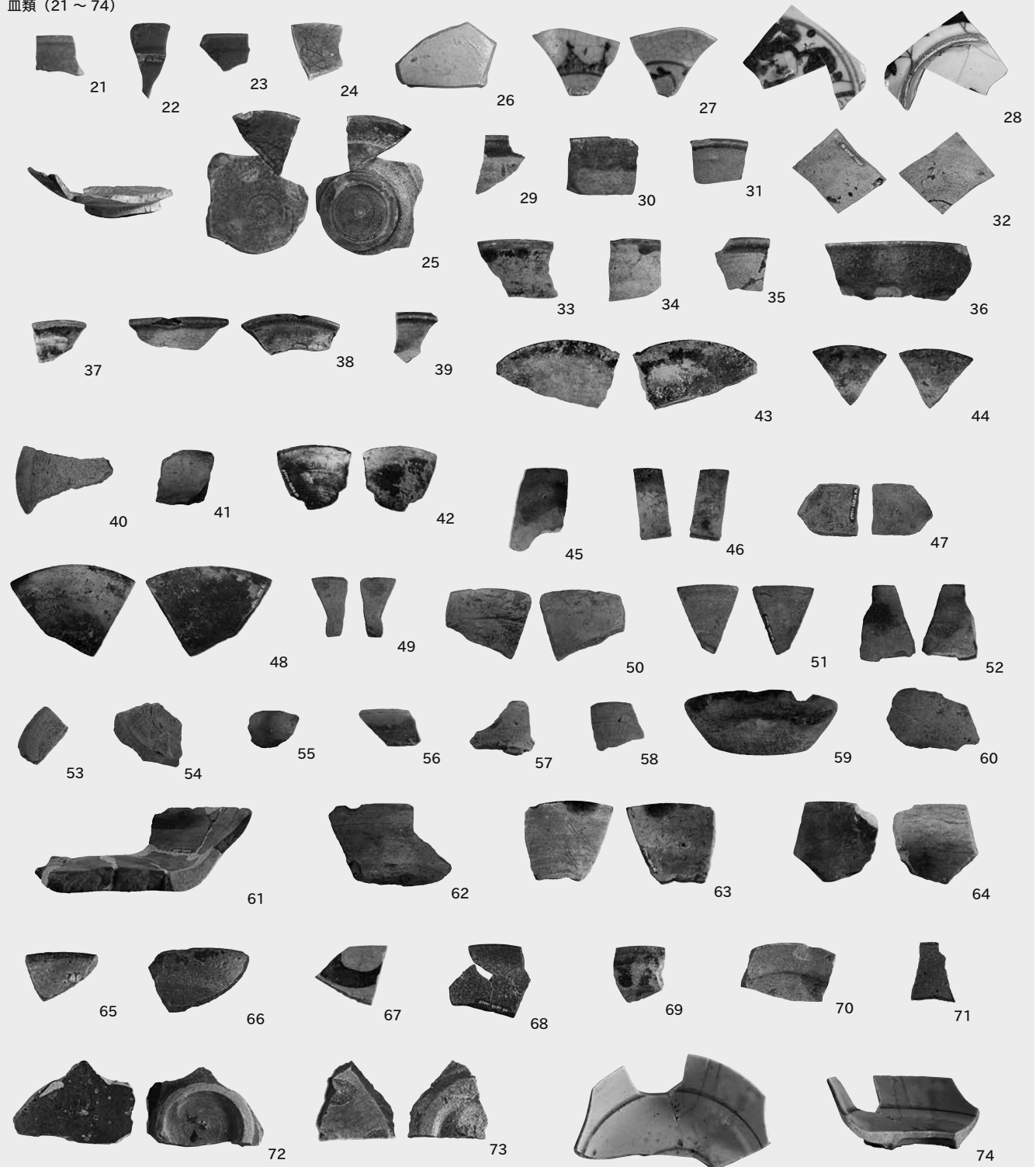


古墳時代の土器 (284) 出土状況 [Ⅳ層] (南から)

中・近世の土器・陶磁器  
椀類 (1 ~ 20)

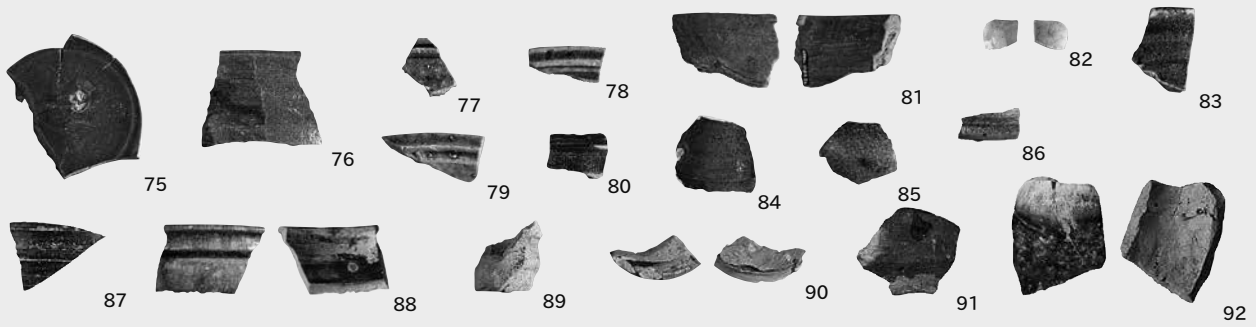


皿類 (21 ~ 74)

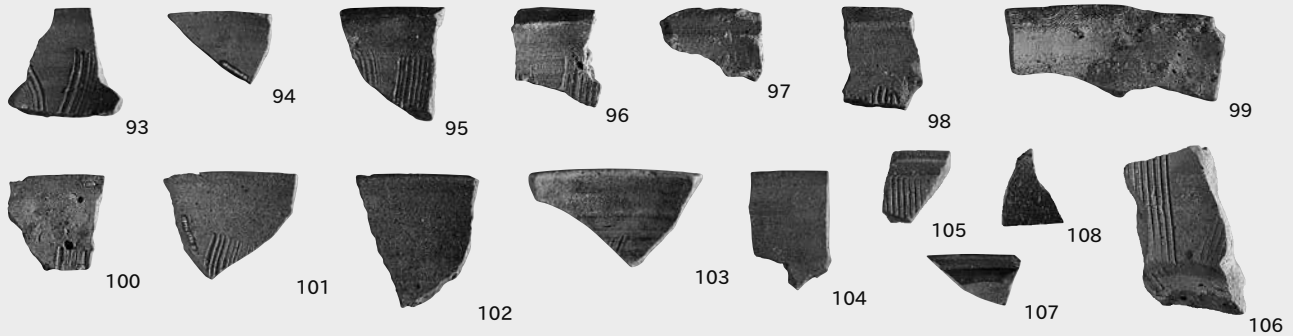


古代～近世の土器・陶磁器

盤・鉢・瓦器・杯・瓶類・香炉 (75～92)



片口鉢・播鉢類 (93～108)



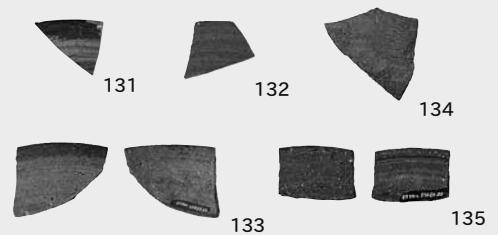
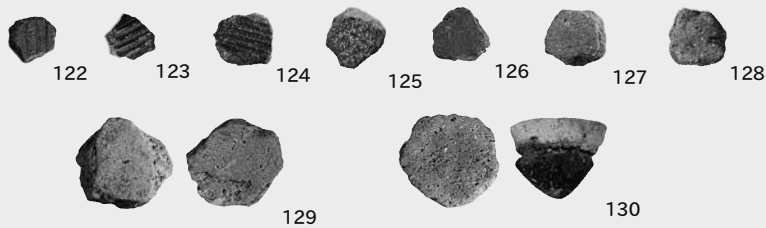
壺・甕類 (109～115)



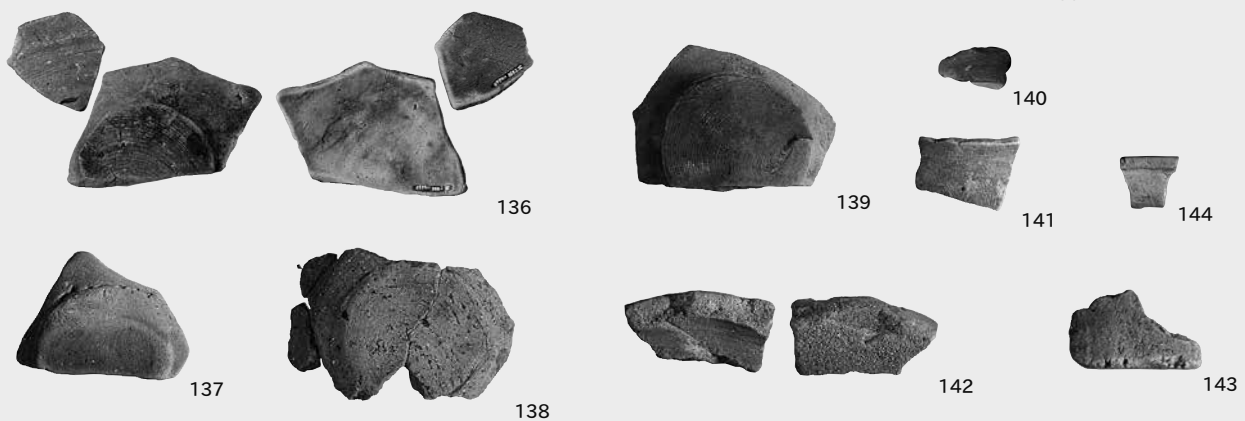
土錘 (116～121)



加工円盤 (122～130)



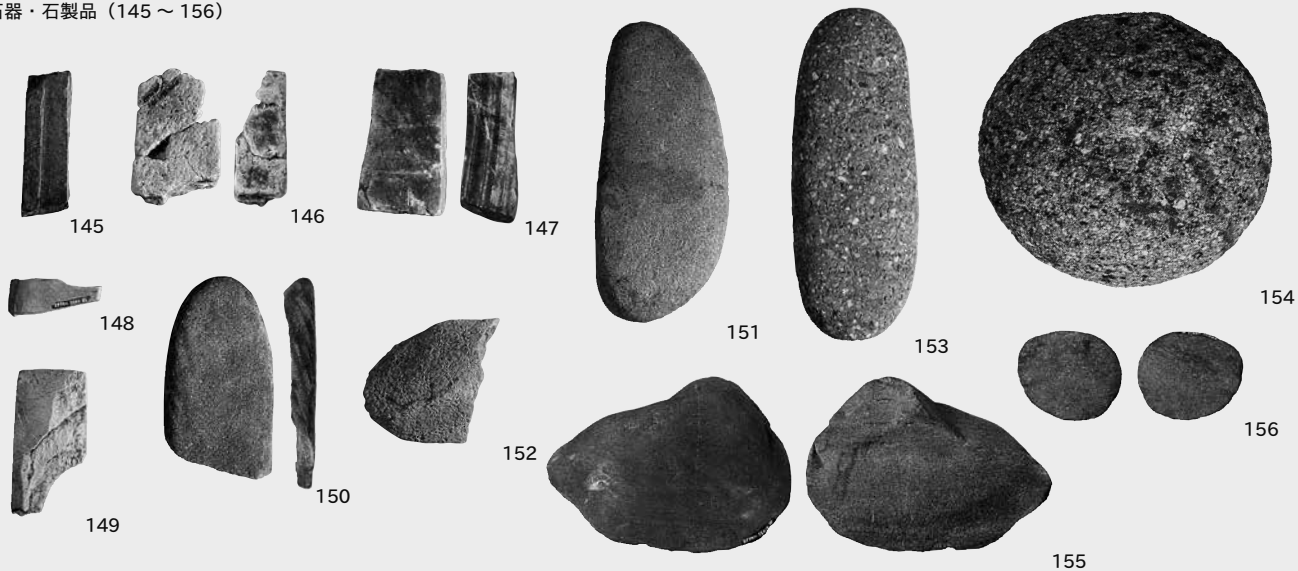
古代の土器 (131～144)



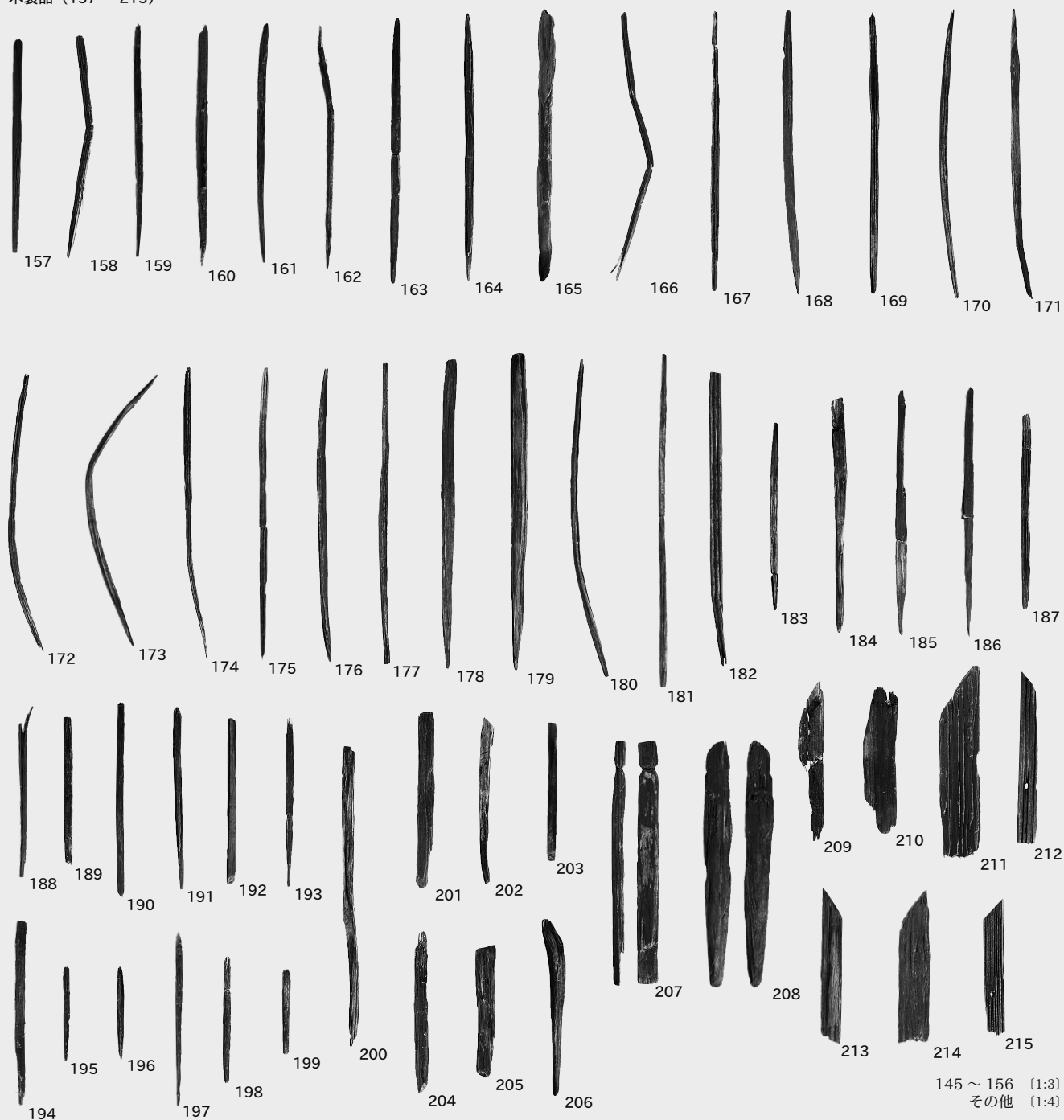
その他 (1:3)  
75～79・81～108・112～115・141～143 (1:4)  
80・109・110・111・144 (1:6)



石器・石製品 (145 ~ 156)

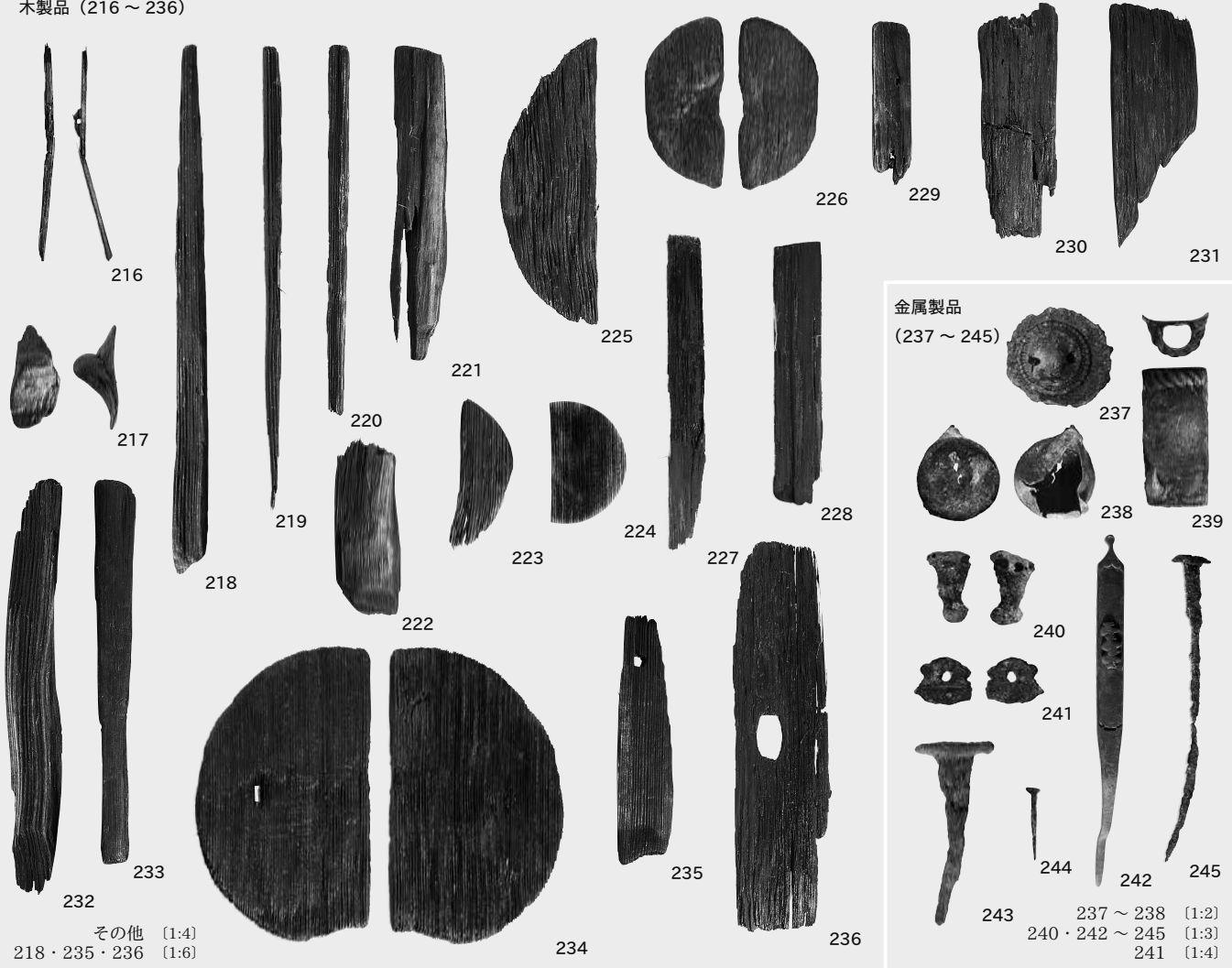


木製品 (157 ~ 215)

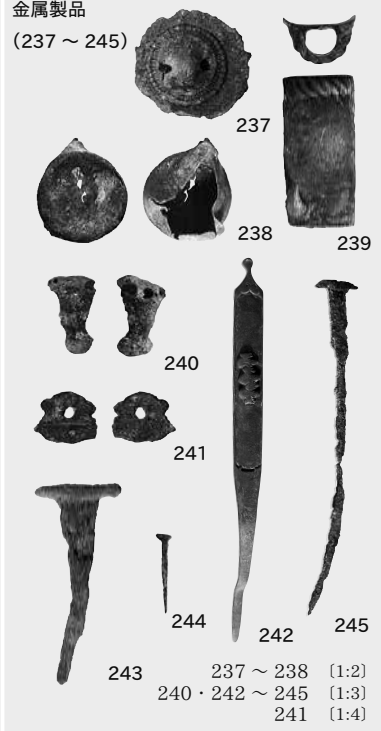


145 ~ 156 [1:3]  
その他 [1:4]

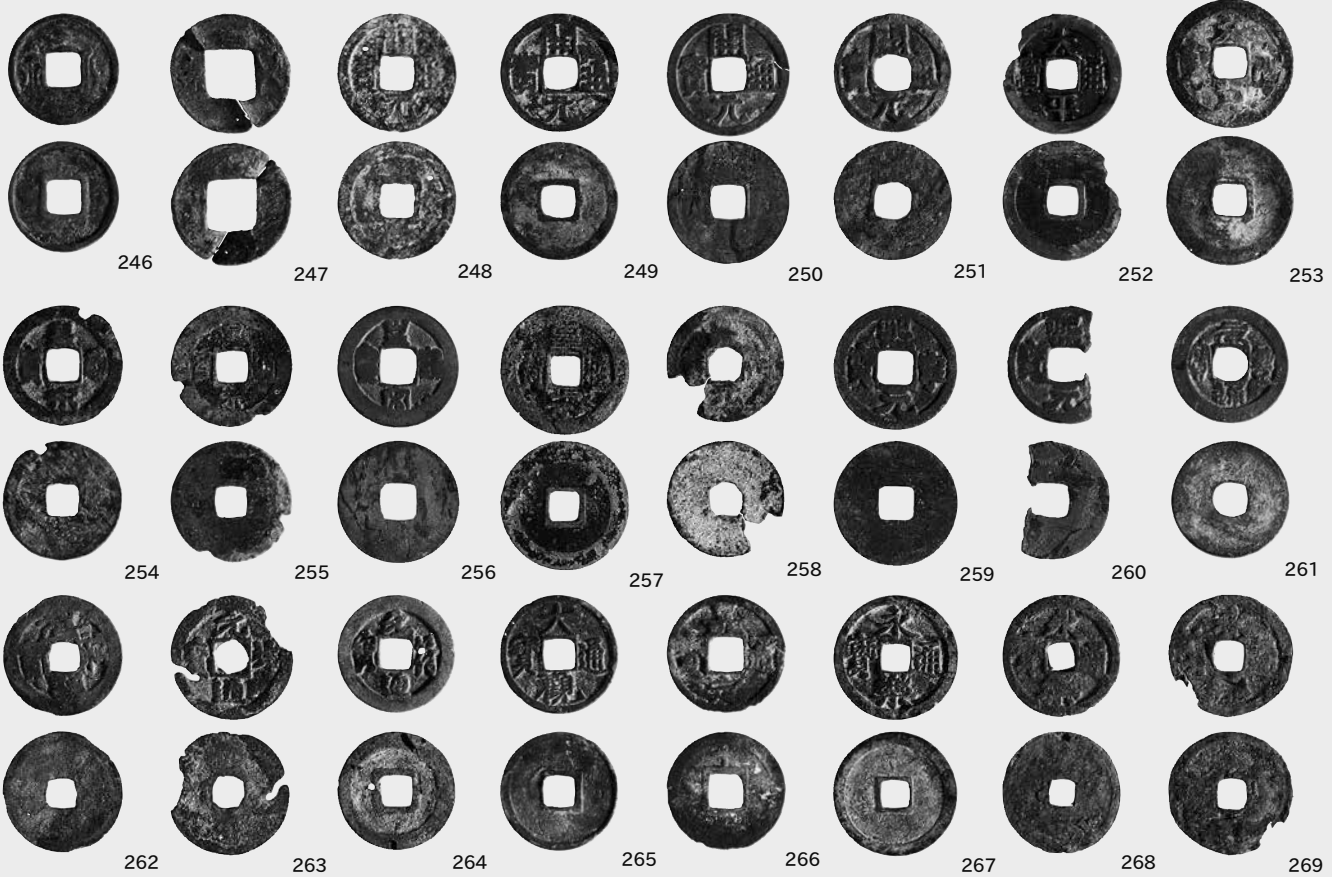
木製品 (216 ~ 236)



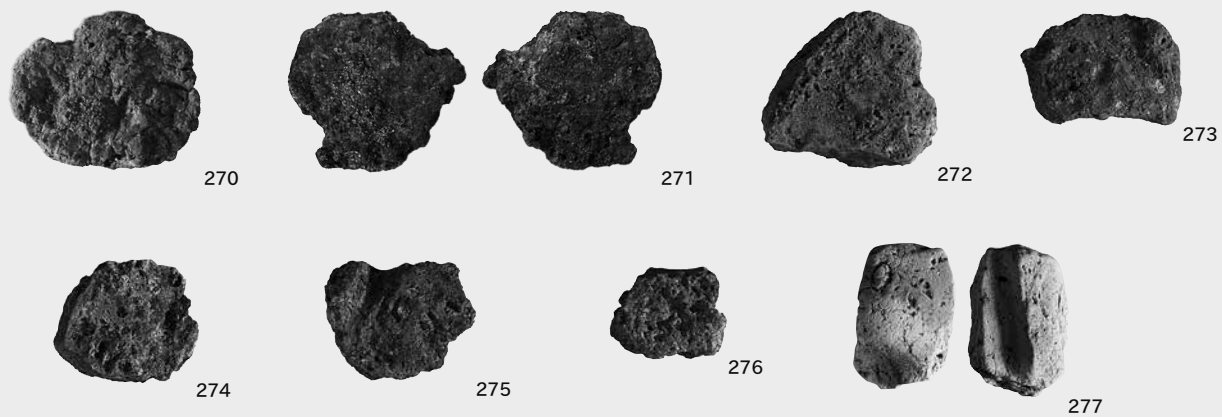
金属製品 (237 ~ 245)



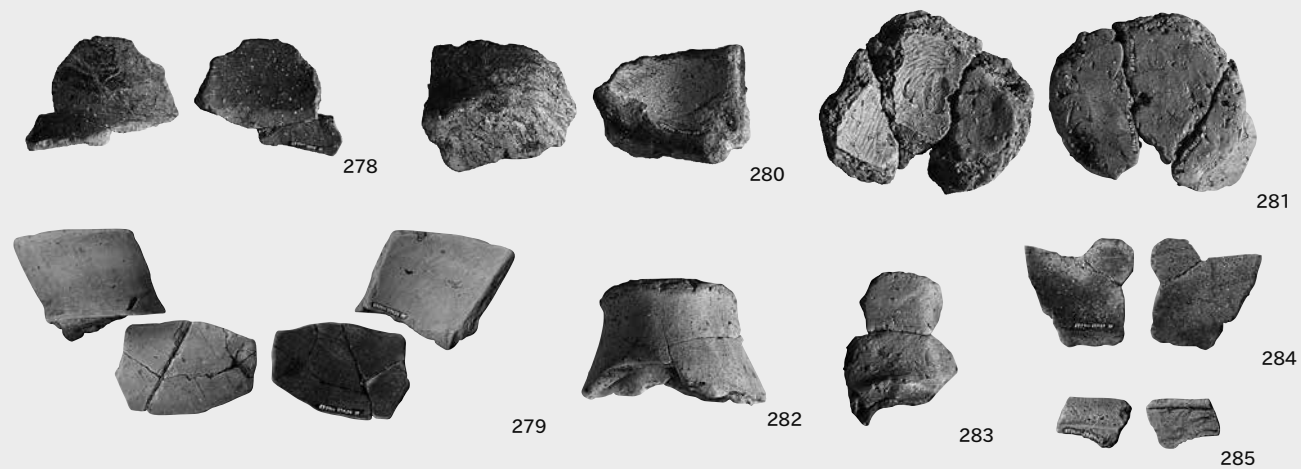
銭貨 (246 ~ 269)



鍛冶関連遺物 (270 ~ 277)



弥生・古墳時代の土器 (278 ~ 285)



# 報告書抄録

ふりがな	たけはないせき に							
書名	竹花遺跡Ⅱ							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	XX							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第226集							
編著者名	相羽重徳・上野川勝・渡邊大士（株式会社古田組）、斉藤崇人・伊藤良永・馬場健司・高橋 敦・金井慎司（パ リノ・サーヴェイ株式会社）、奈良貴史（日本歯科大学）、澤田純明（聖マリアンナ医科大学）、高橋保雄（新 潟県埋蔵文化財調査事業団）							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社 古田組							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250-25-3981 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒949-3216 新潟県上越市柿崎区百木750 TEL 025-536-2721 株式会社 古田組							
発行機関	新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
発行年月日	2011（平成23）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たけはないせき 竹花遺跡	にいがたけんいと いがわし 新潟県糸魚川市 みなみてらまち 南寺町2-2-1ほか	15216	157	37度 02分 31秒	137度 52分 15秒	20090507 ～ 20090702	1,344㎡	北陸新幹線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	遺構	主な遺物			特記事項	
竹花遺跡	遺物包 含地	中世後期 (14世紀～ 16世紀)	土坑1 木製品刺突地点99 木製品集中刺突地点3	船載天目・青磁・白磁・瀬戸美 濃焼・珠洲焼・越前焼・瓦器・ 土師器・木製品（箆状木製品・形 代・火付け木・曲物）・金属製品（銅 製品・鉄釘・銭貨）・石製品（硯・ 砥石）・鍛冶関連（鉄滓・羽口）			箆状木製品や形代が 地面に突き刺さった 状態で出土し、湿地 で行われた祭祀行為 の可能性が高い。	
	生産地 (水田)	古墳時代 (前期後半)	畦畔2	土師器（壺・甕・高杯・器台）・ 木製品（田下駄）			平成20年度調査区 から連続する畦畔及 び直交方向に伸びる 畦畔を検出。	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第226集

## 北陸新幹線関係発掘調査報告書 XX

### 竹花遺跡Ⅱ

平成23年3月25日印刷  
平成23年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1  
電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1  
電話 0250(25)3981  
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社 第一印刷所 上越支店

〒943-0802 新潟県上越市大豆1丁目12番7号  
電話 025(524)8650

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第226集『竹花遺跡Ⅱ』 正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	37度02分31秒	37度02分40秒
抄録	東経	137度52分15秒	137度52分00秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書第226集 『竹花遺跡Ⅱ』正誤表

ページ	範囲	誤	正
例言	3	製品	製本
15	2行目	(竹花Ⅰ遺跡)	(竹花遺跡Ⅰ)
22	32行目	S X 4 1 3 (図版2・5)	S X 4 1 3 (図版3・5)
23	1行目	S X 4 1 6 (図版2・5・15)	S X 4 1 6 (図版3・5・15)
24	8行目	S X 4 3 0 (図版2・6・15)	S X 4 3 0 (図版3・6・15)
24	11行目	S X 4 3 1 (図版2・6・18)	S X 4 3 1 (図版3・6・16)
33	23行目	古瀬戸後期	古瀬戸様式後期
35	30行目	99・100は吉岡Ⅶ期である。	99・100は吉岡Ⅵ期である。
39	19行目	152と155を除き、	152と154・155を除き、
40	6・7行目	板状木製品2点、棒状木製品5点	杭状木製品3点、棒状木製品2点
55	最後の行目	刀形は、4点すべてが…	刀形は、210・211・213・214の4点すべてが…
73	19行目	畦畔に立てるものである	畦畔に立てるものがある
76	20行目	最大でNo.705とNo.701間…、最小はNo.724とNo.720間…	最大で252と262間…、最小は248と255間…
77	24・25行目	木製品環状出土遺構・木製品集中出土遺構・木製品弧状出土遺構	木製品環状刺突遺構・木製品集中刺突遺構・木製品弧状刺突遺構
87	87(器形)	壺・甕類	壺・瓶類